## 第５節　東桂見遺跡のまとめ

東桂見遺跡では、昨年度の試掘調査で田下駄などの農具木製品が出土し３時期以上の水田が存在することが示唆されていた。このたびの調査でも、田下駄などの木製品が多数出土したが明確な水田遺構は検出できなかった。しかし、プラント・オパール分析および田下駄の出土状況から６面以上の水田が営まれていたことが推測されている。このうち上部の３面は近現代のもので、第４面が中世、第５面が古墳時代前期、第６面が弥生時代のものと考えられる。

弥生時代の水田面は、灰白色粘土を床土とする水田であると考える。プラント・オパールは検出されていないが、灰白色粘土層の上層の赤褐色粘質マコモ層で田下駄が出土している。この層の下では、多数の埋もれ木や立木の樹根が多数見つかっており、この時期に森林のような樹木が生育していたものと考えられる。西隣の桂見遺跡のＡ地区Ｔ１でも埋もれ木がみられることから同一の地層であろう。しかし、東隣の布勢遺跡ではこのような埋もれ木はみつかっていない。森林の時代以前は、腐食土が堆積しているため森林の時代は一時的に陸化した時期つまり弥生海退時ではないかと考える。その後の海進または自然堤防の生成などの地形変化による水位の上昇によって水域化し、粘土層によって埋積され森林は枯死していく。

水田は、この時期に開始されたものと考える。この層で出土する立木の根は、この時に伐採されたものと考えられる。営まれた水田は、湿田で、マコモ等の水草が多く繁殖する管理の大変なものであったであろう。このように維持管理に相当な労力を要する場所に水田を営んだのは、当遺跡の北東に位置する岩吉遺跡の近辺では水田に適する場所がすくなかったからであろう。この時期に岩吉周辺に布勢第２遺跡、大桝遺跡などの遺跡があらわれるが、これらの集落は東桂見遺跡と同様に岩吉遺跡から別れた分村と考えられる。岩吉周辺で、すぐに水田を営むことができたのは、東桂見遺跡のような底湿地帯であったのであろう。そして彼らは、低湿地周辺の小段丘の地形を示す東桂見集落下に集落を形成したものと思われる。

水田の最盛期は、古墳時代前期である。この時期には、SD-05 を堰止めたりして水の管理を人工的に行っている。この時代の水田は、黄褐色粘質マコモ層である。畦畔は検出されていないが、水田に伴うと思われる溝や杭列（畦畔？）と田下駄などの農具が多数出土しているし、プラントオパールの分析からも水田が営まれていたことが推測されている。農具の出土状況下から、水田は谷の全域で営まれたいたと考えられる。しかし、現在使用されている排水用水路周辺は中世から流れる川やその改修工事等によって破壊されていた。

杭列や農具などが多いのは１・４区で検出された SD-05 周辺で、溝から東に行くほど遺

物の出土が少なくなっていく傾向がある。一方SD-05の周辺では、この溝を堰止めまたは畦畔を堅個にするためと見られる板列が4区で検出されている。しかしその主要部分は調査区外に広がっているために不明である。桂見遺跡の8T・11T・14Tでも杭列や矢板列が検出されている。

古墳時代の遺物は、農具や建築材などの木製品である。農具は、杉材を加工して作られた田下駄が主であるが、中には2次的使用のものが多くみられた。田下駄は、紐を通す穴を穿孔したもと、板の両辺に切り込みをいれたものや穿孔と切り込みを併用したものとがあるが、切り込みだけのものが多く出土している。このようなタイプの田下駄は、桂見遺跡、服部遺跡、米子市目久美遺跡、池の内遺跡などでも出土している。

農具のほかに、梯子や柱、樋、板などの建築材も出土しているが、建物があった形跡はみられない。

古墳時代中期以降に水田は廃絶される。これは水位の上昇に伴い、もはや水田の維持管理ができなくなったためであろう。桂見遺跡の報告においても、古墳時代中期以降に著しい水位の上層があったと記載されている。

中世の水田は、小礫を含む黒灰色土である。それ以前の水田が粘質のマコモ層であったことと比べると大きな違いであろう。この層からは、溝以外には農具などの農耕に関するものは検出されていない。プラントオパールのみ検出した。

中世の遺構としては、1・4区で溝を検出している。溝は、現在谷の中央を南北流れる排水路（幅1m）とほぼ同じ位置を流れていた。溝の左岸は1・4区の東端に位置し、東岸は排水路の東に3mほどいった地点にその形跡がみられた。この水路は、砂が互層に堆積しており、洪水などでその流路を少しずつ変えながら流れていたものと思われる。天保絵図に描かれた水路やほ場整備前の地図にみられる水路は現在の排水路とほぼ同じ形状、同じ位置を流れている。調査では、この水路に直行する溝も検出されているが、この溝は先の絵図や地図にはみられないものである。この溝は1区で検出されたSD-01で西から東に流れ込むものである。これらの溝は、人工的なものではなく自然河川で、これを利用して稲作を営んだのであろう。中世の層から、農耕に関するものよりも、日常生活に関するものの出土が目だった。土師質土器の小皿や土鍋、青磁、土鈴、土錘、笄、焼木などがそうである。近くに住居域があるのであろう。

以上、検出された遺構遺物から簡単ではあるが東桂見遺跡をまとめてみた。

# 第４章　布勢鶴指奥墳墓群

## 第１節　調査の概要

東桂見遺跡の東隣の丘陵に位置する。この丘陵は南から北に細長く延び、標高20～30ｍである。丘陵の東側裾部（補助グランド）には縄文時代後期の布勢遺跡がある。丘陵の北端には古墳が７基存在し、丘陵奥部には鳥取県東部で最大の前方後円墳である槻間１号墳（全長90ｍ）と湯山城跡が存在する。

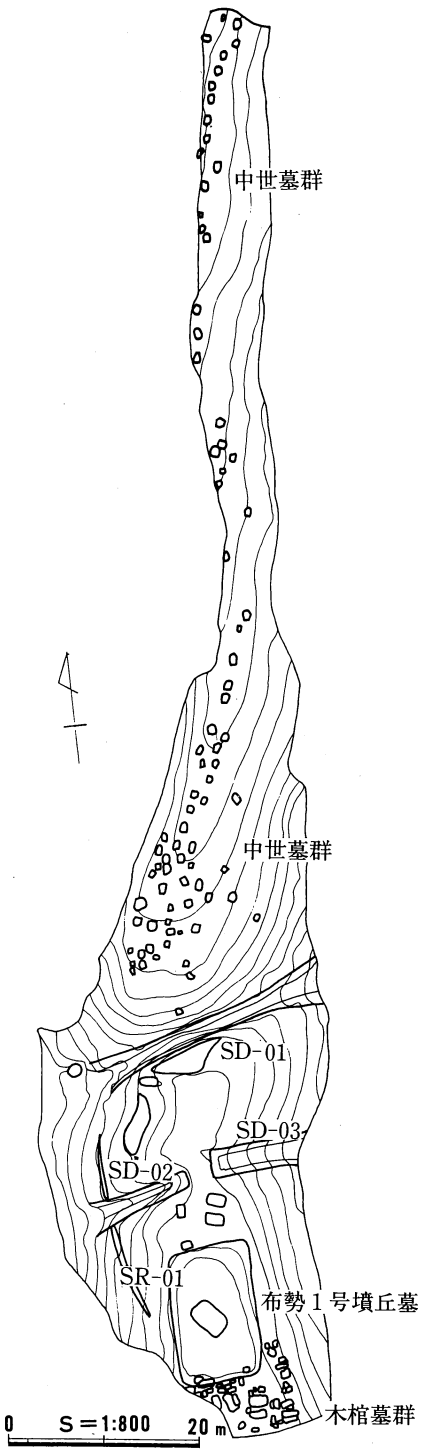
調査区は、丘陵北端にゆるく下った鞍部に位置するところに位置し、調査前は雑木林であったが、調査区の北部と南端の西側半分は掘削を受け、崖壁状になっていた。

調査では、弥生時代の墳丘墓１基と土壙51基、溝３条、テラス２、道、古墳時代の石棺墓、中世の土葬墓44基、火葬墓を検出した。墳丘墓では主体部より木棺の形跡を示す赤色顔料を検出した。また、弥生土器、銅鏃、須恵器、土師質土器、古銭、鉄釘が出土した。

## 第２節　弥生時代の遺構・遺物

調査区の南側の鞍部で弥生時代後期の墳丘墓とそれをとりまく木棺墓群、溝、土壙を検出した。墳丘墓は、鞍部の南側に位置し、地形をうまく利用し墳丘を築いているが、墳丘の軸と埋葬主体の軸が大きくずれているのが特徴である。また埋葬主体部では木棺の形跡を示すように赤色顔料が検出され、その中から人骨が出土している。また、墳丘墓の周囲には51基の木棺墓が配されている。木棺墓は、墳丘墓の南側に多く集中しており、石を配することで木棺墓を区画していたようである。木棺墓からは、弥生土器と銅鏃が出土している。

溝は、性格と時期は不明であるが、周辺の状況から墳丘墓に伴うものと考えた。




**挿図71　布勢鶴指奥墳墓群全体図**

## 《布勢鶴指奥１号墳丘墓》

### １．位　　置

調査区の南側、標高18～20ｍの地点に立地する。丘陵の平坦面は東西13ｍ程で、尾根幅いっぱいに築造されている。墳丘の南西斜面が土砂採取時に掘削されており、南西墳端部が古墳時代の石棺墓に破壊されている。調査前の踏査の段階で長方墳であることが確認でき、北側では２ｍの盛り上がりが確認できた。また一部河原石が露出しているところもあり、貼石の存在も確認された。

７ｍ北にはSD-02があり、26ｍ北には尾根を南北に分断するSD-01がある。墓道と思われる遺構が検出された西側斜面を除いて、墳丘墓の周辺では、墳丘墓を取り囲むように総数51基の埋葬施設と１基の土壙が検出されている。

### ２．規　　模

布勢鶴指奥１号墳丘墓は、花崗岩の岩盤面を削り出して地山整形したのち、盛土を行ない、貼石を施した墳丘墓である。盛土上面は削平されているようで、南側ですぐに岩盤面が検出された。墳丘の規模は、長軸（南北軸）17.8ｍ、短軸（東西軸）10.6ｍ以上を測り、高さは最高2.36ｍである。

南側の墳端は２段になっており、その間に幅0.5～1.8ｍのテラスをつくっている。このテラスは、東側は南東方向に広がるが、西側は古墳時代の石棺墓に破壊されているため不明である。このテラスと墳丘墓南側テラスとの高低差は20㎝程度である。

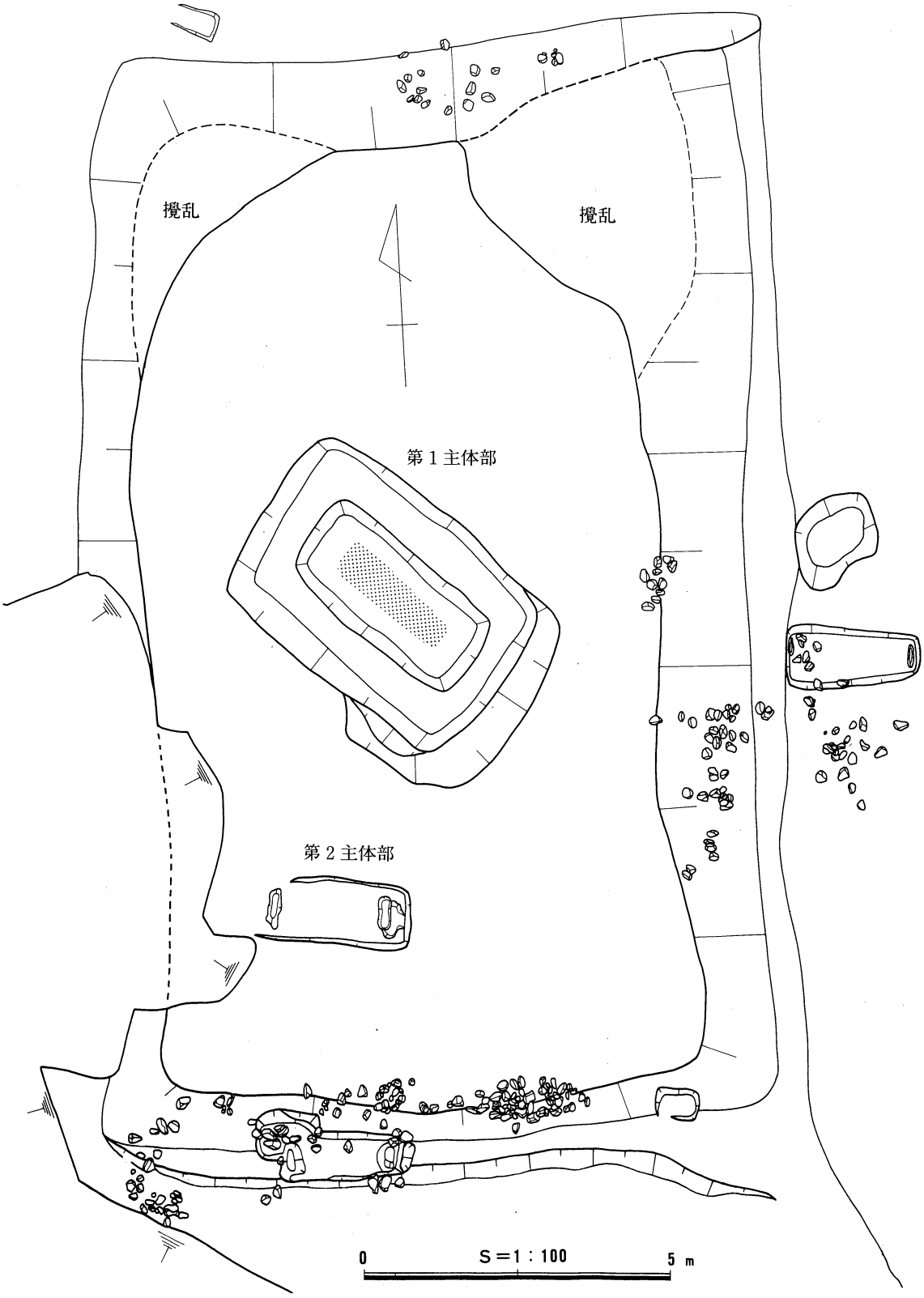
### ３．テ ラ ス

墳丘の北側と南側と東側とにテラスを造っている。北側のテラスは南北７ｍ、東西12ｍの規模で、SD-02の掘り込みと共に終結するが、SD-02は尾根頂部のみが掘り込まれていないため、そこだけは平坦面が続く。北側のテラスには４基の埋葬施設がある。

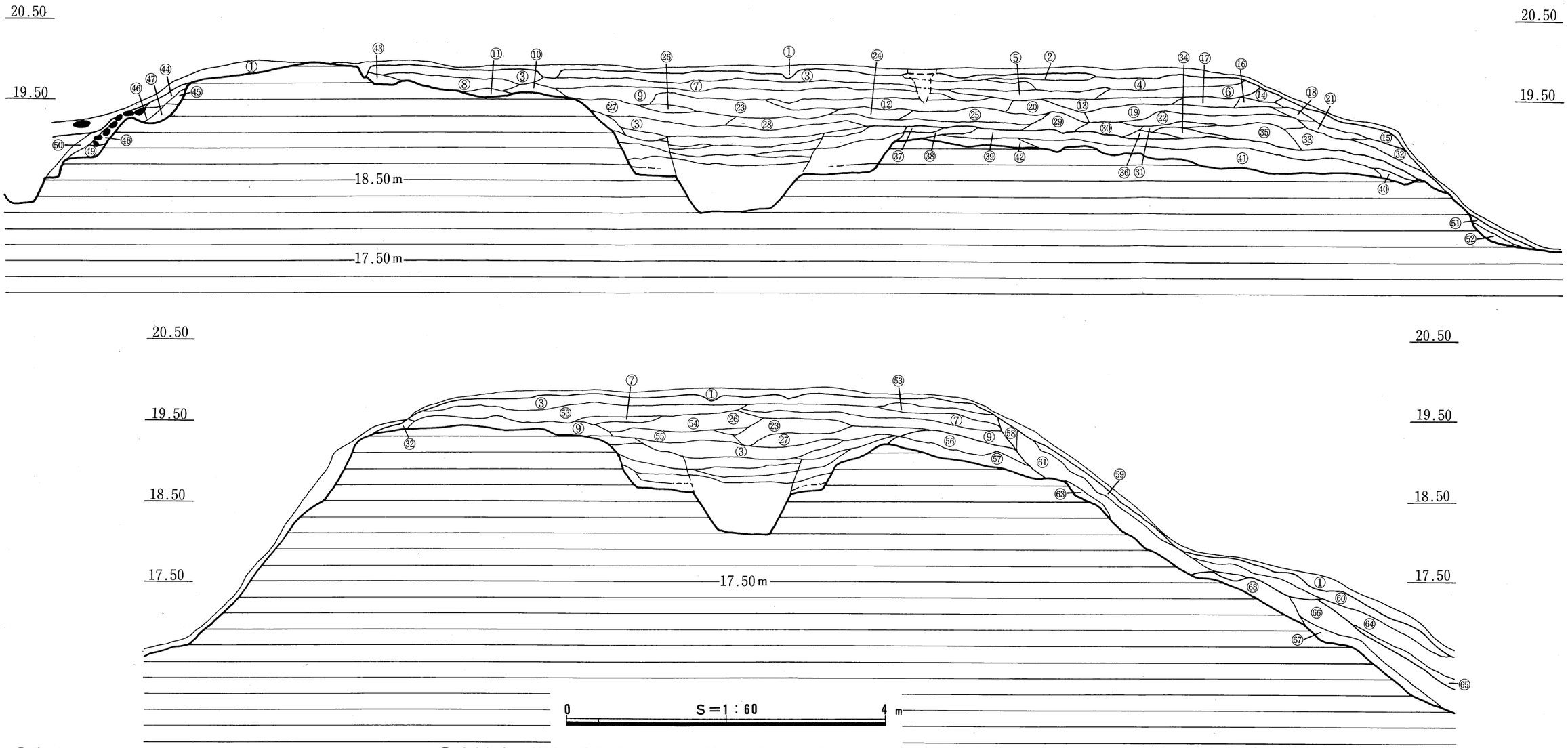
東側のテラスは墳丘墓に沿っており、南側で南側テラスと合流する。東西0.5～1.0ｍ程度のものである。このテラス以東の斜面には12基の埋葬施設と１基の土壙が検出されている。

南側のテラスは、西側の殆どが土砂採取時に掘削されているものの南北6.6ｍ、東西13ｍ以上の規模をもつ。この南側のテラスは、墳丘墓の北側にあるSD-01と同様に、尾根を分断するように掘られているが、南側の上縁の掘り方は西側の一部でしか検出できていないため、テラスの全貌は不明である。しかしながら、検出した範囲でのテラスの掘り方とテラスにつくられた埋葬施設群の配置を見ると、南側テラスの掘り方は、墳丘墓の方向ではなく、さらに南側に向って緩やかに弧を描くようである。このテラスでは35基の埋葬施設が検出されている。

挿図72　墳丘墓盛土検出面地形測量図(S＝1/200)




**挿図73　墳丘墓遺構図（S＝1/100）**




① 表 土
② 淡茶灰褐色土(小礫多混)
③ 暗灰黄褐色土(小礫・花崗岩礫多混、しまりが良い)
④ 淡灰黄褐色土(小礫・花崗岩礫多混、しまりが良い)
⑤ 明黄茶褐色土(小礫・花崗岩礫少混)
⑥ 明灰褐色土(小礫混、固く良くしまる)
⑦ 明黄橙褐色土(花崗岩礫少混、しまりが良い)
⑧ 淡黄橙灰褐色粘質土(花崗岩礫混、しまりが良い)
⑨ 暗黄橙褐色土(花崗岩礫少混、やや粘性をもつ、ややわらかい)
⑩ 暗黄橙褐色粘質土(花崗岩礫少混、しまりが良い)
⑪ 暗黄灰色粘質土(花崗岩礫多混)
⑫ 明黄灰褐色土(花崗岩小礫少混)
⑬ 黄灰色土(しまりが悪い)
⑭ 暗赤褐色土(花崗岩礫混、固く良くしまる)
⑮ 灰黄褐色土(小礫多混、しまりが良い)
⑯ 暗黄灰褐色土(小礫混、しまりが悪い)
⑰ 黄灰褐色土(花崗岩礫多混、しまりが悪い)
⑱ 明黄橙褐色土(小礫・花崗岩礫を多く含む)
⑲ 黄橙灰色土(花崗岩礫少混)
⑳ 淡黄赤褐色土(花崗岩礫少混)
㉑ 暗灰褐色土(小礫・花崗岩礫混、しまりが良い)
㉒ 黄橙褐色土(小礫・花崗岩礫混)
㉓ 暗黄灰褐色土(花崗岩礫少混、しまりが良い)
㉔ 明黄橙色土(花崗岩礫少混)
㉕ 淡黄橙灰色土(花崗岩礫少混、しまりが良い)
㉖ 黄灰色土
㉗ 暗黄灰褐色土(花崗岩礫少混、しまりが良い)
㉘ 明黄橙褐色土(しまりが良い)
㉙ 淡赤灰褐色土(花崗岩礫少混、やや粘性をもつ)
㉚ 暗赤灰色土(花崗岩砂混、やや粘性をもつ)
㉛ 黄橙褐色土(暗褐色の花崗岩礫が極めて多く混じる)
㉜ 暗赤褐色粘質土(花崗岩礫混)
㉝ 暗黄橙褐色土(花崗岩礫少混、粘性をもちよくしまる)
㉞ 暗褐色の花崗岩礫をつみこんだ層
㉟ 暗黄橙褐色土(花崗岩礫少混、やや粘性をもつ)
㊱ 暗黄赤灰褐色土(しまりが良い)
㊲ 暗黄灰色土(暗褐色の花崗岩礫が極めて多く混じる)
㊳ 黄灰色土(暗褐色の花崗岩礫が極めて多く混じる)
㊴ 淡黄橙灰褐色土(大変しまりがよくやや粘性をもつ)
㊵ 暗橙褐色土(花崗岩礫少混)
㊶ 暗黄灰色土(花崗岩礫少混、大変にしまりがよくやや粘性をもつ)
㊷ 暗黄灰色土(花崗岩礫混、大変にしまりが良い)
㊸ 暗黄灰色粘質土(花崗岩礫少混)
㊹ 明赤褐色土(しまりが良い)
㊺ 暗茶灰色土(しまりが良い)
㊻ 淡赤茶褐色土(小礫・花崗岩礫多混、しまりが良い)
㊼ 暗黄赤灰色土(しまりが良い)
㊽ 淡明赤茶褐色土(小礫・花崗岩礫多混、しまりが良い)
㊾ 明赤茶褐色土(きめ細かく、しまりが良い)
㊿ 暗赤茶褐色土(小礫多混)＝盛土の流出
(51) 暗黄灰色土(モサモサでしまりが悪い)
(52) 暗灰褐色土(しまりが悪い)＝盛土の流出

**挿図74　墳丘長軸・短軸土層断面図(S＝1/60)**

## 4．盛　土

墳丘は岩盤面の削り出しと盛土で形成されている。岩盤面は南側から北側に向って緩やかに傾斜しており、墳丘基盤は、北側で0.6m、南側で1.4mの高さまで削り出されている。盛土に先立って地山整形がなされているようで、旧表土はまったく残っていない。

盛土は最も厚い北側で1.2m残っているが、南側は表土下がすぐ岩盤で盛土は残っていない。盛土は大別すると2段階に区別できる。

第1段階は第1主体部が掘り込まれるまでの段階で、地山整形した後に、岩盤面の低い東側と北側に、粘性をもち大変しまりの良い土を盛っている。この段階で、東西方向がほぼ平坦で、南北方向がかなり緩やかな斜面となる墳丘が造られたようである。

第2段階は第1主体部がつくられた後の段階で、北側で最高0.86mの盛土がなされている。盛土は北側から中央部に向って盛られていったようで、墳丘斜面側には、盛土の流出を防ぐために比較的しまりの良い土を盛っているようである。この段階の盛土には花崗岩礫と小礫が多く混入している。

## 5．貼　石

墳丘斜面には河原石が貼られていたようだが、殆どが転落しており、どの程度貼石がなされていたものかは不明である。最も残りが良いのは南側斜面で、斜面が岩盤であるにもかかわらず、わざわざ盛土をして石を貼っている。石は4隅突出型方形墓のように規則的には積まれていない。東側の貼石もかなり動いているようで、流土及び墳丘から外れた東側斜面で転落した河原石が出土している。北側についても同様である。西側斜面に至っては元位置を保っている石は全くなく、斜面下方で転落した河原石が出土している。

## 6．主 体 部

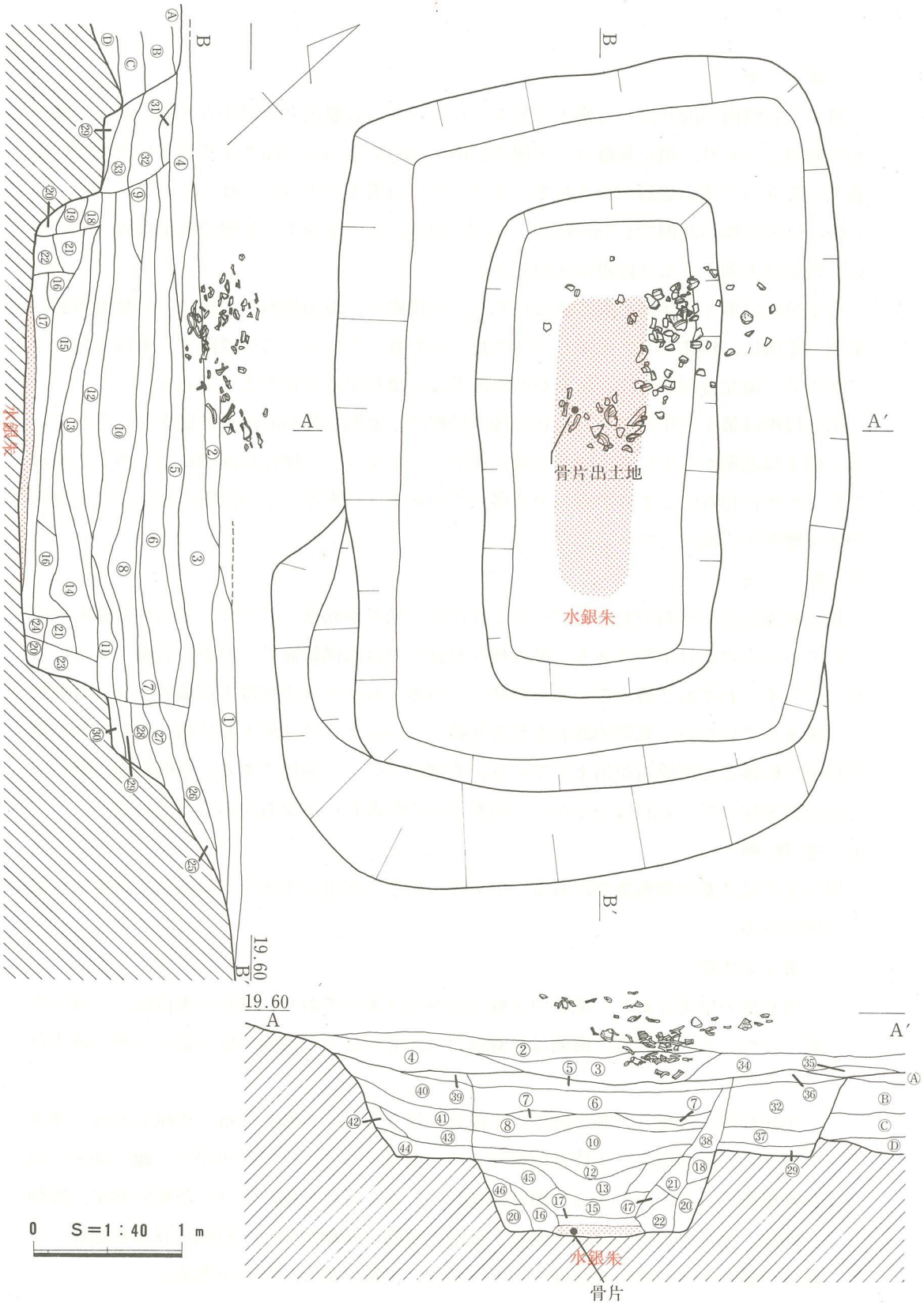
墳丘上には2基の埋葬施設がある。中央部にあるのが第1主体で、南西部にあるのが第2主体である。

(1)　第1主体部

墳丘墓の中央にあり、墳丘の主軸とはかなりずれており、墳丘の東西幅いっぱいを使ってつくられている。南側は岩盤面から、北側は第1段階の盛土面から掘り込まれている。

平面形は2段掘りの長方形で、1段目の掘り方は、長軸4.80m、短軸3.40m、深さ0.48～0.72mを測る。1段目の掘り方の底面（テラス）はほぼ水平で、幅0.36～0.64mの規模で、そこからさらに掘り込まれている2段目の掘り方は、長軸3.38m、短軸1.60m、深さ0.42～0.55mを測る。底面の規模は長軸2.96m、短軸1.18mを測る。1段目の掘り方の上縁から底面までの深さは、東壁で最大1.28mを測る。

主軸はN-48°-Wで、ほぼ北西方向を示す。




挿図 75　第 1 主体部遺構図（S＝1/40）

① 暗黄灰褐色土(花崗岩礫少混)
② 明黄灰褐色土(花崗岩礫混)
③ 明黄茶灰色土
(粘性をもつ、花崗岩少混)
④ 黄橙褐色土(花崗岩礫多量混)
⑤ 暗黄橙灰褐色土(粗大花崗岩礫混)
⑥ 淡黄茶褐色土
(粗大花崗岩礫混、やや粘性をもつ)
⑦ 暗褐灰色土(粗大花崗岩礫混)
⑧ 暗褐灰色土
(花崗岩礫多混、やや粘性をもつ)
⑨ 暗黄橙褐色土
(花崗岩小礫混、しまりが良くない)
⑩ 暗褐色土(粗大花崗岩礫多量混)
⑪ 暗橙褐色粘質土(花崗岩礫多混)
⑫ 明黄橙色土(花崗岩小礫少混)
⑬ 暗黄橙色土(花崗岩小礫少混)
⑭ 黄灰褐色土(花崗岩礫混)
⑮ 暗黄橙褐色土(花崗岩礫少混)
⑯ 淡黄橙色土
(花崗岩礫混、しまりが良くない)
⑰ 暗橙褐色土
(花崗岩礫混、水銀朱が点存する)
⑱ 暗褐色土
(花崗岩礫多量混、黄灰色土粒少混)
⑲ 暗橙褐色土(花崗岩礫混)
⑳ 褐色の花崗岩礫をつめこんだ層
㉑ 暗黄灰褐色土(花崗岩礫混)
㉒ 暗褐色土
(花崗岩礫多量混、暗黄灰色土粒混)
㉓ 暗黄灰褐色土(粗大花崗岩礫多混、
しまりが良くない)
㉔ 暗橙褐色土(花崗岩礫多混、明橙褐
色粘土ブロック混)
㉕ 明黄橙色土(小礫混、やや粘性をも
ち、しまりが良い)
㉖ 暗黄茶灰色土
(花崗岩礫多混、粘性をもつ)
㉗ 淡暗黄茶灰色土
(粗大花崗岩礫多混、粘性をもつ)
㉘ 明黄橙灰色土
(粗大花崗岩礫多混、粘性をもつ)
㉙ 灰褐色の粗大花崗岩礫をつめこんだ層
㉚ 暗茶灰色粘質土(花崗岩礫少混)
㉛ 明黄褐灰色土
(花崗岩小礫混、しまりが良い)
㉜ 黄褐灰色土(非常に細かい花崗岩礫混、
しまりが良い)
㉝ 暗黄褐灰色土(非常に細かい花崗岩礫
混、しまりが良い)
㉞ 暗橙褐色土
(花崗岩礫混、しまりが良い)
㉟ 淡明橙褐色土(花崗岩小礫混)
㊱ 明橙褐色土
(花崗岩礫多混、しまりが良い)
㊲ 暗赤茶色粘質土
㊳ 暗赤茶褐色土(やや粘性をもつ)
㊴ 暗黄橙褐色土(花崗岩礫少混)
㊵ 明黄赤灰褐色土(花崗岩礫多混)
㊶ 暗黄茶灰褐色土(花崗岩礫少混)
㊷ 淡赤灰褐色土(花崗岩礫少混)
㊸ 暗黄赤褐色土(花崗岩小礫少混)
㊹ 黄赤灰褐色粘質土(花崗岩礫少混)
㊺ 淡暗黄灰色褐色土(花崗岩礫混)
㊻ 淡黄橙灰色土
(花崗岩礫少混、しまりが良い)
㊼ 暗黄茶褐色粘質土
Ⓐ 暗黄橙褐色土(花崗岩礫少混、やや粘性をもつ)
Ⓑ 暗黄灰色土(花崗岩破砕礫を極めて多景に含む)
Ⓒ 暗褐色の花崗岩破砕粒を積んだ層
Ⓓ 暗黄灰色粘質土(花崗岩礫少混、しまりが大変に良い)
} 墳丘盛土

底面の中央はやや窪んでおり、その範囲は、長軸2.00ｍで、北東側の短軸0.56ｍ、南西側の短軸0.40ｍを測る。この窪みは頭位と思われる北西側が最も深くなっている。この窪みに合致して、最大７㎝の厚みをもって大量の水銀朱が出土しており、この水銀朱の範囲こそ墓壙内に埋納された木棺の大きさを示すものと推定される。検出した水銀朱の輪郭は北東側が幅広の、やや隅の丸い長方形で、厚さも中央ほど厚く、長軸方向の両隅ほど薄くなっている。また、水銀朱とともに、中央やや西寄りで骨片が出土している。

**挿図76　第１主体部遺物出土状況図(Ｓ＝1/20)**

掘り方検出時に、テラスの埋土とテラス以内の埋土が明らかに区別できた。テラス埋土に花崗岩礫を多く含む土が入っているためである。２段目の墓壙の壁面に板材などをたてて、木廓をつくっていた可能性がある。底面には小口穴等はなく、土層観察により、箱形の木棺を基壙内に安置したものと推定される。

(2) 第2主体部

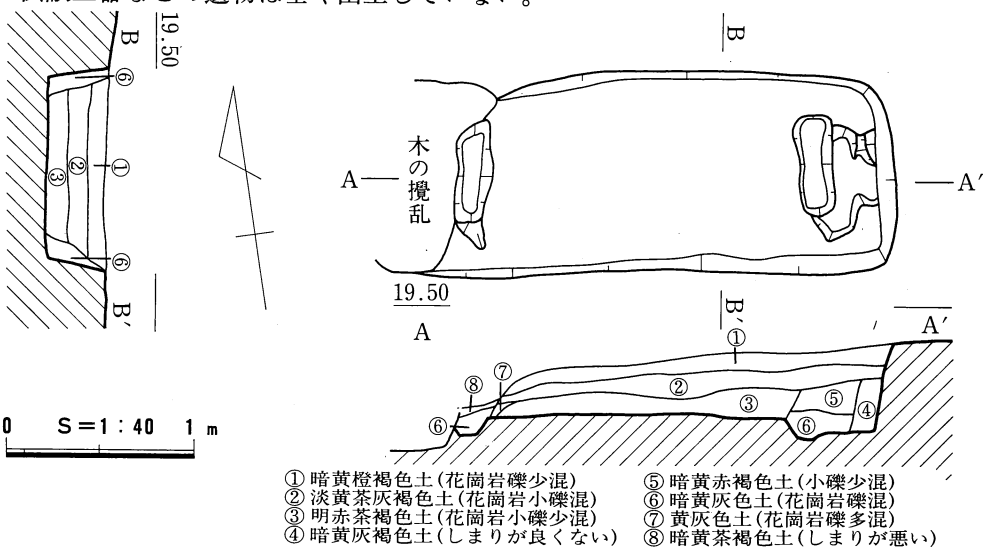
墳丘墓の南西側にある。この辺りは盛土が残っていないため、南側の一部を除いて、掘り方の殆どを岩盤面で検出した。西側が木により攪乱されている。

平面形は長方形で、長軸2.50m以上、短軸1.05mを測り、深さは東壁で最大0.46mを測る。底面も長方形で、長軸2.36m程度、短軸0.96mを測る。底面の東西両壁側には小口穴があり、小口穴間の距離は1.63mを測る。東側の小口穴の規模は上縁で、長軸51cm、短軸18cm、深さ9cmを測る。西側の小口穴は上縁で、長軸54cm、短軸27cm、深さ12cmを測る。

主軸はN-82°-Wで、ほぼ南北に直交しており、南側テラス部の埋葬施設群と一致する。

埋土には花崗岩礫が混入しており、側板の痕跡が窺える。

供献土器などの遺物は全く出土していない。

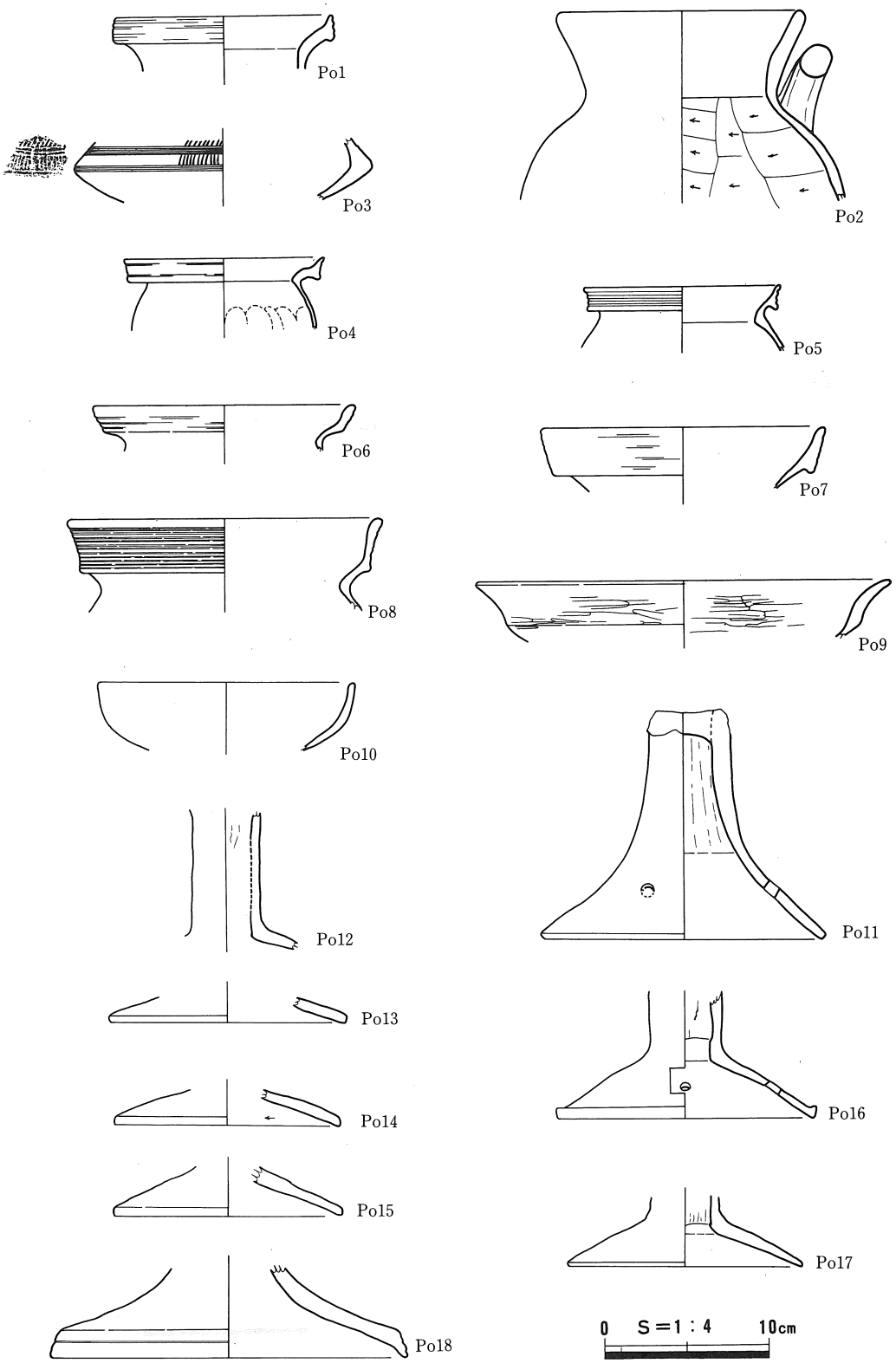



**挿図77 第2主体部遺構図(S=1/40)**

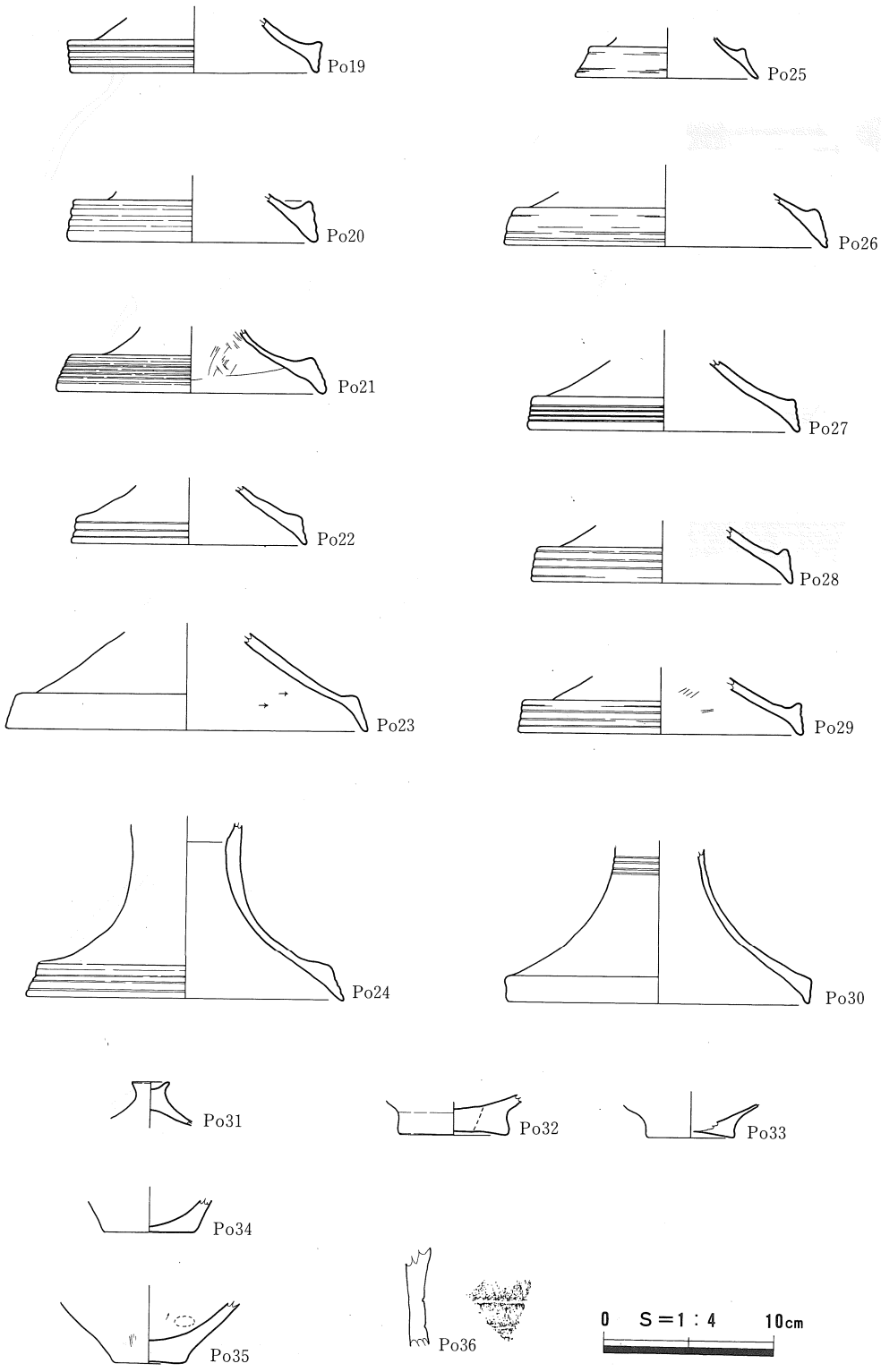
## 7. 供献土器

第1主体部の中央から北寄りにかけて、集中して弥生土器が出土しており。盛土上層から主体部検出面に至るまで、かなりの高低差をもっている。土器はかなり壊れており、完形に復元できたものはないが、壺 (Po1・3)、把手付直口壺 (Po2)、甕 (Po4~8)、高坏 (Po9~18)、器台 (Po19~30)、蓋 (Po31)、底部 (Po32~35) が出土している。Po36は器種不明である。いずれも供献土器と考えられる。

墳丘の東斜面と西斜面で土器が出土しているが、中には墳丘から転落したものもあると思われるので、ここで取り扱うこととした。東側斜面からは、広口長頸壺 (Po37)、壺 (Po38)、高坏筒部 (Po39)、器台 (Po41) が出土しており、西側斜面の切り土されていない部分からは、高坏筒部 (Po40)、器台 (Po42) が出土している。転落した供献土器の




**挿図78　第１主体部供献土器(1)(Ｓ＝1/4)**

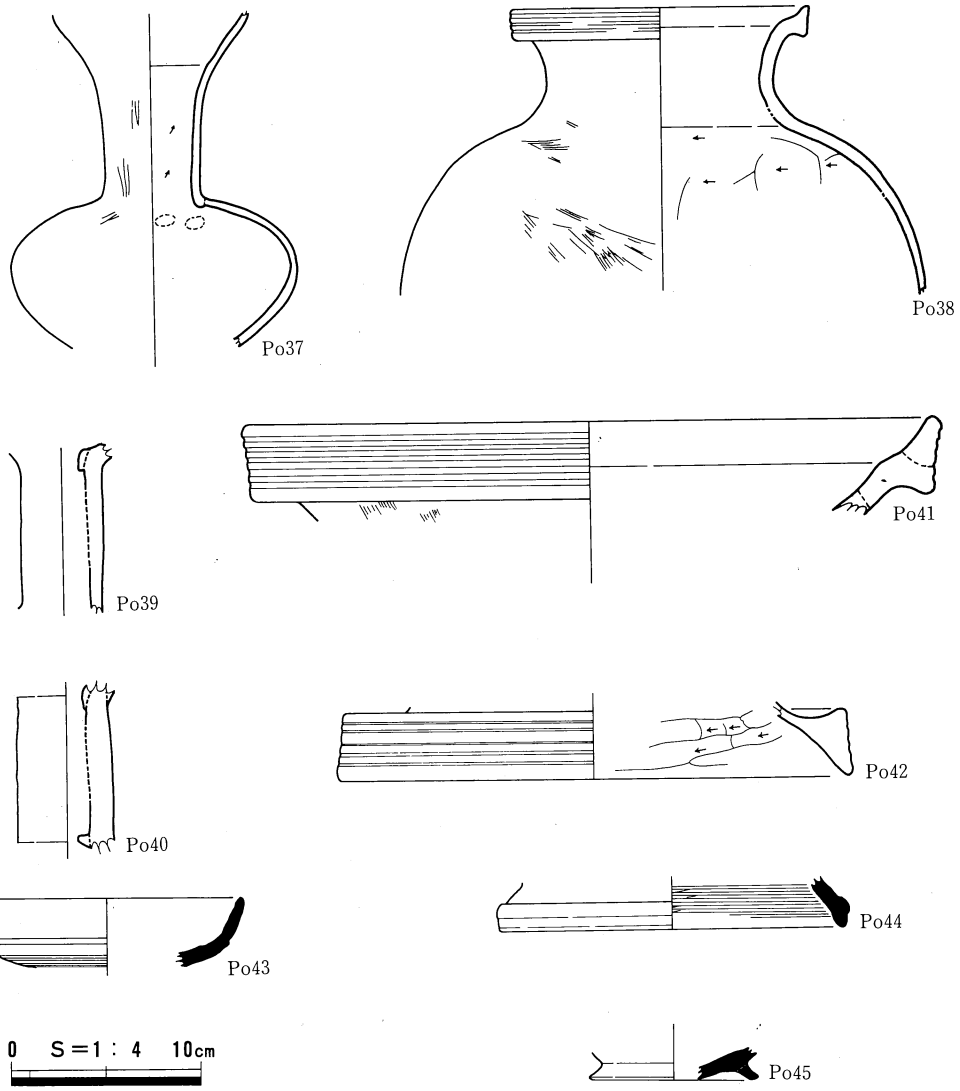



挿図79　第１主体部供献土器(2)(Ｓ＝1/4)

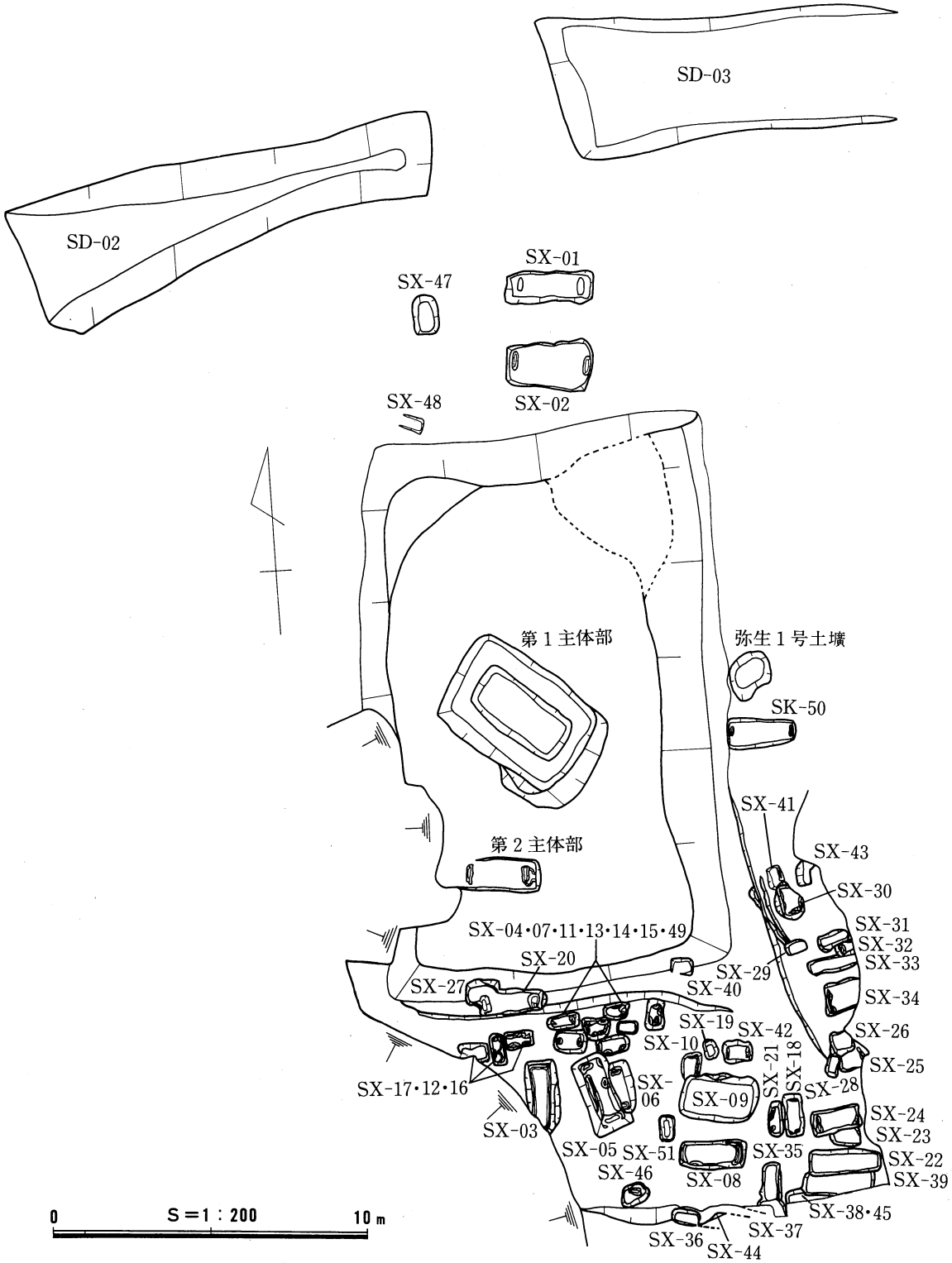
可能性がある。また、Po43～45が墳丘盛土検出中に出土しているが、墳丘墓に伴うものではない。

**8．時　　期**

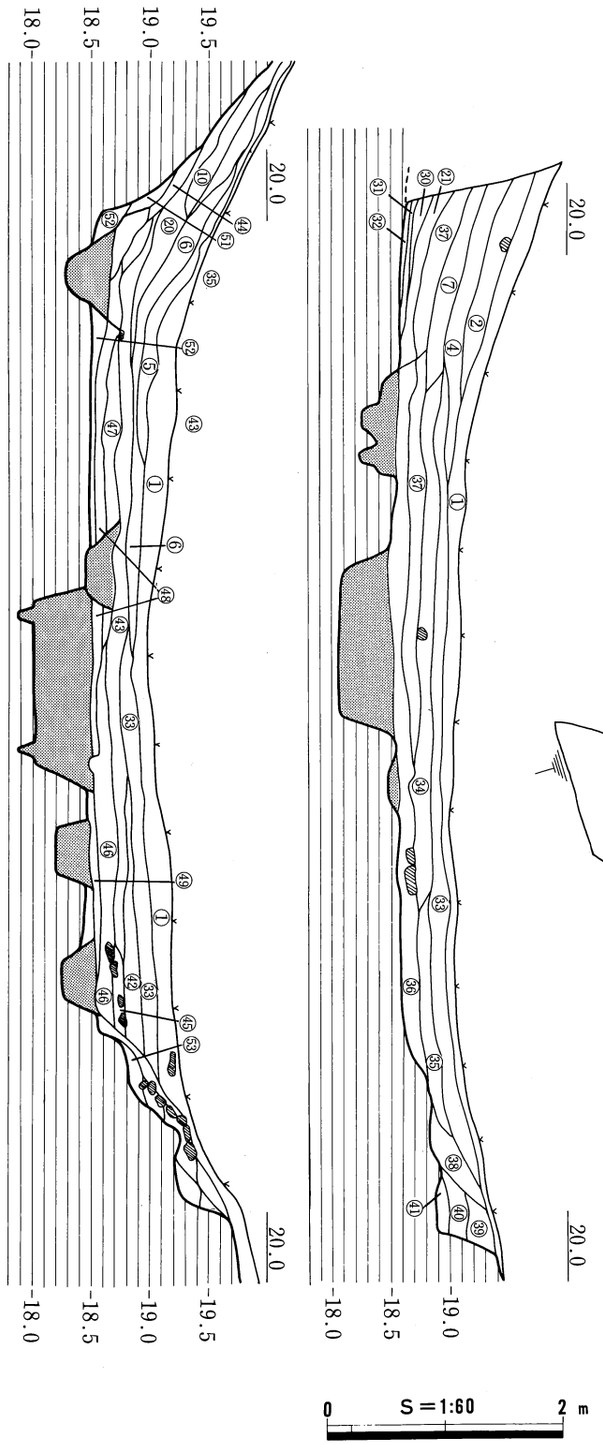
第１主体部から出土した土器は、いずれも弥生時代後期中葉から後葉に比定されるもので、墳丘墓の築造年代もこの時期と推定される。土器の中にはPo８のように、やや新相を示すものも出土しているが、これは後に供献されたものと考えられる。一方、第２主体部については、土器が出土していないので詳細は不明であるが、主軸が、墳丘墓の周辺につくられたSX群と同じであることなどを考えると、第１主体部がつくられた後につくられたものと思われる。

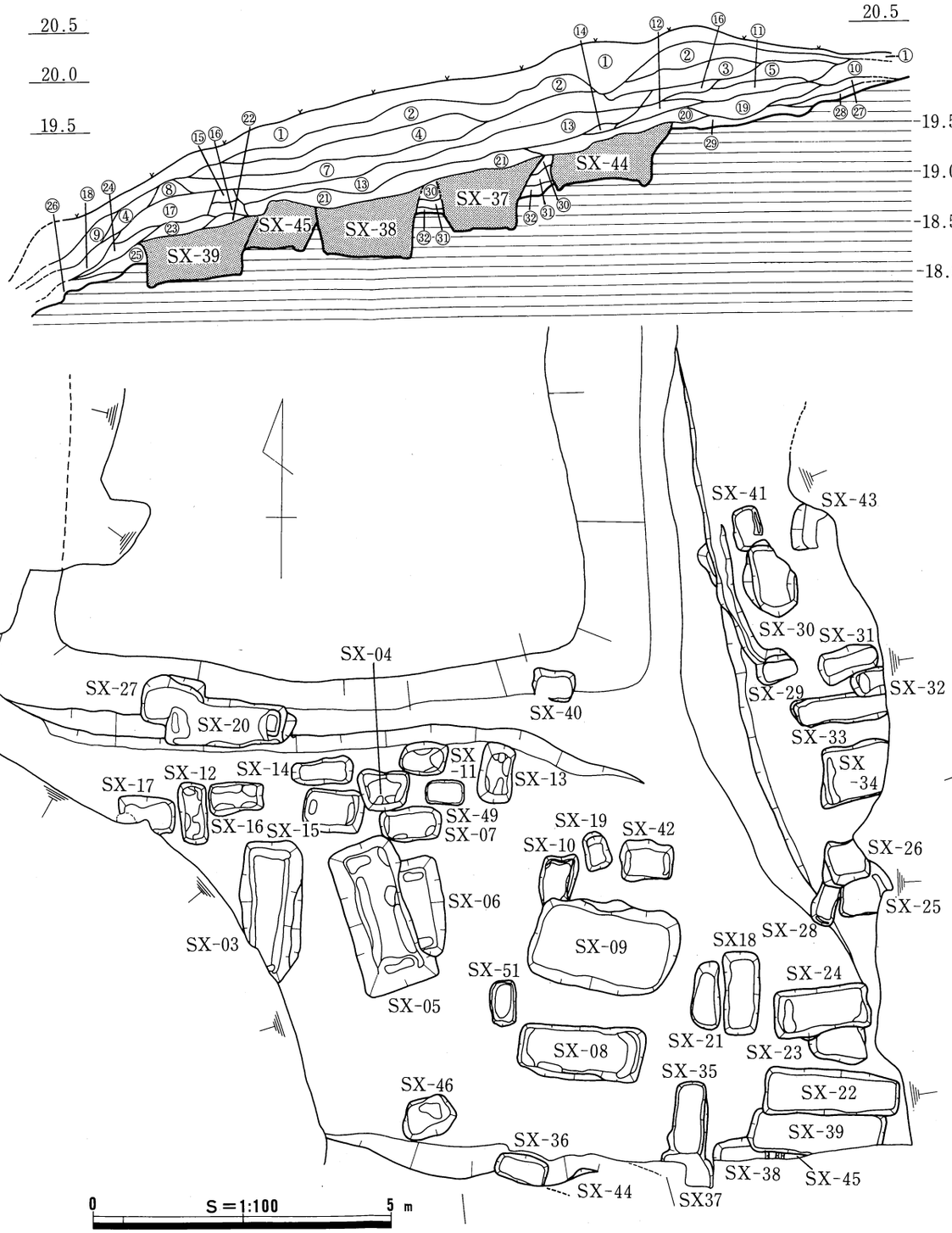



**挿図80　墳丘墓東西斜面出土土器（S＝1/4）**




**挿図81　墳丘墓周辺埋葬施設群（S＝1/200）**




① 表土
② 暗黄灰茶色土(小礫多混、しまりが悪い)
③ 黄灰茶色土(小礫多混、しまりが悪い)
④ 暗黄橙茶褐色土(小礫混、やや粘性をもちしまりが悪い)
⑤ 淡黄灰茶色土(小礫多混、しまりが悪い)
⑥ 暗黄橙灰色土(小礫混)
⑦ 暗灰茶色土(小礫多混)
⑧ 黄赤灰褐色土(粘性が強い)
⑨ 暗黄橙褐色土(小礫混、やや粘性をもちしまりが悪い)
⑩ 淡黄灰茶色土(小礫をかなり多く含みボロボロしていてしまりが悪い)
⑪ 淡黄灰褐色土(小礫多混、ボロボロしていてしまりが悪い)
⑫ 暗灰褐色土(小礫多混)
⑬ 暗黄灰色土(小礫混)
⑭ 淡黄茶灰色土(花崗岩小礫混)
⑮ 黄褐色土(花崗岩礫多混、しまりが良い)
⑯ 淡黄褐色土(花崗岩小礫少混、サラサラしている)
⑰ 明橙褐色土(花崗岩小礫混、しまりが悪い)
⑱ 暗黄橙褐色土(小礫混、粘性をもつ)
⑲ 暗灰褐色土(花崗岩礫多混)
⑳ 暗黄灰褐色土(小礫少混、しまりが悪い)
㉑ 橙茶褐色土(小礫花崗岩礫混、しまりが良い)
㉒ 淡黄橙褐色土
㉓ 淡黄橙褐色土(花崗岩小礫混)
㉔ 淡赤灰色土
㉕ 淡黄橙灰色土(小礫混、やや粘性をもちしまりが良い)
㉖ 淡黄橙色粘質土
㉗ 暗黄赤灰色土(花崗岩小礫多混)
㉘ 淡黄褐色土(花崗岩礫混)
㉙ 淡黄灰色土(花崗岩小礫混、サラサラしている)
㉚ 暗褐灰色土
㉛ 明淡黄灰褐色土(花崗岩礫混)
㉜ 明黄橙灰色土(花崗岩礫混)
㉝ 明黄茶褐色土(花崗岩小礫少混)
㉞ 暗茶褐色土(小礫少混)
㉟ 暗赤茶褐色土(小礫多混)
㊱ 明赤茶褐色土(花崗岩礫混)＝㉑層と似ている
㊲ 暗赤茶褐色土(花崗岩礫混)
㊲′㊲より花崗岩礫を少ししか含まない層
㊳ 暗赤灰褐色土
㊴ 淡赤茶褐色土(花崗岩礫・小礫多混、しまりが良い)
㊵ 淡明赤茶褐色土(花崗岩礫・小礫多混、しまりが良い) } 墳丘盛土
㊶ 明赤茶褐色土(きめの細かい土で、かたくしまる)
㊷ 黄茶褐色土(しまりが悪い)
㊸ 暗茶褐色土(小礫混、ややしまりが良い)
㊹ 明黄褐色土(小礫混)
㊺ 明黄赤褐色土(しまりが良くない)
㊻ 暗赤褐色土(小礫多混)……盛土……
㊼ 暗黄茶褐色土(花崗岩礫多混、しまりが良い)
㊽ 明黄褐色土(花崗岩礫多混、しまりが良い)
㊾ 黄灰褐色土(花崗岩礫混、サラサラしている)
㊿ 暗黄灰色土(花崗岩礫少混、サラサラしている)
(51) 黄灰褐色土(小礫・花崗岩礫多混)
(52) 黄灰色土(小礫・花崗岩礫多混)
(53) 暗黄茶褐色土(花崗岩小礫混)＝盛土の流出
(54) 暗黄赤茶

**挿図82　墳丘墓南側テラス・南東斜面埋葬施設群遺構図(S＝1/100)**

【SX-01】

墳丘墓の北側に位置する。北にSD-01、南にSK-02がある。検出は、地表下20cmの花崗岩地盤である。掘り方の平面形は長方形で、長軸方向はN-84°-Wである。長軸2.75m、短軸0.9mで、検出面よりの深さは0.54cmで、上縁よりほぼ垂直に掘り込まれている。底面は、平らで形状は長方形である。長軸2.53m、短軸0.74mを測る。底面には組み合わせ式の木棺を安置したと思われる溝が4辺に見られる。小口の穴は東側で長軸54cm、短軸21cm、深さ7.2cm、底の大きさは38cm、短軸10.4cmを測る。西側は長軸44cm、短軸10.4cm、深さ9.1cmを測る。底の大きさは長軸36cm短軸10.1cmである。上縁は東側が大きいが底は両穴とも38cmと36cmでほぼ同じ大きさになっている。側板用の溝は、両長軸壁部に沿って掘り込まれており両端で小口穴を挟み込んでいる。北側で長さ170cm、幅20cm、深さ4cm、南側で長さ141cm、幅13cm、深さ4cmを測る。これらの掘り込みの主軸はN-78°-Wで、掘り方とは東に6°傾いている。

埋土は、赤褐色真砂土であるが、下部のほうが軟らかである。

遺物は試掘調査時に弥生土器が出土してる。

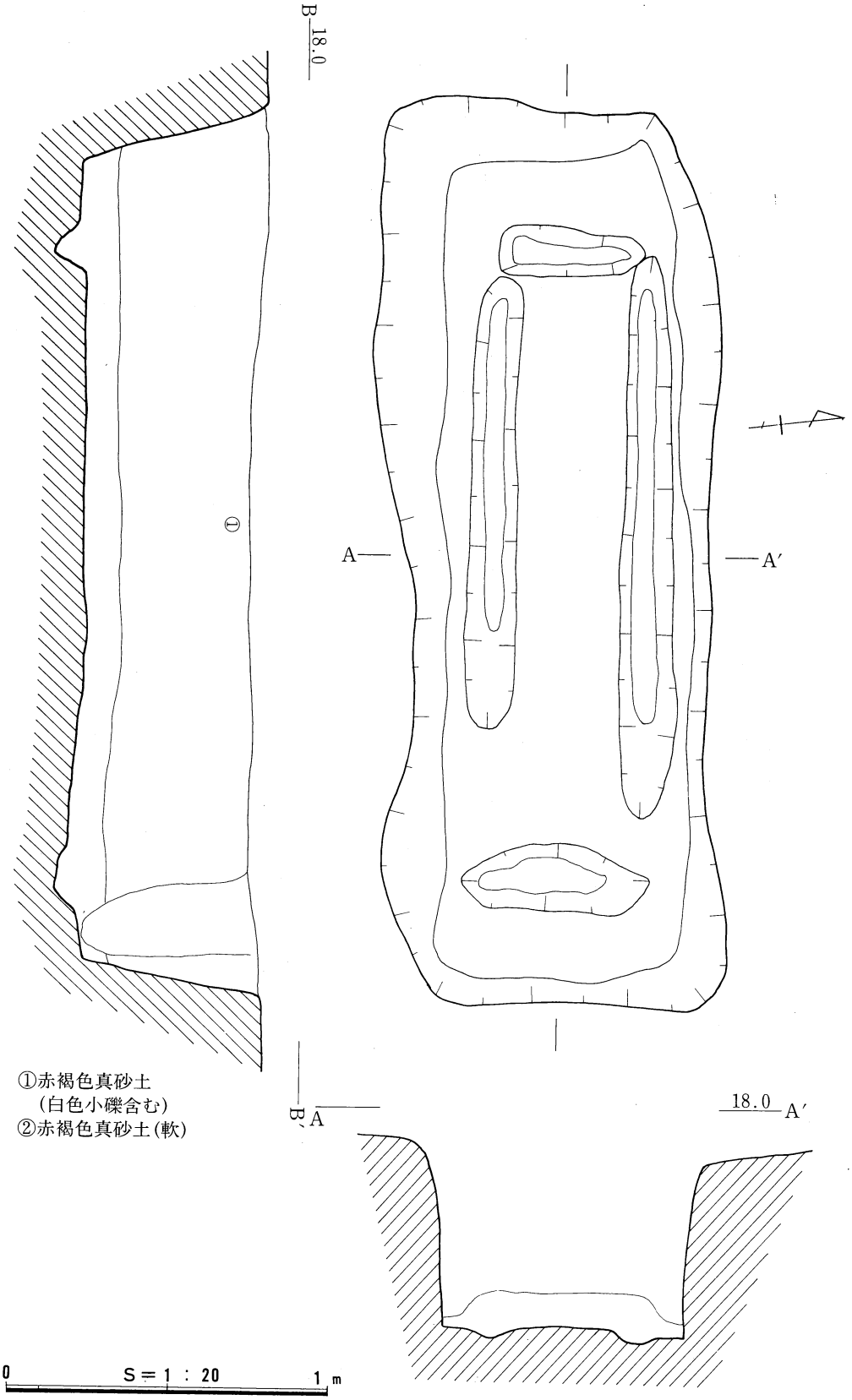
遺物と検出位置から墳丘墓に関係するものと思われる。

【SX-02】

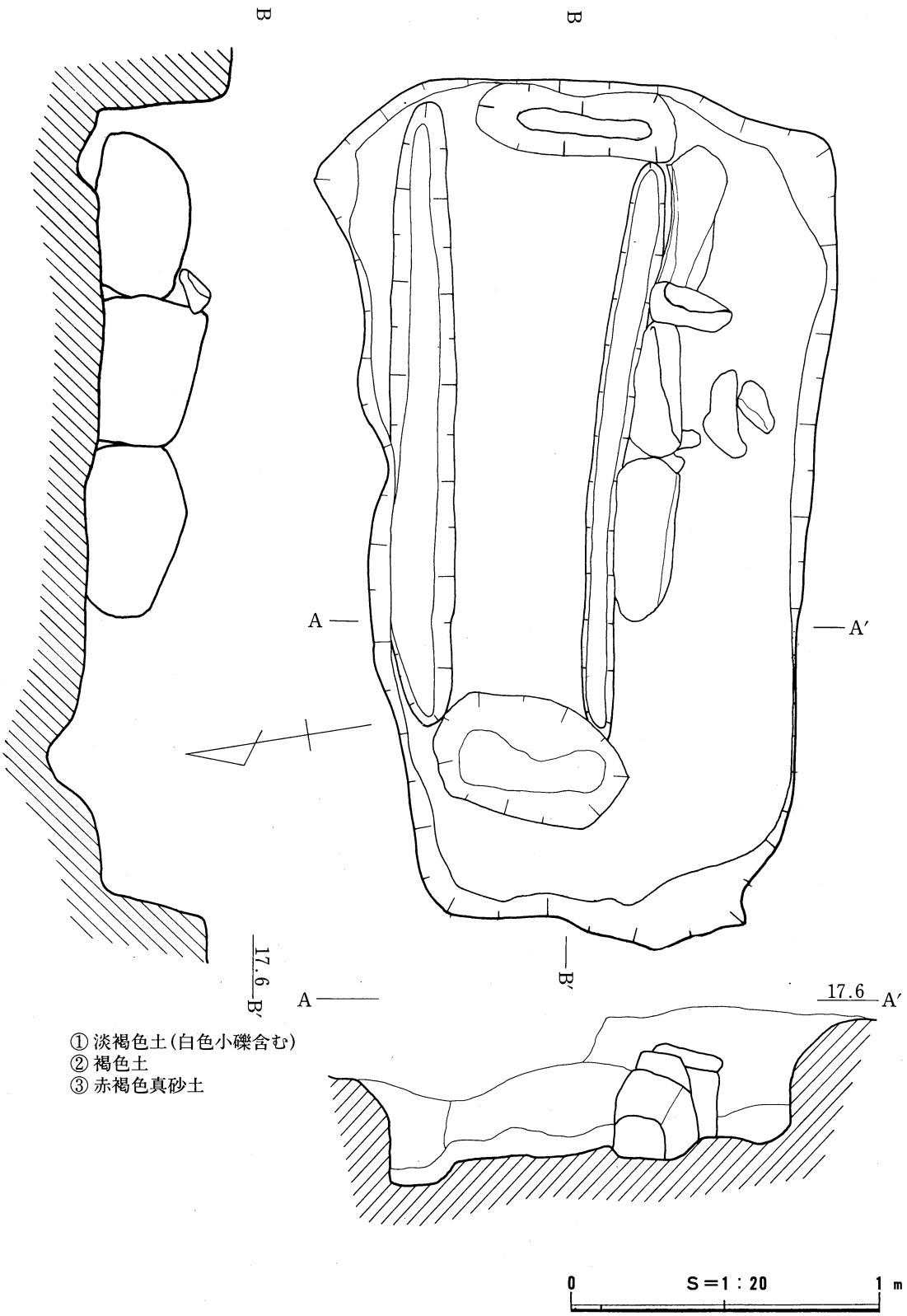
墳丘墓の北側に位置する。北にSK-01、西にSK-03がある。検出は、地表下20cmの花崗岩地盤である。掘り方の平面形は長方形であるが東側がやや広い。長軸方向はN-85°-Wである。長軸2.68cm、短軸は中央で1.38cmで、検出面よりの深さは東側で0.40cm、西側0.32cmである。壁は、上縁よりほぼ垂直に掘り込まれている。底面は、東側がやや高くなっており、形状は掘り方と同じ東側がやや広い長方形である。長軸2.53cm、短軸1.28cmを測る。底面には組み合せ式の木棺を安置したと思われる溝が4辺にそれぞれに見られる。小口の穴は東側で長軸54cm、短軸21cm、深さ13.1cmを測る。底の大きさは長軸38cm、短軸10.1cmを測る。西側は長軸63cm、短軸33.4cm、深さ13.1cmを測る。底の大きさは長軸36cm、短軸10.1cmである。上縁は東側が大きいが底は両穴とも38cmと36cmでほぼ同じ大きさになっている。側板用の掘り込みは、北側壁部に沿って掘り込まれているが、南側は中央よりやや南側に掘り込まれている。南側側板の溝の外側には40～50cm大の石が3個一列に並べられている。北側は、長さ199cm、幅20cm、深さ8cm南側で長さ185cm、幅11cm、深さ4cmを測る。側板はその両端で小口穴に接している。これらの掘り込みは、主軸をN-78°-Wで掘り方とは東に7°傾いている。

埋め土は、底面の上に赤褐色真砂土、その上に褐色土があるが、石列の南は白色の小礫を含む淡褐色土が堆積していた。

遺物は試掘調査で弥生土器が出土してる。




挿図83　SX-01 遺構図




挿図84　SX-02 遺構図(S＝1/20)

墳丘墓よりやや遅い弥生時代後期のものと思われる。

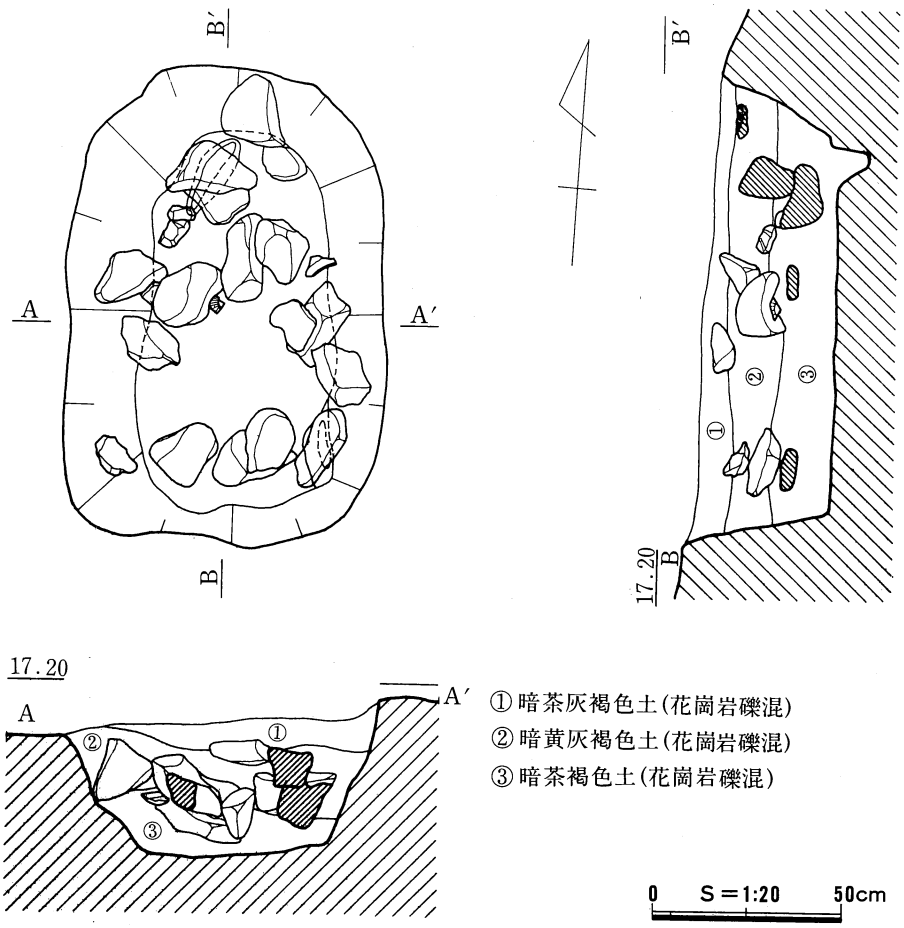
【SX-47】

墳丘墓の北の平坦地に位置し、北にSD-02、東にSX-01、南にSX-48がある。掘り方は花崗岩にほぼ垂直に掘り込まれ、平面形は、長方形である。上縁の長軸1.1m、短軸0.67m、底面の長軸0.86m、短軸0.51mを計る。深さは南壁が最大で0.38m、北壁で最小0.24mを計る。長軸は、N-3°-Wである。埋め土は、花崗岩礫混じりの暗茶灰褐色土・暗黄灰褐色土・暗茶褐色土である。上面に河原石が並べてあったらしく土壙内に人頭大の石が数個落ち込んでいた。弥生底部が出土していることから、この時期の土壙墓と考える。

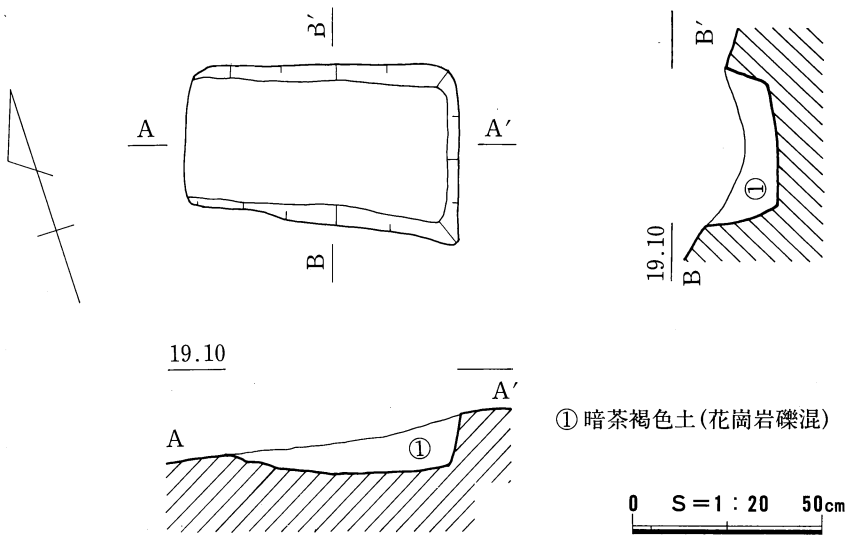
【SX-48】

墳丘墓の北の平坦地に位置し、北にSX-47、SD-02、東にSX-02がある。掘り方は花崗岩にほぼ垂直に掘り込まれ、平面形は、卵形である。長軸方向は、N-71°-Wである。上縁の長軸0.87m、短軸0.50m、底面の長軸0.76m、短軸0.35mを計る。深さは東壁が最大で0.13m、西壁は検出されていない。埋め土は、花崗岩礫混じりの暗茶褐色土である。遺物は出土していないが、弥生時代後期の土壙墓と考える。

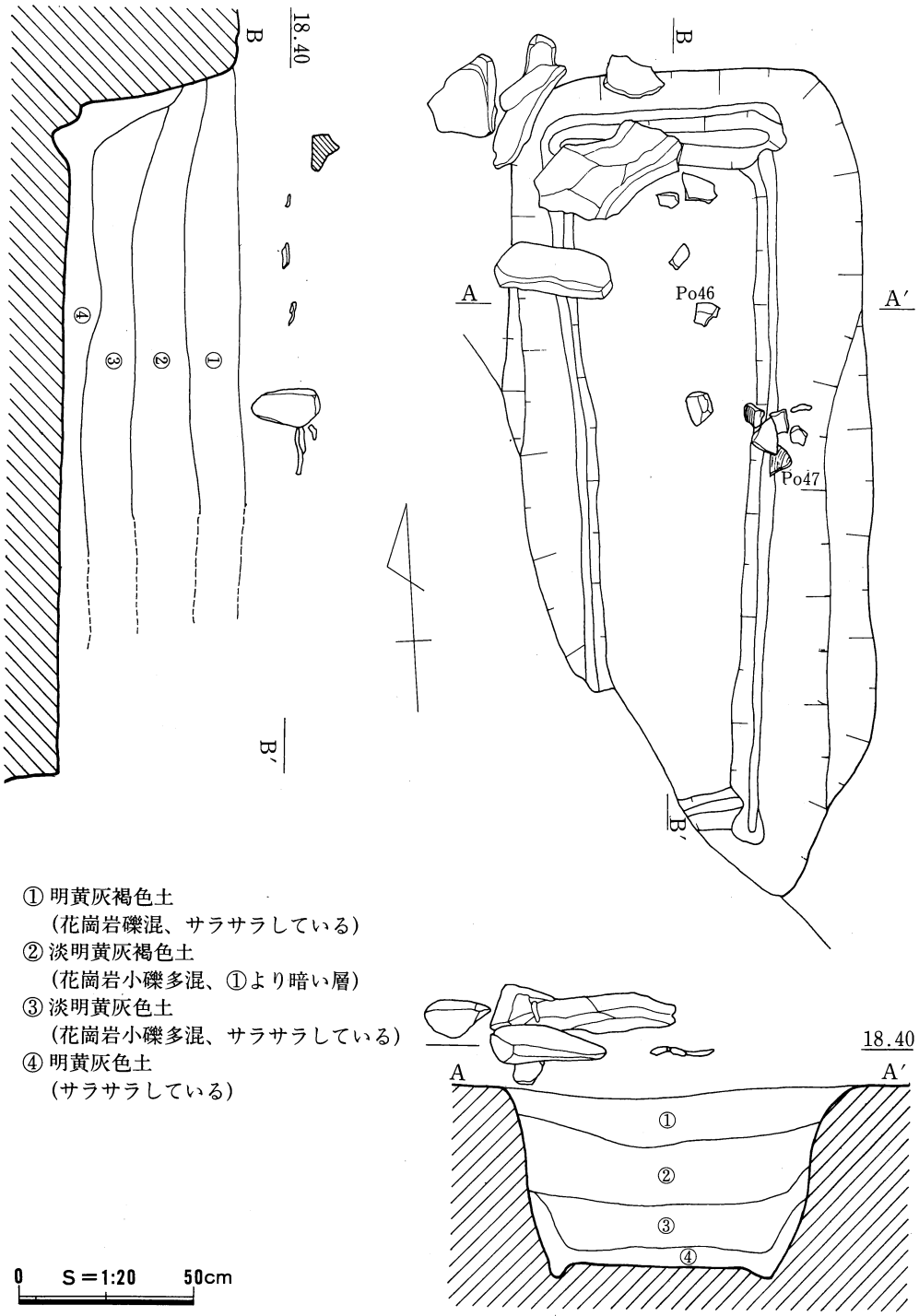
写真　S×47石出土状況




**挿図85　SX-47遺構**




**挿図86　SX-48遺構図(S=1/20)**




**挿図87 SX-03 遺構図(S=1/20)**

墳丘墓南側テラス部の西側に位置する。テラスが掘削されているが、本来はテラス中央やや西寄りにあったものと思われる。掘り方の南西隅が土砂採取時に掘削されている。北側にはSX-12・15・16等の小規模埋葬施設群がある。

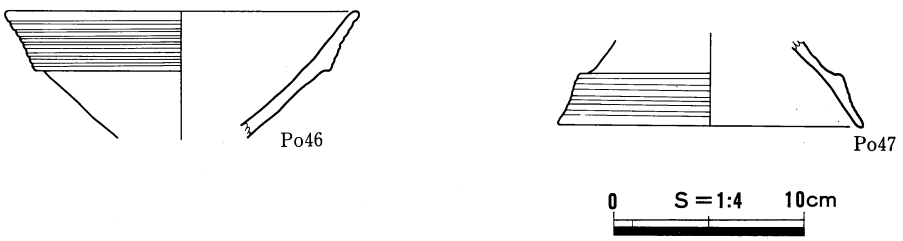
平面形は長方形で、長軸は推定で2.40m、短軸は1.05mを測る。深さは東側で最大0.56mを測る。底面も長方形で、長軸は1.83m、短軸は北側が0.52m、南側が推定で0.33mを測る。4辺にそれぞれ木棺を安置したと思われる掘り込みがある。北側の小口穴は、上縁で長軸68cm、短軸14cm、底面で長軸62cm、短軸3cmを測り、深さは6cmを測る。南側の小口穴は、西側半分が掘削されているものの、短軸は上縁で10cm、底面で3cmを測り、深さは5cmを測る。側板用の掘り込みは、東側の上縁で長軸200cm、短軸4cm、深さ4cmを測り、西側の上縁で157cm以上、短軸3cm、深さ5cmを測る。平面形、底面形いずれも北側が南側よりも大きいため、北方向を頭位とする埋葬施設と推定される。

主軸はN-4°-Eで、ほぼ真北を示す。

埋土は黄灰色系の土で花崗岩礫が多く混入している。

遺物は掘り方検出面より10～30cm上層の暗黄灰褐色土・暗黄茶褐色土中で、河原石・花崗岩石とともに弥生土器が出土している。石は掘り方の北西部に集中しているが、規則性はない。墓壙中央付近では直立した状態で河原石が出土している。土器は、器台（Po46、47）と底部が石と同様に検出面より上層で出土しており、供献土器と考えられる。

時期は遺物より弥生時代後期後葉で、墳丘墓に伴ってつくられた木棺墓跡である。




**挿図88　SX-03 出土土器実測図（S＝1/4）**

**【SX-05】**

本調査に先立って行われた試掘調査で確認された埋葬施設で、墳丘墓南側テラス部の西側にあり、SX-14・15等の南に位置する。北東隅でSX-07と複合しており、東側でもSX-06と複合している。新旧関係はいずれも本埋葬施設の方が新しい。テラス部が掘削されていなければ、本来はテラス部の中央あたりに位置していたものと思われる。

平面形は長方形で、長軸2.58m、短軸1.20mを測り、深さは北壁で最大0.62mを測る。

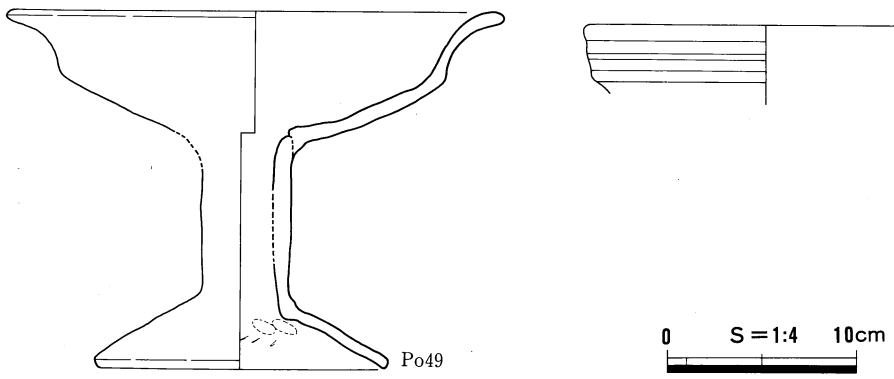
底面も長方形で、長軸2.20ｍ、短軸0.70ｍを測る。上縁も底面も南側がやや大きい。底面の南北壁際には小口穴があり、南側の小口穴は上縁で長軸70cm、短軸20cm、深さ12cmを測る。北側の小口穴は掘り方が不明瞭だが、深さ４cmを測る。東西壁際にも側板に伴う掘り込みがあり、西側の掘り込みは上縁の長軸156cm、短軸16cm、深さ10cmを測る。東側は掘り方が不明瞭なものの深さは４cm程である。掘り方から推定すると、側板が小口板を挟み込むものと思われ、平面・低面ともに南側が大きいので、頭位は南と推定される。

主軸はN-18°-Wである。

埋土には花崗岩の粗大礫が多量に混入しており、最下層のみが花崗岩小礫を少量含むもののサラサラした細粒の土である。埋土内に混入する礫の大きさ、多さは、他の埋葬施設とはやや異なる。

遺物は河原石と弥生土器が掘り方の上層で出土している。石は、掘り方の中央やや東よりと、高坏（Po49）と共に出土している。高坏はほぼ完形で、坏部が押し潰されたように出土しており、そこで甕（Po48）も出土している。いずれも供献土器と考えられる。

時期は遺物より弥生時代後期中葉で、墳丘墓に伴ってつくられた木棺墓跡である。



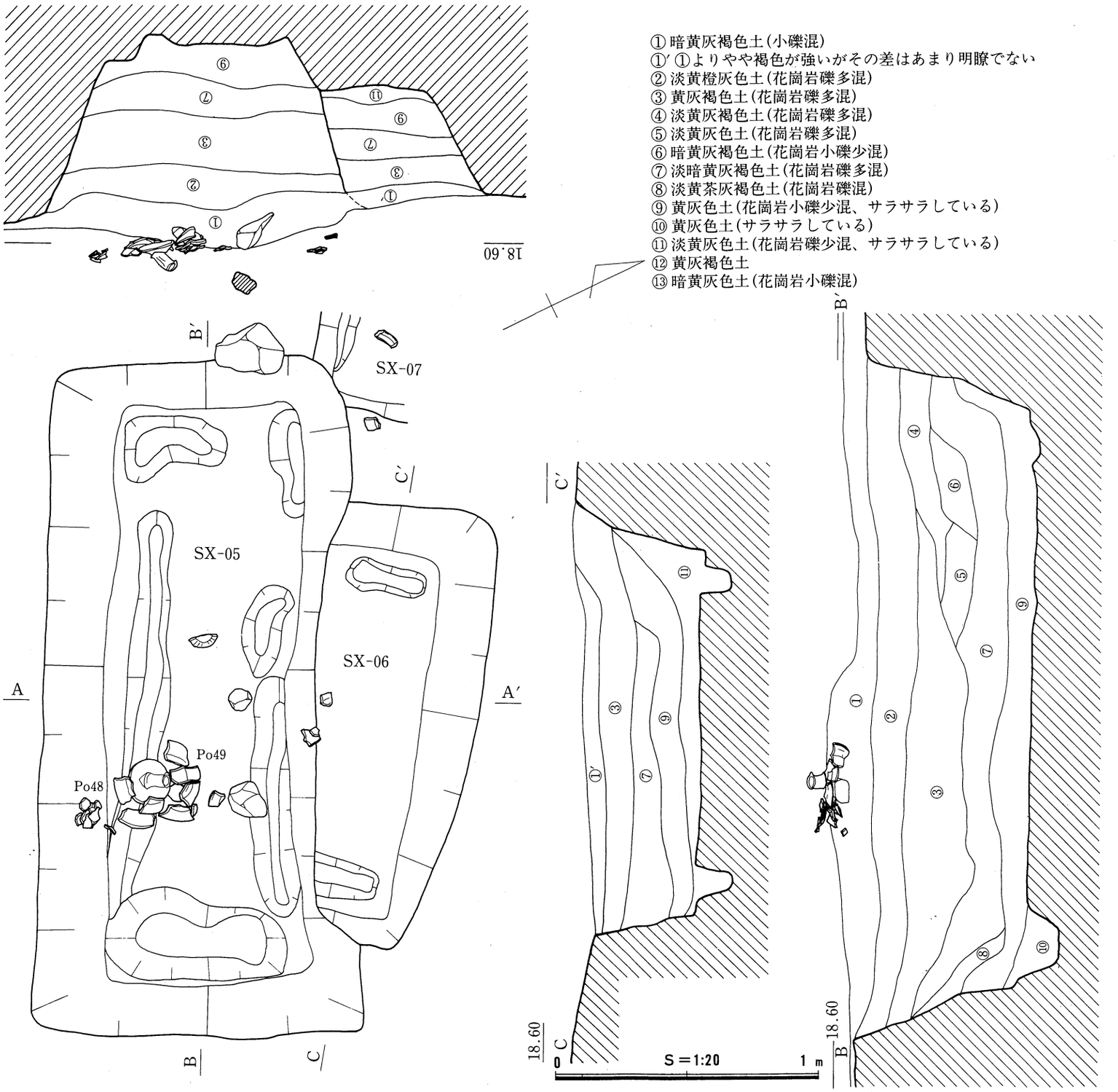

**挿図89　SX-05 出土土器実測図（S＝1/4 ）**

**【SX-06】**

墳丘墓南側テラス部にあり、石列を伴うSX-08･09の西に位置する。SX-05と複合しており、新旧関係は本埋葬施設の方が古い。テラス部が掘削されていなければ、本来はテラス部のほぼ中央に位置していたものと思われる。

平面形は長方形で、長軸1.68ｍ、短軸0.70ｍ以上を測り、深さは北壁で最大0.50ｍを測る。底面も長方形で、長軸1.38ｍ、短軸0.44ｍ以上を測り、南北底面隅に小口穴がある。北側の小口穴は上縁で長軸31cm、短軸10cm、深さ12cmを測り、南側の小口穴は上縁で長軸27cm以上、短軸16cm、深さ14cmを測る。

主軸はN-10°-Wで、ほぼ南北を示す。

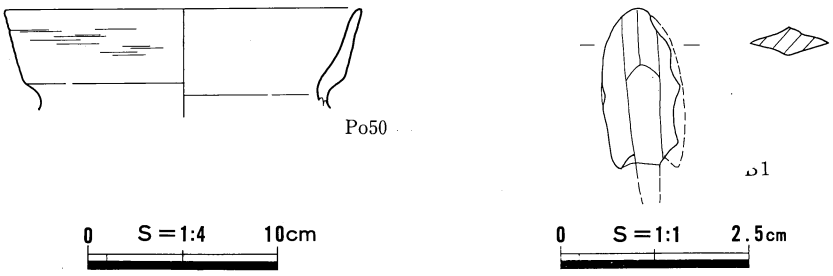



**挿図90　SX-05・06 遺構図（S＝1/20）**

埋土上層には花崗岩礫が多く混入しているが、下層は細粒のサラサラした土である。

遺物は底面直上で銅鏃（Ｂ１）が出土している。また、掘り方検出中に甕（Po50）が出土しているが、SX-05との関係もあり、本埋葬施設に伴うものとは言いがたい。河原石が全く出土していない点が注目される。

時期は、SX-05より古いものの、周辺の状況からして弥生時代後期中葉で、墳丘墓に伴ってつくられた木棺墓跡である。




**挿図91　SX-06 出土遺物実測図（S＝1/4・1/1）**

**【小規模埋葬施設群（1）】**（SX-04・07・11・13・14・15・49）

墳丘墓のすぐ南にある長軸１ｍ程の小規模の埋葬施設群で、墳丘墓南墳端テラスの直南にあり、そのテラスを意識して掘り込まれている。かなり密集しているものの切り合い関係は見つかっておらず、遺物にも時期差が見られないこと、主軸もほぼ同じであることから、殆ど同時期に掘られたものと思われる。すぐ西にも同規模の埋葬施設SX-12・16・17がある。遺構を検出した岩盤面より30cm程上層から検出面に至るまで、河原石と弥生土器が多数出土しているが、どの埋葬施設に供献されたものかわからないため、まとめて取り扱うこととした。河原石の中には、早い段階で墳丘墓の貼石が転落したものもあると思われるが、石全体としての規則性はみあたらない。

**【SX-04】**

平面形はやや不整な長方形で、長軸0.80ｍ、短軸0.66ｍ、深さは北壁で最大0.11ｍを測る。底面も長方形で、長軸0.50ｍ、短軸0.42ｍを測る。底面の東西壁際には小口穴と思われる掘り込みがあり、南北壁際には不整ながら浅い掘り込みがある。東側の小口穴は上縁で長軸35cm、短軸10cm、深さ３cmを測り、西側の小口穴は上縁で長軸23cm、短軸５cm、深さ３cmを測る。南北壁際の掘り込みは深さ２～５cm程度で、側板に伴うものと思われる。小口穴の規模から判断すると頭位は東と考えられる。

主軸はN-88°-Eで、ほぼ東西方向を示す。

埋土は細粒の明るい黄灰色土だが、岩盤面からの深さが浅いことから、盛土がなされていた可能性が強い。

掘り方の中央と、SX-14・15と接する西壁に河原石が出土している。また、埋土内より甕が出土しているが、図化できなかった。

時期は、遺物より弥生時代後期中葉～後葉で、墳丘墓に伴ってつくられた木棺墓跡である。

**【SX-07】**

SX-04・49の南にあり、南西隅でSX-05と複合している。新旧関係は本埋葬施設の方が古い。

平面形は長方形で、長軸1.00m、短軸0.57mで、深さは0.25mを測る。底面も長方形で長軸0.74m、短軸0.40mを測る。底面の西壁際には小口穴と思われる掘り込みがあり、小口穴の規模は上縁で長軸33cm、短軸7cm、深さ4cmを測る。

主軸はN-84°-Eで、ほぼ東西方向を示す。

埋土は黄灰色系の土で、花崗岩小礫を含む。深さも浅く、遺物も上層から出土していることから、盛土がなされていた可能性がある。

遺物は岩盤面より10cm程上層で、把手（Po102）が出土している。

時期は、SX-03との関係から弥生時代後期中葉で、墳丘墓に伴ってつくられた木棺墓跡である。

**【SX-11】**

墳丘墓南裾テラスに接し、SX-04・49の北に位置する。

平面形は長方形で、長軸0.78m、短軸0.58mを測り、深さは北壁で最大0.30mを測る。底面も長方形で、長軸0.63m、短軸0.34mを測る。底面の壁際には不整な浅い窪みがあるが、西壁際のものは小口穴と思われ、上縁で長軸18cm、短軸10cm、深さ7cmを測る。東壁際の窪みも小口穴の痕跡と思われ、南北壁際の窪みは側板に伴うものと思われる。

主軸はN-86°-Wで、ほぼ東西方向を示す。

埋土は上層が赤褐色土、下層が黄褐色土で、3層に分かれる。石・土器ともに墓壙上面で出土しており、盛土がなされていた可能性がある。

岩盤面より10～30cm上層で河原石が出土しており、西壁付近のものは南北に整然と並んでいる。また掘り方中央やや東寄りにも河原石が出土している。埋土上層で土器片が出土している他、SX-49と接する南壁付近で甕（Po53）が出土している。

時期は、周辺の埋葬施設との関係から弥生時代後期中葉～後葉と推定され、墳丘墓に伴ってつくられた木棺墓跡である。

【SX-13】

墳丘墓南裾テラスに接しており、SX-49とは20cm離れている。墳丘墓の墳端を意識して掘られた埋葬施設である。

平面形は長方形で長軸1.00m、短軸0.54mを測り、深さは北壁で最大0.54mを測る。底面も長方形で長軸0.67m、短軸0.35mを測る。底面は中央付近は平らだが、壁際には不整な窪みがある。この内、北壁際の凹は小口穴と思われ、上縁で長軸21cm、短軸16cm、深さ4cmを測る。その他の窪みは深さが3～10cmで、掘り方が不明瞭なものの、小口穴や側板に伴う掘り込みの痕跡と思われる。

主軸はN-7°-Eで、ほぼ真北を示す。

埋土は赤褐色系の土で、上層には花崗岩礫が多く混入しており、下層はサラサラした細粒の土である。石・土器は墓壙上層で出土しており、盛土されていた可能性がある。

遺物は岩盤面より20cm程上層から埋土上層に至るまで、河原石と弥生土器が出土している。河原石は掘り方中央やや南よりに、高低差をもって2個出土している。埋土上層で壺(Po52)、甕(Po58)が出土しており、掘り方の北西付近で底部(Po66)が出土している。

時期は、遺物より弥生時代後期中葉～後葉で、墳丘墓に伴ってつくられた木棺墓跡である。

【SX-14】

墳丘墓南裾テラスに接しており、墳丘墓の墳端を意識して掘られている。

平面形は長方形で、長軸0.99m、短軸0.43mを測り、深さは0.48mを測る。底面も長方形で、長軸0.50m、短軸は東側が0.33mで西側が0.25mを測る。東西両壁際には小口穴があり、東側の小口穴の規模は上縁で長軸33cm、短軸13cm、深さ5cmを測り、西側の小口穴は長軸25cm、短軸8cm、深さ5cmを測る。底面形・小口穴の規模からして東方向を頭位とする埋葬施設と推定される。

主軸はN-87°-Eで、ほぼ東西方向を示す。

埋土は黄灰土系の土で、花崗岩礫が混入する。岩盤面より20cm上層から検出面に至るまで、河原石と土器が出土しており、盛土が施されていた可能性がある。

河原石は掘り方の東よりで3個、南よりで甕(Po63・65)と共に2個、掘り方北側で1個出土している。甕は口縁を下に向けて逆さまに供献されているが、掘り方からSX-15よりにはずれており、本埋葬施設に伴うものとは断定できない。

時期は、遺物より弥生時代後期中葉～後葉で、墳丘墓に伴ってつくられた木棺墓跡である。

【SX-15】

SX-14の南、SX-04・07の西にあり、SX-05の北に位置する。

平面形は長方形で長軸1.07m、短軸0.72mを測り、深さは0.20mを測る。底面も長方形で長軸0.78m、短軸0.56mを測る。底面の東西両側に小口穴がある。東側の小口穴は上縁で長軸25cm、短軸6cm、深さ5cmで、西側の小口穴は上縁で長軸23cm、短軸10cm、深さ5cmを測る。底面の規模に比して小口穴が小さい。小口穴の規模からすると、東を頭位とする埋葬施設であろう。

主軸はN-84°-Wで、ほぼ東西方向を示す。

埋土は、上層には花崗岩礫が混入しており、下層は細粒のサラサラした土である。岩盤面より25cm程上層から河原石と土器が出土しており、深さも浅いことから、盛土がなされていた可能性がある。

岩盤面より20cm程上層で、掘り方の中央やや北寄りに河原石が出土している。河原石は南東隅と南壁付近でも出土しており、同じように掘り方の上層で、甕（Po54・55・57）と底部が出土している。

時期は、遺物より弥生時代後期中葉～後葉で、墳丘墓に伴ってつくられた木棺墓跡である。

【SX-49】

SX-04、SX-07、SX-11、SX-13に囲まれるようにあり、この一群の中では最後に検出した埋葬施設である。

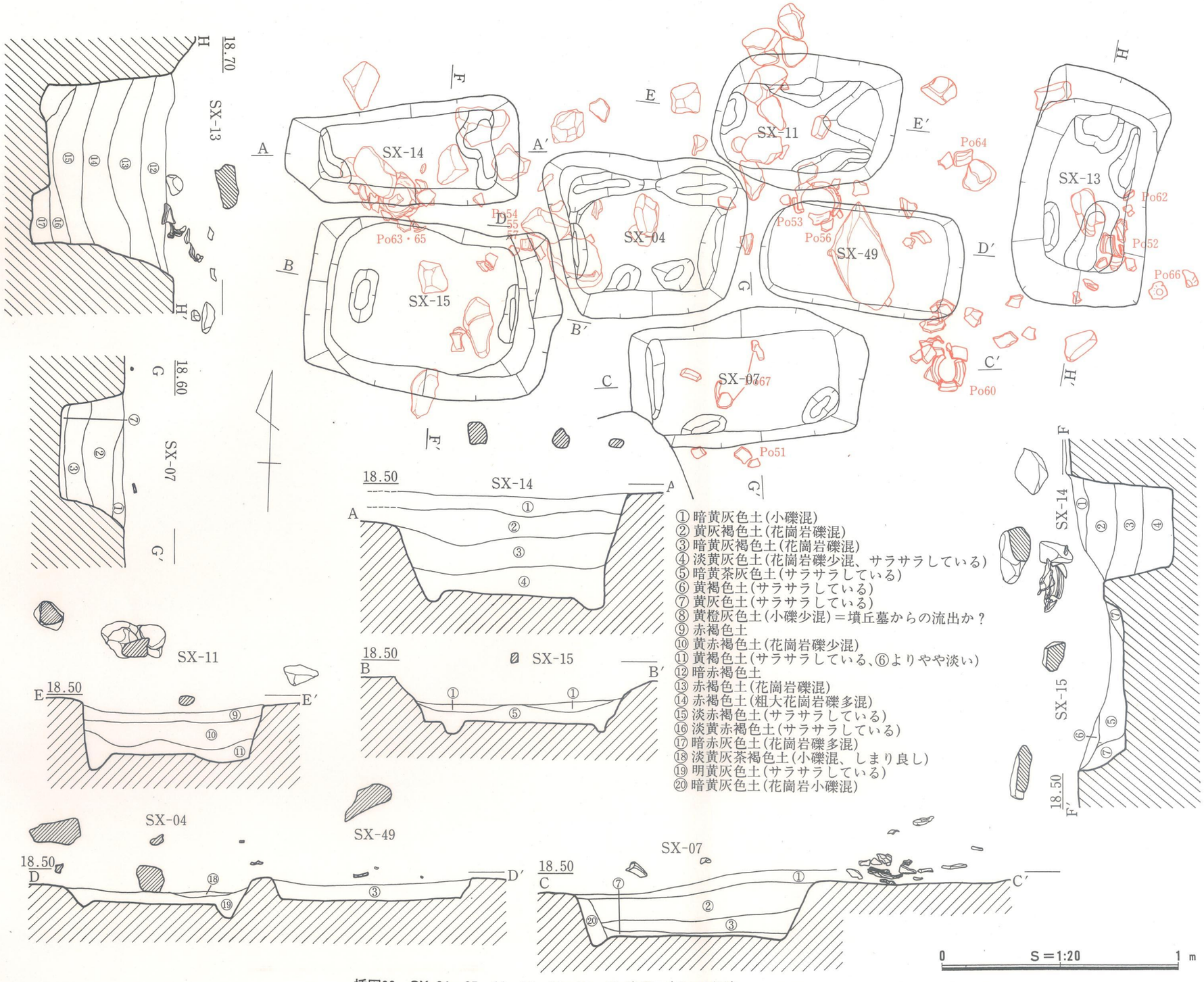
平面形は長方形で、長軸0.86m、短軸0.45mを測り、深さは0.10mを測る。底面形も長方形で、長軸0.76m、短軸0.39mを測る。底面の岩盤が風化していたこともあり、小口穴等の掘り込みは検出できなっかった。

主軸はN-85°-Wで、ほぼ東西方向を示す。

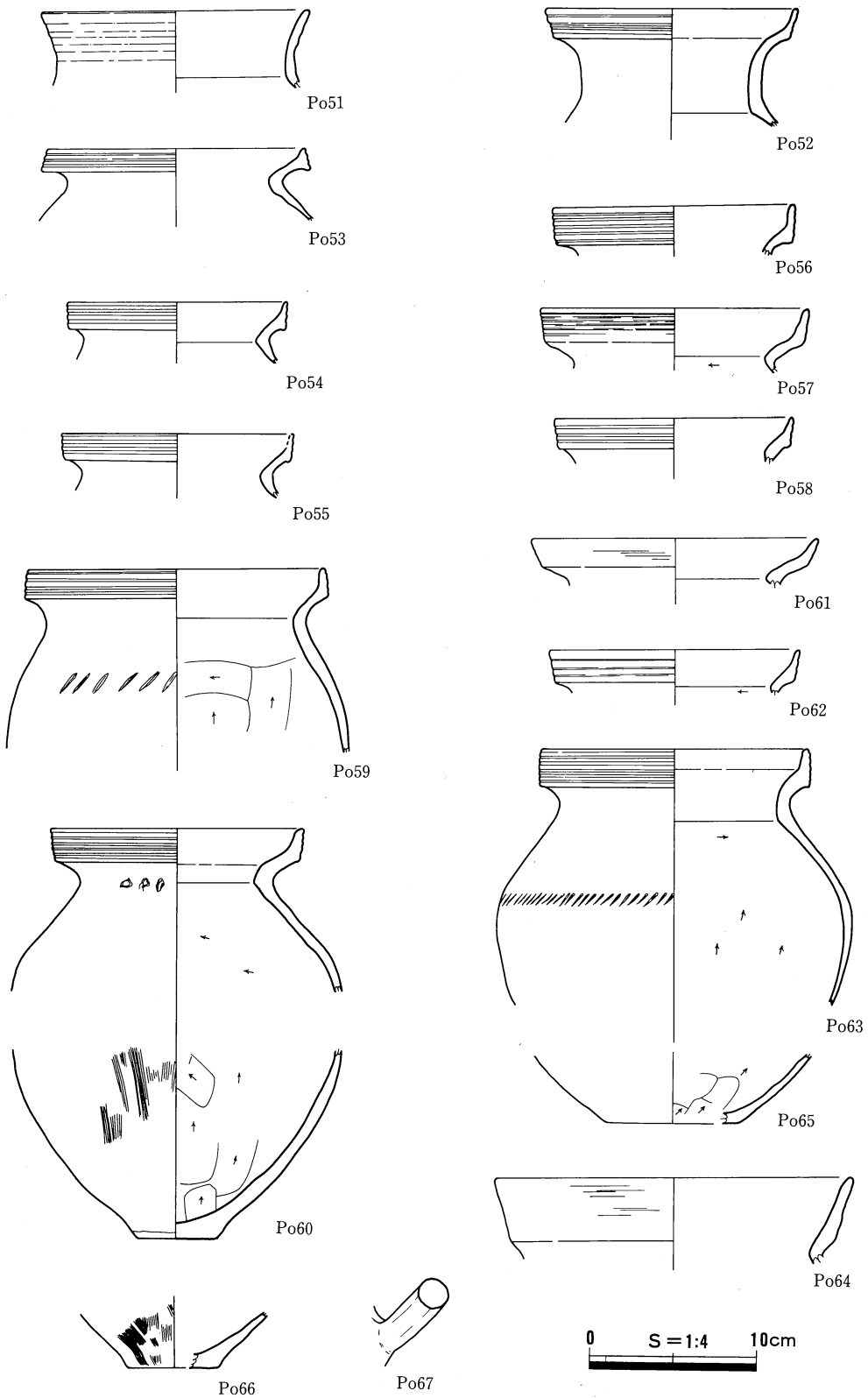
埋土には花崗岩礫が混入している。岩盤面からの掘り方が浅いことと、掘り方より上層で河原石が出土していることから、盛土が施されていた可能性が強い。

岩盤面より25cm程上層で、掘り方の中央に、長さ46cmを測る大きな河原石が出土しており、土器もその高さから埋土上層に至るまで出土している。SX-11と接する北東付近で甕（Po53）が、南東隅付近で甕（Po60）と壺（Po51）が出土しているほか、図化できなっかたが高坏筒脚部も出土している。

時期は、遺物より弥生時代後期中葉～後葉で、周囲の埋葬施設が全て木棺墓であることから、本埋葬施設も、墳丘墓に伴ってつくられた木棺墓跡である可能性が強い。




挿図92　SX-04・07・11・13・14・15・49 遺構図(S＝1/20)




挿図93　SX-04・07・11・13・14・15・49 出土土器実測図(S=1/4)

**【小規模埋葬施設群（2）】**（SX-12・16・17）

墳丘墓南側テラス部の西側にあり、墳端から南に0.5m離れた所にある小規模の埋葬施設群である。先述したSX-04等の埋葬施設群と同様に、岩盤面より20～30cm上層で、河原石と弥生土器が出土しており、どの埋葬施設にどの遺物が伴うのかはっきりしないため、一括して取り扱うことにした。3基ともに接近しているが、切り合い関係は見つかっておらず、主軸もほぼ一致する。SX-04等と同様に、さほど時期差なくつくられた埋葬施設と思われる。

**【SX-12】**

平面形はややいびつな長方形で、長軸1.03m、短軸0.44mを測り、深さは東壁で最大0.14mを測る。底面もややいびつな長方形で、長軸0.88m、短軸0.28mを測る。底面壁際には小口板、側板に係わると思われる掘り込みがあるが、底面の岩盤が風化している事もあって、明瞭には検出できなかった。深さは2～5cmである。

主軸はN-Sで、南北を示す。

埋土は黄灰色系の土で、小口板の痕跡が窺える。岩盤面より20cm程上層で河原石と土器が出土しており、掘り方も浅いことから、盛土が施されていた可能性がある。

河原石は掘り方中央やや北西寄りと、北西隅、南東隅にある。図化できなっかったが、石とともに器台が出土している。

時期は、遺物より弥生時代後期中葉～後葉で、墳丘墓に伴ってつくられた木棺墓跡である。

**【SX-16】**

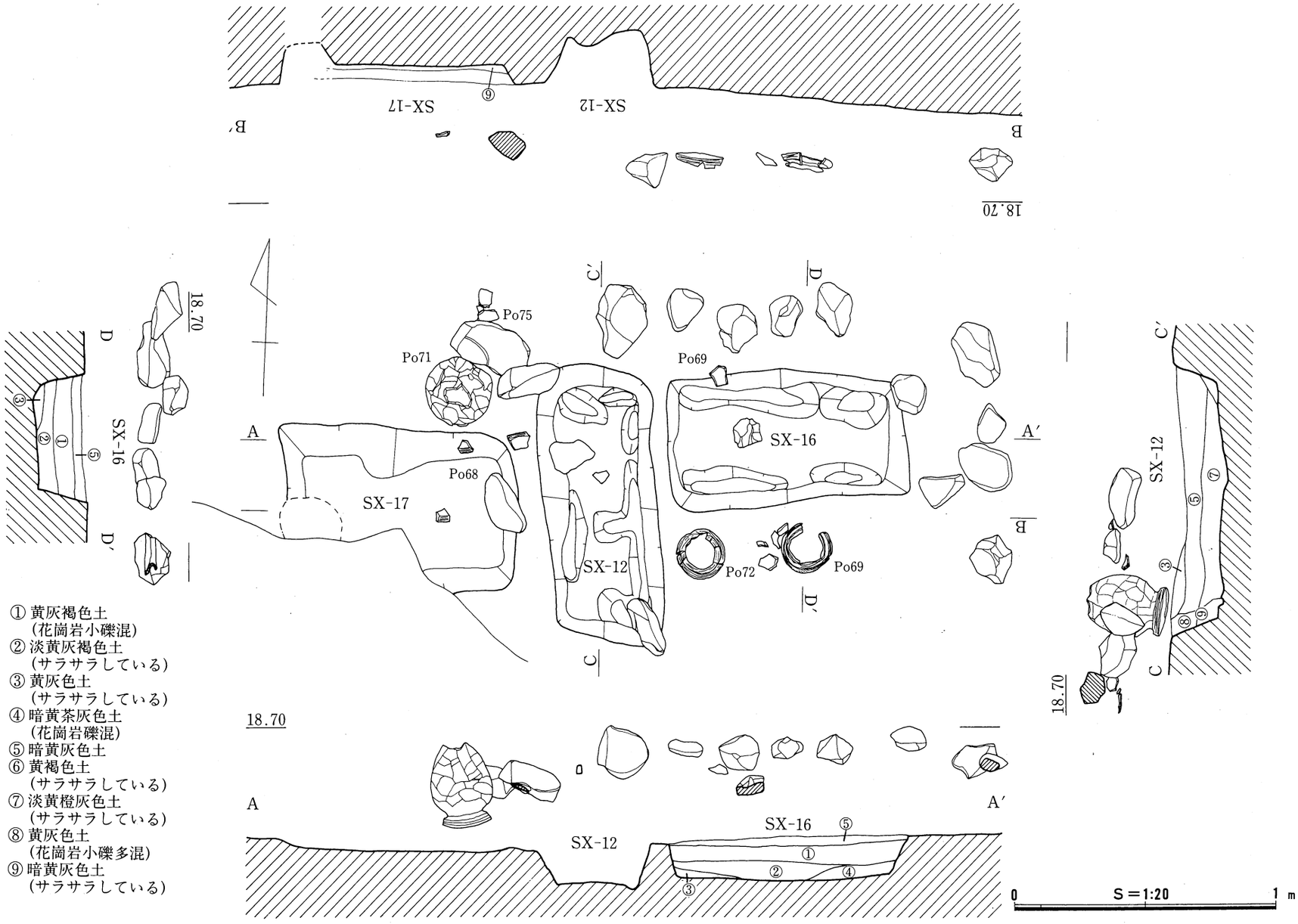
平面形は長方形で、長軸0.91m、短軸0.50mを測り、深さは北壁で最大0.18mを測る。底面も長方形で長軸0.82m、短軸0.24mを測る。南北壁際に側板に係わる掘り込みがあるが、底面の岩盤が風化しており、明確には検出できなかった。幅10cmで深さは3～5cm程度である。

主軸はN-88°-Eで、ほぼ南北に直交する。

埋土は黄灰色系の土で、河原石と土器が岩盤面より30cmほど上層で出土しており、掘り方も浅いことから、盛土が施されていた可能性がある。

河原石は、掘り方の北側と東側で巡るように並んでいるほか、掘り方中央やや西よりに1個出土している。土器も掘り方の南側に沿って出土しており、壺（Po69）、甕（Po72）は口縁部のみが下に向けられてほぼ完形で出土している。

時期は、遺物より弥生時代後期中葉～後葉で、墳丘墓に伴ってつくられた木棺墓跡である。




**挿図94　SX-12・16・17 遺構図（S＝1/20）**

【SX-17】

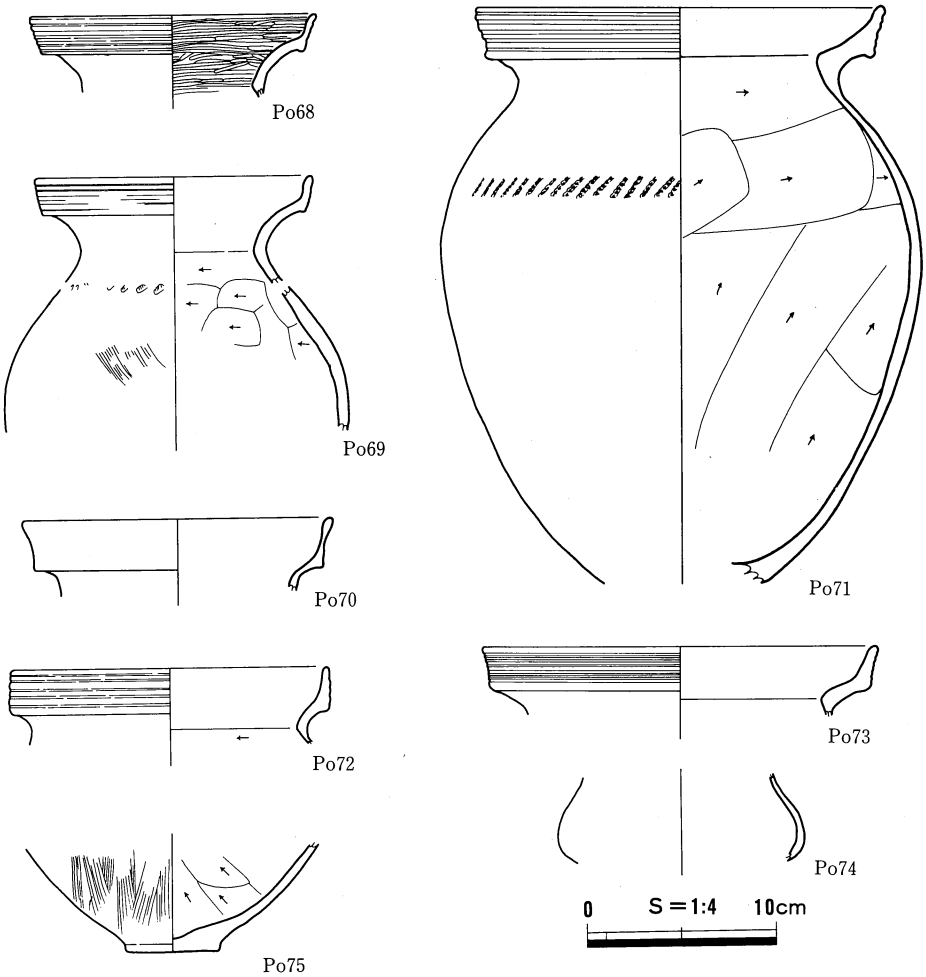
墳丘墓南側テラス部の西端にあり、SX-12の西に位置する。掘り方の南西部分が土砂採取時に掘削されている。

平面形は長方形で、長軸0.88m、短軸0.60mを測り、深さは北壁で最大0.08mを測る。底面も長方形で、長軸0.75m、短軸0.42mを測る。底面の岩盤の風化が著しく、西側が木の攪乱を受けていることもあって、小口穴等は検出できなかった。

主軸はN-89°-Eで、南北にほぼ直交する。

埋土は細粒のサラサラした土で、石・土器が墓壙上層で出土しており、この埋葬施設にも盛土が施されていた可能性がある。

岩盤面より20cmほど上層の北壁付近で河原石が1個と、その石よりもやや中央よりで壺(Po68)が出土している。また、掘り方とはややずれるものの、北西隅で、河原石とともに甕(Po70)が、底部のみ欠損してほぼ完形の状態で口縁部を下に向けて出土している。




挿図95 SX-12・16・17 出土土器実測図(S=1/4)

時期は、遺物より弥生時代後期中葉～後葉で、墳丘墓に伴ってつくられた埋葬施設である。

**【石　　列】**

墳丘墓南側テラス部の東側にはSX-08・09を取り囲むように河原石が並んでいる。本調査に先立って行われた試掘調査で確認された遺構である。石は東側半分が乱れており、南側に至っては殆ど残っていない。南側の様相がわからないため、石列の全体のプランは不明であるが、残りの良好な西側の配列を見ると北側はほぼ円弧をなし、SX-09の南西隅でくびれるようにして、南側は南西方向に広がっていくようである。また、石は中央部に向かって高くなっており、この石列はテラス内につくられた小墳墓の墳端に貼られた石である可能性が強いが、南北土層断面観察（挿図82）では明瞭には窺えなっかた。石列の規模は、南北軸が5ｍ以上、円弧を描く北側の径が推定で3.60ｍである。河原石と共に弥生土器が出土している。

西側の石列と共に出土した土器は試掘調査で取り上げられており、甕3点と底部が出土している。北東側の石列からは、小型の甕（Po77）、甕（Po78・80・81）、底部（Po86）が出土している。

石列内にある埋葬施設も数グループに分かれるようで、石列下にあって石を除去した後に検出したSX-51は、石列以前につくられた埋葬施設と思われ、SX-08・09は石列の主体をなす埋葬施設で、北側のSX-10・19・42や東側のSX-18・21・35等はその後つくられた埋葬施設と思われる。

**【SX-08】**

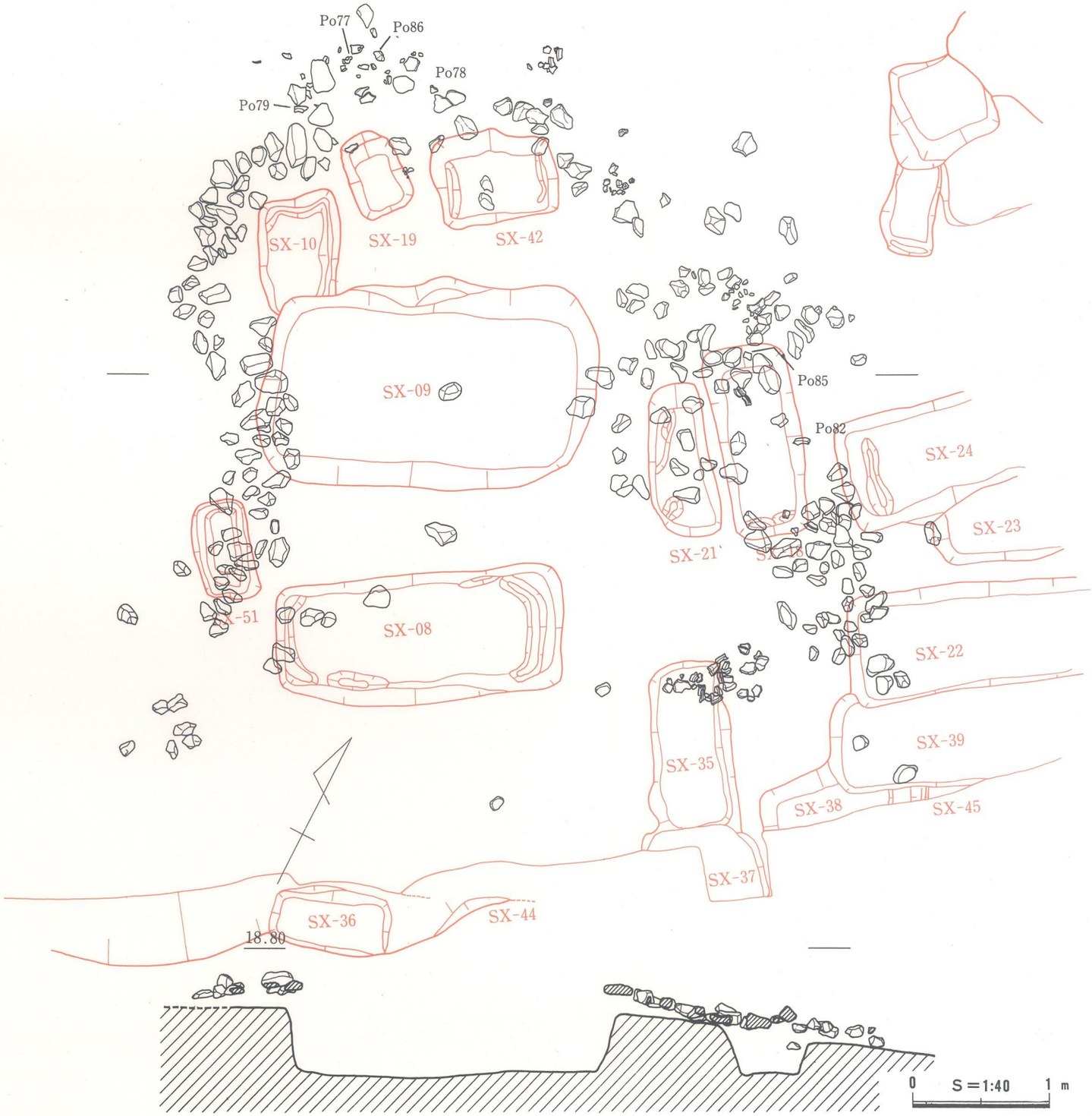
石列内の中央南側にあり、SX-09の南に位置する。

平面形は長方形で、長軸2.07ｍ、短軸0.92ｍを測り、深さは西壁で最大0.22ｍを測る。底面も長方形で、長軸1.95ｍ、短軸0.70ｍを測る。底面の東西両壁際には小口穴があり、その形態はU字状を呈し、今回調査した埋葬施設の中では特異である。東側の小口穴の規模は、上縁で長軸97cm、短軸15cm、深さ15cmを測り、西側の小口穴の規模は、上縁で長軸80cm、短軸9cm、深さ18cmを測る。東西小口穴間の長さは1.68ｍを測る。平面形と小口穴の規模から判断すると、頭位を東とする埋葬施設と思われる。

主軸はN-84°-Wで、ほぼ東西方向を示す。

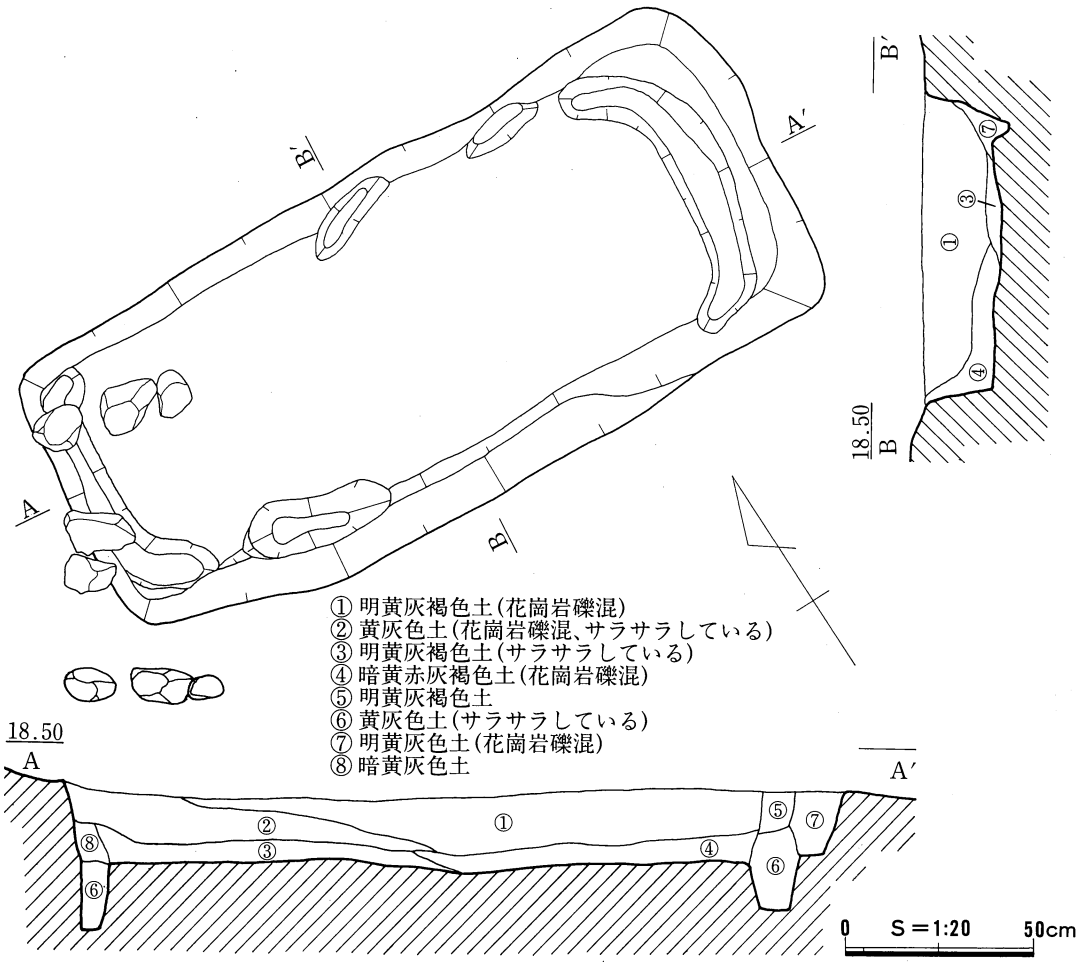
埋土は黄灰色系の土で、花崗岩礫が混入する。SX-05・06等に比べると花崗岩礫の混入も少なく、細粒のきれいな埋土である。

西側小口穴付近で河原石が出土しているが、掘り方検出面より25cm程上層にあり、本埋葬施設に伴うものかどうかは不明である。




挿図96　石列周辺の埋葬施設群遺構図(S＝1/40)

時期は石列と共に出土している弥生土器から判断して、弥生時代後期中葉と思われる。SX-08は墳丘墓に伴ってつくられた木棺墓跡ではあるが、石列を伴うことと、小口穴の形態からして、他の埋葬施設とは一線を画すようである。




**挿図97 SX-08 遺構図（S=1/20）**

**【SX-09】**

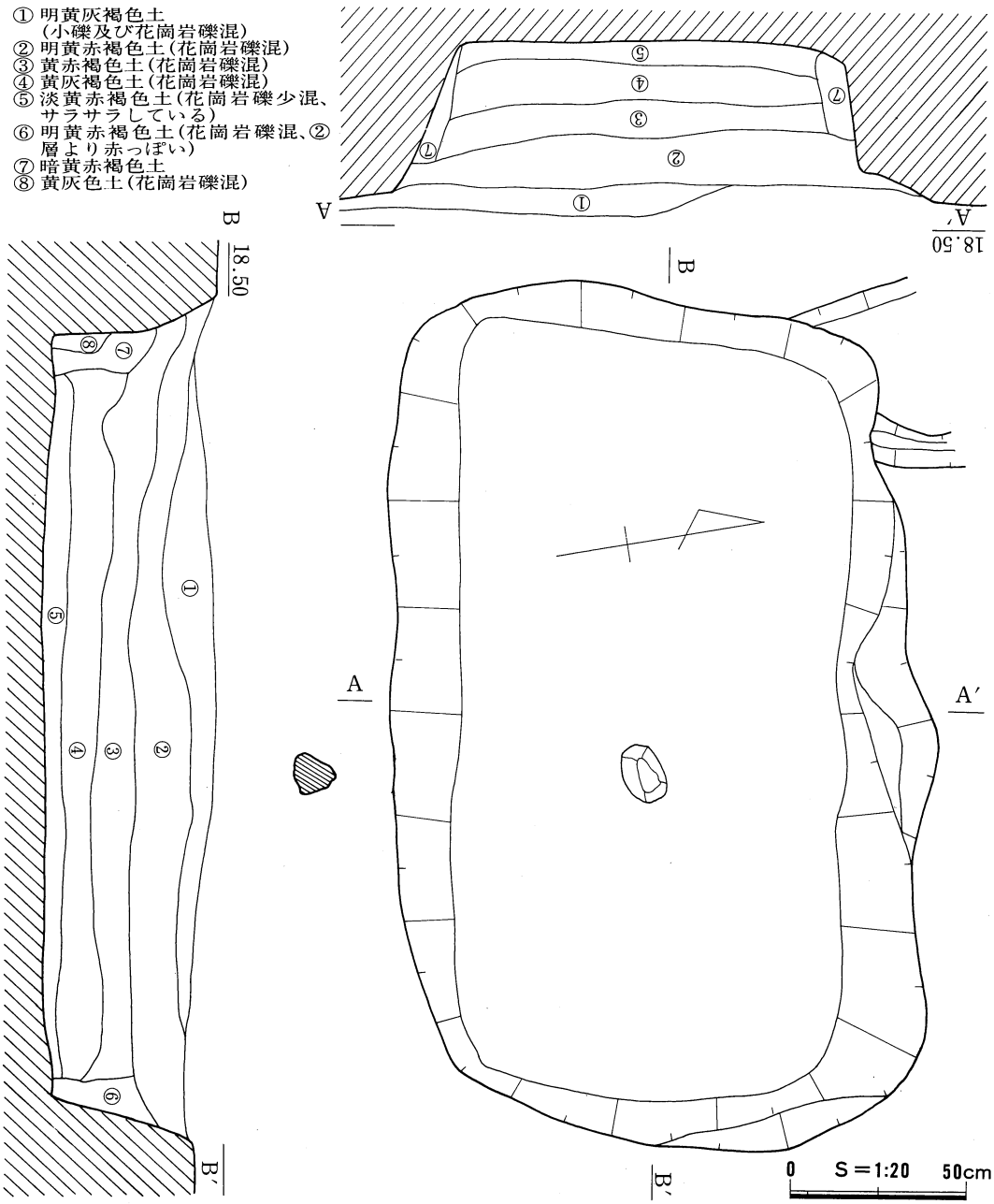
石列内の中央にあり、SX-08の南に位置する。北にはSX-10・19・42がある。北西隅でSX-10と複合関係にあり、新旧関係は本埋葬施設の方が古い。

平面形はやや隅の丸い長方形で、長軸2.42m、短軸1.45mを測る。深さは西壁で最大0.46mを測る。底面もやや隅の丸い長方形で、長軸2.17m、短軸1.06mを測る。南側テラス部で検出された埋葬施設の中では最大規模を誇る。底面には小口穴等の掘り込みはない。 主軸はN-79°-Wで、ややずれるもののほぼ南北に直交する。

埋土は黄赤褐色系の土で、花崗岩礫が混入しているが、SX-08と同様に礫の混入は少な

く、細粒のきれいな埋土である。土層観察では木棺の痕跡が窺える。

掘り方のほぼ中央部で河原石が１点出土している。河原石は岩盤面より30cm程上層にある。時期は、石列と共に出土した土器から判断して弥生時代後期中葉で、墳丘墓に伴ってつくられた木棺墓跡であるが、石列を伴うことと、墓壙の大きさからして、テラス部で検出された他の埋葬施設とは一線を画すようである。

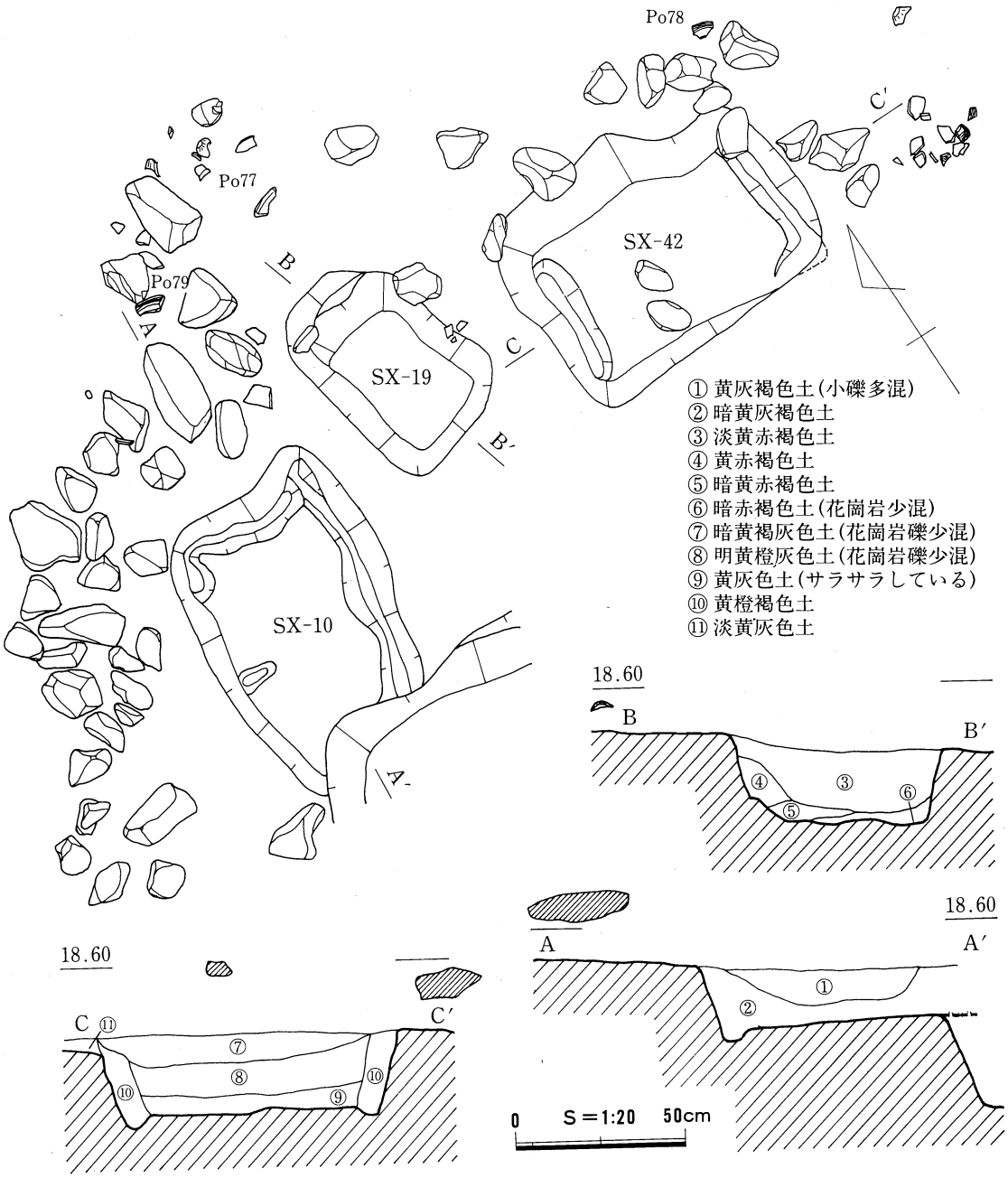



挿図98　SX-09 遺構図(S=1/20)

【SX-10】

石列内の北西隅にあり、南側でSX-09と複合しており、新旧関係は本埋葬施設の方が新しい。

平面形は長方形で、長軸0.71m以上、短軸0.60mを測り、深さは北壁で最大0.19mを測る。底面も長方形で長軸0.55m以上、短軸0.38mを測る。北壁際には小口穴があり、上縁




挿図99 SX-10・19・42 遺構図(S=1/20)

で長軸40cm、短軸７cmを測り、深さは４cmを測る。東壁際には側板に伴う掘り込みがあり、上縁で長軸76cm以上、短軸５～10cm、深さ４cmを測り、小口穴を挟み込むよう掘られている。平面形から判断すると頭位は北と推定される。

主軸はN-７°-Eで、ほぼ南北を示す。

埋土は、上層には花崗岩小礫が混入し、下層は細粒のサラサラした土である。

遺物は出土していない。

時期は、周辺の状況からして弥生時代後期後半で、墳丘墓に伴ってつくられた木棺墓跡である。

**【SX-19】**

石列内の北側にあり、SX-09の北、SX-10・42の中間に位置する。この埋葬施設を境にして石列は乱れる。

平面形は長方形で、長軸0.62ｍ、短軸0.40ｍを測り、深さは北壁で最大0.27ｍを測る。底面も長方形で、長軸0.39ｍ、短軸0.23ｍを測る。底面には小口穴等の掘り込みはない。

主軸はN-14°-Wである。

埋土は赤褐色系の土である。

掘り方の北西部と北東部で、岩盤面より10cm程上層に河原石が出土しているほか、土器片が出土している。

時期は、周辺の状況からして弥生時代後期後半で、墳丘墓に伴ってつくられた埋葬施設である。

**【SX-42】**

石列の北東部中央寄りにある。SX-09の北、SX-19の東に位置する。

平面形は長方形で、長軸0.87ｍ、短軸0.67ｍを測り、深さは最大0.23ｍを測る。底面も長方形で、長軸0.58ｍ、短軸0.45ｍを測る。東西両壁際には小口穴があり、東側の小口穴は上縁で長軸40cm、短軸７cm、深さ３cmを測り、西側の小口穴は上縁で長軸40cm、短軸８cm、深さ４cmを測る。

主軸はE-Wで、東西方向を示す。

埋土の上層には花崗岩礫が少量混入しており、下層は細粒のサラサラした土である。

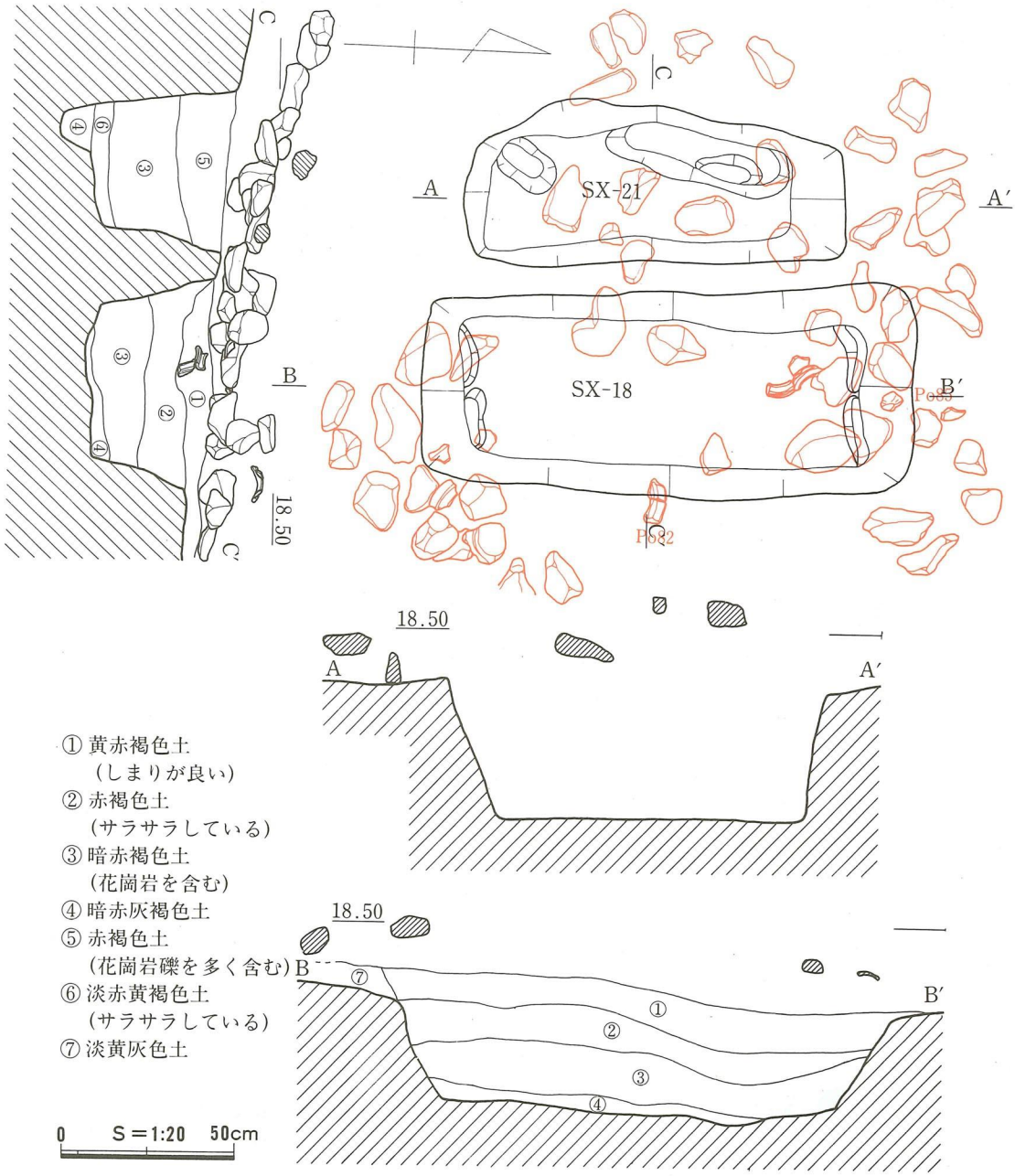
掘り方の北側と東側で、岩盤面より15cm程上層に河原石が出土しており、掘り方の中央やや南寄りでは、岩盤面より20cm上層で２個出土している。

時期は、周辺の状況からして弥生時代後期後半で、墳丘墓に伴ってつくられた木棺墓跡である。

【SX-18】

SX-09の東に位置し、すぐ東にはSX-23・24があり、西隣にはSX-21がある。掘り方を検出する前に多数の河原石が出土しており、石はかなり乱れている。

平面形は長方形で、長軸1.42m、短軸0.60mを測り、深さは西壁で最大0.33mを測る。




挿図100 SX-18・21 遺構図(S=1/20)

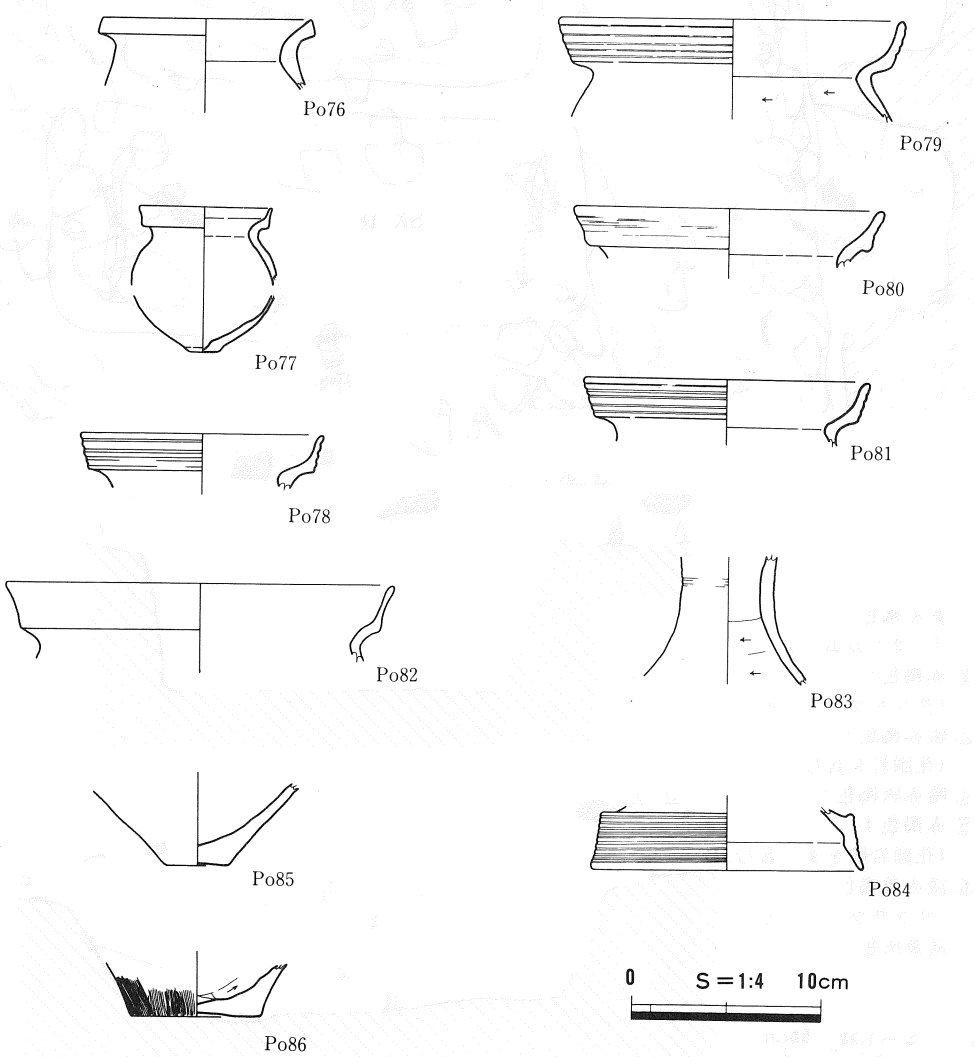
底面も長方形で、長軸1.05m、短軸0.42mを測る。南北両壁際には小口穴と思われる浅い掘り込みがあるが、掘り方がやや不明瞭で、深さは2cm程度である。

主軸はN-1°-Wで、南北を示す。

埋土は赤褐色系の土で、花崗岩礫が混入する。

岩盤面より20cm上層から岩盤面直上に至るまで河原石が出土しており、石とともに甕（Po82）と底部（Po85）が出土しており、埋土最上層でも甕が出土している。

時期は、遺物より弥生時代後期後半で、墳丘墓に伴ってつくられた木棺墓跡である。




**挿図101　石列周辺出土土器実測図（S=1/4）**

【SX-21】

SX-09の東に位置し、東隣にはSX-18がある。掘り方を検出する前に多数の河原石が出土している。

平面形は長方形で、長軸1.10m、短軸0.45mを測り、深さは西壁で最大0.42mを測る。底面も長方形で長軸0.87m、短軸0.30mを測る。底面の西側に不整な落ち込みがあり、深さは10cm程度である。底面に小口穴等は見つかっていない。

主軸はN-1°-Wで、南北を示す。

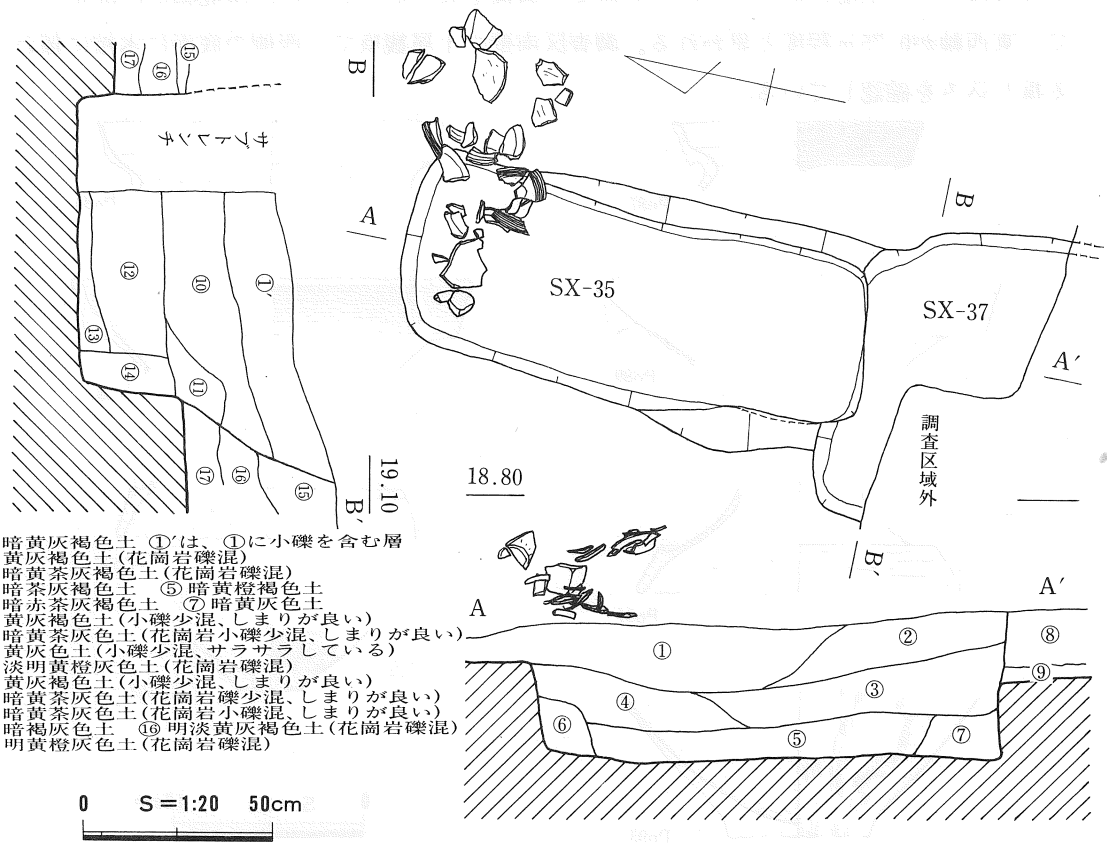
埋土は赤褐色系の土で、上層には花崗岩礫が多く混入している。

出土した河原石は西ほど岩盤面から浮いている。土器は出土していない。

時期は、周辺の状況からして弥生時代後期後半で、墳丘墓に伴ってつくられた埋葬施設である。

【SX-35】

SX-08の南東にあり、調査区の南端に位置する。SX-37と複合しており、新旧関係は本埋葬施設の方が新しい。石列は本埋葬施設の周辺で完全にとぎれている。




挿図102 SX-35・37遺構図(S=1/20)

平面形は長方形で、長軸1.25ｍ、短軸0.56ｍを測り、深さは0.39ｍを測る。底面も長方形で長軸1.20ｍ、短軸0.43ｍを測る。小口穴等は見つかっていない。

主軸はN-5°-Eで、ほぼ南北を示す。

埋土の上層には花崗岩礫が混入しており、東西両壁際には小口板の痕跡が窺える。

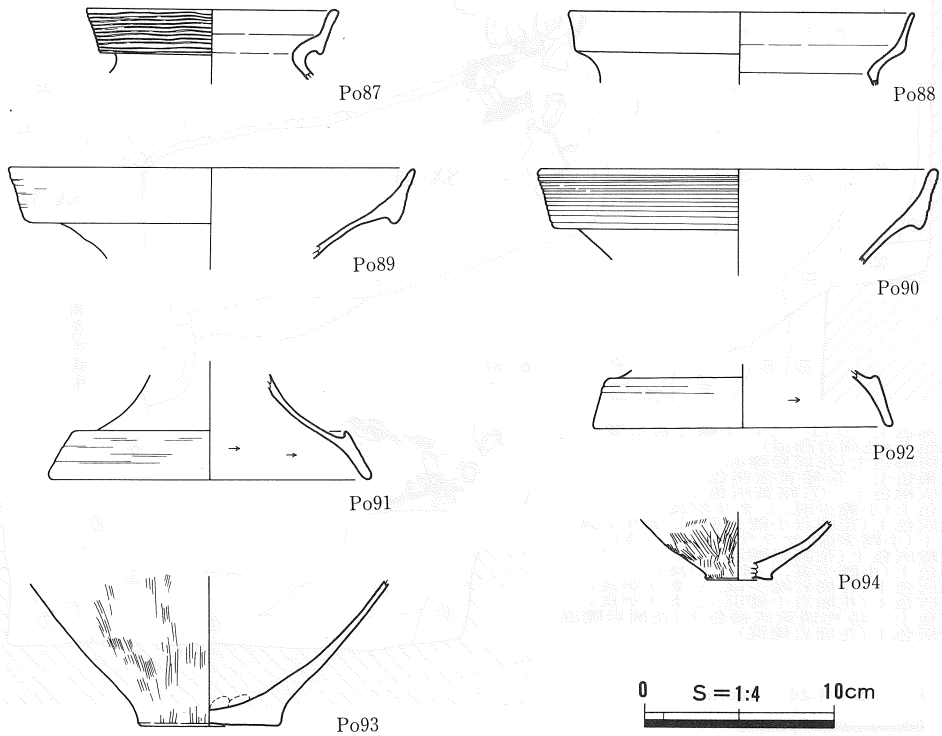
岩盤面より35cm程上層の掘り方の北側付近で、河原石と弥生土器が多数出土している。土器は、石列とともに出土した弥生土器よりも、やや新しい要素をもっており、甕（Po87、88）、器台（Po89～92）、底部（Po93、94）が出土している。

時期は、遺物より弥生時代後期後葉で、墳丘墓に伴ってつくられた木棺墓跡であるが、埋葬施設群の中では新しいグループに属するものと思われる。

**【SX-37】**

調査区南端にあり、北側だけの調査で、南側は調査区域外にある。SX-35と複合関係にあり、新旧関係は本埋葬施設の方が古い。

平面形は長方形と思われ、南北軸が0.55ｍ以上、東西軸が0.85ｍ程度と推定され、深さは東側で最大値を測り、岩盤面からは0.26ｍだが、調査区南壁の土層断面観察では掘り込み面ははさらに上層にあり、0.66ｍを測る。底面も長方形と思われ、南北軸が0.50ｍ以上で、東西軸が0.75ｍ程度と思われる。調査区南壁の土層観察で、西側の底面に木棺に係わる掘り込みを確認している。




**挿図103　SX-35 出土土器実測図（S＝1/4）**

主軸は断定はできないが、南北あるいは東西方向を示すものと思われる。

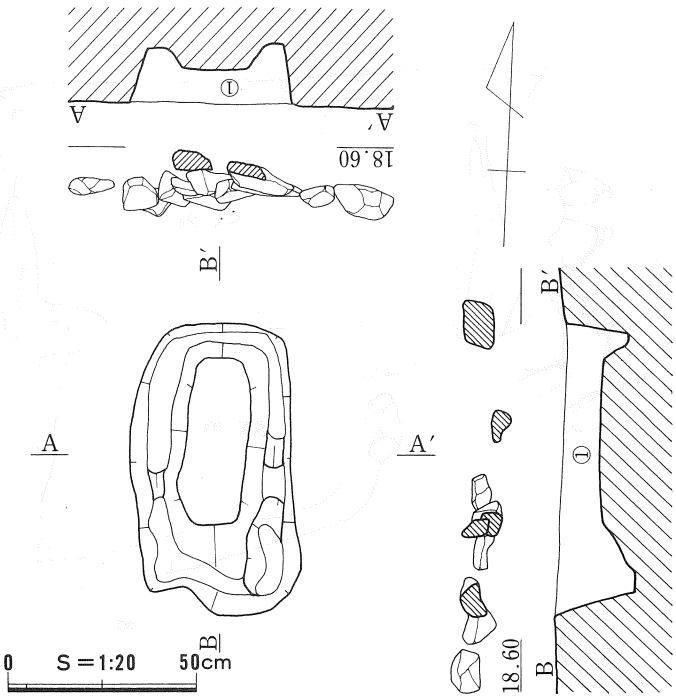
埋土は黄灰色系の土で、花崗岩礫を含む。

時期は、SX-35より古いものの、やはり弥生時代後期後半と思われ、墳丘墓に伴ってつくられた木棺墓跡である。

**【SX-51】**

石列の南西部にあり、掘り方を検出した岩盤面より20cm程上層に石列があり、石を除去した後に検出した埋葬施設である。石列に殆ど乱れがないことから、それ以前につくられたものと思われる。すぐ北西にSX-09があり、すぐ南西にSX-08がある。

平面形は長方形で、長軸0.77m、短軸0.43mを測り、深さは西壁で最大0.13mを測る。底面も長方形で、長軸0.44m、短軸0.16mを測る。底面の壁際には深さ6cm程の掘り込みがあり、全周している。木棺に伴う掘り込みであろう。




**挿図104 SX-51 遺構図(S=1/20)**

主軸はN-3°-Wで、ほぼ南北を示す。

埋土は暗黄灰褐色土で、花崗岩小礫が少量混入している。

遺物は全く出土していないが、石列との関係からして、時期は弥生時代後期中葉で、墳丘墓に伴ってつくられた埋葬施設である。

**【SX-23】**

墳丘墓南側テラス部の東端にあり、石列とはやや東に外れる。SX-22の北に位置する。北側でSX-24と複合しており、新旧関係は本埋葬施設の方が古い。

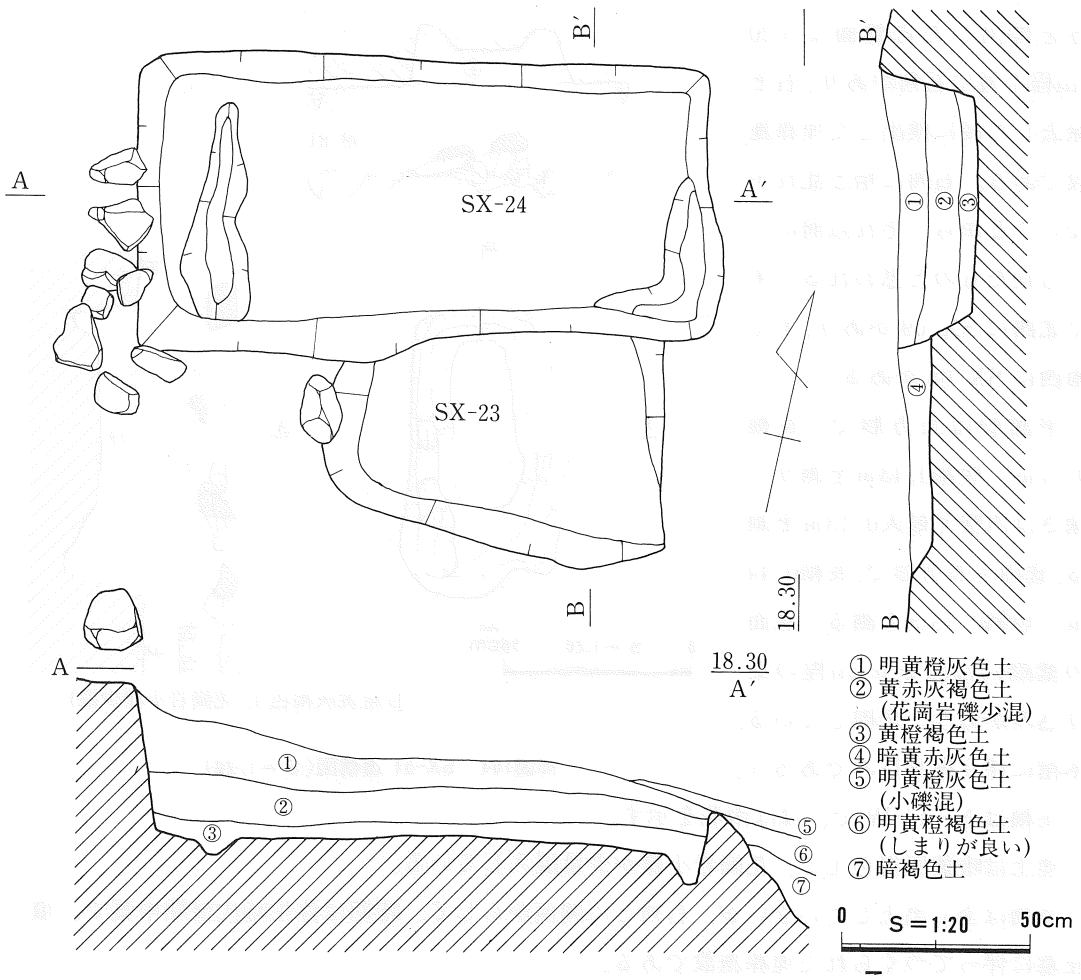
南東側の壁面が崩れているために歪な形をしているが、平面形はやや隅の丸い長方形と推定され、長軸0.90m、短軸0.56m以上を測る。深さは西壁で最大0.26mを測る。底面もやや隅の丸い長方形と推定され、長軸0.75m、短軸0.48m以上を測る。底面では小口穴等の掘り込みは検出していない。

主軸はN-88°-Wで、ほぼ東西方向を示す。

埋土は暗黄赤灰色土である。

岩盤面より10cm程上層の西壁付近で、河原石が1点出土している。

時期は、周辺の状況からして弥生時代後期後半と推定され、墳丘墓に伴ってつくられた埋葬施設であろう。




挿図105　SX-23・24 遺構図(S=1/20)

【SX-24】

墳丘墓南側テラス部の東端にあり、SX-18の東に位置する。墓壙西壁付近には乱れてはいるものの石列の一部がかかっている。南側でSX-23と複合しており、新旧関係は本埋葬施設の方が新しい。

平面形は長方形で、長軸1.52m、短軸0.81mを測り、深さは西壁で最大0.41mを測る。底面も長方形で、長軸は1.40m、短軸は西側が0.64m、東側が0.55mを測る。底面の東西

両壁側には小口穴がある。西側の小口穴の規模は上縁で、長軸57cm、短軸12cm、深さ5cmを測る。東側の小口穴は北ほど掘り方が不明瞭で、深さ6cmを測る。底面形から判断すると頭位は西と推定される。

主軸はN-81°-Eである。

埋土には花崗岩礫があまり混入していない。

掘り方の西側で河原石が多数出土している。その石の中には本埋葬施設に対して置かれたものもあろうが、詳細は不明である。

時期は、周辺の状況からして弥生時代後期後半と推定され、墳丘墓に伴ってつくられた木棺墓跡である。

**【SX-22】**

墳丘墓南側テラス部の南東端にあり、SX-23の南に位置する。南側がSX-39と複合しており、新旧関係は本埋葬施設の方が新しい。

平面形は長方形で、長軸2.22m、短軸0.76mを測るが、墓壙の大きさは東ほど小さくなる。深さは西壁で最大0.58mを測る。底面も長方形で、長軸は2.12m、短軸は西側が0.65m、東側が0.46mを測る。底面には小口穴等は検出していない。底面形から判断すると頭位は西と推定される。

主軸はN-89°-Eで、ほぼ東西方向を示す。

埋土には花崗岩礫が混入しており、土層観察では小口板の痕跡が窺える。

西壁付近の岩盤面直上から20cm程上層で河原石が多数出土している。すべてが本埋葬施設に伴うものかどうかは不明である。

土器が出土していないが、周辺の状況からして、時期は弥生時代後期後半と推定され、墳丘墓に伴ってつくられた木棺墓跡である。

**【SX-38】**

墳丘墓南側テラス部の南東端にあり、掘り方の南半分は調査区域外にある。SX-35・37の東に位置し、すぐ東隣にはSX-45がある。北東側でSX-39と複合しており、新旧関係は本埋葬施設の方が古い。

平面形は長方形と推定され、長軸0.98m、短軸0.37m以上を測る。岩盤面での深さは西壁で最大0.48mを測るが、調査区南壁の土層観察では、掘り込み面が岩盤面よりも上層にあるため、西壁で0.66mを測る。底面も長方形と推定され、長軸0.84m、短軸0.24m以上を測る。底面に小口穴等の掘り込みは検出していない。

主軸はN-84°-Eで、ほぼ東西方向を示す。

埋土は花崗岩礫を含む赤灰色系の土で、土層観察で小口板の痕跡を確認している。

土器が出土していないが、周辺の状況からして、時期は弥生時代後期後半と推定され、

墳丘墓に伴ってつくられた木棺墓跡と思われる。

【SX-39】

墳丘墓南側テラス部の南東端にあり、掘り方の南東側は調査区域外にある。北側がSX-22と複合しており、南側はSX-38・45と複合している。新旧関係は、SX-22よりも古く、SX-38・45よりも新しい。

平面形は長方形で、長軸2.22m、短軸0.70m以上を測る。岩盤面からの深さは西壁で最大0.35mを測るが、調査区南壁の土層観察では、SX-45の埋土を切り込んでいる西壁で0.60mを測る。底面も長方形で、長軸2.11m、短軸0.65m以上を測る。底面の岩盤の風化が著しく、小口穴は検出できなかったが、調査区南壁の土層観察では、東壁際に深さ5cmの小口穴を確認している。

主軸はN-86°-Wで、ほぼ東西方向を示す。

埋土は花崗岩礫を含む赤灰色系の土である。

墓壙西壁付近と南西壁付近で、河原石が出土している。いずれも岩盤面より15cm程上層である。

土器が出土していないが、周辺の状況からして、時期は弥生時代後期後半と推定され、墳丘墓に伴ってつくられた木棺墓跡である。

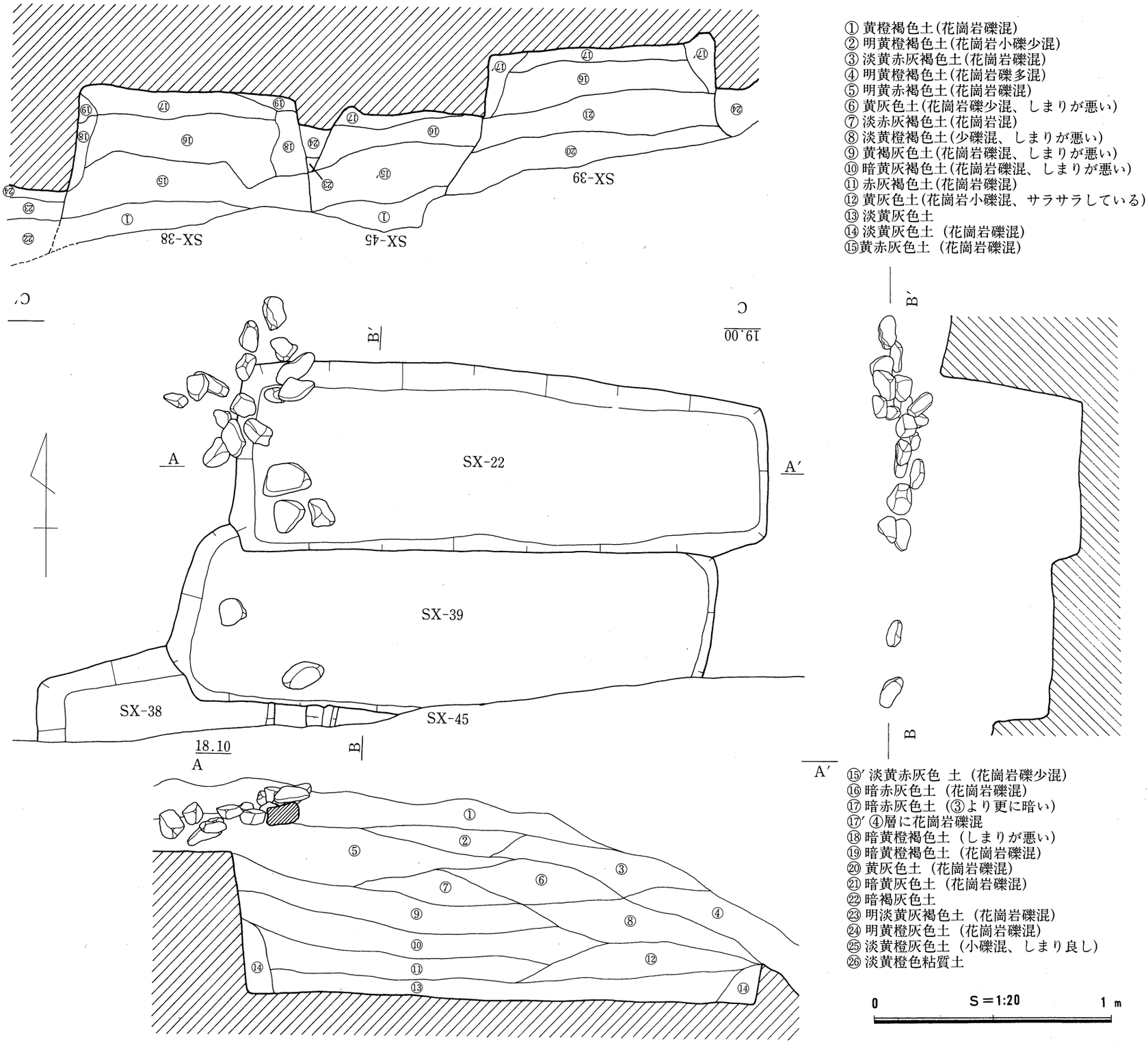
【SX-45】

墳丘墓南側テラス部の南東端にあり、墓壙西壁側のごく一部を検出しただけで、ほとんどが調査区域外にある。SX-38の東に位置し、北側でSX-39と複合しており、新旧関係は本埋葬施設の方が古い。

平面形、底面形とも不明で、調査区南壁の土層観察では、掘り込み面が岩盤面よりも上層にあり、深さは西壁で0.40mを測る。西壁際には小口穴があり、上縁で短軸7cm、深さ5cmを測る。

埋土は花崗岩礫を含む赤灰色系の土である。

遺物は出土していないが、周辺の状況からして、時期は弥生時代後期後半と推定され、墳丘墓に伴ってつくられた木棺墓跡と思われる。



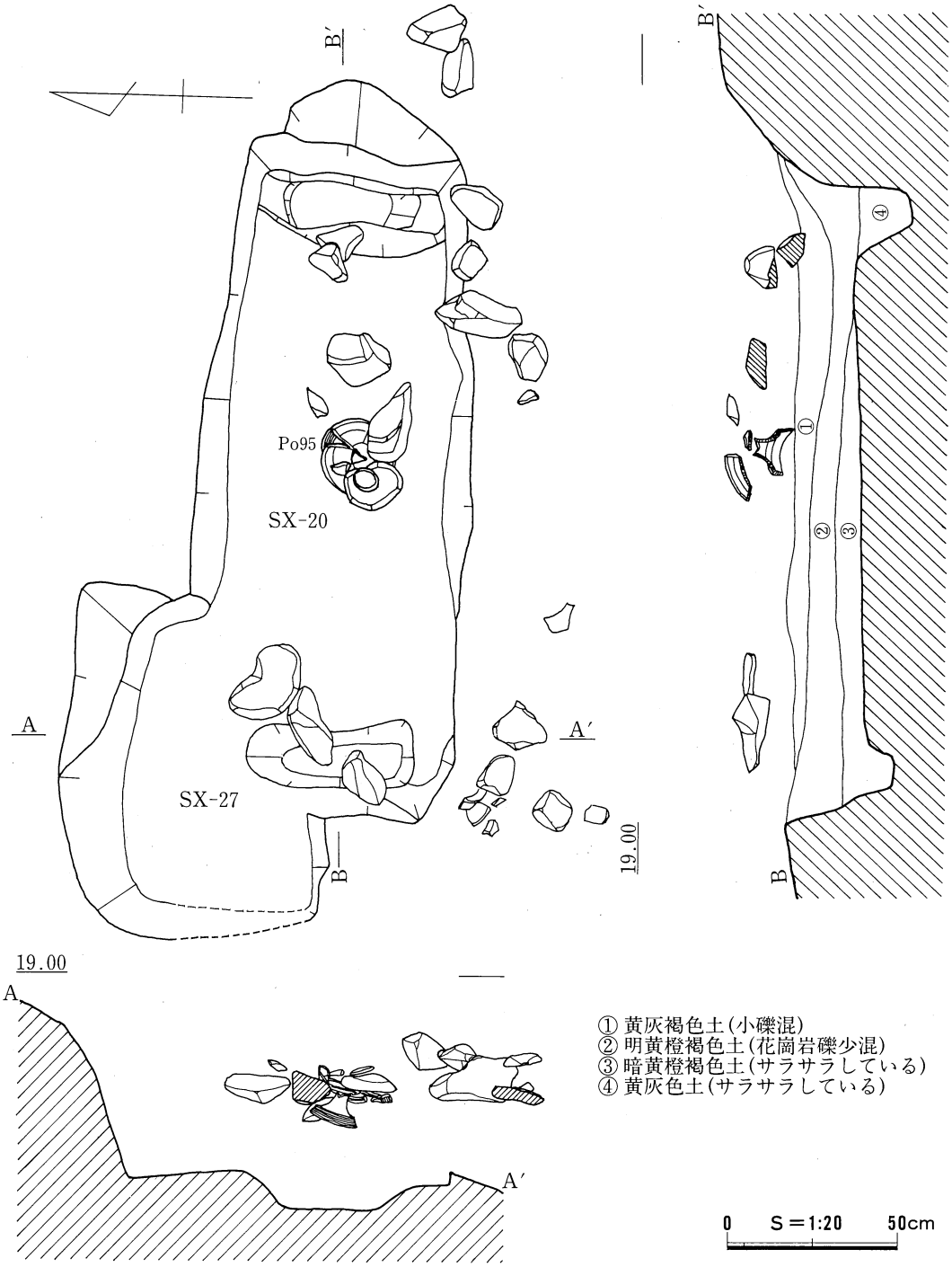

① 黄橙褐色土(花崗岩礫混)
② 明黄橙褐色土(花崗岩小礫少混)
③ 淡黄赤灰褐色土(花崗岩礫混)
④ 明黄橙褐色土(花崗岩礫多混)
⑤ 明黄赤褐色土(花崗岩礫混)
⑥ 黄灰色土(花崗岩礫少混、しまりが悪い)
⑦ 淡赤灰褐色土(花崗岩混)
⑧ 淡黄橙褐色土(少礫混、しまりが悪い)
⑨ 黄褐灰色土(花崗岩礫混、しまりが悪い)
⑩ 暗黄灰褐色土(花崗岩礫混、しまりが悪い)
⑪ 赤灰褐色土(花崗岩礫混)
⑫ 黄灰色土(花崗岩小礫混、サラサラしている)
⑬ 淡黄灰色土
⑭ 淡黄灰色土 (花崗岩礫混)
⑮ 黄赤灰色土 (花崗岩礫混)
⑮′ 淡黄赤灰色 土 (花崗岩礫少混)
⑯ 暗赤灰色土 (花崗岩礫混)
⑰ 暗赤灰色土 (③より更に暗い)
⑰′ ④層に花崗岩礫混
⑱ 暗黄橙褐色土 (しまりが悪い)
⑲ 暗黄橙褐色土 (花崗岩礫混)
⑳ 黄灰色土 (花崗岩礫混)
㉑ 暗黄灰色土 (花崗岩礫混)
㉒ 暗褐灰色土
㉓ 明淡黄灰褐色土 (花崗岩礫混)
㉔ 明黄橙灰色土 (花崗岩礫混)
㉕ 淡黄橙灰色土 (小礫混、しまり良し)
㉖ 淡黄橙色粘質土

0 S＝1:20 1 m

**挿図106　SX-22・38・39・45 遺構図(S＝1/20)**

【SX-20】

墳丘墓南側墳端テラスを破壊して掘られている埋葬施設で、SX-27と複合しているが新旧関係は不明である。南側テラス部で検出した埋葬施設群の中では最北西隅に位置する。



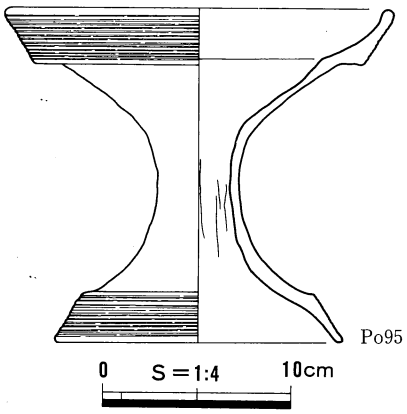

挿図107 SX-20・27 遺構図(S=1/20)

平面形は長方形で、長軸1.98m、短軸0.80mを測り、深さは東壁で最大0.38mを測る。東側が不整なのは岩盤の崩れである。底面も長方形で、長軸1.42m、短軸0.65mを測る。東西両壁際には小口穴があり、東壁際の小口穴は上縁で長軸54cm、短軸23cm、深さ6cmを測り、西壁際の小口穴は上縁で長軸50cm、短軸16cm、深さ7cmを測る。

主軸はN-89°-Eで、ほぼ東西方向を示す。

埋土は4層に分かれるが、上層には花崗岩小礫が混入しており、下層は細粒のサラサラした土である。

底面より70cm程上層から埋土上層に至るまで河原石が出土しているが、中には明らかに墳丘墓の貼石の転落と思われるものがあり、遺構図からは除外した。本埋葬施設に伴うと思われる河原石は、東西両小口穴の上層、底面中央上層と、一部南側の掘り方に沿うように出土している。いずれも底面より20～30cm上層である。また底面中央の河原石と共に器台(Po95)がほぼ完形で出土している。




**挿図108　SX-20 出土土器実測図(S=1/4)**

時期は遺物より弥生時代後期後葉で、墳丘墓に伴う木棺墓跡と考えられるが、墳丘墓のテラスを壊していることなどからして、若干新しいグループに属するものと考えられる。

**【SX-27】**

墳丘墓の南側墳丘を破壊してつくられている埋葬施設で、SX-20と複合しているが、新旧関係は不明である。西側の一部が木の攪乱を受けている。

平面形は長方形で、長軸1.00m、短軸0.78mを測り、深さは北壁で最大0.46mを測る。底面も長方形で、長軸は0.85m、短軸は西側が0.53m、東側が推定で0.40mを測る。底面が木の根の攪乱を受けていることもあって、小口穴などは検出できなっかた。

主軸はN-89°-Eで、ほぼ東西方向を示す。

墳丘墓からの転落と思われる河原石が数個出土しているが、本埋葬施設に伴う石、土器は出土していない。

土器が出土していないので断定はできないが、時期は弥生時代後期後半と推定され、墳丘墓に伴ってつくられた埋葬施設であろうが、墳丘斜面を破壊していることから、やや新しいグループに属するものではなかろうか。

【SX-36】

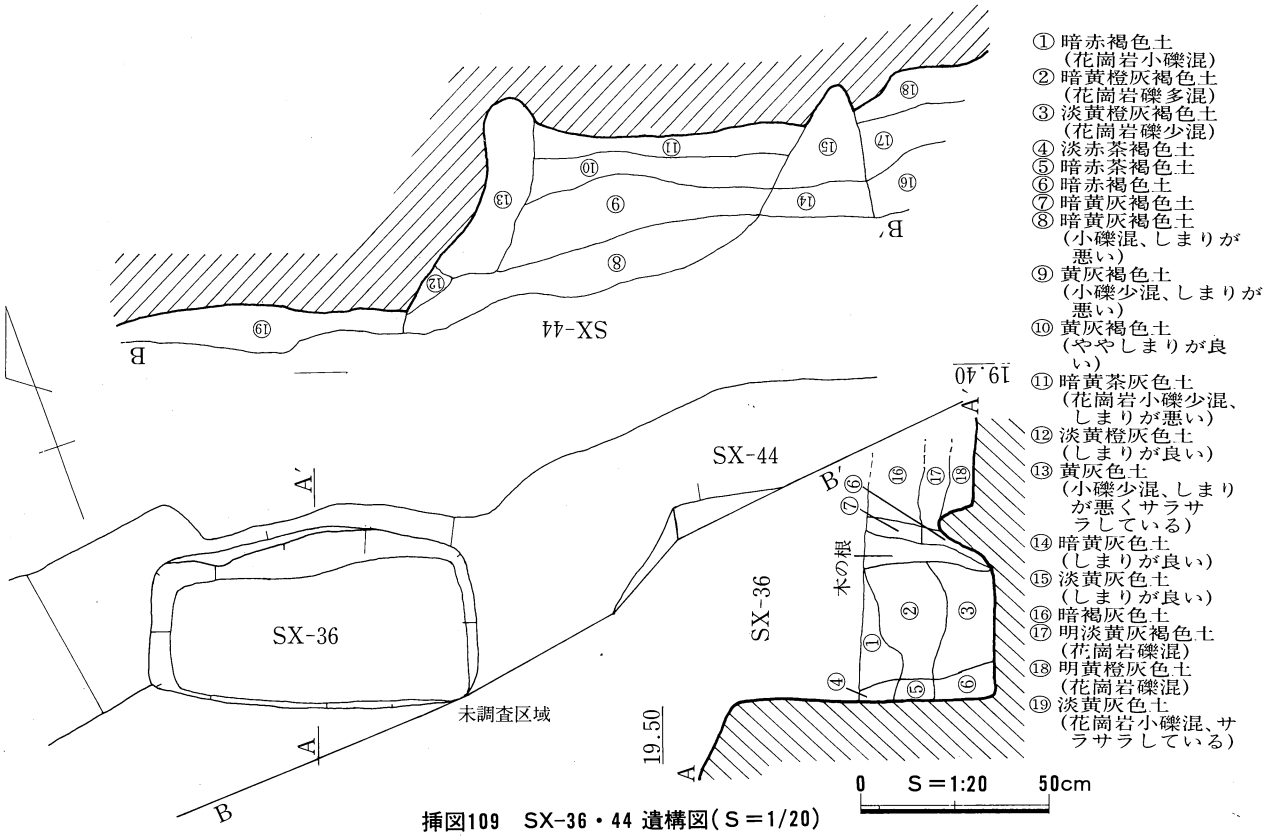
墳丘墓南側テラス部の南端にあり、テラスの南壁を壊してつくられた埋葬施設である。SX-08の南に、SX-46の南東に位置し、すぐ東にはSX-44がある。

平面形は長方形で、長軸0.87m、短軸0.46mを測り、深さは南壁で最大0.70mを測る。底面も長方形で、長軸は0.78m、短軸は東側が0.38m、西側が0.27mを測る。底面には小口穴等の掘り込みは見つかっていない。底面形から判断すると頭位は東と推定される。

主軸はN-73°-Wである。

埋土には花崗岩礫が混入しており、土層観察では側板の痕跡を確認している。

遺物は全く出土していないが、周辺の状況からして、時期は弥生時代後期後半と推定され、墳丘墓に伴ってつくられた木棺墓跡である。




挿図109　SX-36・44遺構図(S=1/20)

【SX-44】

墳丘墓南側テラス部の南端にあり、SX-37の西に、SX-36の東に位置する。SX-36と同様にテラスの南壁を壊してつくられた埋葬施設である。調査区南壁の土層観察で見つかっただけで、平面的な掘り方は検出していない。

調査区南壁の土層では、東西方向の長さは、上縁で1.20m、底面で0.74mを測る。東西両壁際に小口穴があり、西側の小口穴が深さ7cmを測り、東側の小口穴が深さ3cmを測る。

埋土は暗黄灰色系の土で、花崗岩小礫が混入している。

周辺の状況からして、時期は弥生時代後期後半と推定され、墳丘墓に伴ってつくられた木棺墓跡であろう。

**【SX-40】**

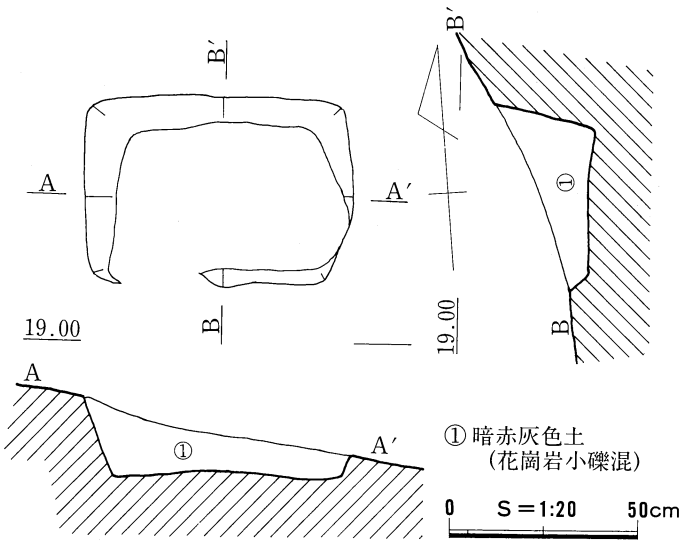
墳丘墓南東斜面を壊してつくられた埋葬施設で、SX-13の1m北東に位置する。

平面形はやや歪な長方形で、長軸0.70m、短軸0.50mを測り、深さは北壁で最大0.27mを測る。底面はやや歪な長方形で、長軸0.60m、短軸0.38mを測る。底面に小口穴等は検出していない。

主軸はN-83°-Wである。

埋土は暗赤灰色土で、花崗岩小礫が混入している。

遺物は全く出土していないが、時期は弥生時代後期後半と思われる。墳丘墓に伴ってつくられた埋葬施設であろうが、墳丘斜面を破壊していることから、やや新しいグループに属するものと考えられる。

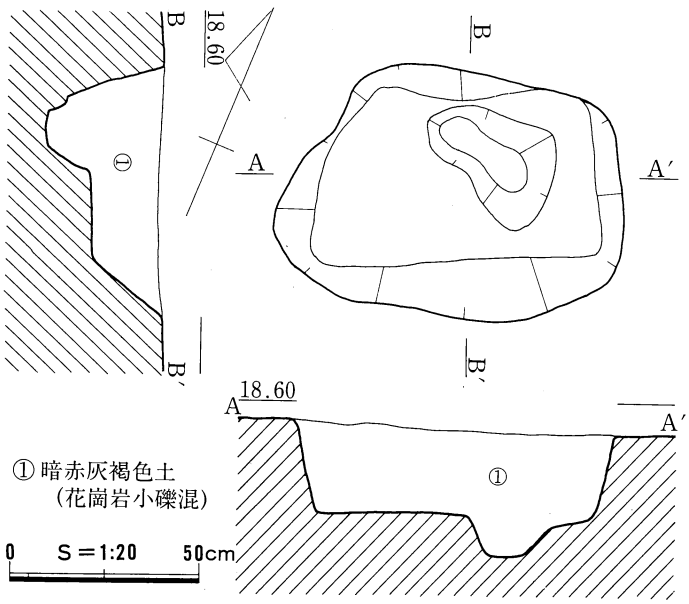



挿図110 SX-40 遺構図(S=1/20)

**【SX-46】**

墳丘墓南側テラス部の南西側にあり、石列の南西方向の延長線上にあるが、河原石は出土していない。SX-08から南西に1.3m、SX-36から北西に1mのところに位置する。

平面形はやや歪な長方形で、長軸0.86m、短軸0.66mを測り、深さは西壁で最大0.24m




挿図111 SX-46 遺構図(S=1/20)

を測る。底面もやや歪な長方形で、長軸0.73m、短軸0.43mを測る。底面には深さ10cm程の不整な掘り込みがあるが、小口穴等は検出していない。

主軸はN-65°-Eである。

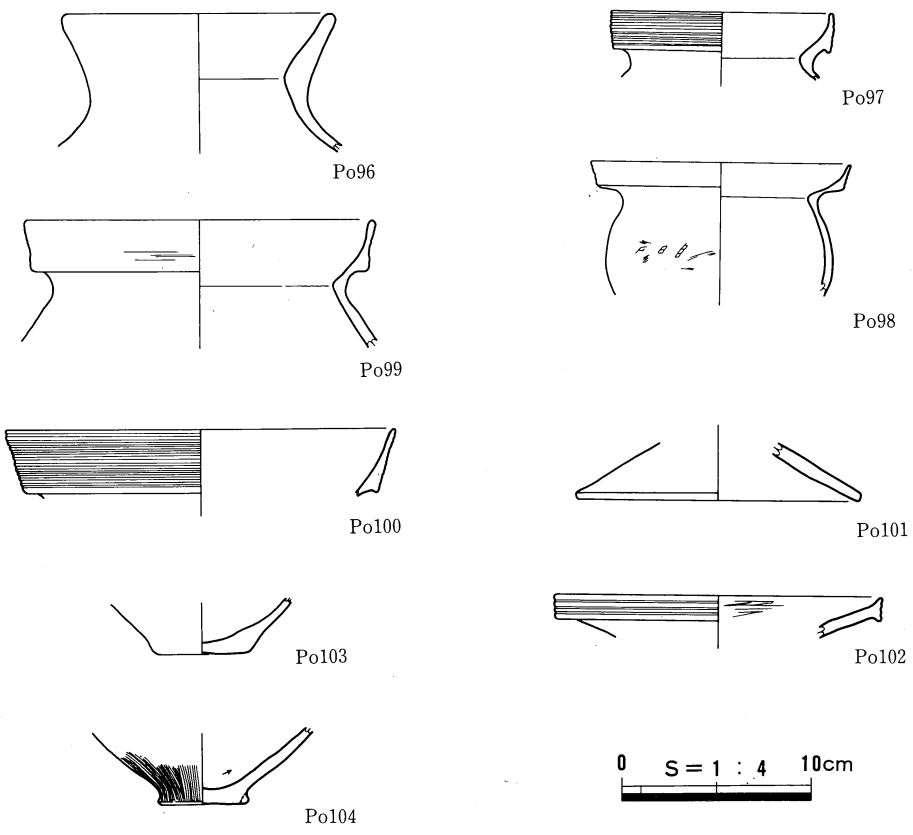
埋土は暗赤灰褐色土で、花崗岩小礫が混入している。

遺物は全く出土していないが、時期は弥生時代後期後半と推定され、墳丘墓に伴ってつくられた埋葬施設であろう。

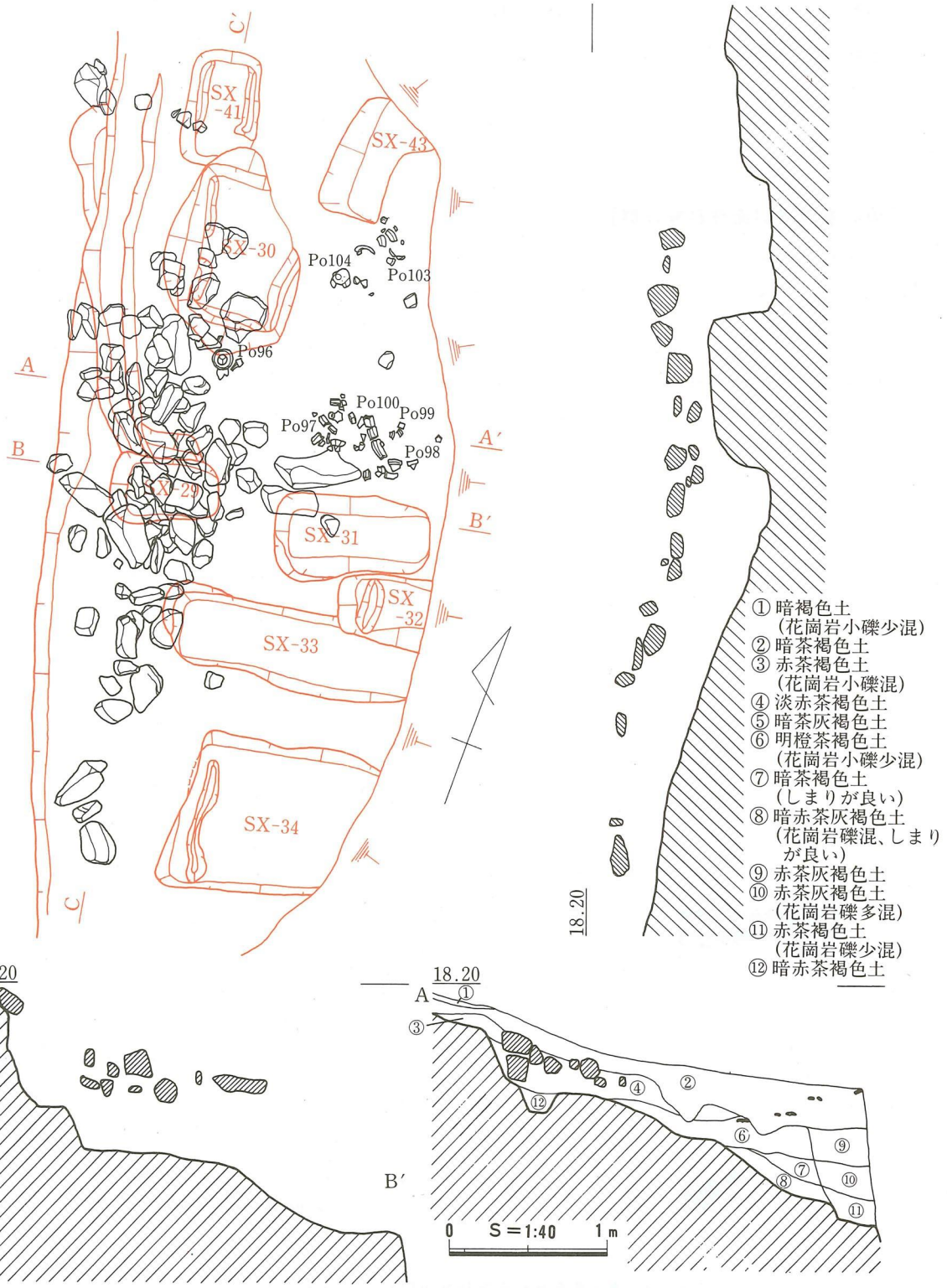
**【墳丘墓南東斜面埋葬施設群】**(SX-25・26・28・29～34・41・43)

墳丘墓の南東側の斜面では、墳丘側の岩盤面を約 0.7m切り込み、さらに岩盤面の低い東側に花崗岩礫を含む土を盛って、平坦面をつくっている。しかしながら、東側の盛土はかなり流出しており、検出できた埋葬施設はすべて東側の掘り方を喪失している。

埋葬施設の掘り方は盛土面では検出できないため、岩盤面まで掘り下げて検出した。したがって、検出できないでとばしてしまったものも何基かあると思われるが、ここでは11基の埋葬施設を検出している。このうち、SX-29～34・41・43の周辺で、多数の河原石と




**挿図112　墳丘墓南東斜面埋葬施設群出土土器実測図(S=1/4)**



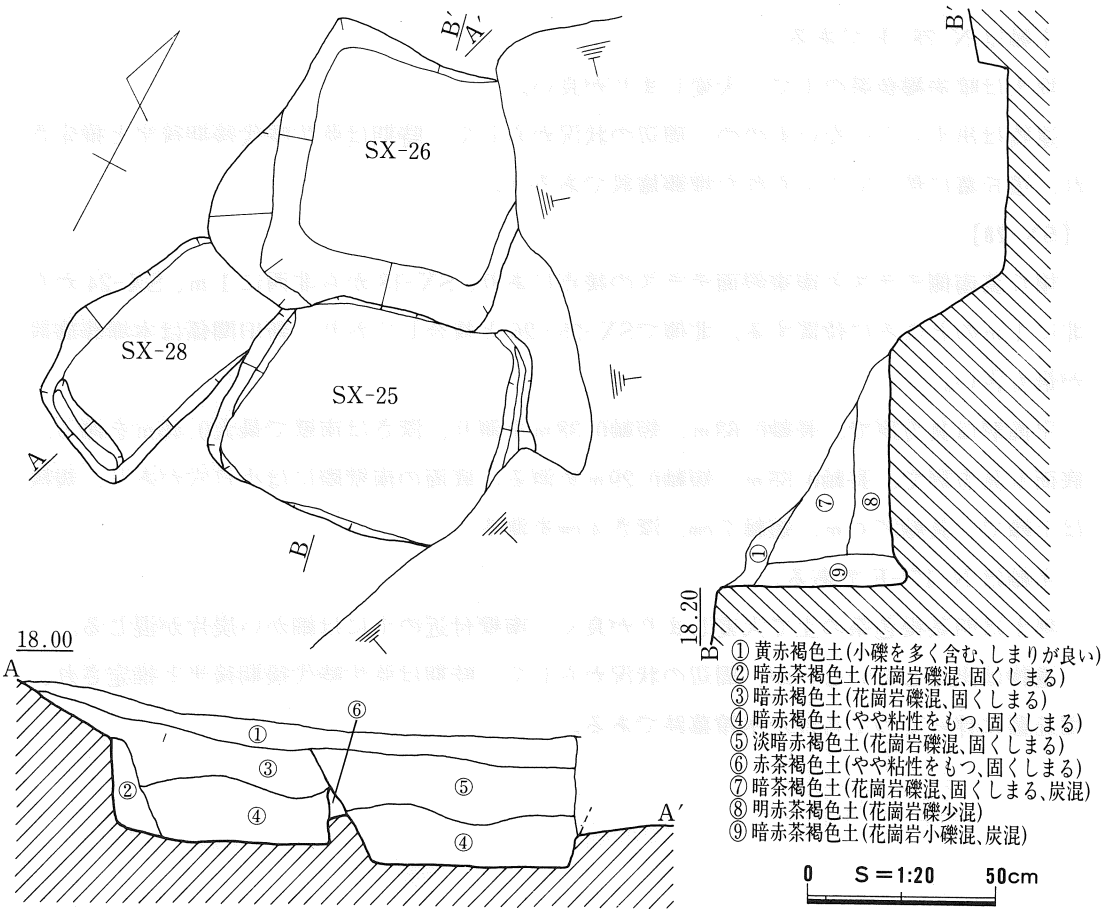

挿図113　南東斜面埋葬施設群遺構図(S=1/40)

弥生土器が出土している。河原石は、SX-29の上層付近に密集しながらも、南北4mにわたって連なっている。弥生土器は、石とともに出土しているものもあるが、ほとんどが石よりも東側で出土しており、岩盤面よりも30～60cmも上層で出土している。これらの土器は埋葬施設に供献されたものであろうが、土器の残存状況からしても、かなり流されているようである。

SX-30・41の西側には深さ10～15cmの溝状の掘り込みがあるが、南側がSX-29と複合しており、SX-29以南側でもこの溝を検出することができなかったため、全体像は不明である。検出した範囲では溝の底面は北ほど高く南に下っている。

**【SX-25】**

南東斜面のテラスの最南端に位置し、ここでテラスは終焉する。墳丘墓南側テラス部につくられているSX-24の1m北にある。SX-26・28と複合しているが、新旧関係は、SX-28よりも新しく、SX-26よりも古い。




**挿図114　SX-25・26・28遺構図(S=1/20)**

平面形は長方形で、長軸0.80ｍ、短軸0.60ｍ以上を測る。深さは西壁で最大0.29ｍを測る。底面も長方形で、長軸0.65ｍ、短軸0.56ｍを測る。底面の東側には小口穴があり、規模は上縁で、長軸35cm以上、短軸10cm、深さ５cmを測る。

主軸はN-82°-Eである。

埋土は暗赤褐色系の土で、大変にしまりが良い。土層観察で、側板の痕跡が窺える。

遺物は出土していないが、周辺の状況からして、時期は弥生時代後期後半と推定され、墳丘墓に伴ってつくられた木棺墓跡である。

**【SX-26】**

南東斜面のテラスの最南端に位置し、南側でSX-25・28と複合しており、新旧関係は本埋葬施設が最も新しい。

北東隅の床面を喪失しているものの、平面形はほぼ正方形で、長軸が推定で0.70ｍ、短軸が0.67ｍを測り、深さは西壁で最大0.55ｍを測る。底面もほぼ正方形で長軸0.55ｍ、短軸0.52ｍを測る。

主軸はN-78°-Eである。

埋土は暗赤褐色系の土で、大変しまりが良い。

遺物は出土していないものの、周辺の状況からして、時期は弥生時代後期後半と推定され、墳丘墓に伴ってつくられた埋葬施設であろう。

**【SX-28】**

墳丘墓南側テラスと南東斜面テラスの接点にあり、SX-18から北西に１ｍ、SX-24から北に１ｍのところに位置する。北側でSX-25・26と複合しており、新旧関係は本埋葬施設が最も古い。

平面形は長方形で、長軸0.63ｍ、短軸0.38ｍを測り、深さは南壁で最大0.46ｍを測る。底面も長方形で、長軸0.55ｍ、短軸0.29ｍを測る。底面の南壁際には小口穴があり、規模は上縁で、長軸27ｃｍ、短軸７cm、深さ４cmを測る。

主軸はN-17°-Eである。

埋土は明茶褐色系の土で大変しまりが良く、南壁付近の土には細かい炭片が混じる。

遺物は出土していないが、周辺の状況からして、時期は弥生時代後期後半と推定され、墳丘墓に伴ってつくられた木棺墓跡である。

【SX-29】

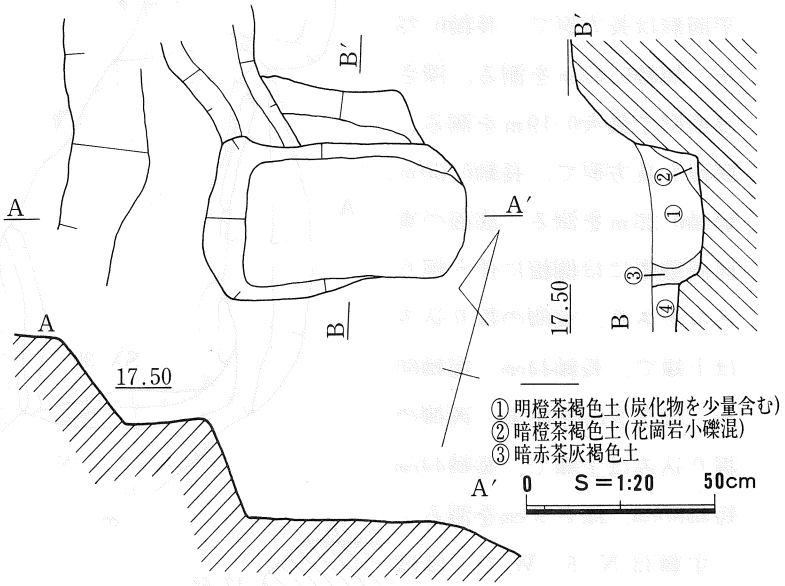
南東斜面テラスの中央西よりにあり、SX-31～33の西に位置する。墓壙底面より30～60cm上層で多量の河原石が出土している。テラス西壁際に掘られている溝と複合しており、新旧関係は不明である。

平面形は長方形で、長軸0.68m以上、短軸0.40mを測る。深さは西壁で最大0.26mを測る。底面も長方形で、長軸0.58m、短軸0.32mを測る。底面には小口穴などの掘り込みはない。

主軸はN-75°-Eである。

埋土は橙茶褐色系の土で、側板の痕跡が窺え、壁際の土には細かい炭片を含む。

遺物は出土していないが、周辺の状況からして、時期は弥生時代後期後半と推定され、墳丘墓に伴ってつくられた木棺墓跡である。




挿図115 SX-29 遺構図(S=1/20)

【SX-30】

南東斜面テラスの北部にあり、SX-29の北に位置する。北側でSX-41と複合しており、新旧関係は本埋葬施設の方が新しい。

底面の北東側を喪失しているものの、平面形は長方形で、長軸1.14m、短軸0.86mを測る。深さは西壁で最大0.50mを測る。底面も長方形で、長軸0.81m、短軸0.50mを測る。底面には側板に伴う掘り込みがあり、深さは3cm程度である。底面の形は北ほど大きくなっており、頭位は北と推定される。

主軸はN-9°-Wで、ほぼ南北を示す。

埋土には花崗岩礫が多く混入している。

本埋葬施設の南壁付近の上層で、河原石とともに壺(Po☆)が出土している。この壺が本埋葬施設に伴うものか否かは不明である。

周辺の状況からして、時期は弥生時代後期後半と推定され、墳丘墓に伴ってつくられた木棺墓跡である。

【SX-41】

南東斜面テラスの北部にあり、南側でSX-30と複合しており、新旧関係は本埋葬施設の方が古い。

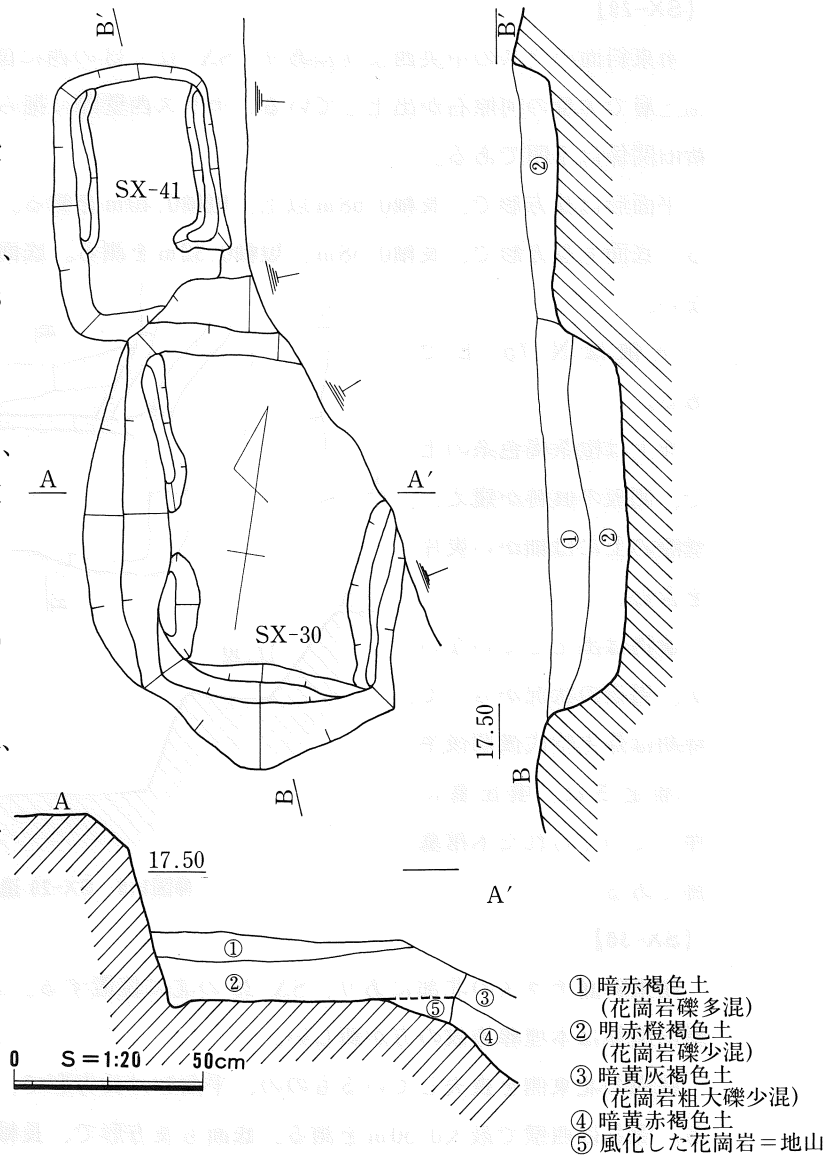
東壁を喪失しているものの、平面形は長方形で、長軸0.73m、短軸0.45mを測る。深さは西壁で最大0.19mを測る。底面も長方形で、長軸0.60m、短軸0.35mを測る。底面の東西両壁際には側板に伴う掘り込みがあり、東側の掘り込みは上縁で、長軸44cm、短軸60cm、深さ3cmを測る。西側の掘り込みは上縁で、長軸44cm、短軸60cm、深さ3cmを測る。

主軸はN-5°-Wで、ほぼ南北を示す。

埋土には花崗岩礫が少量混入している。

本埋葬施設の西壁付近の上層で土器片が出土している。

時期を特定できる遺物は出土していないが、周辺の状況からして、時期は弥生時代後期後半と推定され、墳丘墓に伴ってつくられた木棺墓跡である。




挿図116　SX-30・41 遺構図(S＝1/20)

【SX-31】

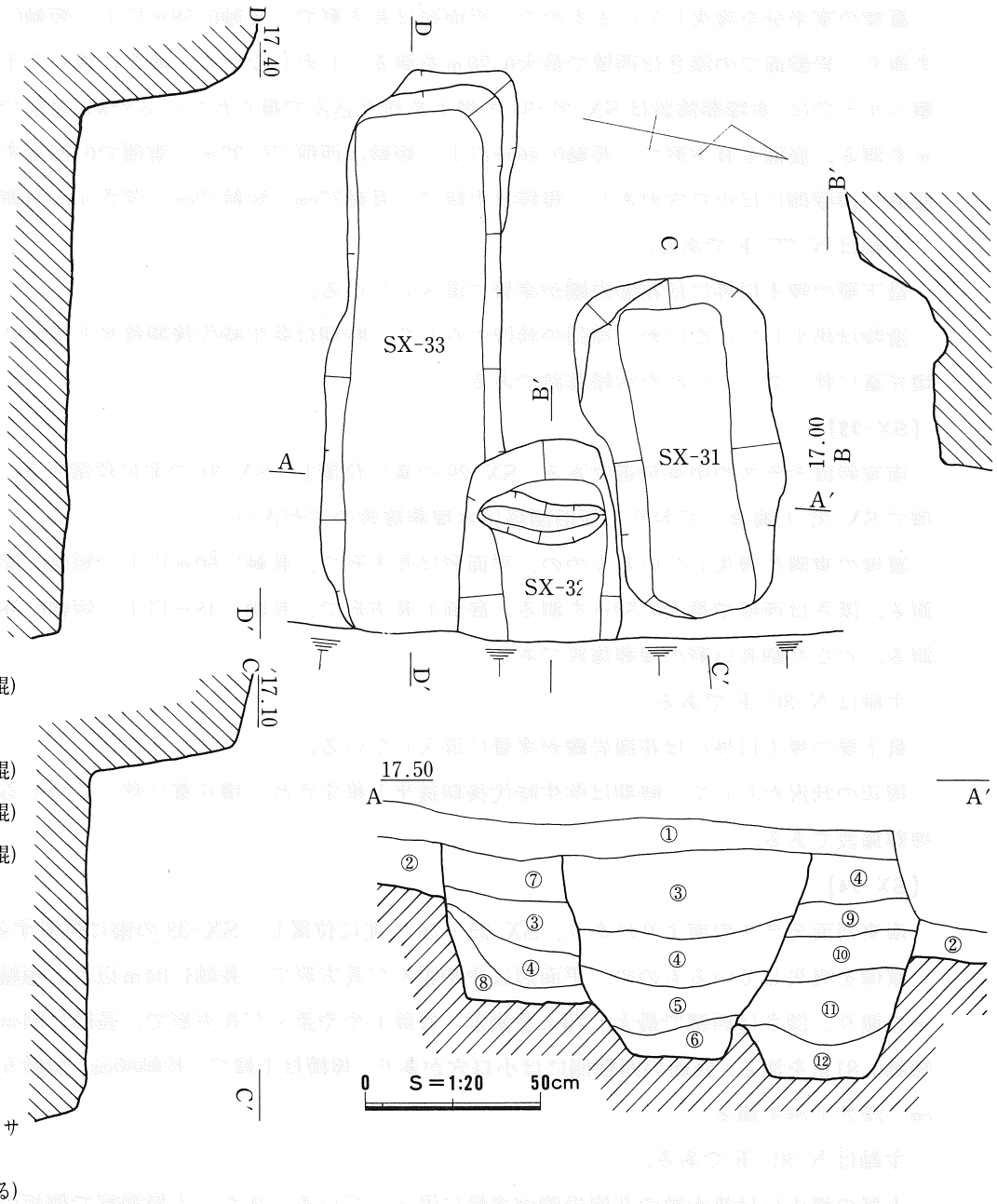
南東斜面テラスの中央東よりにあり、SX-29の東に位置する。南側でSX-32と複合しており、新旧関係は本埋葬施設の方が古い。

東壁を喪失しているものの、平面形はやや隅の丸い長方形で、長軸0.97m以上、短軸0.52mを測る。岩盤面での深さは西壁で最大0.45mを測る。しかしながら、掘り込み面は岩盤面よりも上層にあるため、南北に残した土層観察ベルトでは北壁で0.45mを測る。底面は

長方形で、長軸0.88m、短軸0.26mを測る。底面では小口穴などの掘り込みは検出していない。

主軸はN-73°-Eである。

埋土の上層には花崗岩礫が多量に混入しており、中層には少量混入しており、下層は殆ど混入しないサラサラした土である。




①暗灰褐色土
(花崗岩粗大礫多混)
②暗赤茶褐色土
(花崗岩礫混)
③明茶褐色土
(花崗岩粗大礫多混)
④明茶褐色土
(花崗岩粗小礫多混)
⑤淡明茶褐色土
(花崗岩粗大礫多混)
⑥明黄茶褐色土
(花崗岩小礫少混)
⑦茶褐色土
(花崗岩粗大礫混)
⑧暗赤茶褐色土
(花崗岩礫少混、しまり良し)
⑨淡明茶褐色土
(花崗岩小礫多混)
⑩淡黄灰褐色土
(花崗岩小礫少混)
⑪淡黄灰色土
(花崗岩小礫少混、サラサラしている)
⑫暗黄灰褐色土
(サラサラしている)

**挿図117　SX-31・32・33 遺構図(S=1/20)**

周辺の状況からして、時期は弥生時代後期後半と推定され、墳丘墓に伴ってつくられた埋葬施設である。

**【SX-32】**

南東斜面テラスの中央付近にあり、SX-29の東に位置する。北側でSX-31と、南側でSX-33と複合しており、新旧関係は本埋葬施設が最も新しい。

墓壙の東半分を喪失しているものの、平面形は長方形で、長軸0.58m以上、短軸0.46mを測り、岩盤面での深さは西壁で最大0.20mを測る。しかしながら、南北に残した土層観察ベルトでは、本埋葬施設はSX-31・33の埋土を切り込んで掘られているため、北壁で0.60mを測る。底面も長方形で、長軸0.46m以上、短軸は西側で0.32m、東側で0.26mを測る。底面の西壁側には小口穴があり、規模は上縁で、長軸37cm、短軸12cm、深さ4cmを測る。

主軸はN-77°-Eである。

最下層の埋土以外には花崗岩礫が多量に混入している。

遺物は出土していないが、周辺の状況からして、時期は弥生時代後期後半と推定され、墳丘墓に伴ってつくられた木棺墓跡である。

**【SX-33】**

南東斜面テラスの中央付近にある。SX-29の東に位置し、SX-34の北に位置する。北東側でSX-32と複合しており、新旧関係は本埋葬施設の方が古い。

墓壙の東隅を喪失しているものの、平面形は長方形で、長軸1.60m以上、短軸0.50mを測る。深さは西壁で最大0.50mを測る。底面も長方形で、長軸1.48m以上、短軸0.38mを測る。かなり細長い形の埋葬施設である。

主軸はN-80°-Eである。

最下層の埋土以外には花崗岩礫が多量に混入している。

周辺の状況からして、時期は弥生時代後期後半と推定され、墳丘墓に伴ってつくられた埋葬施設である。

**【SX-34】**

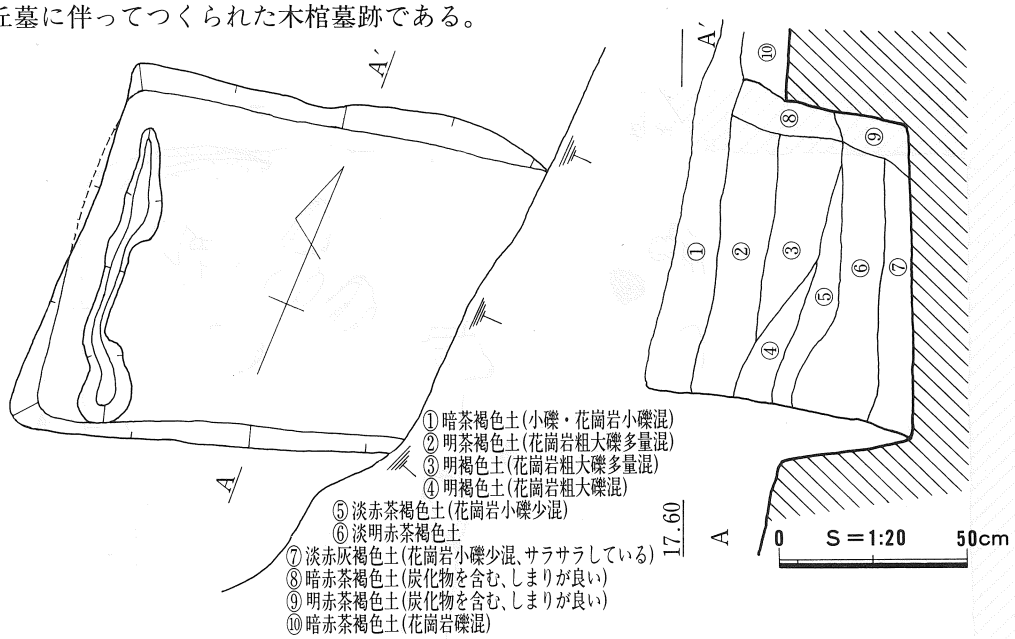
南東斜面テラスの南よりにあり、SX-25・26の北に位置し、SX-33の南に位置する。

東側を喪失しているものの、平面形はやや歪んだ長方形で、長軸1.04m以上、短軸0.92mを測り、深さは西壁で最大0.70mを測る。底面もやや歪んだ長方形で、長軸1.04m以上、短軸0.81mを測る。底面の西壁側には小口穴があり、規模は上縁で、長軸80cm、短軸5～12cm、深さ2cmを測る。

主軸はN-81°-Eである。

上層の埋土には粗大粒の花崗岩礫が多量に混入している。また、土層観察で側板の痕跡が窺える。南北壁際付近の土は細かい炭片を含んでいる。

遺物は出土していないが、周辺の状況からして、時期は弥生時代後期後半と推定され、墳丘墓に伴ってつくられた木棺墓跡である。




**挿図118　SX-34 遺構図(S=1/20)**

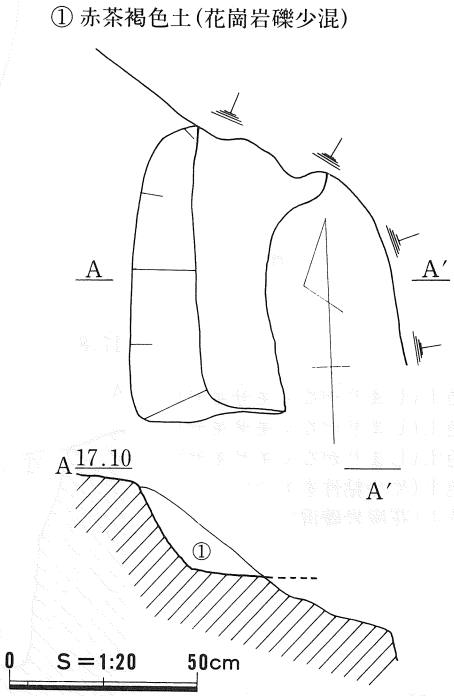
**【SX-43】**

南東斜面テラスの北東隅にあり、SX-30・41の東に位置する。遺存状況がかなり悪く、掘り方のほとんどを喪失している。

平面形は長方形と推定され、長軸0.75m以上、短軸0.50m以上を測り、深さは西壁で最大0.23mを測る。底面も長方形と推定され、長軸0.75m以上、短軸0.35m以上を測る。

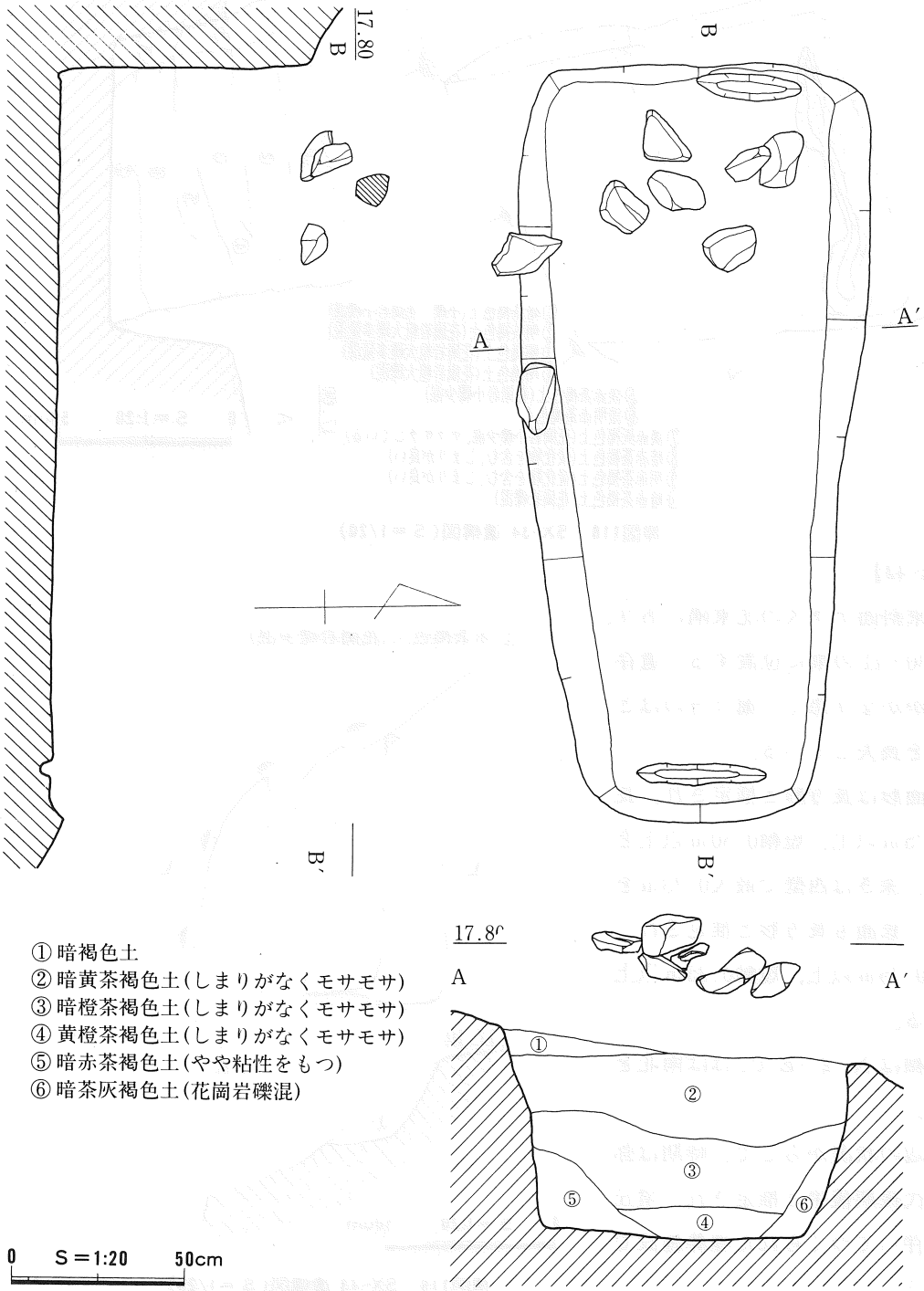
主軸はN-2°-Eで、ほぼ南北を示す。

周辺の状況からして、時期は弥生時代後期後半と推定され、墳丘墓に伴ってつくられた埋葬施設であろう。




**挿図119　SX-43 遺構図(S=1/20)**

【SX-50】




挿図120 SX-50 遺構図(S=1/20)

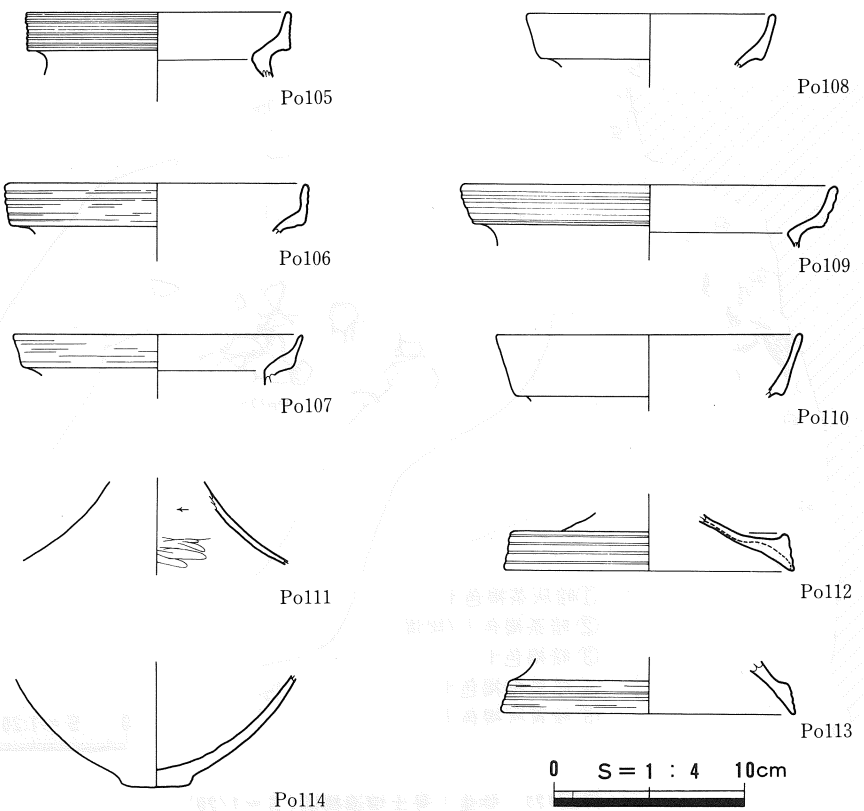
墳丘墓東側斜面にあり、東墳端のテラスに接している。他の埋葬施設とはかなり離れており、すぐ北側に弥生１号土壙がある。周辺には墳丘墓の貼石が転落しており、本埋葬施設に伴う石があったとしても区別がつかない。

平面形は長方形で、長軸は2.20ｍ、短軸は西側で1.00ｍ、東側で0.66ｍを測り、深さは西壁で最大0.72ｍを測る。底面も長方形で、長軸は2.11ｍ、短軸は西側で0.81ｍ、東側で0.52ｍを測る。底面の西壁際には、小口穴の痕跡と思われる掘り込みがあり、規模は上縁で、長軸30cm、短軸８cm、深さ２cmを測る。東壁際には小口穴があり、規模は上縁で、長軸37cm、短軸６cm、深さ３cmを測る。平面形・底面形ともに西側が大きいため、頭位は西と推定される。

主軸はN-88°-Wで、ほぼ東西方向を示す。

埋土には花崗岩礫がほとんど混入しておらず、しまりが悪い。

遺物が全く出土していないので断定はできないが、時期は弥生時代後期後半と思われ、墳丘墓に伴ってつくられた木棺墓跡であろう。

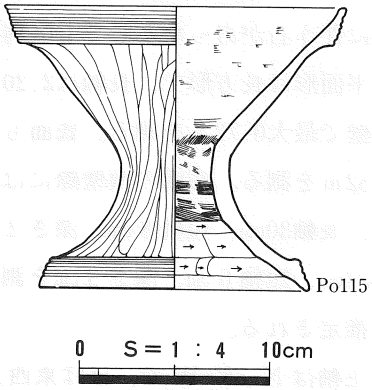



**挿図121　SX 群出土土器実測図（S＝1/4）**

【弥生１号土壙】

墳丘墓東側斜面にあり、東墳端のテラスに接している。掘り方が不明瞭なため、土壙として取り扱ったが、埋葬施設の可能性も否定できない。すぐ南側にSX-50がある。

平面形は不整形で、東西軸は1.40ｍ、南北軸は1.15ｍを測り、深さは西壁で最大0.30ｍを測る。底面も不整形で、東西軸は1.02ｍ、南北軸は0.66ｍを測る。東側の底面は、岩盤ではなくその上の粘質土を基盤にしており、埋土との区別がつきにくい。

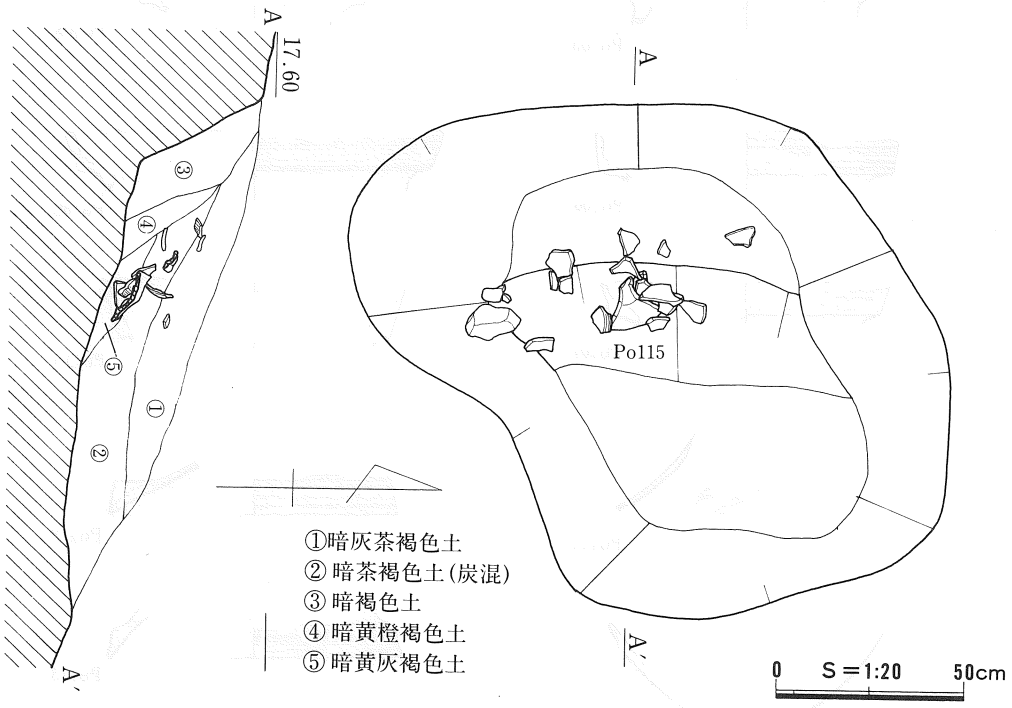



挿図122　弥生１号土壙出土土器実測図

埋土下層には細かい炭片が混入している。

埋土内から器台(Po115)が出土しており、ほぼ完形に復元された。

時期は、器台によると弥生時代後期後半で、他の埋葬施設と一致する。この土壙自体の性格が不明なため断定はできないが、墳丘墓に関係するものと思われる。




挿図123　弥生１号土壙遺構図(Ｓ＝1/20)

表10　ＳＸ群一覧表

| 土壙番号 | 平面形 | 規　模（m） | 底面形 | 規　模（m） | 小口穴側板溝 | 主　軸 | 遺物・特徴 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SX-01 | 長方形 | 2.75×0.90−0.54 | 長方形 | 2.53×0.74 | 有 | 平N-84°-W<br>底N-78°-W | |
| SX-02 | 長方形 | 2.68×1.38−0.40 | 長方形 | 2.53×1.28 | 有 | 平 N-85°-W<br>底 N-78°-W | |
| SX-03 | 長方形 | (2.40)×1.05−0.56 | 長方形 | 1.83×0.52 | 有 | N-4°-E | 器台・底部 |
| SX-04 | 長方形 | 0.8×0.66−0.11 | 長方形 | 0.50×0.42 | 有 | N-88°-E | |
| SX-05 | 長方形 | 2.58×1.20−0.62 | 長方形 | 2.20×0.70 | 有 | N-18°-W | 甕・高坏 |
| SX-06 | 長方形 | 1.68×0.70−0.50 | 長方形 | 1.38×0.44 | 有 | N-10°-W | 銅鏃 |
| SX-07 | 長方形 | 1.00×0.57−0.25 | 長方形 | 0.74×0.40 | 有 | N-84°-E | |
| SX-08 | 長方形 | 2.07×0.92−0.22 | 長方形 | 1.95×0.70 | 有 | N-84°-W | |
| SX-09 | 長方形 | 2.42×1.45−0.46 | 長方形 | 2.17×1.06 | | N-79°-W | |
| SX-10 | 長方形 | 0.71×0.60−0.19 | 長方形 | 0.55×0.38 | 有 | N-7°-E | |
| SX-11 | 長方形 | 0.78×0.58−0.30 | 長方形 | 0.63×0.34 | 有 | N-86°-W | |
| SX-12 | 長方形 | 1.03×0.44−0.14 | 長方形 | 0.88×0.28 | 有 | N-S | |
| SX-13 | 長方形 | 1.00×0.54−0.54 | 長方形 | 0.67×0.35 | 有 | N-7°-E | |
| SX-14 | 長方形 | 0.99×0.43−0.48 | 長方形 | 0.50×東側0.65 西側0.25 | 有 | N-87°-E | |
| SX-15 | 長方形 | 1.07×0.72−0.20 | 長方形 | 0.78×0.56 | 有 | N-84°-W | |
| SX-16 | 長方形 | 0.91×0.50−0.18 | 長方形 | 0.82×0.24 | 有 | N-88°-E | |
| SX-17 | 長方形 | 0.88×0.60−0.08 | 長方形 | 0.75×0.42 | | N-89°-E | |
| SX-18 | 長方形 | 1.42×0.60−0.33 | 長方形 | 1.05×0.42 | 有 | N-1°-W | 甕 |
| SX-19 | 長方形 | 0.62×0.40−0.27 | 長方形 | 0.39×0.23 | | N-14°-W | |
| SX-20 | 長方形 | 1.98×0.80−0.38 | 長方形 | 1.42×0.65 | 有 | N-89°-E | 器台 |
| SX-21 | 長方形 | 1.10×0.45−0.42 | 長方形 | 0.87×0.30 | | N-1°-W | |
| SX-22 | 長方形 | 2.22×0.76−0.58 | 長方形 | 2.12×西側0.65 東側0.46 | | N-89°-E | |
| SX-23 | 長方形 | (0.90)×0.56−0.26 | 長方形 | 0.75×0.48 | | N-88°-W | |
| SX-24 | 長方形 | 1.52×0.81−0.41 | 長方形 | 1.40×西側0.64 東側0.55 | 有 | N-81°-E | |
| SX-25 | 長方形 | 0.80×0.60−0.29 | 長方形 | 0.65×O.56 | 有 | N-82°-E | |
| SX-26 | 正方形 | (0.70)×0.67−0.55 | 正方形 | 0.55×0.52 | | N-78°-E | |
| SX-27 | 長方形 | 1.00×0.78−0.46 | 長方形 | 0.85×西側0.53 東側0.40 | | N-89°-E | |
| SX-28 | 長方形 | 0.63×0.38−0.46 | 長方形 | 0.55×0.29 | 有 | N-17°-E | |
| SX-29 | 長方形 | 0.68×0.40−0.26 | 長方形 | 0.58×0.32 | | N-75°-E | |
| SX-30 | 長方形 | 1.14×0.86−0.50 | 長方形 | 0.81×0.50 | 有 | N-9°-W | |
| SX-31 | 長方形 | 0.97×0.52−0.45 | 長方形 | 0.88×0.26 | | N-73°-E | |
| SX-32 | 長方形 | 0.58×0.46−0.20 | 長方形 | 0.46×西側0.32 東側0.26 | 有 | N-77°-E | |
| SX-33 | 長方形 | 1.60×0.50−0.50 | 長方形 | 1.48×0.38 | | N-80°-E | |
| SX-34 | 長方形 | 1.04×0.92−0.70 | 長方形 | 1.04×0.81 | 有 | N-81°-E | |
| SX-35 | 長方形 | 1.25×0.56−0.39 | 長方形 | 1.20×0.43 | | N-5°-E | 甕・高坏<br>器台・底部 |
| SX-36 | 長方形 | 0.87×0.46−0.70 | 長方形 | 0.78×東側0.38 西側0.27 | | N-73°-W | |
| SX-37 | 長方形 | (0.55)×0.85−0.26 | 長方形 | 0.50×0.75 | 有 | ? | |
| SX-38 | 長方形 | (0.98)×0.37−0.48 | 長方形 | 0.84×0.24 | | N-84°-E | |
| SX-39 | 長方形 | 2.22×0.70−0.35 | 長方形 | 2.11×0.65 | 有 | N-86°-W | |
| SX-40 | 長方形 | 0.70×0.50−0.27 | 長方形 | 0.60×0.38 | | N-83°-W | |
| SX-41 | 長方形 | 0.73×0.45−0.19 | 長方形 | 0.60×0.35 | 有 | N-5°-W | |
| SX-42 | 長方形 | 0.87×0.67−0.23 | 長方形 | 0.58×0.45 | 有 | E-W | |
| SX-43 | 長方形 | (0.75)×0.5−0.23 | 長方形 | 0.75×0.35 | | N-2°-E | |
| SX-44 | | 不　明 | | | 有 | | |
| SX-45 | | 不　明 | | | 有 | | |
| SX-46 | 長方形 | 0.86×0.66−0.24 | 長方形 | 0.73×0.43 | | N-65°-E | |
| SX-47 | 長方形 | 1.10×0.67−0.38 | 長方形 | 0.86×0.51 | | N-3°-W | |
| SX-48 | 卵　形 | 0.87×0.50−0.13 | 卵　形 | 0.76×0.35 | | N-71°-W | |
| SX-49 | 長方形 | 0.86×0.45−0.10 | 長方形 | 0.76×0.39 | | N-85°-W | |
| SX-50 | 長方形 | (2.20)×<br>西側1.00<br>東側0.66−0.72 | 長方形 | 2.11×西側0.81 東側0.52 | 有 | N-88°-W | |
| SX-51 | 長方形 | 0.77×0.43−0.13 | 長方形 | 0.44×0.16 | 有 | N-3°-W | |

【銅鏃について】

布勢鶴指奥１号墳丘墓南側テラス部につくられたSX-06の底面から銅鏃が出土した。副葬品を伴う埋葬施設はこのSX-06のみで、弥生時代後期中葉～後葉の木棺墓跡と推定される。

銅鏃は残存最大長2.1cm、最大幅1.0cm、最大厚0.3cmを測る。県下ではこれまでに多数の銅鏃が採集されているが、発掘調査にともなって出土した例は少ない。SX-05で出土した銅鏃はかなり摩耗しており、茎部も欠損している。観察できる範囲では、逆刺部分はさほど大きくなく、鏃身の鏑の部分があまり明瞭ではないが棒状に隆起しているようにも見える。

以下、県内の銅鏃出土地を紹介する

**表11　鳥取県内銅鏃出土地一覧表**

| | 出　土　地 | 数量 | 形　態 | 備　考 | 時期 | 文献 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 鳥取市布勢（布勢鶴指奥遺跡） | 1 | 有茎鏃 | 埋葬施設 | 弥生 | |
| 2 | 鳥取市浜坂（追後遺跡） | 数点 | 無茎鏃 | 採集品 | 弥生 | 1 |
| 3 | 鳥取市浜坂（長者ケ庭遺跡） | 1 | 無茎鏃 | 採集品 | 弥生 | 1 |
| 4 | 鳥取市賀露町狐塚 | 15 | 採集品 | | | 2 |
| 5 | 鳥取市伏野（中茶屋遺跡） | 数点 | 無茎鏃 | 採集品 | 弥生 | 1 |
| 6 | 鳥取市湖山町（天神山遺跡） | 2 | 有茎鏃 | 包含層 | 弥生 | 3 |
| 7 | 鳥取市岩吉（岩吉遺跡） | 1 | 有茎鏃 | | | 5 |
| 8 | 東伯郡東郷町長江(隅ケ坪遺跡) | 1 | 漢式三角鏃 | | | 4 |
| 9 | 東伯郡羽合町（長瀬高浜遺跡） | 12 | 有茎鏃 | 住居跡他 | 古墳 | 6 |
| 10 | 東伯郡東伯町伊勢野 | 1 | | | | 7 |
| 11 | 米子市彦名(米子高専建設時？) | 10以上 | 漢式三角鏃他 | | | 3 |


［参考文献］

1：『鳥取県史跡勝地調査報告』第１冊　鳥取県（1922）
2：『鳥取県郷土史』　鳥取県（1932）
3：『帆城遺跡・天神山遺跡調査報告書』鳥取市教育委員会（1982）
4：『羽合町史（前編）』羽合町教育委員会（1967）
5：『岩吉遺跡発掘調査概報』鳥取市教育委員会（1989）
6：『長瀬高浜遺跡調査報告書Ⅰ～Ⅴ』鳥取県教育文化財団（1980～1983）
　大賀靖浩「長瀬高浜遺跡出土の銅鏃」『長瀬高浜遺跡Ⅲ』（1980）
7：直良信夫『近畿古文化論叢』
8：「弥生時代の青銅器とその共伴関係」－中国・四国篇－『埋蔵文化財研究会資料』埋蔵文化財センター（1986）
9：田中勝博「銅鏃」『弥生文化の研究』９（1986）

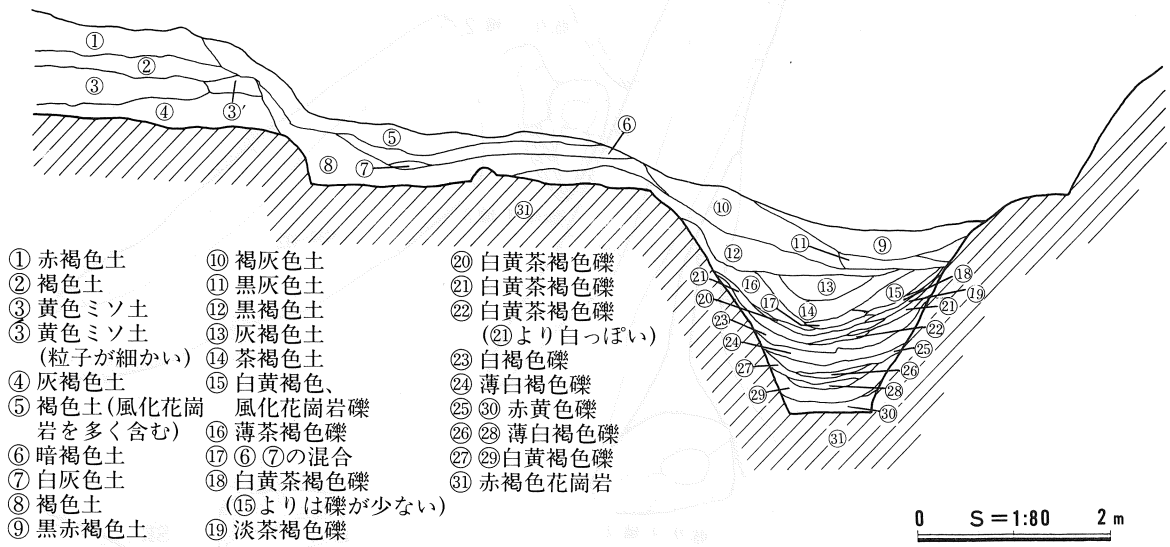
【SD-01・SS-01】

調査区の中央よりやや南に位置し、調査前は道として利用されていた。鞍部を東西に走り、丘陵を南北に二分する。北側には中世の土葬墓・火葬墓群があり、南側にはSD-02と布勢第1墳丘墓、木棺墓群、SS-01・02がある。東端で弥生土壙4と西で土葬墓（SK-86）と重複する。溝の形はやや北に弧を描くがほぼまっすぐで両端が開くバチ形をしている。溝の底は、中央から両端がくだる。長さ32m、幅は中央上縁で3.7m、底で0.89m、深さは中央で2mを測るが、両端は浅くなっている。溝の北側は、自然地形を利用しながら掘り込まれているが、南は一旦尾根部を深さ0.6m掘り込んで平坦部（SS-01）を築き、その平坦部からさらにほぼ垂直に近い状態で掘り込まれた二段掘りとなっている。平坦部の平面形は不整形の三角形で、それぞれの辺の長さは、5.6、5.7、11mで、面積は19.3m²である。

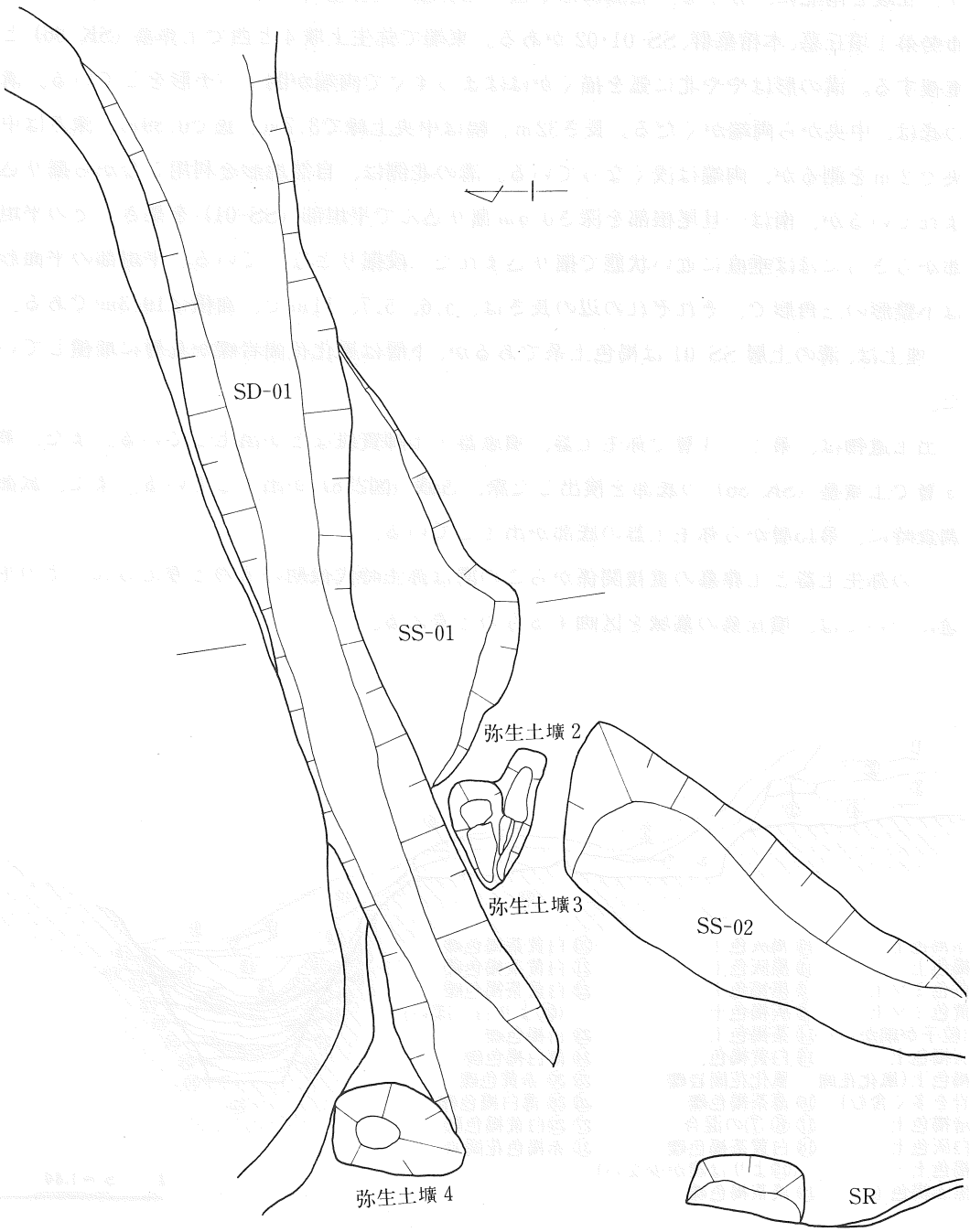
埋土は、溝の上層SS-01は褐色土系であるが、下層は風化花崗岩礫が互層に堆積していた。

出土遺物は、第1～3層で弥生土器、須恵器・土師質皿などが出土している。また、第6層で土壙墓（SK-86）の底部を検出した際、古銭（図218）が出土している。また、試掘調査時に、第15層から弥生土器の底部が出土している。

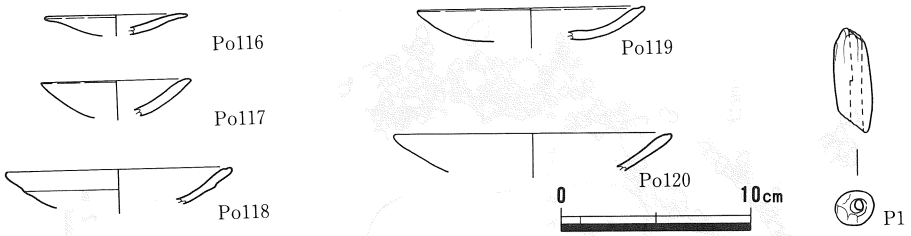
この弥生土器と土葬墓の重複関係からこの溝は弥生時代後期のものと考えられ、その用途については、墳丘墓の墓域を区画するものと考える。




挿図124　SD-01 土層図




挿図125　SD-01 遺構図




**挿図126　SD-01 遺物図**

**【SD-02】**

SD-01 と墳丘墓の中間に位置する。尾根を隔てた東側に SD-03 がある。花崗岩盤にほぼ垂直に近い状態で掘り込まれているが、東側は上部は緩やかであるが途中から垂直に近い角度に掘り込まれている。溝の東端の上縁には河原石と山石が弧状に並べられている。弧の半径は3.2ｍ程度である。また、西端でも第２層で河原石が並んだ状態で見つかっているが関係は不明である。深さは東壁が最大で2.4ｍを計るが西壁は存在しない。底の平面形は台形で、東から西へゆるく下るが、途中20～40cm程度の段差が３ヶ所に設けられている。一番西端の段差は道（SR-01）と重複する位置にある。底面の長軸は12.5ｍで奥壁の幅1.1ｍ、入口の幅は4.17ｍを計る。また、奥壁の北隅にはステップ状の掘り込みが５段見られる。ステップは底より順に20、55、20、25、30cmの間隔で、幅12～21cm、奥行き６～11cm掘り込まれている。

埋め土は、SD-01 と同様に下部が風化花崗岩礫で、上部が褐色土である。

遺物は、弥生土器、須恵器、土師質小皿等が出土しているが、いずれも第１・２層からの出土である。

この溝は埋土より、SD-01 と同時期で、SD-01 と同様に墳丘墓に関するもので、墓域を区画するものと思われる。

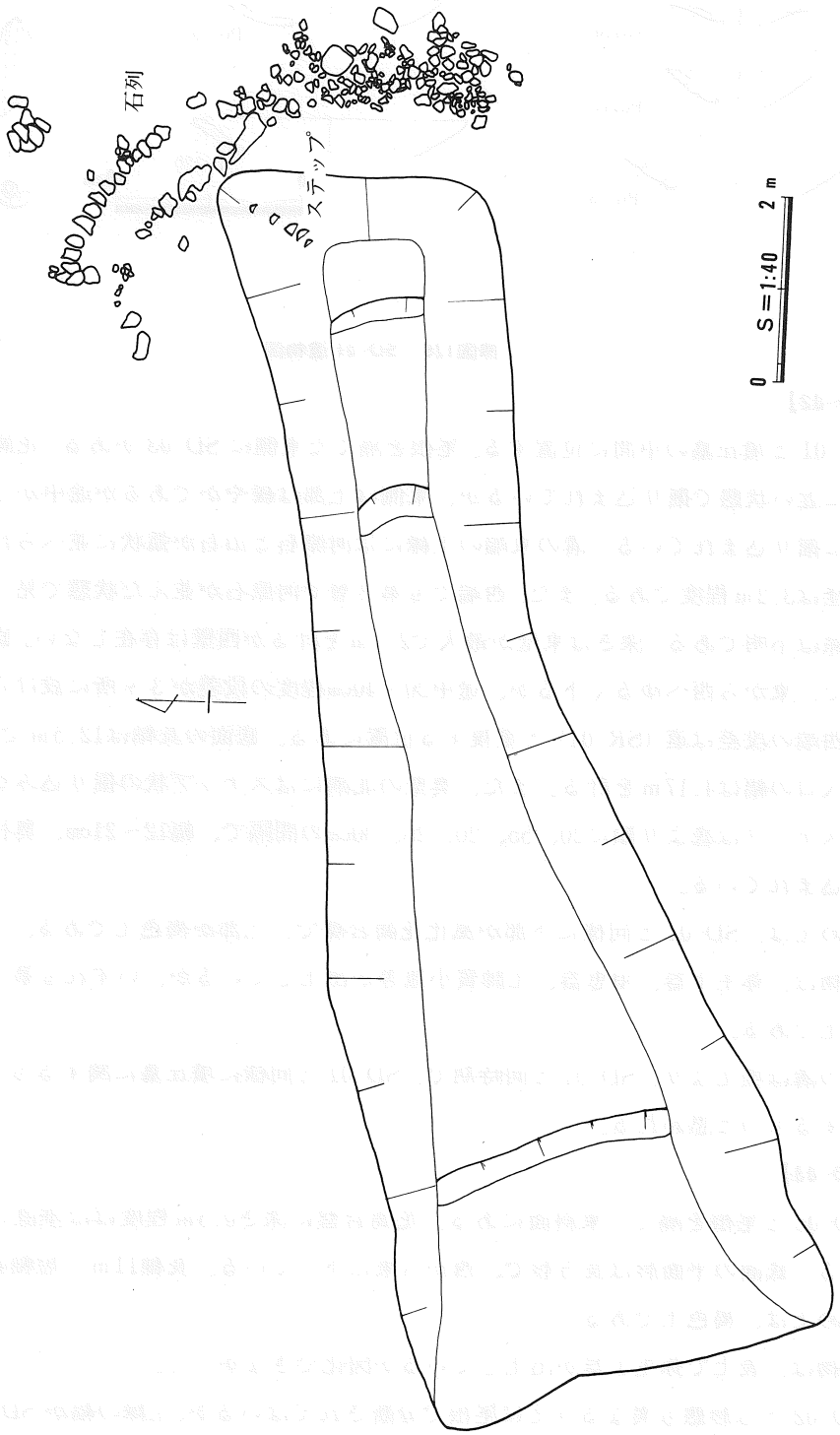
**【SD-03】**

SD-02 と尾根を隔てた東斜面にある。花崗岩盤に深さ0.5ｍ程度ほぼ垂直に掘り込まれている。底面の平面形は長方形で、西から東に下っている。長軸11ｍ、短軸4.4ｍを計る。

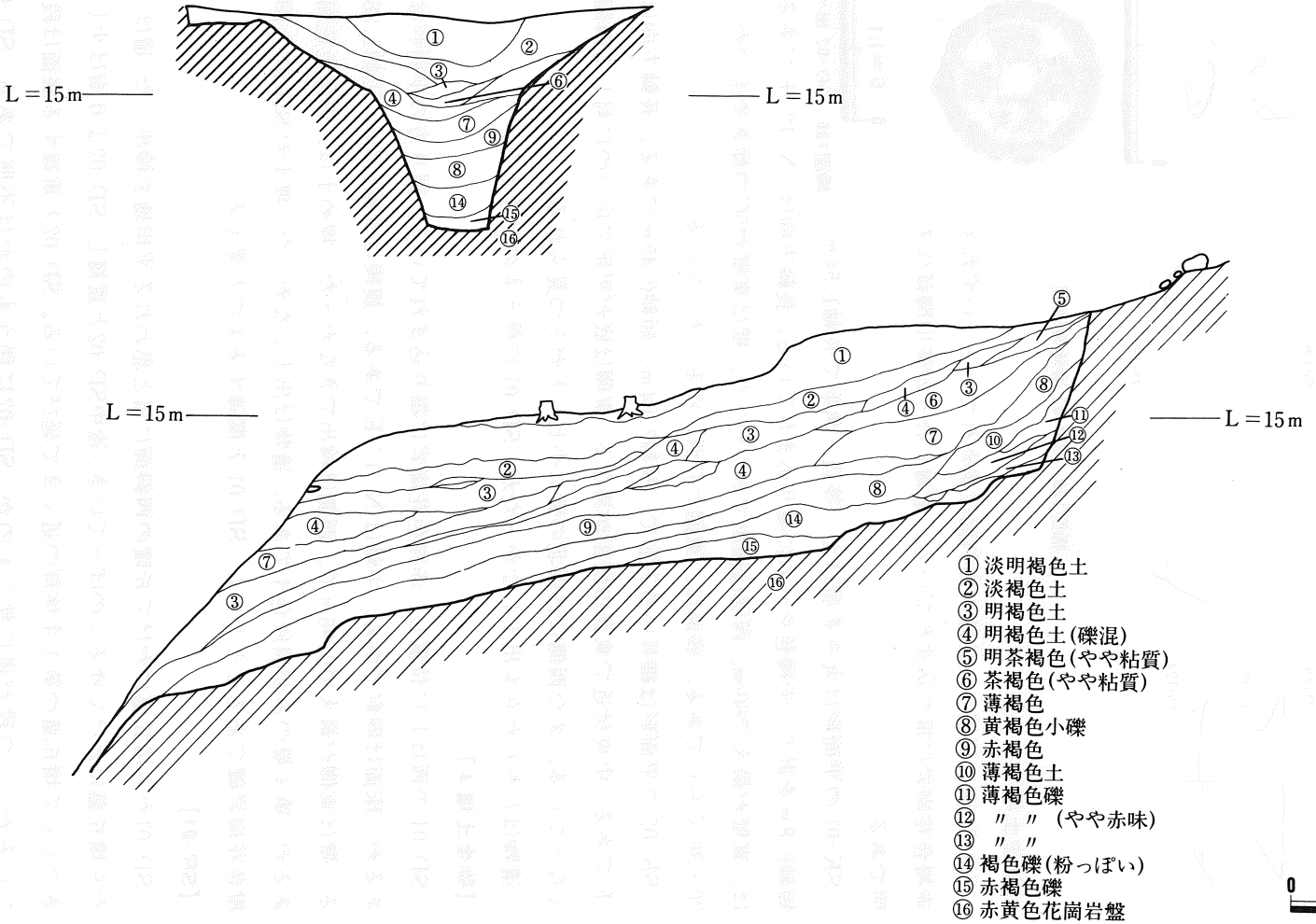
埋め土は、褐色土である。

遺物は、表土で弥生土器が出土しているが図化できなかった。

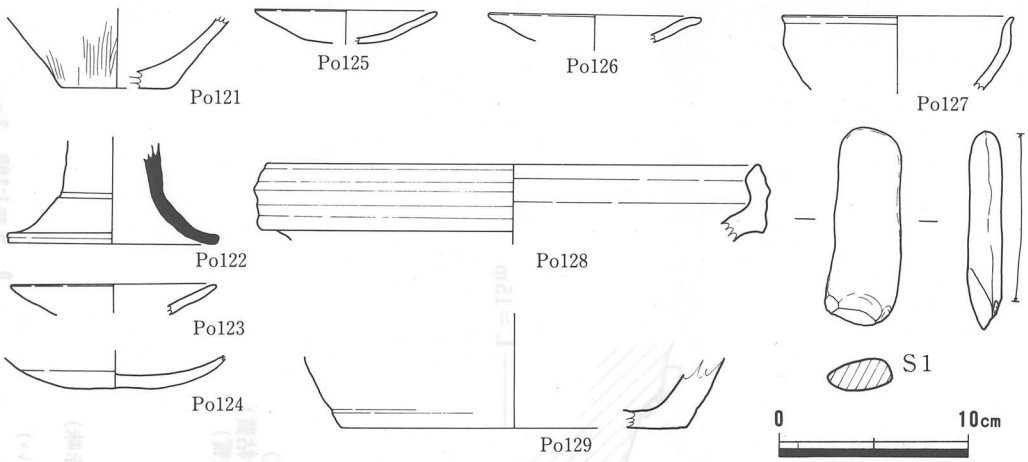
SD-02 とは形態も異なるうえに尾根で分断されてはいるが、上縁の幅が SD-02 石列の幅とほぼ同じであることや尾根を３ｍの間隔で隔てて対になる場所に位置することから、SD-03 は SD-02 と対となり墳丘墓を区画するものと考えたい。



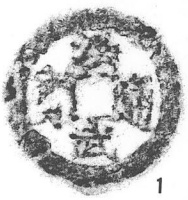

挿図 127　SD-02 平面図

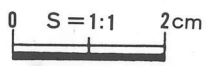



挿図 128 SD-02 土層図




挿図129　SD-02 遺物実測図




挿図130　SD-02 出土銅銭

**【弥生土壙 2 ・ 3 】**

SD-01 南に位置し、丘陵の西斜面に築かれている。いずれも赤褐色花崗岩に掘り込まれている。重複し合うが新旧関係は不明である。

SK-01 の平面形は丸みを帯びた二等辺三角形で長軸1.54ｍ、短軸0.8ｍを計り、赤褐色ロームに掘り込まれている。長軸方向は、N-12°-E である。深さは、東壁が最大で60㎝、西壁は検出できなかった。壁は東壁が50°の傾きをもつが、南北は20～30°ぐらいである。底面は、東側から西にゆるく下っている。

SK-02 の平面形は細長い長方形で、長軸2.04ｍ、短軸0.45ｍである。長軸方向は N-14°-E である。中央付近で東西の様相が異なる。東側は底が平坦で広いのに対して西側は細長くなっている。また西側には南北の壁に小ピットが５つ見られる。

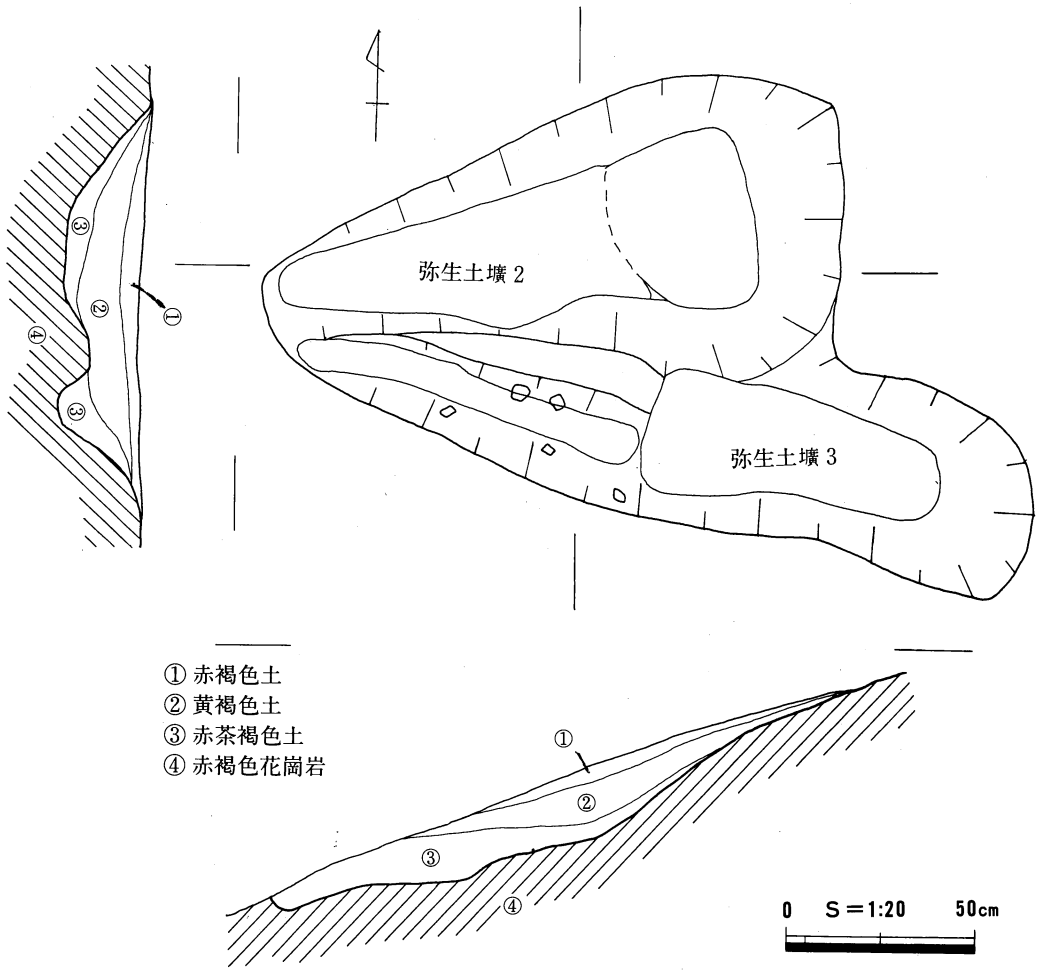
遺物はどちらからも出土しなかったが、SD-01 に伴うものと考える。

**【弥生土壙 4 】**

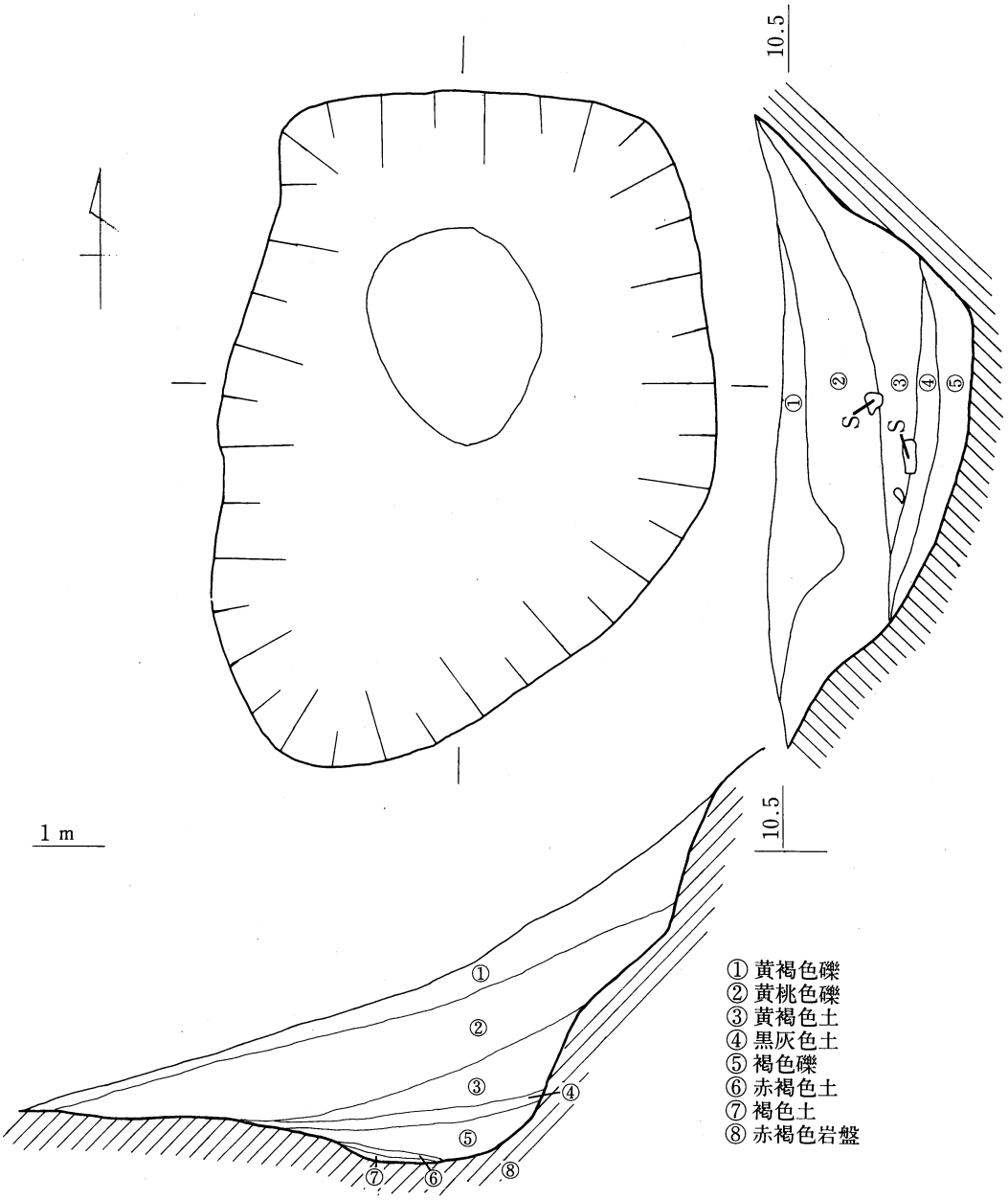
SD-01 の西はしに位置し、赤橙色花崗岩に掘り込まれている。掘り方の平面形は台形であるが、床面は卵形である。主軸は N-１°-E である。規模は長軸1.8ｍ、短軸1.36ｍを計る。壁は東側が最大で0.96ｍで、西側は検出できなかった。埋め土は、赤橙色花崗岩礫であるが、第４層のみが黒灰色土である。遺物は出土しなかった。埋土が SD-01 と同様の赤橙色花崗岩礫であることとから、SD-01 と関連するものと考える。

**【SR-01】**

SD-01から墳丘墓にかけて丘陵の西斜面に道と思われる平坦地を検出した。道は、SD-01から墳丘墓にかけてゆるくのぼっていき、途中SD-02と重複し、SD-02より南は少し傾斜をきつくして墳丘墓の第１主体部の近くまで延びている。SD-02と重複する底面は段となっているが、この段が道に伴うものか、SD-02に伴うものかは不明である。SD-02より




**挿図 130 弥生土壙 2 ・ 3 遺構図**




**挿図131　弥生土壙4遺構図**

北側は長さ6.4m、幅0.3m、南側は長さ10m、幅0.45mである。

遺物は出土しなかった。SD-01、SD-02や墳丘墓と同時期のものと考える。

**【SS-02】**

SD-01とSD-02の間の西斜面に平坦地を検出した。平坦部は尾根より2.5m下で弥生土壙2・3の南に位置する。平坦部の南端はSD-02に接している。平坦部の形状はナスビ形で長軸12.7m、短軸3.3mを計り、面積は36.2m²である。

遺物は出土していない。

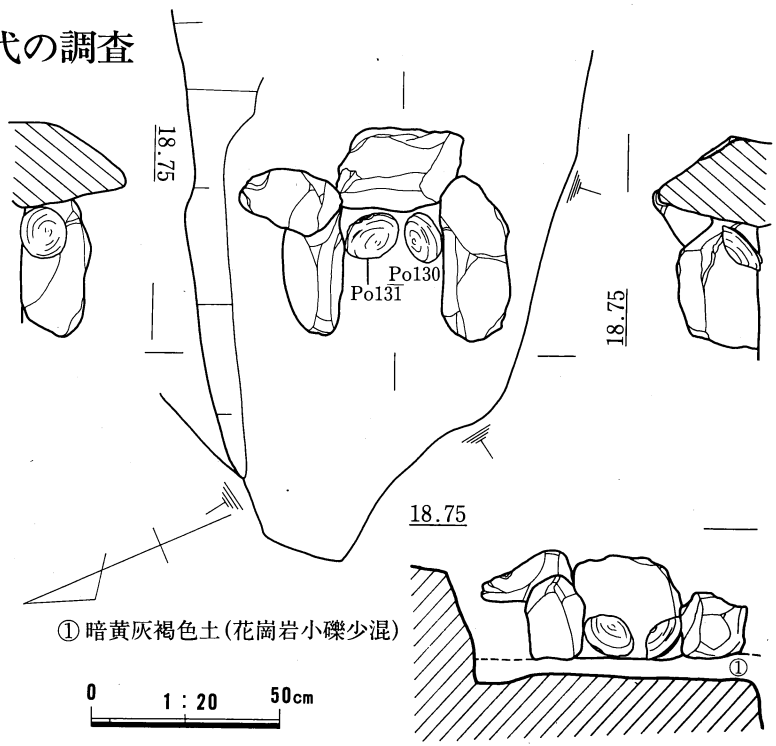
時期と性格は不明である。

## 第３節　古墳時代の調査

墳丘墓の南墳端南西隅で石棺を検出したのみである。

**【石 棺 墓】**

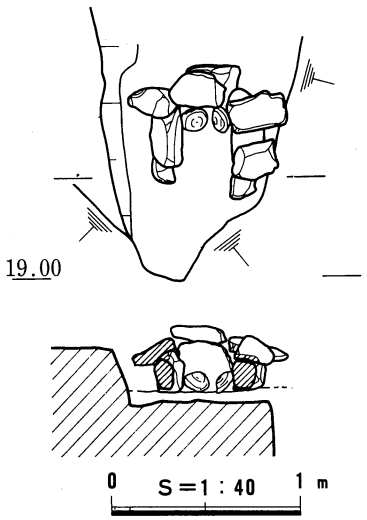
墳丘墓の南西墳端を破壊して造られている。西側が土砂採取時に掘削されている。当初は墳丘墓の転落した貼石とＳＸ群に伴う石が出土していると思われたが、須恵器の土器枕が出土したことから石棺と判明した。石はすべて河原石が使用されている。石棺の中心よりやや南側にずれて比較的平たい河原石が出土している。蓋石がずれたものであろうが、墳丘墓の転落石と誤解して除去してしまった。




挿図132　石棺墓遺構図(1)(Ｓ＝1/20)

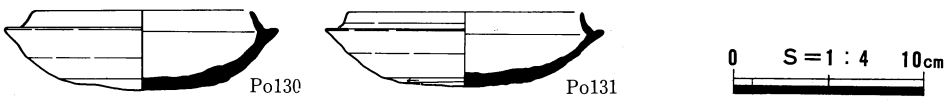
平面形は長方形で、規模は長軸が0.80ｍ以上、短軸が0.75ｍ以上で、深さは0.28ｍを測る。底面も長方形で、長軸0.50ｍ以上、短軸0.26ｍを測る。一旦岩盤まで掘り下げて、土を敷いて床面をつくっている。枕はいずれも須恵器坏身でＶ字に立てられている。

主軸はＮ-65°Ｗで、埋土は花崗岩小礫を少量含む暗褐灰色土である。




挿図133　石棺墓遺構図(2)(Ｓ＝1/40)

出土した須恵器は陶邑編年の２形式４段階に比定されるもので、石棺の時期は古墳時代後期後半である。




挿図134　石棺墓出土遺物実測図(Ｓ＝1/4)

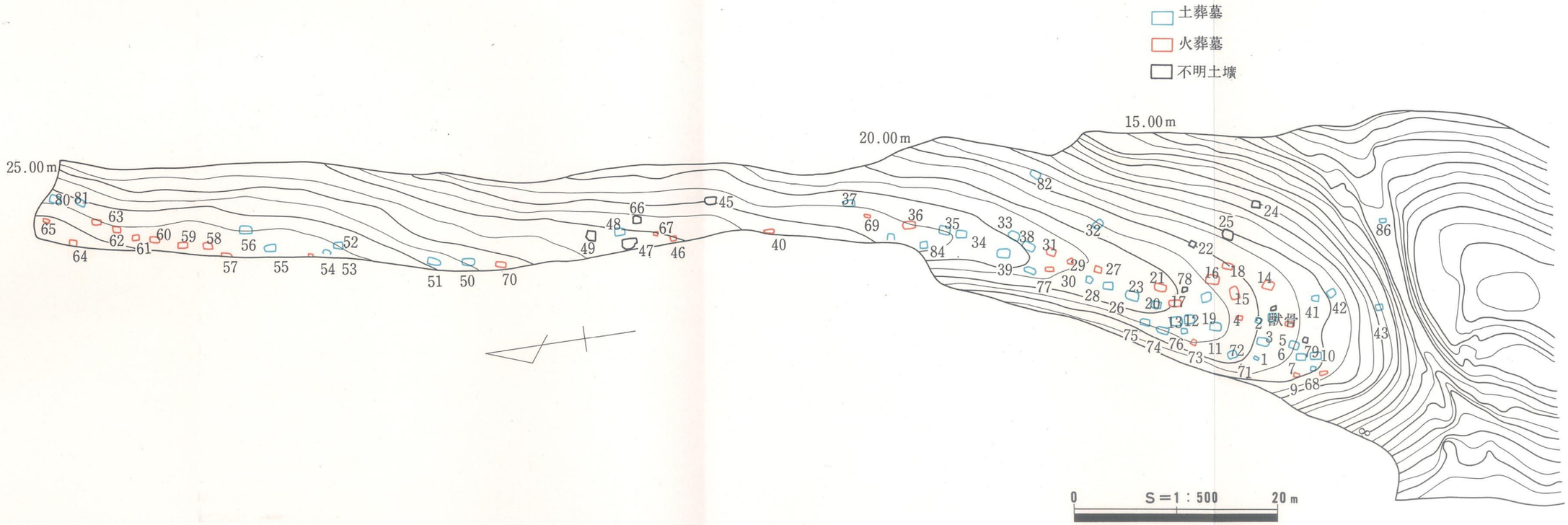
## 第4節　中世墓の調査

布勢鶴指奥墳墓群の北側の南北に伸びる丘陵の尾根を中心に中世遺構と考えられる土壙が84基検出された。土壙はいずれも表土下10～20cmの地山に掘り込まれていた。盛土、周溝などの痕跡は確認されなかった。

検出された土壙のうち、焼骨が検出されない場合でも掘り込みが浅く、土壙内で加熱した跡が認められる土壙を「火葬墓」とし、加熱の跡が認められず、遺物や掘り方等から明らかに墓と考えられるものを「土葬墓」とした。また、人為的な加工はみられるが掘り方が雑で遺物もなく、埋葬施設として決定する根拠のないものを「不明土壙」とした。今回の調査では「土葬墓」44基、「火葬墓」31基、「不明土壙」9基が検出された。また、その他に五輪塔1基、獣骨を納めた近代の土壙が1基検出された。このうち43基で人骨が残っており、鳥取大学医学部、井上晃孝助教授に取り上げ、鑑定を依頼した。人骨の出土状況については本章で記述するが、詳細は人骨鑑定の結果を参照していただきたい。

中世墓はSD-01内の埋土中で検出されたSK-86を南端にして調査区北端のSK-65に至る南北約130mに及ぶ尾根に集中して検出された。尾根は北から南にかけてゆるやかに傾斜するがほぼ平坦面を形成する。特に南側は平坦面が広く、人工的に加工されたと考えられる。丘陵中央より北側は尾根の一部及び西斜面が削られ崖面をなしている。また調査区より北側は尾根の傾斜が少し急になる。丘陵北側の尾根の平坦部の多くは調査区外にあたるが、試掘調査で数基の中世墓が確認されていることを考えるとその数は100基を越えるものと推定され、大規模な中世墓群を形成していたと考えられる。

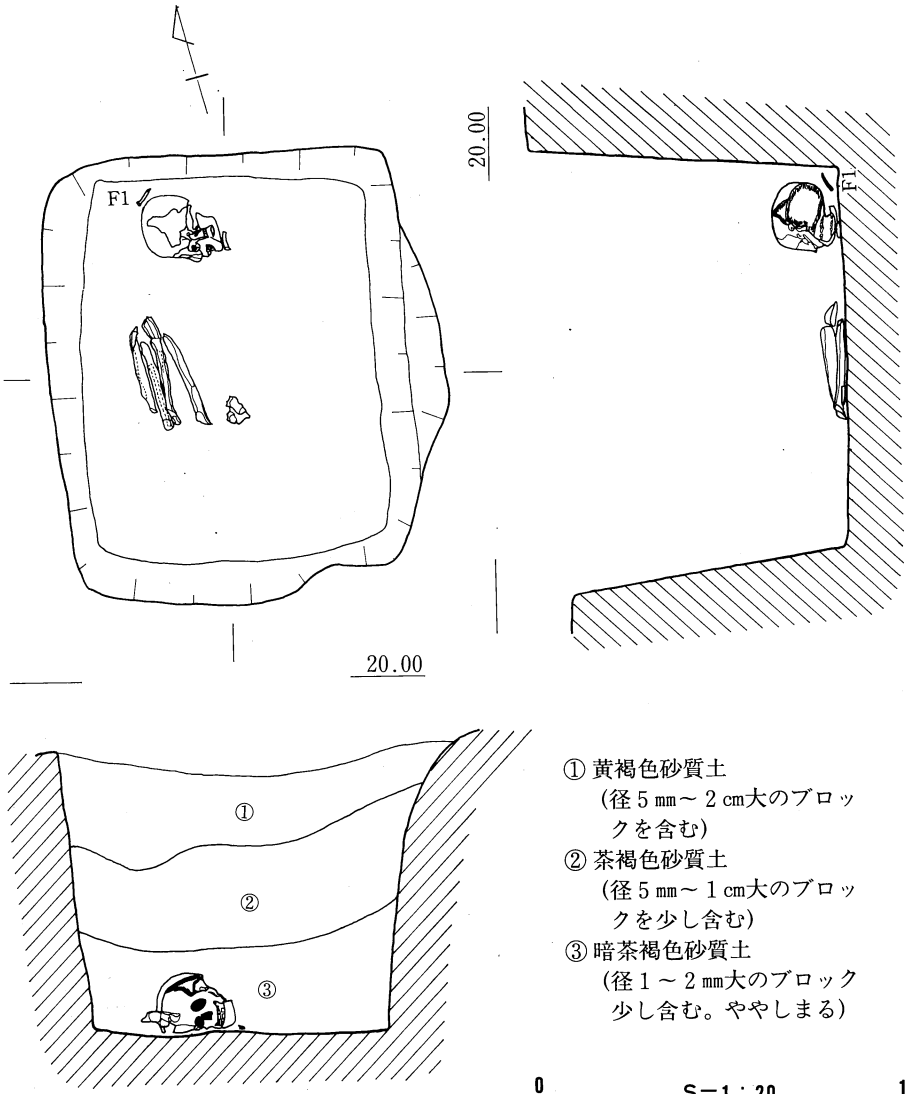
調査は丘陵の南側から調査を始め、弥生時代の木棺墓と区別するため便宜的にSKとした。検出された順に番号をつけたためSK番号と土壙の性格、位置等に一貫性はない。本章では「土葬墓」、「火葬墓」、「不明土壙」、「その他の遺構・遺物」とし、出土遺物は遺構ごとにまとめて紹介した。




挿図135　中世墓配置図（S＝1/200）

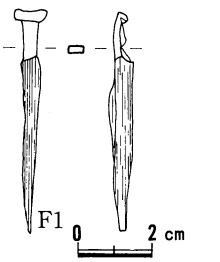
## 《土　葬　墓》

【SK-01】




挿図136　SK-01 実測図

丘陵の南側で、尾根の中央付近の平坦部で検出された。SK-02 の西約１ｍに位置する。平面形は、上面でやや不整な長方形を呈し、長軸118㎝、 短軸95㎝、深さは最深部で82㎝を測る。底面は平坦で長方形を呈し、長軸101㎝、短軸77㎝を測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり全体的に造りがていねいで、残存状態も良い。長軸方位はN-15°-E を




挿図137　SK-01 出土鉄釘
(S＝1/2)

とる。

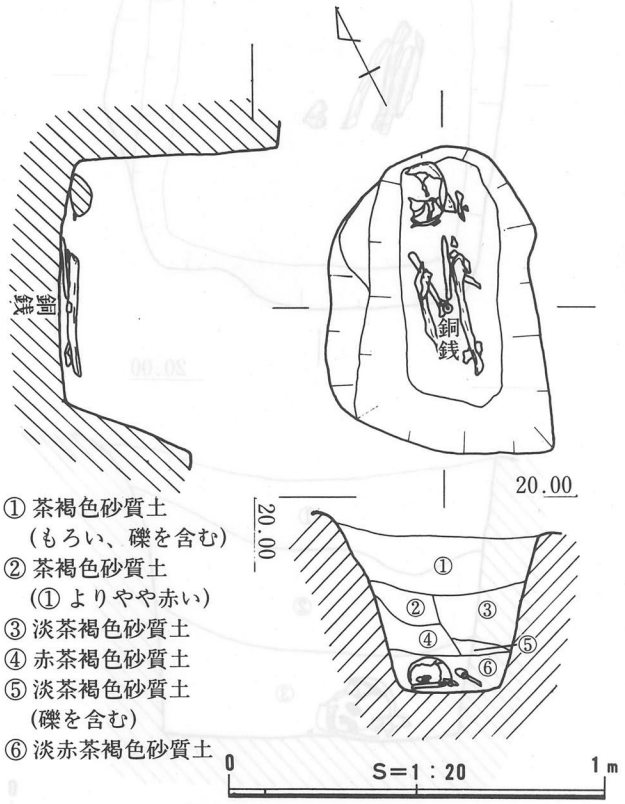
遺物は北壁の西隅側の底面近くで鉄釘が１本検出された。人骨は１体分で、頭骨が北壁近くで、下肢骨が中央西寄りの底面で重なるように検出された。土層で木棺の確認はできなかったが、鉄釘に木質部が残っていることから木棺に埋葬したものと考えられる。

**【SK-02】**

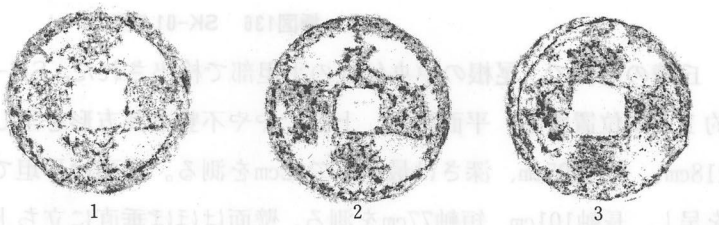
丘陵の南側で、尾根の中央付近の平坦部で検出された。SK-01より１ｍ程東に位置する。上面の平面形は不整な隅丸長方形を呈し、長軸81cm、短軸55cmで深さは最深部で53cmを測る。底面は平坦でやや不整な隅丸長方形を呈し、長軸63cm、短軸25cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がるが、南壁側がやや崩落している。長軸方位はN-27°-Eをとる。

遺物は銅銭と人骨１体分が検出された。銅銭は３枚重なって底面中央で検出された。人骨は頭部を北にして、底面全体に広がるようにして検出された。人骨の大きさに比べて掘り方がやや小規模と考えられる。

土層で、木棺の痕跡は認められなかった。鉄釘が検出されず、掘り方が棺を安置するにはやや小規模と考えられることから、木棺に埋葬せず、直葬した可能性も考えられる。




挿図138　SK-02 実測図




挿図139　SK-02 出土銅銭

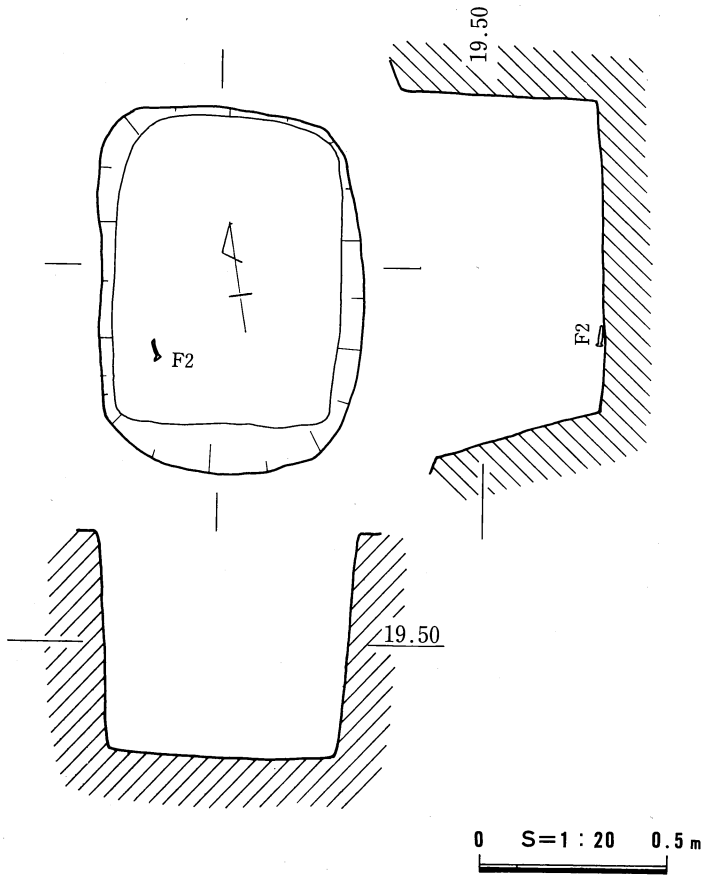
表12　SK-02 出土銅銭一覧表

| No. | 銅 銭 名 | 国 名 | 初鋳年(西暦) | 書 体 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 天 聖 元 宝 | 北　宋 | １０２３年 | 楷　書 | |
| 2 | 永 楽 通 宝 | 明 | １４０８年 | 楷　書 | |
| 3 | 熙 寧 元 宝 ? | 北　宋 | １０６８年 | 楷　書 | |

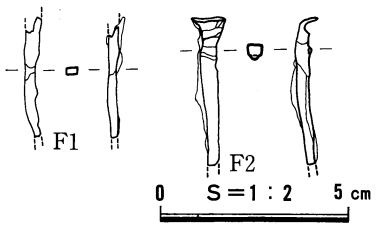
【SK-03】

丘陵南側の尾根の平坦部で検出された。SK-02の約0.5ｍ南側に位置する。平面形は上面で隅丸長方形を呈し、長軸97cm、短軸70cm、深さは最深部で58cmを測る。底面は平坦で隅丸長方形を呈し、長軸81cm、短軸60cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。全体的にていねいに造られており、残存状態も良い。長軸方位はN-8°-Eをとる。

遺物は西側南寄りの底面で鉄釘Ｆ１が検出されている。まだ、掘り下げ中にも１本鉄釘が確認されている。人骨は検出されなかった。釘が検出されたことから木棺に埋葬されたと考えられる。




挿図140　SK-03 実測図

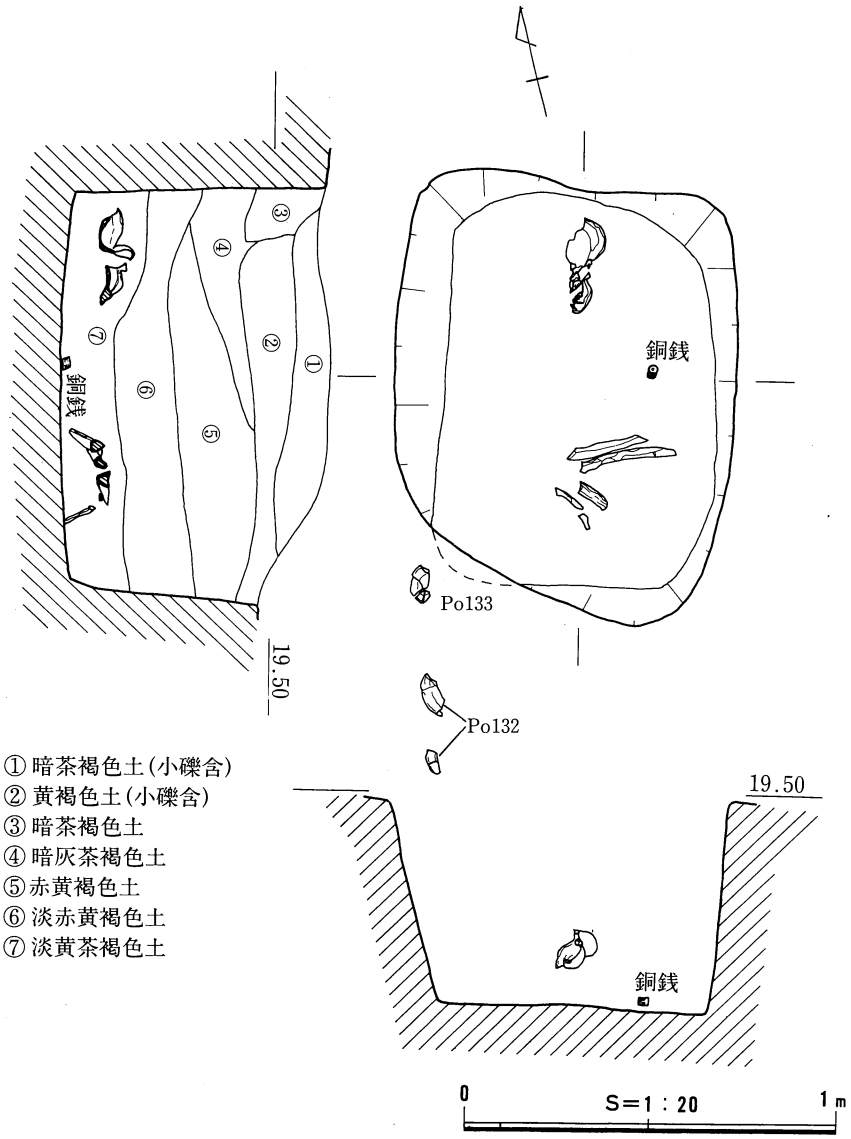



挿図141　SK-03 出土鉄釘(S=1/2)

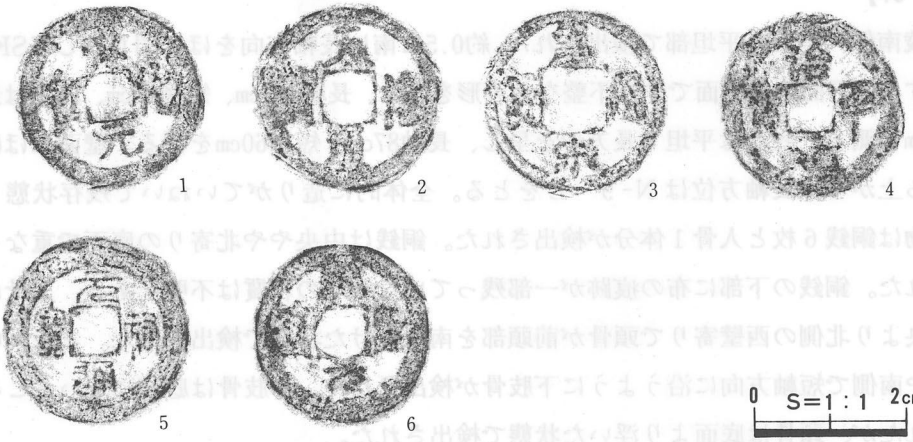
【SK-06】

丘陵南側の尾根の平坦部で検出された。SK-01の約2ｍ南に位置する。平面形は上面で不整な隅丸長方形を呈し、長軸112cm、短軸91cm、深さは最深部で67cmを測る。底面は平坦で隅丸長方形を呈し、長軸103cm、短軸71cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位はN-15°-Eをとる。残存状態は良い。

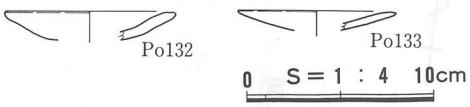
遺物は銅銭、人骨、鉄釘、土師質皿が検出された。銅銭は中央東寄りの底面で6枚重なって検出された。鉄釘は先端部が1本分掘り下げ中に検出された。土師質皿は土壙外で検出された。人骨は1体分で、北壁側中央付近に頭骨、中央よりやや南側で下肢骨が検出された。人骨は底面よりやや浮いた状態であった。土層では木棺の痕跡は確認できなかったが、釘の存在より木棺に埋葬されたと考えられる。



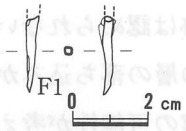

挿図142　SK-06 実測図




挿図143　SK-06 出土銅銭




挿図144　SK-06 出土土器




挿図145　SK-06 出土鉄釘（S＝1/2）

表13　SK-06 出土銅銭一覧表

| No. | 銅銭名 | 国名 | 初鋳年(西暦) | 書体 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 淳化元宝 | 北宋 | 990年 | 楷書 | |
| 2 | 天禧通宝 | 北宋 | 1017年 | 楷書 | |
| 3 | 皇宋通宝 | 北宋 | 1039年 | 楷書 | |
| 4 | 治平元宝 | 北宋 | 1064年 | 楷書 | |
| 5 | 元祐通宝 | 北宋 | 1086年 | 篆書 | |
| 6 | ○○元宝 | | —— | —— | |

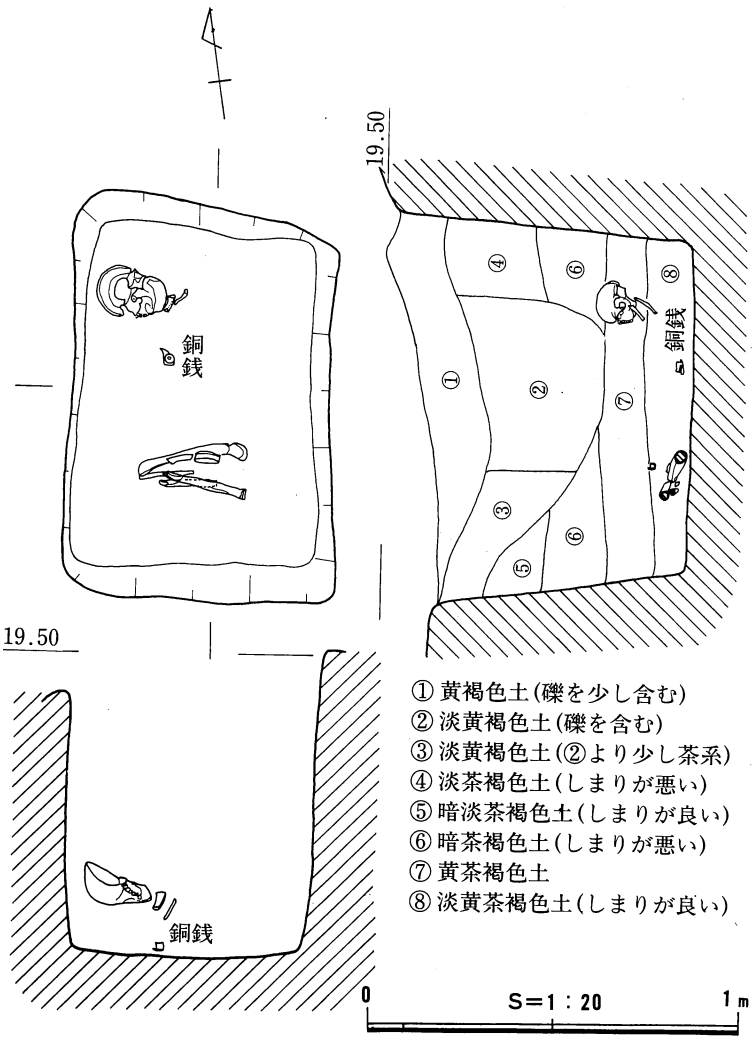
SK-43 人骨取り上げ風景

【SK-07】

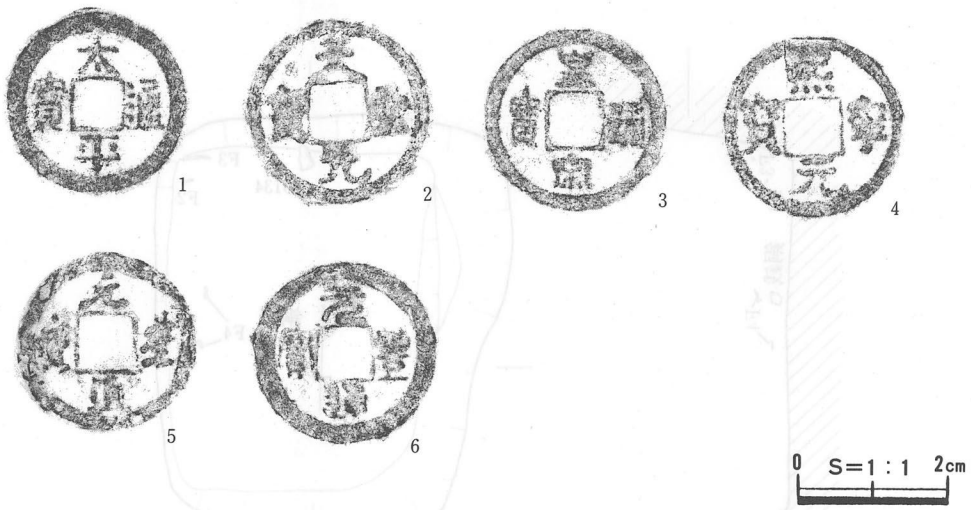
丘陵南側の尾根の平坦部で検出された。約0.5m南に長軸方向をほぼ同じにしてSK-10が位置する。平面形は上面でやや不整な長方形を呈し、長軸104cm、短軸68cm、深さは最深部で80cmを測る。底面は平坦で長方形を呈し、長軸87cm、短軸60cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位はN-9°-Eをとる。全体的に造りがていねいで残存状態も良い。

遺物は銅銭6枚と人骨1体分が検出された。銅銭は中央やや北寄りの底面で重なって検出された。銅銭の下部に布の痕跡が一部残っていたが布の材質は不明である。人骨は底面の中央より北側の西壁寄りで頭骨が前頭部を南に向けた状態で検出された。また、中央よりやや南側で短軸方向に沿うように下肢骨が検出された。下肢骨は底面に近いところで検出されたが、頭骨は底面より浮いた状態で検出された。

土層では明瞭な木棺の跡は認められないが、②の層の落ち込みから木棺の可能性が考えられる。




挿図146　SK-07 実測図




挿図147　SK-07 出土銅銭

表14　SK-07 出土銅銭一覧表

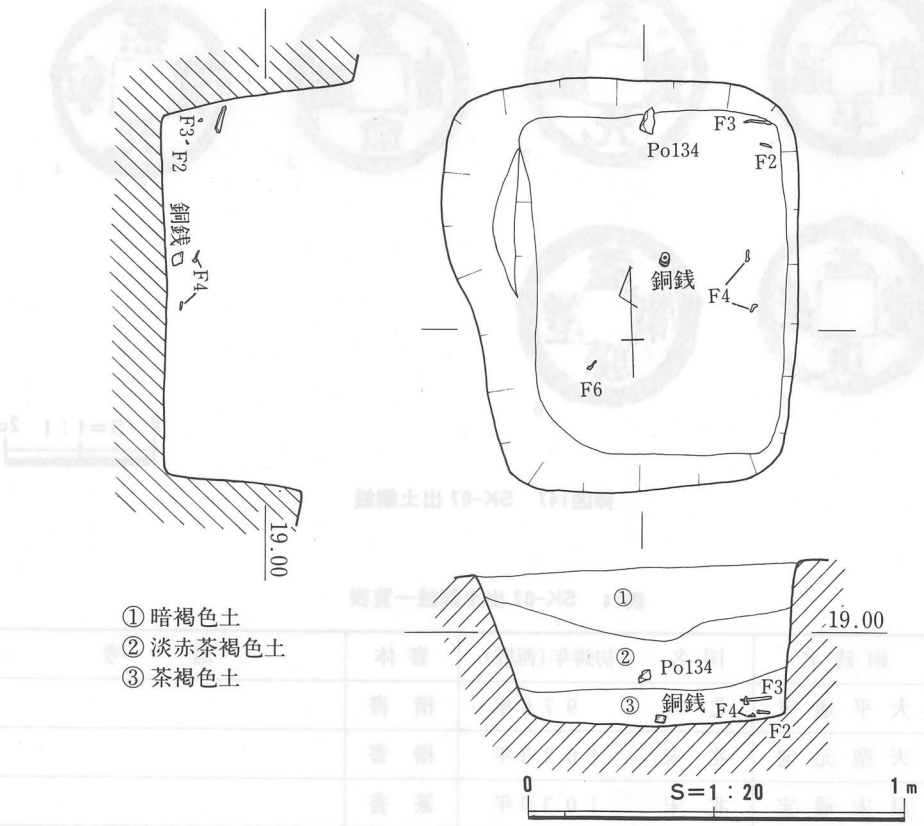
| No. | 銅銭名 | 国名 | 初鋳年(西暦) | 書体 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 大平通宝 | 北宋 | 976年 | 楷書 | |
| 2 | 天聖元宝 | 北宋 | 1023年 | 楷書 | |
| 3 | 皇宋通宝 | 北宋 | 1039年 | 篆書 | |
| 4 | 熙寧元宝 | 北宋 | 1068年 | 楷書 | |
| 5 | 元豊通宝 | 北宋 | 1078年 | 楷書 | |
| 6 | 元豊通宝 | 北宋 | 1078年 | 篆書 | |

**【SK-10】**

丘陵尾根の南端の平坦部で検出された。約0.5m北に長軸方向をほぼ同じにしてSK-07が位置する。平面形は上面でやや不整な隅丸長方形を呈し、長軸110cm、短軸85cm、深さは最深部で50cmを測る。底面は平坦で隅丸長方形を呈し、長軸90cm、短軸65cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位はN-4°-Eでほぼ南北に向く。残存状態は良い。

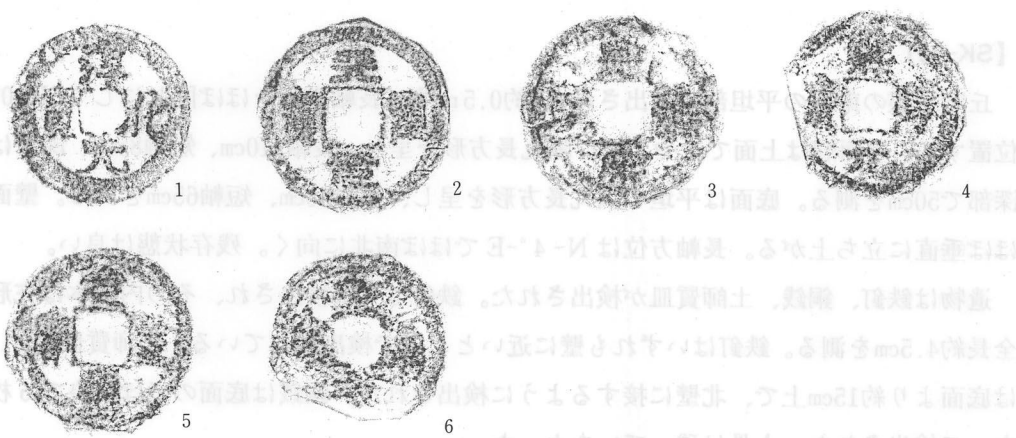
遺物は鉄釘、銅銭、土師質皿が検出された。鉄釘は7本検出され、その内2本は完形で全長約4.5cmを測る。鉄釘はいずれも壁に近いところで検出されている。土師質皿(Po134)は底面より約15cm上で、北壁に接するように検出された。銅銭は底面のほぼ中央で6枚重なって検出された。人骨は残っていなかった。

土層で木棺の痕跡は確認できなかったが、釘の存在より木棺に埋葬したと考えられる。

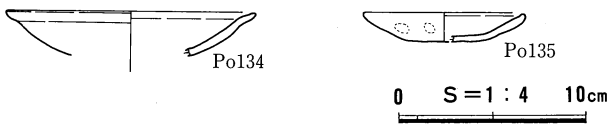



① 暗褐色土
② 淡赤茶褐色土
③ 茶褐色土

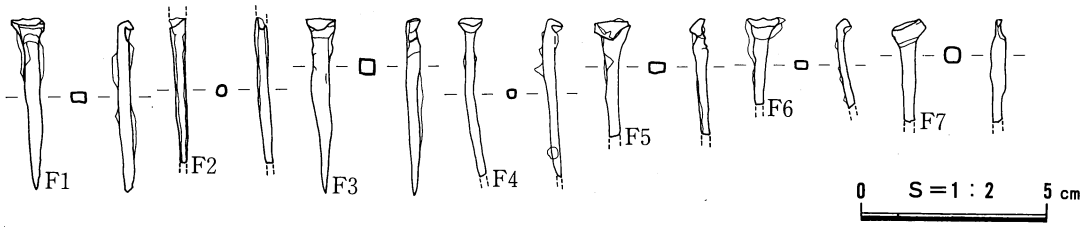
挿図148　SK-10実測図




挿図149　SK-10出土銅銭




挿図150　SK-10 出土土器(S=1/4)




挿図151　SK-10 出土鉄釘(S=1/2)

表15　SK-10 出土銅銭一覧表

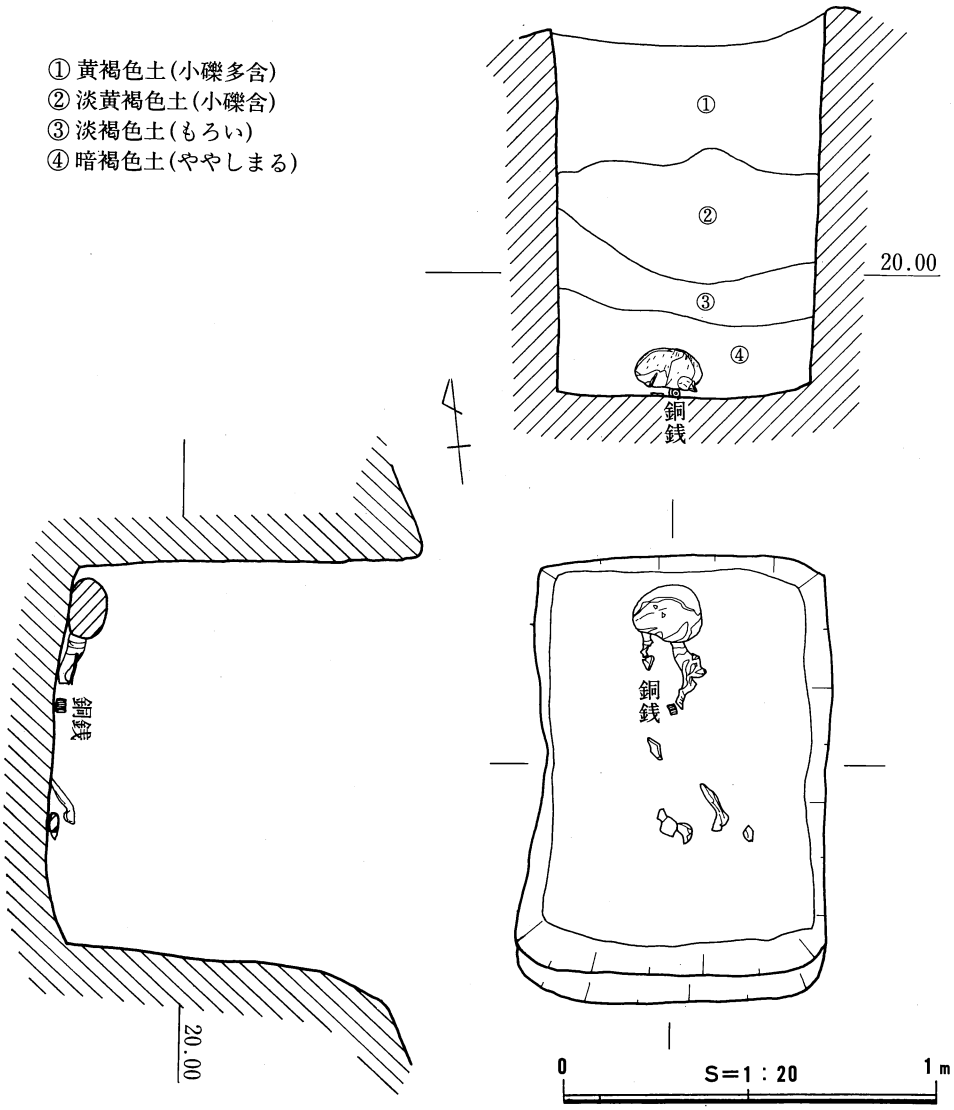
| No. | 銅銭名 | 国名 | 初鋳年(西暦) | 書体 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 淳化元宝 | 北宋 | 990年 | 楷書 | |
| 2 | 天聖元宝 | 北宋 | 1023年 | 篆書 | |
| 3 | 皇宋通宝 | 北宋 | 1039年 | 篆書 | |
| 4 | 熙寧元宝 | 北宋 | 1068年 | 楷書 | |
| 5 | 元豊通宝 | 北宋 | 1078年 | 篆書 | |
| 6 | 不明 | | —— | —— | |

【SK-11】

丘陵尾根の南側の平坦部で検出された。尾根の中央よりやや西にあり、SK-01の北約3.5mに位置する。土壙の密集地にあって他の土壙との間隔が他のそれと比較して広い。平面形は上面で長方形を呈し、長軸118cm、短軸73cm、深さは最深部で98cmを測る。底面はほぼ平坦で長方形を呈し、長軸99cm、短軸67cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位はN-8°-Eである。全体的に造りがていねいで、残存状態が良い。

遺物は銅銭と人骨が検出された。銅銭は6枚で中央よりやや北の底面で横に重なって検出された。近くには首から肩にかけての骨が検出されている。人骨はほぼ底面直上で検出された。頭骨は底面の北端中央で首の骨と連なった状態で検出された。下肢骨は残りは悪いが中央よりやや南側で検出された。

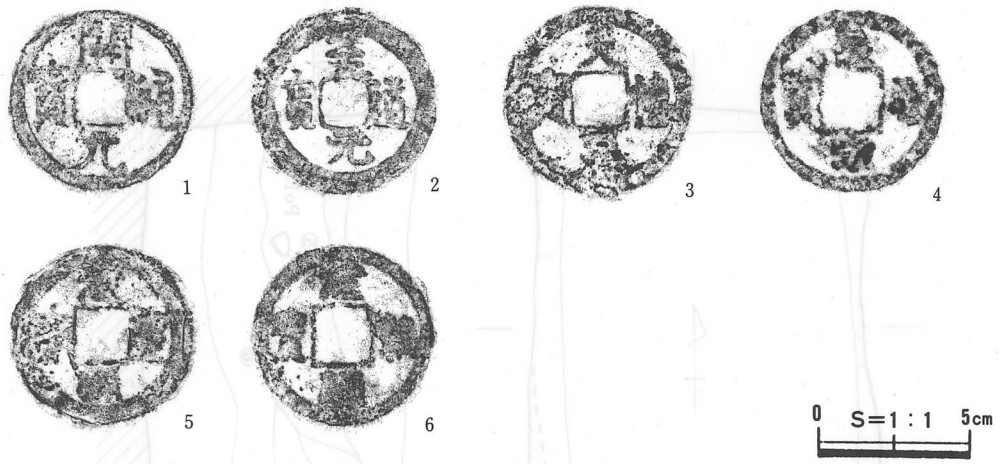
土層では自然堆積に近く、明瞭な木棺の痕跡は確認できなかった。




**挿図152　SK-11 実測図**

**表16　SK-11 出土銅銭一覧表**

| No. | 銅 銭 名 | 国 名 | 初鋳年(西暦) | 書 体 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 開 元 通 宝 | 唐 | 621年 | 楷　書 | |
| 2 | 至 道 元 宝 | 北　宋 | 995年 | 楷　書 | |
| 3 | 天 禧 通 宝 | 北　宋 | 1017年 | 楷　書 | |
| 4 | 皇 宋 通 宝 | 北　宋 | 1039年 | 篆　書 | |
| 5 | 元 豊 通 宝 | 北　宋 | 1078年 | 楷　書 | |
| 6 | 元 祐 通 宝 | 北　宋 | 1086年 | 篆　書 | |




挿図153　SK-11 出土銅銭

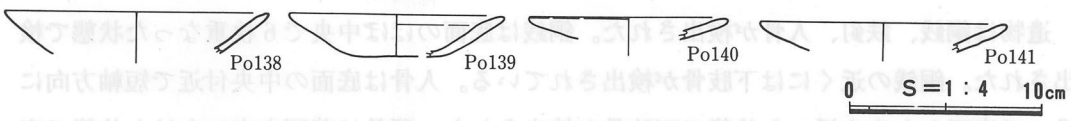
挿図154　SK-11 出土土器(S=1/4)

【SK-12】

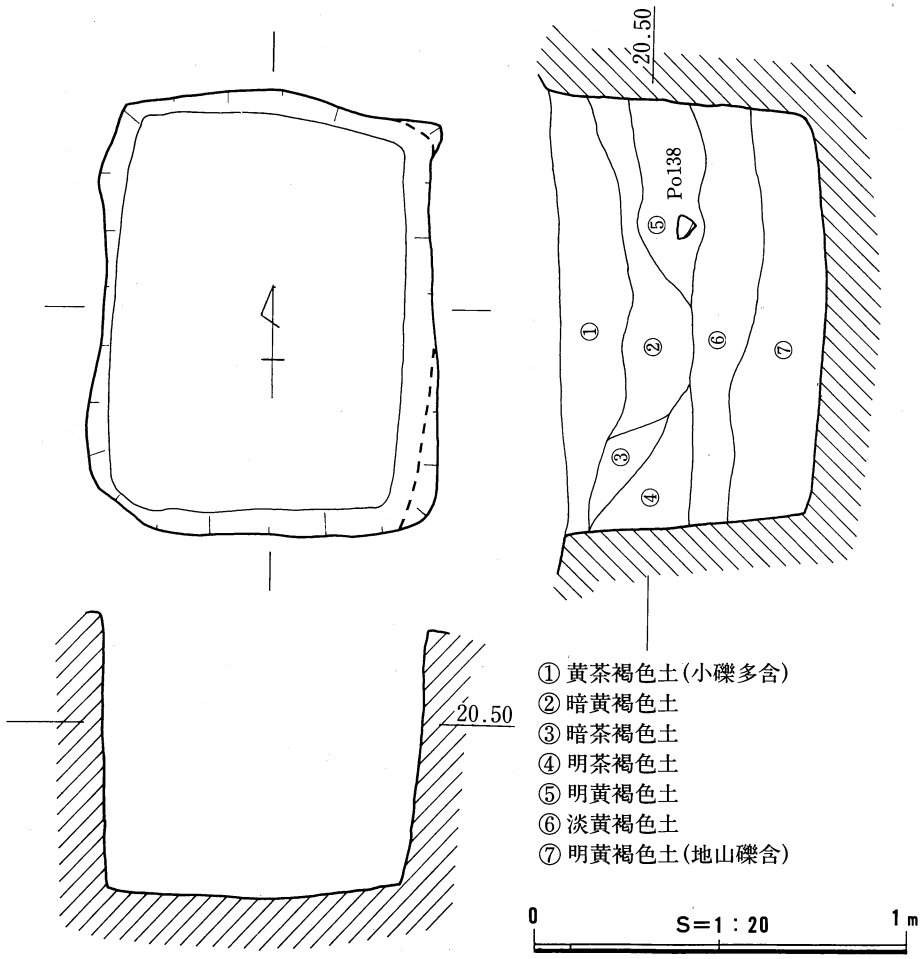
丘陵尾根の南側の平坦部で検出された。尾根の中央よりやや西にある。0.1m北には長軸方向をほぼ同じにしてSK-13が並ぶ。平面形はやや不整な隅丸長方形を呈し、長軸118cm、短軸87cm、深さは最深部で68cmを測る。底面は平坦で隅丸長方形を呈し、長軸103cm、短軸77cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。造りはていねいで残存状態も良い。長軸方向は真北を向いている。

遺物は掘り下げ中に土師質皿片が4点検出された。その他の遺物は検出されなかった。

土層では明瞭な木棺の痕跡は確認できなかったが、一部落ち込みが認められた。




挿図155　SK-12 出土土器(S=1/4)



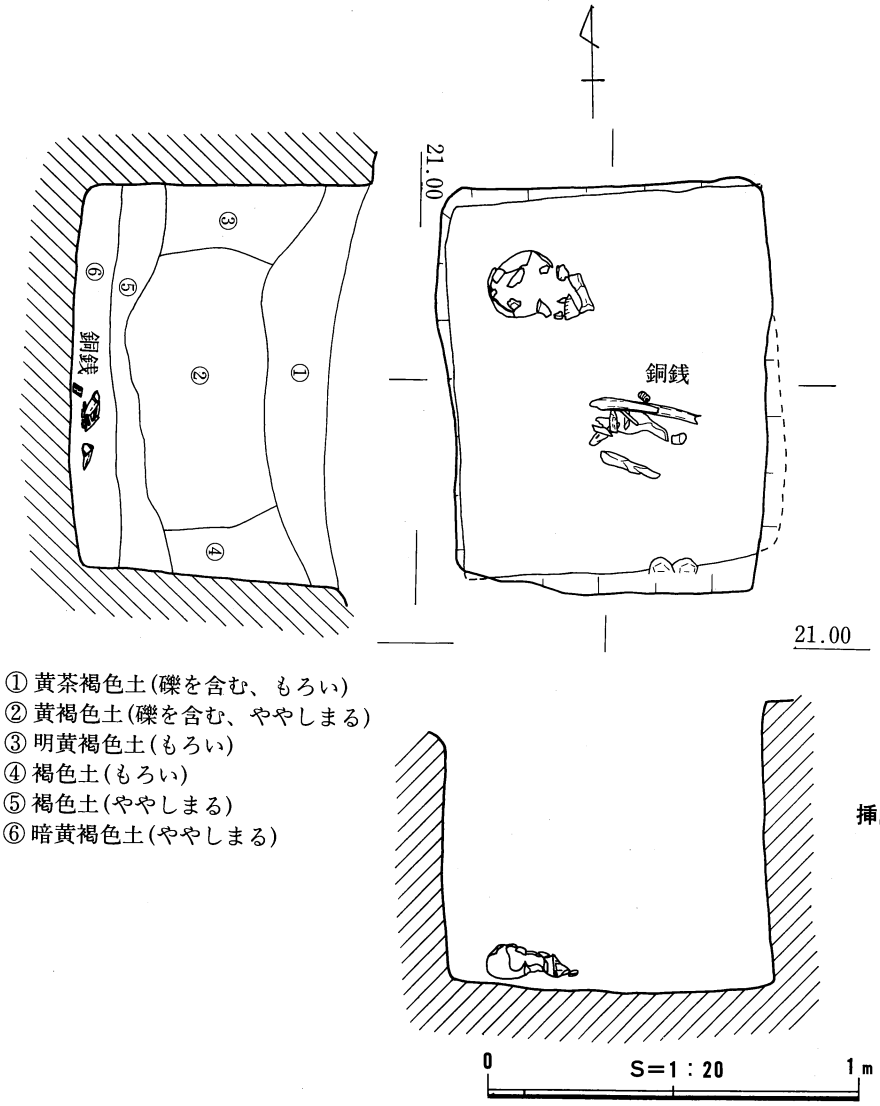

**挿図156　SK-12 実測図**

**【SK-13】**

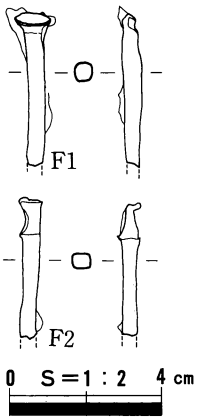
丘陵尾根の南側の平坦部で検出された。尾根中央より西にある。0.1m南に長軸方向をほぼ同じにしてSK-12が並ぶ。平面形は不整な長方形を呈し、長軸118cm、短軸84cm、深さは最深部で75cmを測る。底面は平坦で長方形を呈し、長軸100cm、短軸85cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。残存状態は良い。長軸方位はN-2°-Eでほぼ真北を向く。SK-12とほぼ同規模の土壙である。

遺物は銅銭、鉄釘、人骨が検出された。銅銭は底面のほぼ中央で6枚重なった状態で検出された。銅銭の近くには下肢骨が検出されている。人骨は底面の中央付近で短軸方向に沿って底面からやや浮いた状態で下肢骨が検出された。頭骨は前頭を南に向けた状態で底面の北西隅近くで検出された。また鉄釘は2本分で掘り下げ中に検出された。

鉄釘の検出及び土層の②層の落ち込みから木棺に埋葬されたと考えられる。



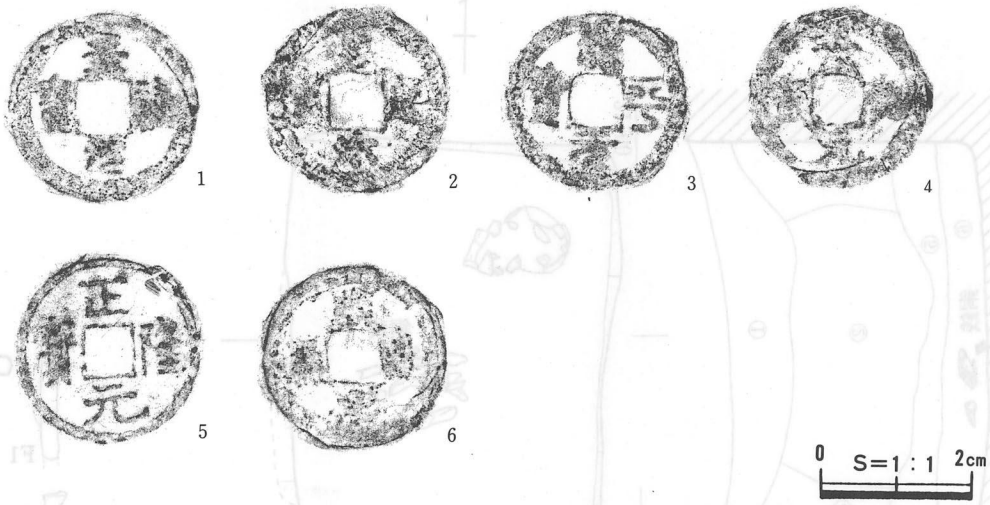

挿図157-①　SK-13 実測図




挿図157-②　SK-13 出土鉄釘(S=1/2)

表 17 SK-13 出土銅銭一覧表

| No. | 銅 銭 名 | 国 名 | 初鋳年(西暦) | 書 体 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 景 祐 元 宝 | 北 宋 | 1034年 | 篆 書 | |
| 2 | 皇 宋 通 宝 | 北 宋 | 1039年 | 楷 書 | |
| 3 | 治 平 元 宝 | 北 宋 | 1064年 | 篆 書 | |
| 4 | 元 祐 通 宝 | 北 宋 | 1086年 | 篆 書 | |
| 5 | 正 隆 元 宝 | 金 | 1161年 | 楷 書 | |
| 6 | 至 元 通 宝 | 元 | 1335年 | 楷 書 | |

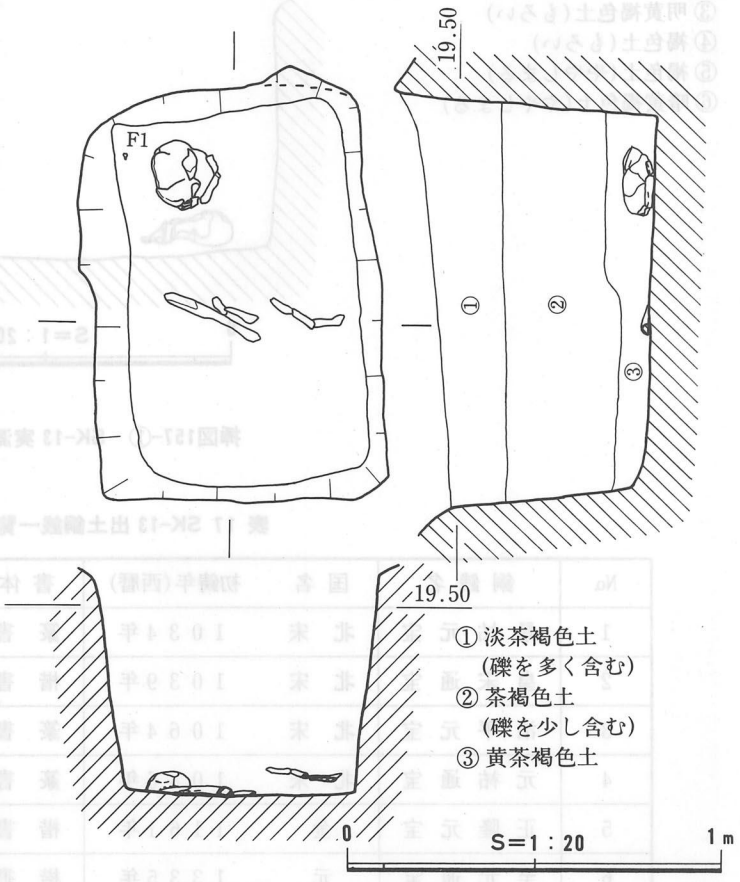



挿図158　SK-13 出土銅銭

【SK-19】

丘陵尾根の南側の平坦部で検出された。尾根中央付近にあり、SK-12の南東1.5mに位置する。平面形は不整な長方形を呈し、長軸110cm、短軸75cm、深さは最深部で70cmを測る。底面は平坦で長方形を呈し、長軸100cm、短軸60cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方向は真北を向いている。残存状態は良い。

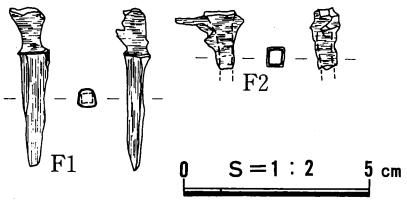
遺物は鉄釘と人骨が検出されている。鉄釘（Ｆ１）は北東隅の床面で、Ｆ２は埋土中に検出されている。木質部が多く残り、それより推定される棺材の厚さは1.5cm内外である。人骨は１




挿図159　SK-19 実測図

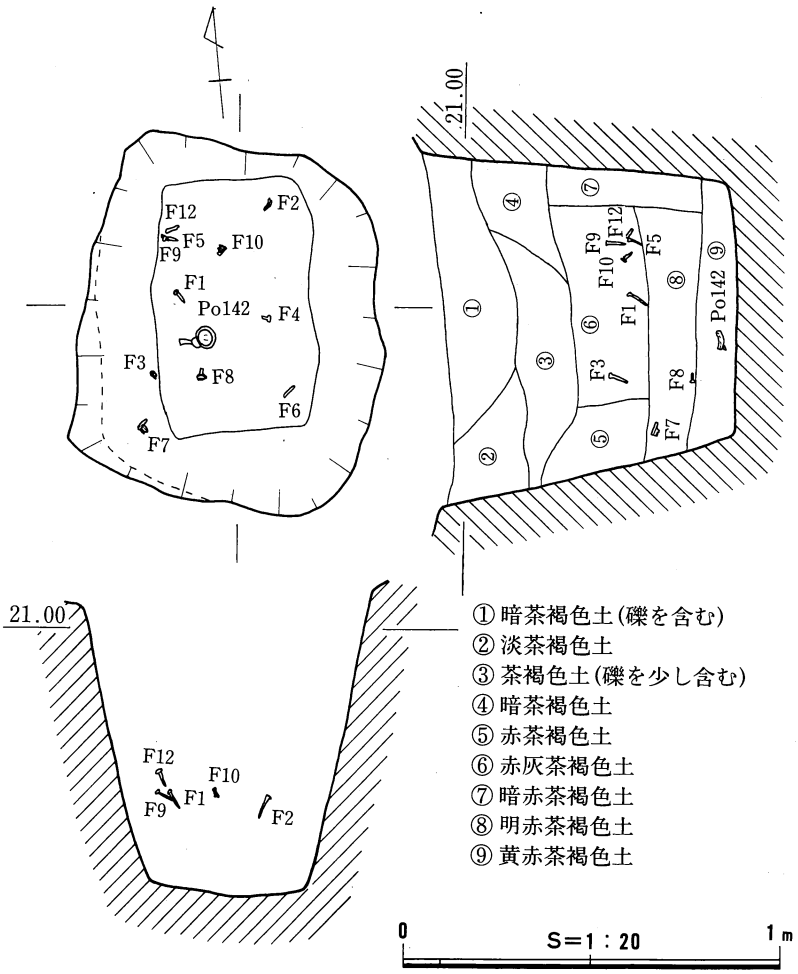
体分で、床面の中央付近で短軸方向に沿うように下肢骨が検出された。また、頭骨が底面の北西隅近くで検出された。人骨はほぼ底面直上である。

土層では盗掘、木棺の痕跡は確認できなかったが、鉄釘の存在より木棺に埋葬されたものと考えられる。




挿図160 SK-19 出土鉄釘(S=1/2)

【SK-20】

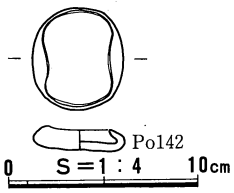



挿図161 SK-20 実測図

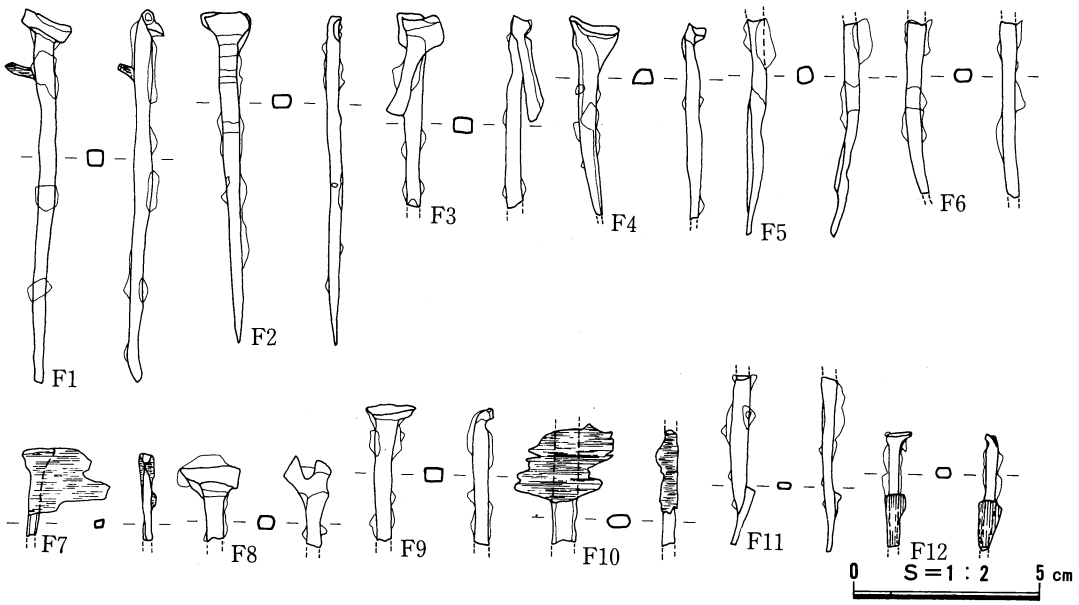
丘陵尾根の南側の平坦部で検出された。尾根中央よりやや西にあり、SK-13の北東1mに位置する。平面形は上面で不整な隅丸長方形を呈し、長軸94cm、短軸77cm、深さは最深部で80cmを測る。底面はほぼ平坦でやや不整な長方形を呈し、長軸66cm、短軸40cmを測る。壁面はやや外傾しながら急に立ち上がる。長軸方位はN-5°-Eをとる。残存状態は良い。

遺物は鉄釘、土師質耳皿(Po142)が検出された。鉄釘は全部で12本あり、全て底面から浮いた状態で検出された。壁際で出土するものが多く、四隅近くでも検出していることを考えると底面に即した長方形の木棺であったことが推察される。一番高い所で出土した釘が底面から33cmある。釘に残った木質部から棺材の厚さは1.5cm内外と推定される。土師質耳皿は底面よりやや浮いた状態で検出された。また土師質耳皿に接するように漆器片が検出されたが図化できなかった。人骨は残っていなかった。

土層では⑤、⑥、⑦層あたりが木棺の痕跡を残しているものと考えられ、これより木棺の高さは底面よりの50cm内外はあったと推察される。

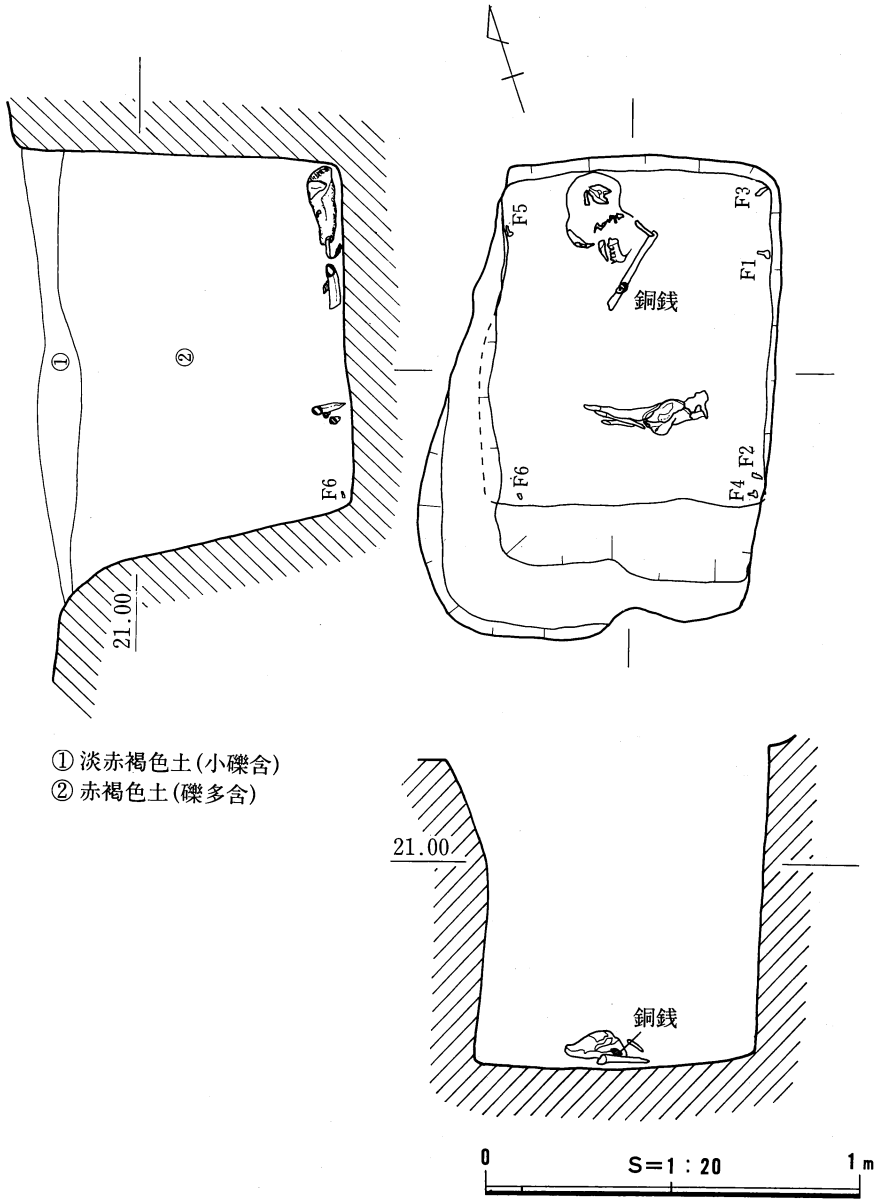



挿図162 SK-20 出土土器(S=1/4)




挿図163 SK-20 出土鉄釘(S=1/2)

【SK-23】

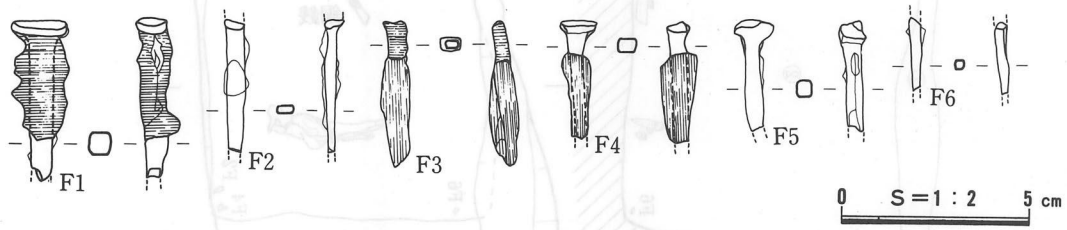



**挿図164　SK-23 実測図**

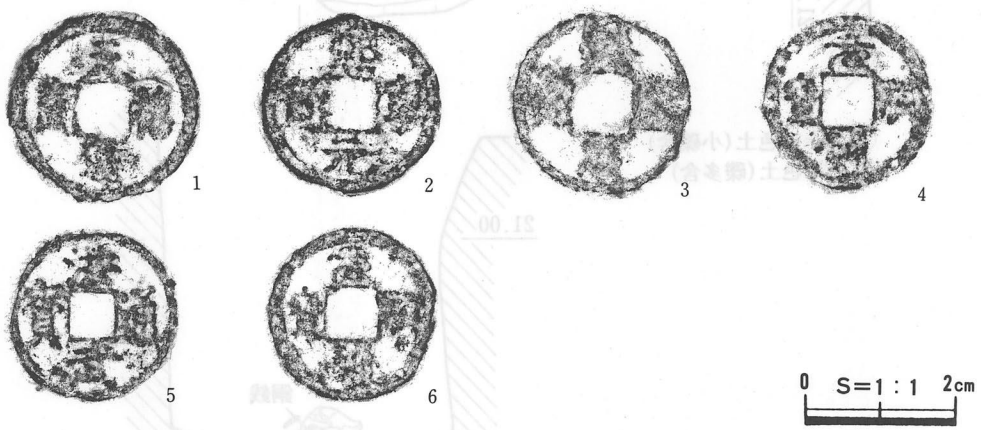
丘陵尾根の南側の平坦部で検出された。尾根中央よりやや西にあり、SK-20の北約1mに位置する。尾根幅はやや狭くなる。平面形は上面で不整な隅丸長方形を呈し、長軸120cm、短軸86cm、深さは最深部で85cmを測る。底面はほぼ平坦でやや不整な長方形を呈し、長軸88cm、短軸75cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位はN-19°-Eをとる。残存状態は南壁側がやや崩落しているがほぼ良好である。

遺物は鉄釘、銅銭、人骨が検出された。鉄釘は底面で6本検出された。四隅近くからそれぞれ検出されており、底面に沿った長方形の木棺が安置されたと考えられる。銅銭は中央北寄りの上腕骨の直上で6枚重なった状態で検出された。人骨は北壁際に頭骨が前頭部を南に向けて検出された。下肢骨は中央よりやや南で短軸方向に沿って重なるように検出された。

土層では、木棺等の痕跡は確認できなかった。




挿図165　SK-23出土鉄釘(S=1/2)




挿図166　SK-23出土銅銭

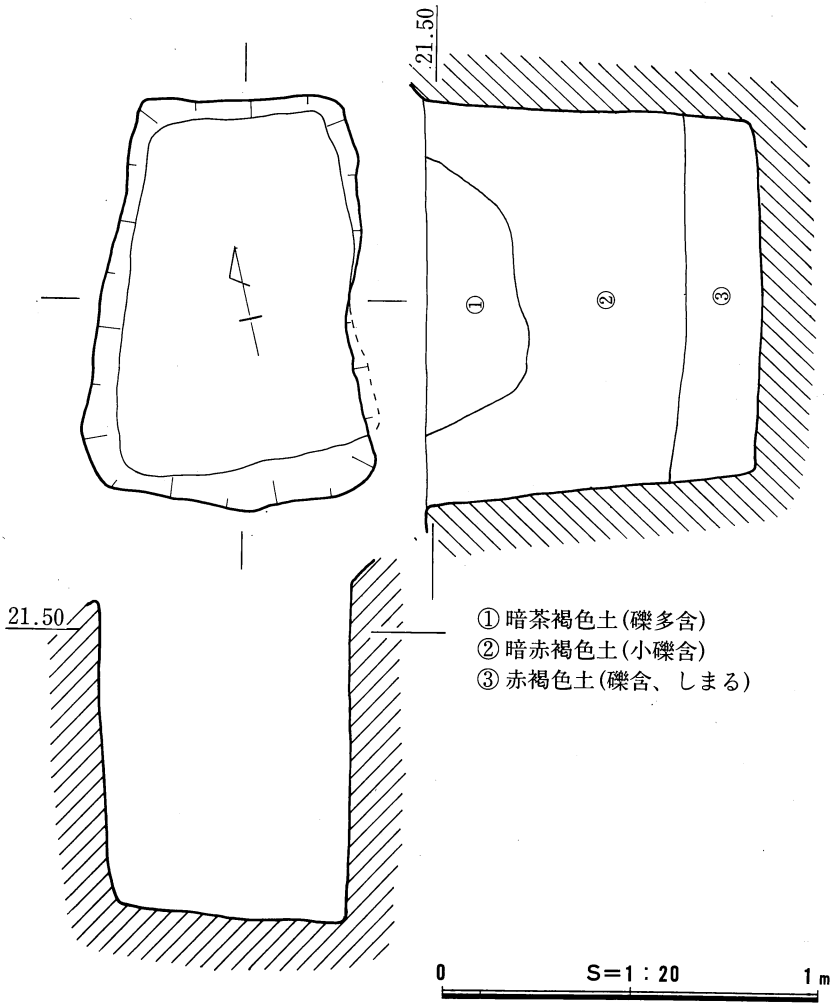
表18　SK-23出土銅銭一覧表

| No. | 銅銭名 | 国名 | 初鋳年(西暦) | 書体 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 天禧通宝 | 北宋 | 1017年 | 楷書 | |
| 2 | 熙寧元宝 | 北宋 | 1068年 | 楷書 | |
| 3 | 熙寧元宝 | 北宋 | 1068年 | 楷書 | |
| 4 | 元祐通宝 | 北宋 | 1086年 | 篆書 | |
| 5 | 洪武通宝 | 明 | 1368年 | 楷書 | |
| 6 | 不明 | | —— | —— | |

【SK-26】

丘陵尾根の南側の平坦部で検出された。尾根中央よりやや西にあり、SK-23の北約1mに位置する。尾根幅はやや狭くなる。平面形は上面で不整な隅丸長方形を呈し、長軸109cm、短軸67cm、深さは最深部で89cmを測る。底面は平坦で不整な隅丸長方形を呈し、長軸93cm、短軸60cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位はN-12°-Eをとる。残存状態は良好である。

遺物は検出されなかった。土層でも木棺等の痕跡は確認出来なかったが、掘り方が他の土葬墓と類似しており、土葬墓として使われたと考えられる。

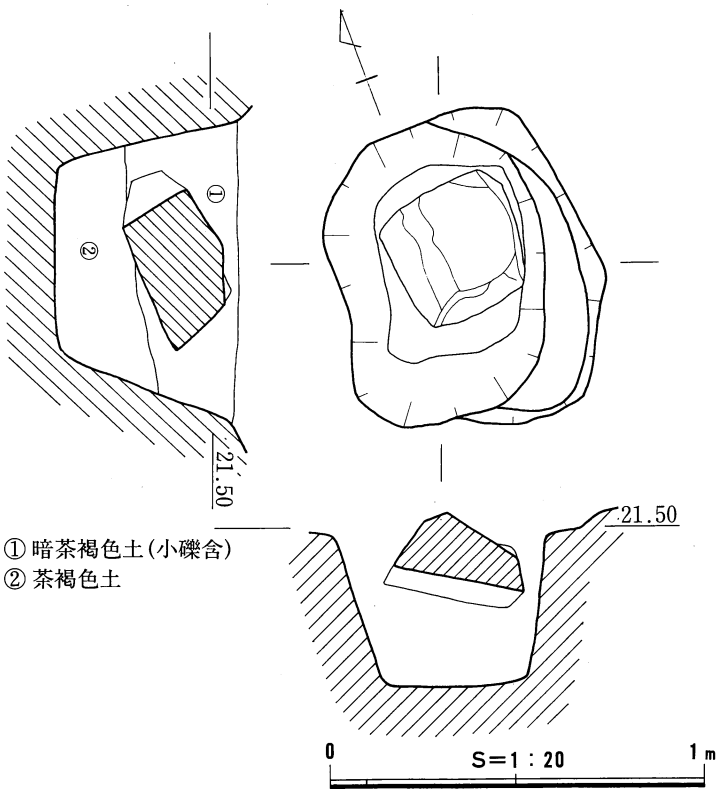



挿図167　SK-26 実測図

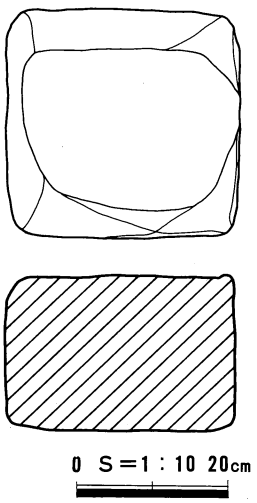
【SK-28】

丘陵尾根の南側の平坦部で検出された。尾根中央よりやや西にあり、SK-26の北約1mに位置する。平面形は上面で不整な隅丸長方形を呈し、長軸81cm、短軸71cm、深さは最深部で46cmを測る。東壁側が浅い二段掘りになっている。底面は平坦でやや不整な隅丸長方形を呈し、長軸50cm、短軸38cmを測る。壁面はやや外傾して急に立ち上がる。規模は他の土葬墓と比較して小さい。長軸方位はN-21°-Eをとる。

遺物は土壙の掘り方上層の埋土中で五輪の地輪が検出された。検出状況から、土壙を埋めた後に置かれたものと考えられる。その他の遺物は検出されなかった。

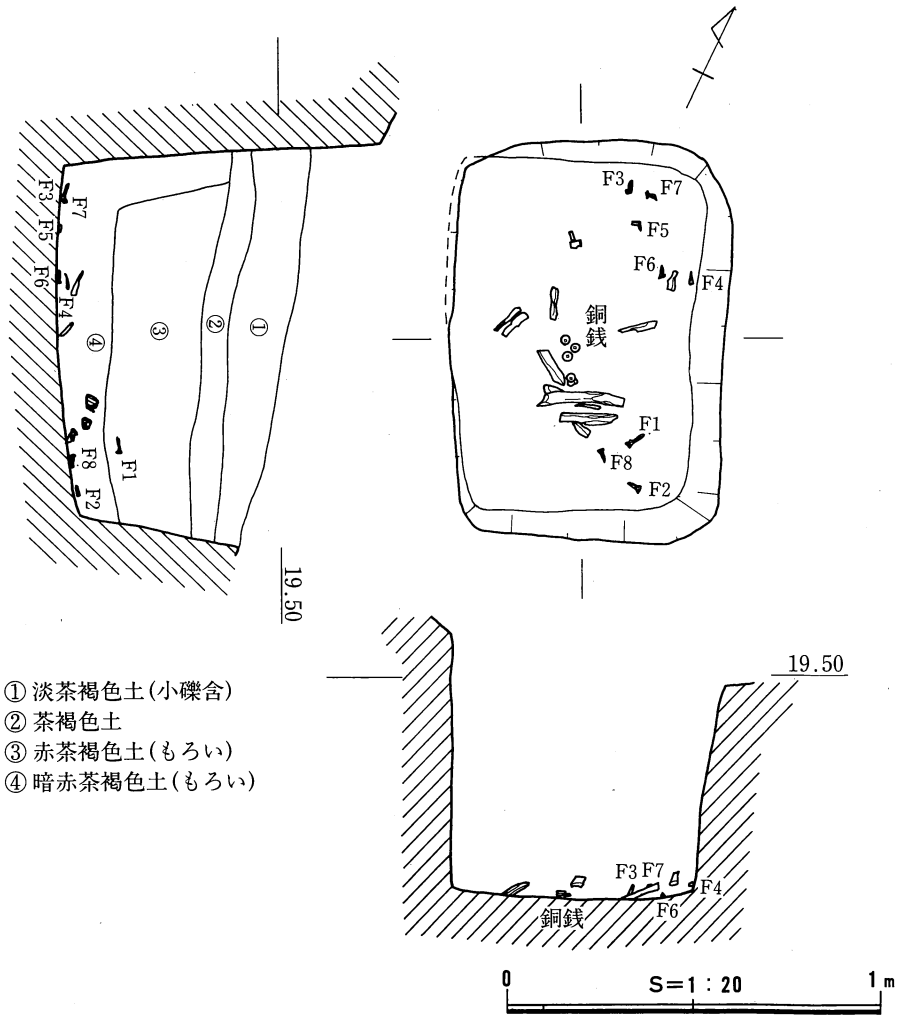



挿図168　SK-28 実測図




挿図169　SK-28 出土五輪(S=1/10)

【SK-32】

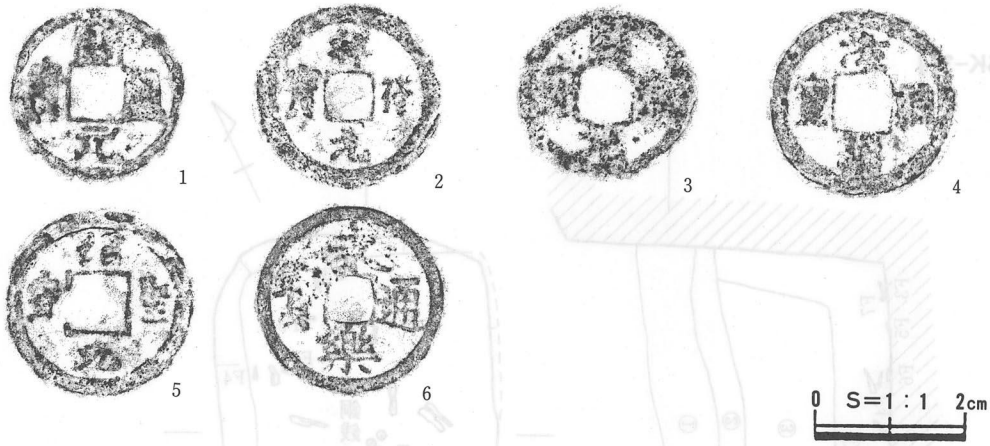



**挿図170　SK-32 実測図**

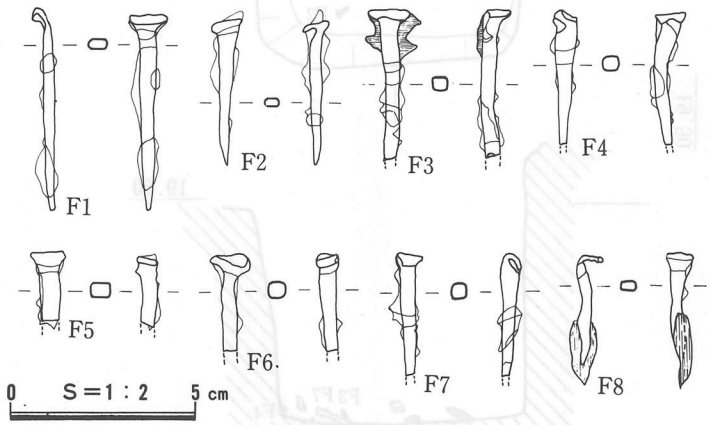
丘陵南側の尾根の東側斜面で検出された。尾根に近く傾斜はゆるやかである。他の土壙との間隔は広い。平面形は上面で隅丸長方形を呈し、長軸106cm、短軸73cm、深さは最深部で84cmを測る。底面は平坦で隅丸長方形を呈し、長軸93cm、短軸64cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位はN-26°-Wをとる。南壁側が少し消失していると考えられるが残存状態はほぼ良好である。

遺物は鉄釘、銅銭、人骨が検出された。鉄釘は底面近くで計8本検出された。北壁、南壁近くで多く検出されており、木棺は掘り方に沿った長方形のものと考えられる。銅銭は中央底面で散在した状態で6枚検出された。人骨は1体分で底面の北側で頭骨片、中央よりやや南側で短軸方向に沿って下肢骨が重なるように検出されている。

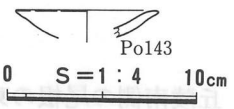
土層では③層が木棺痕跡を残すものと考えられる。




挿図171-① SK-32 出土銅銭




挿図171-② SK-32 出土鉄釘(S=1/2)




挿図172 SK=32 出土土器(S=1/4)

表19 SK-32 出土銅銭一覧表

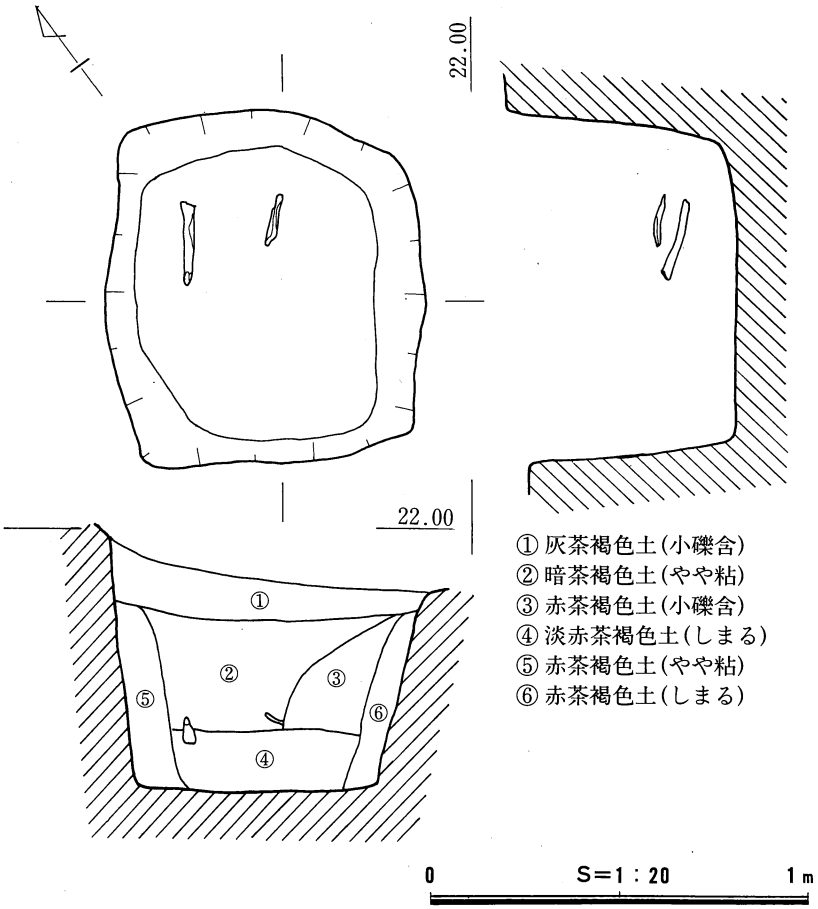
| No. | 銅銭名 | 国名 | 初鋳年(西暦) | 書体 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 開元通宝 | 唐 | 621年 | 楷書 | |
| 2 | 祥符元宝 | 北宋 | 1008年 | 楷書 | |
| 3 | 天禧通宝 | 北宋 | 1017年 | 篆書 | |
| 4 | 元祐通宝 | 北宋 | 1086年 | 篆書 | |
| 5 | 紹聖元宝 | 北宋 | 1094年 | 楷書 | |

【SK-33】

丘陵の尾根の中央寄りの平坦部で検出された。SK-38の北東約0.5ｍに位置する。平面形は上面で方形に近い不整隅丸長方形を呈し、長軸93cm、短軸84cm、深さは最深部で56cmを測る。底面は平坦で方形に近い不整な隅丸長方形を呈し、長軸76cm、短軸63cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位はN-36°-Eをとる。やや掘り方が雑だが残存状態はほぼ良好である。

遺物は地面の北側で下肢骨が2本長軸方向に沿うように並んで検出された。いずれも底面より浮いた状態で検出された。頭骨は検出されなかった。その他の遺物は検出されなかった。

土層をみると、②、③、④層が木棺の痕跡を残すものと考えられ、鉄釘は検出されていないが木棺に埋葬されたものと推定される。

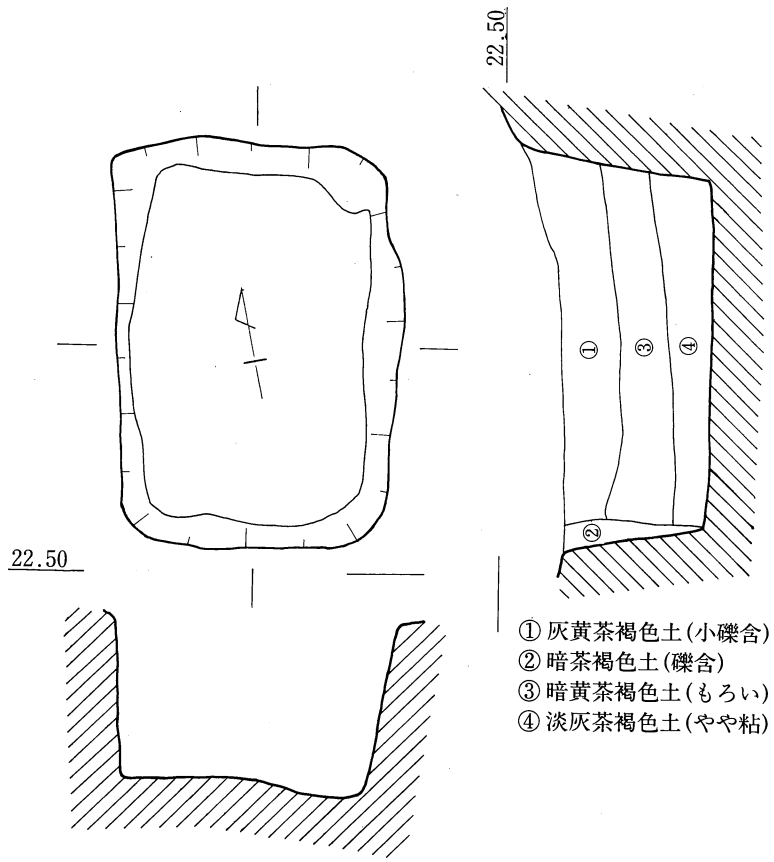



挿図173　SK-33 実測図

【SK-34】

丘陵尾根の中央付近の平坦部で検出された。0.5m北にSK-35が並ぶように位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸107cm、短軸75cm、深さは最深部で50cmを測る。底面は東側でやや不整ながらほぼ平坦で、やや不整な隅丸長方形を呈す。規模は長軸92cm、短軸62cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位はN-11°-Eをとる。

遺物は検出されなかった。土層でも明瞭な木棺の痕跡は確認できなかったが、他の土葬墓と比較して規模、掘り方が類似しており、土葬墓として使われたと考えられる。



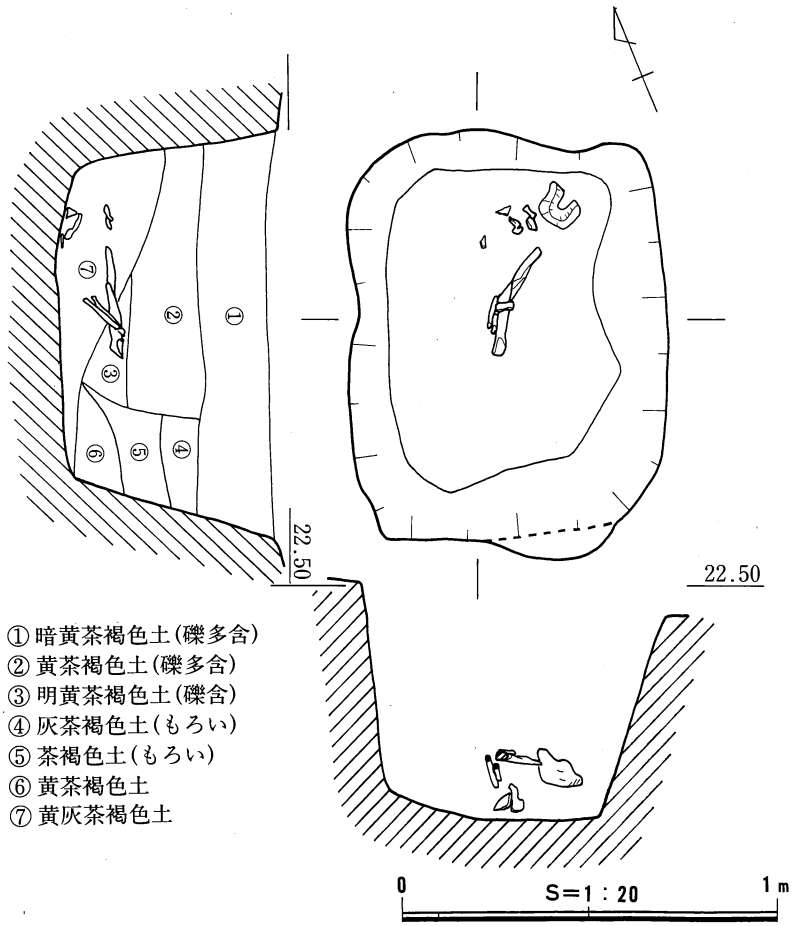

挿図174　SK-34 実測図

【SK-35】

丘陵尾根の中央付近の平坦部で検出された。0.5m南にSK-34が並ぶように位置する。平面形はやや不整な隅丸長方形を呈し、長軸108cm、短軸81cm、深さは最深部で55cmを測る。底面はやや東側に傾斜するがほぼ平坦である。平面形はやや東側が不整だが全体的には隅丸長方形を呈す。規模は長軸83cm、短軸56cmを測る。壁面はやや外傾しながら急に立ち上がる。長軸方位はN-17°-Eをとる。

遺物は人骨が1体分検出された。底面の北東隅近くで頭骨が、中央よりやや北側で下肢骨と上腕骨が重なるように検出された。いずれも底面よりやや浮いた状態で検出されている。その他の遺物は検出されなかった。

土層をみると明瞭な木棺の痕跡は確認できなかったが、②層以下の層序が乱れている。

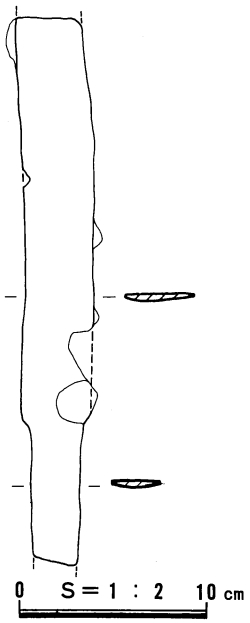



挿図175　SK-35 実測図

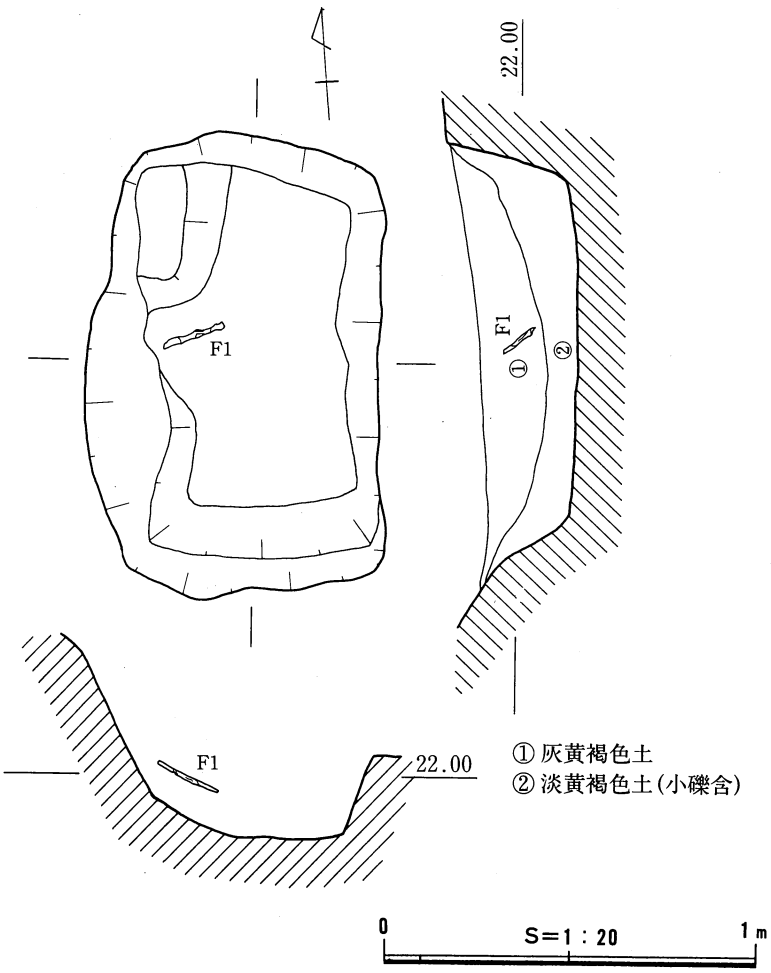
【SK-37】

丘陵の中央付近で、尾根よりやや下がったゆるやかな東斜面で検出された。南西約１ｍにSK-69（火葬墓）があるが、他の土壙とは少し離れた位置にある。平面形は上面でやや不整な隅丸長方形を呈し、長軸120cm、短軸76cm、深さは最深部で36cmを測る。底面は西側が不整だが全体的には長方形を呈する。規模は長軸89cm、短軸49cmを測る。西側底面がゆるやかに傾斜しており、全体的に雑な造りである。長軸方位はN-5°-Eをとる。

遺物は中央西壁寄りの地点で底面より浮いた状態で小刀と考えられる鉄製品が検出された。他の遺物は検出されなかった。

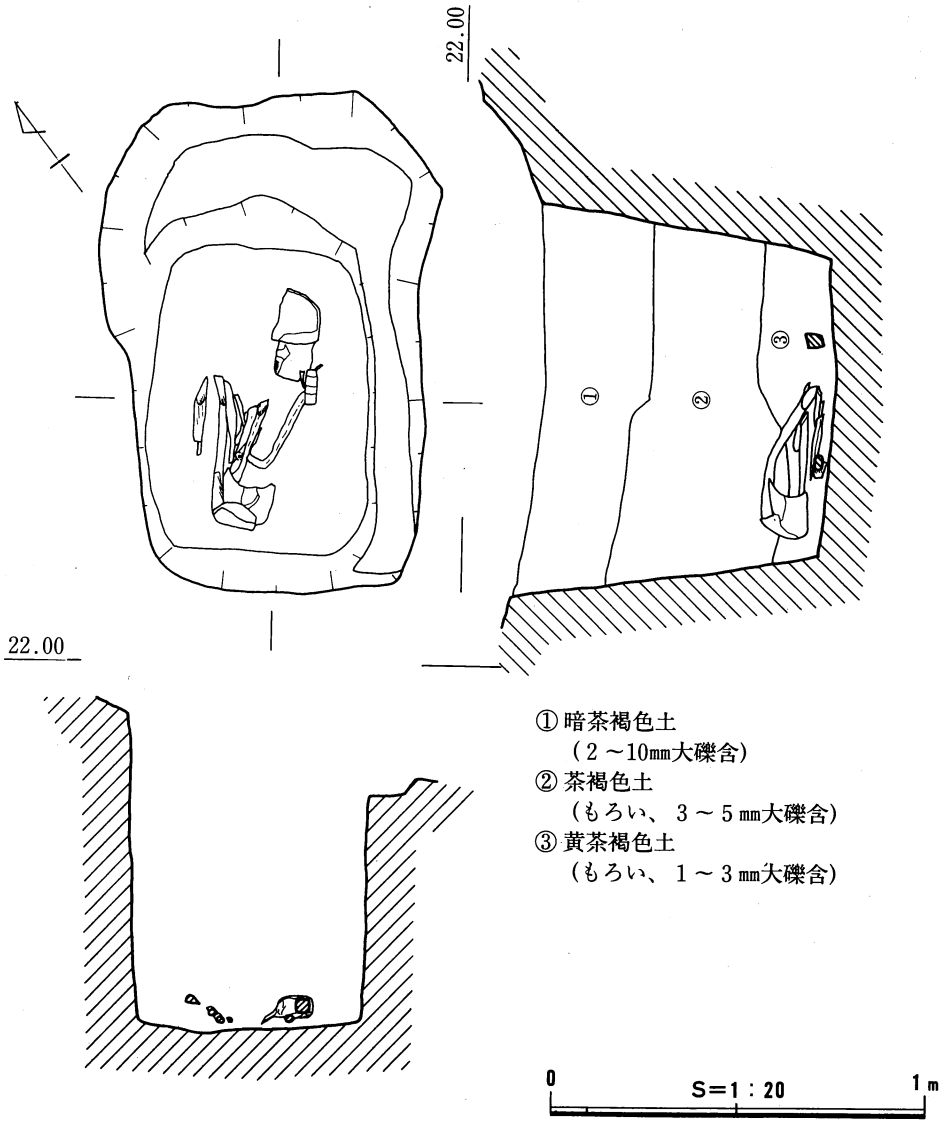



挿図176　SK-37 出土鉄製品（S＝1/2）




挿図177　SK-37 実測図

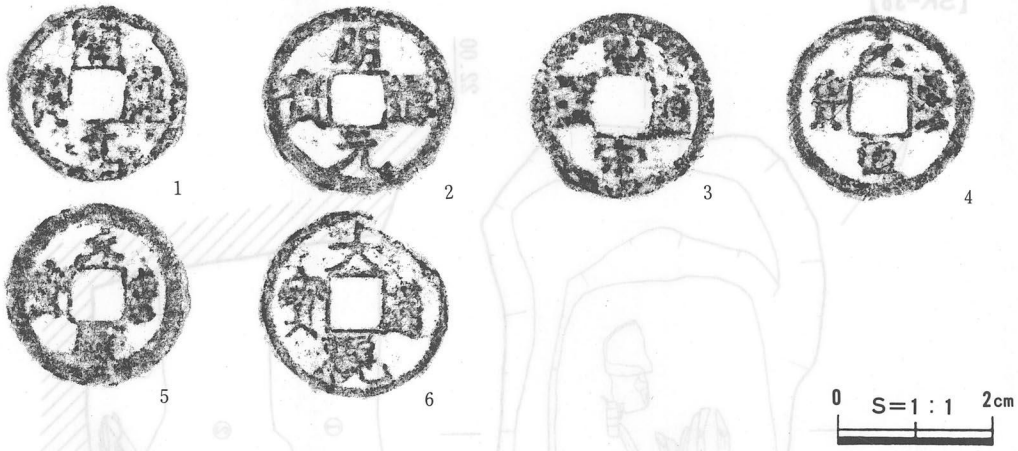
【SK-38】




挿図178　SK-38 実測図

丘陵尾根の中央寄りの平坦部で検出された。SK-33の南西約0.5mに位置する。平面形は上面で不整な隅丸長方形を呈する。規模は長軸130cm、短軸76cm、深さは最深部で80cmを測る。北側と東側が浅い2段掘りになっている。底面は平坦で隅丸長方形を呈する。規模は長軸80cm、短軸57cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位はN-38°-Eをとる。残存状態は良い。遺物は銅銭と人骨1体分が検出された。人骨は底面の北側で頭骨、南側で骨盤、中央付近で長軸方向に沿って下肢骨、上腕骨が重なるようにして検出された。人骨の残りは良い。銅銭は6枚で下肢骨、上腕骨の下から検出された。

土層では明瞭な木棺の痕跡は確認できなかった。




挿図179　SK-38 出土銅銭

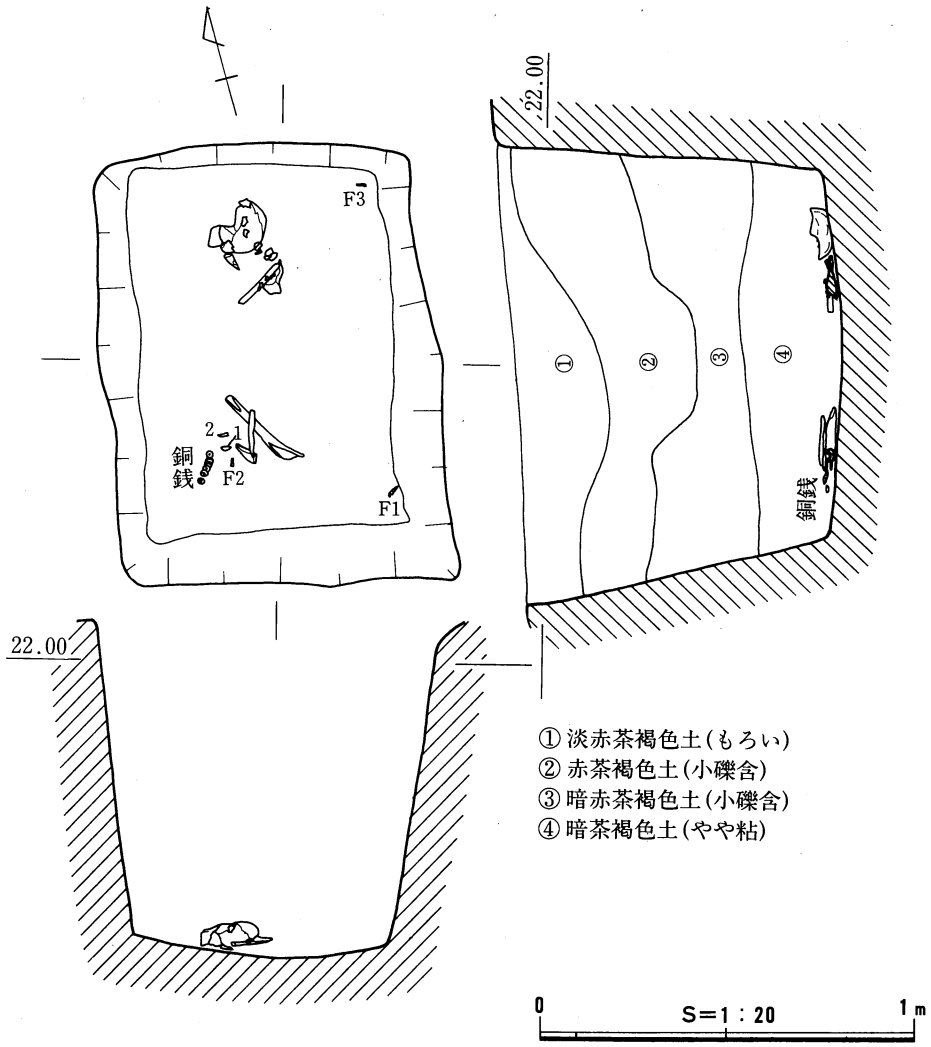
表20　SK-38 出土銅銭一覧表

| No. | 銅銭名 | 国名 | 初鋳年(西暦) | 書体 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 開元通宝 | 唐 | 621年 | 楷書 | |
| 2 | 明道元宝 | 北宋 | 1032年 | 楷書 | |
| 3 | 皇宋通宝 | 北宋 | 1039年 | 篆書 | |
| 4 | 元豊通宝 | 北宋 | 1078年 | 楷書 | |
| 5 | 元豊通宝 | 北宋 | 1078年 | 楷書 | |
| 6 | 大観通宝 | 北宋 | 1107年 | 楷書 | |

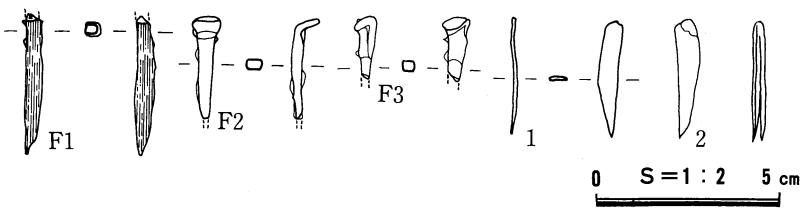
【SK-39】

丘陵尾根の中央よりの平坦部で検出された。SK-33の西側約1mに位置する。尾根中央よりやや西にある。平面形はやや不整な長方形を呈し、長軸117cm、短軸90cm深さは最深部で84cmを測る。底面は平坦で長方形を呈し、長軸97cm、短軸66cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位はN-16°-Eをとる。残存状態は良い。

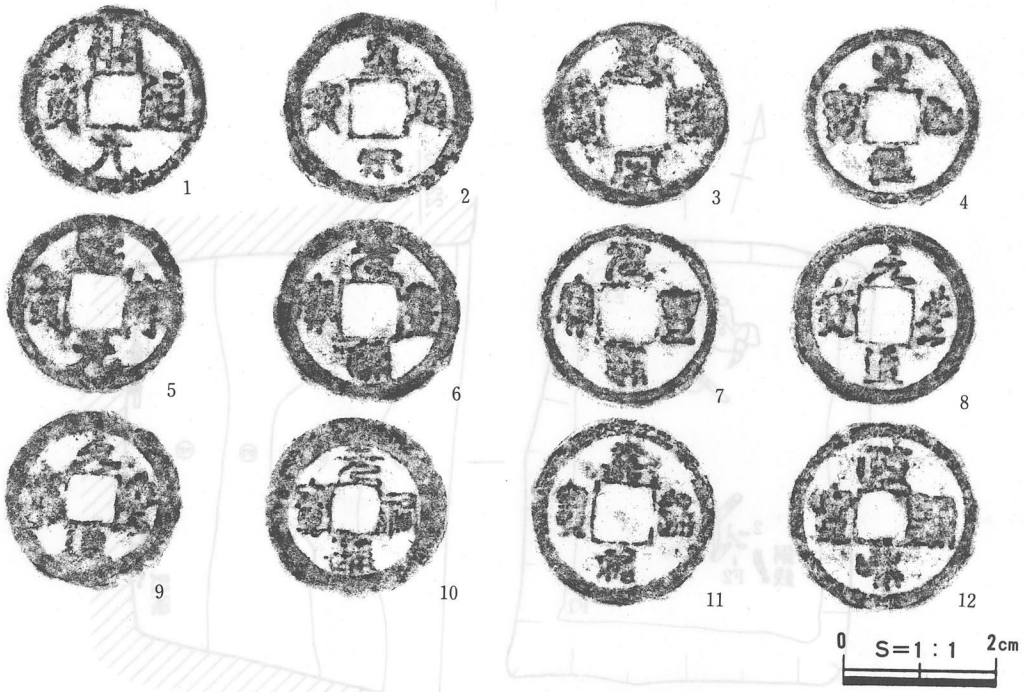
遺物は銅銭、鉄釘、竹製品の一部、人骨が検出された。人骨は底面の北側に頭骨、南側に下肢骨が検出された。下肢骨の西側に櫛の歯の部分と考えられる竹製品の破片が2片と鉄釘が1本、重ねてあったものが崩れた状態で銅銭が12枚検出された。また鉄釘は東壁の北と南隅でそれぞれ1本ずつ検出されており、土層では明瞭な木棺の痕跡は確認できなかったが、掘り方に沿った長方形の木棺が安置されたと考えられる。




挿図180　SK-39 実測図




挿図181　SK-39 出土鉄釘・竹製品(S=1/2)




挿図182　SK-39 出土銅銭

表21　SK-39 出土銅銭一覧表

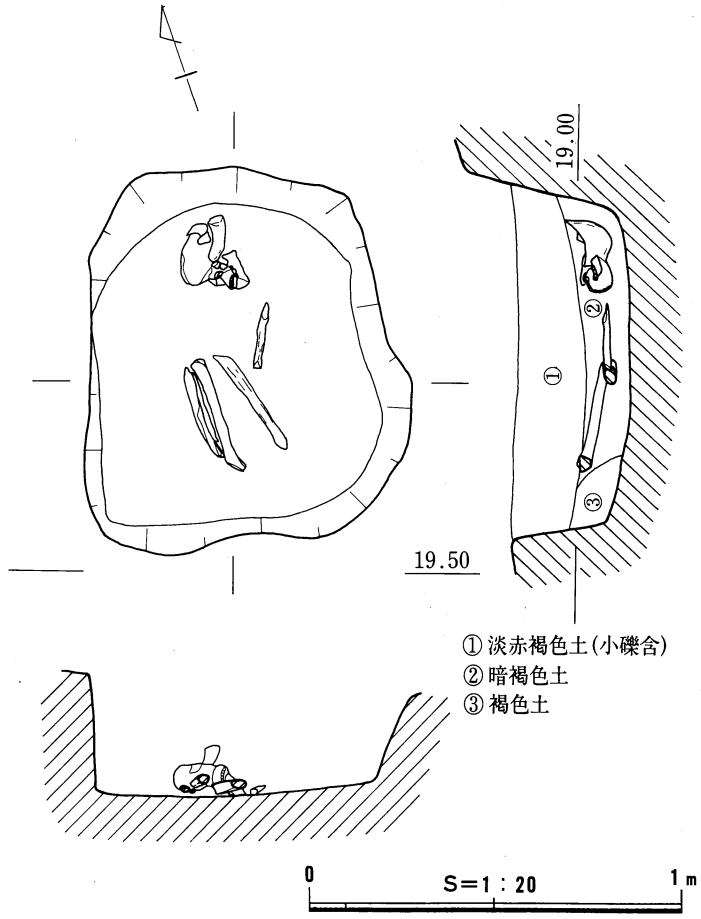
| No. | 銅銭名 | 国名 | 初鋳年(西暦) | 書体 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 開元通宝 | 唐 | 621年 | 楷書 | |
| 2 | 皇宋通宝 | 北宋 | 1039年 | 楷書 | |
| 3 | 皇宋通宝 | 北宋 | 1039年 | 篆書 | |
| 4 | 至和元宝 | 北宋 | 1054年 | 篆書 | |
| 5 | 熙寧元宝 | 北宋 | 1068年 | 楷書 | |
| 6 | 元豊通宝 | 北宋 | 1078年 | 篆書 | |
| 7 | 元豊通宝 | 北宋 | 1078年 | 篆書 | |
| 8 | 元豊通宝 | 北宋 | 1078年 | 楷書 | |
| 9 | 元豊通宝 | 北宋 | 1078年 | 楷書 | |
| 10 | 元祐通宝 | 北宋 | 1086年 | 篆書 | |
| 11 | 元祐通宝 | 北宋 | 1086年 | 篆書 | |
| 12 | 政和元宝 | 北宋 | 1111年 | 篆書 | |

【SK-41】

丘陵尾根の南端の平坦部で検出された。SK-42の北側約1mに位置する。他の土壙との間隔は比較的広い。平面形は上面で不整な長方形を呈し、長軸99cm、短軸85cm、深さは最深部で39cmを測る。底面はほぼ平坦で、長軸83cm、短軸73cmを測る。壁面はやや外傾しながら急に立ち上がる。長軸方位はN-19°-Eをとる。

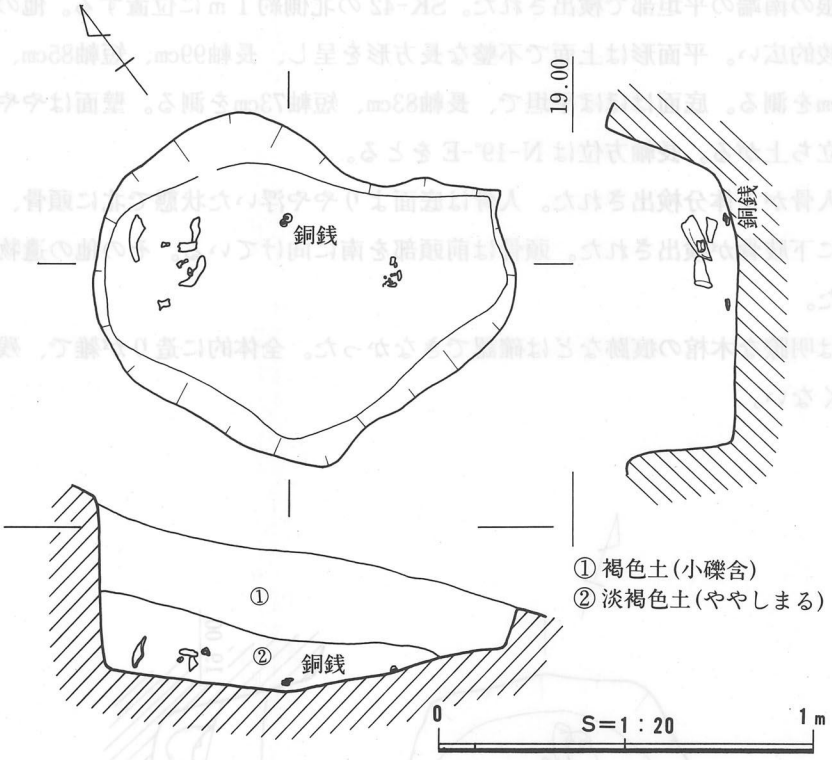
遺物は人骨が1体分検出された。人骨は底面よりやや浮いた状態で北に頭骨、中央よりやや南側に下肢骨が検出された。頭骨は前頭部を南に向けている。その他の遺物は検出されなかった。

土層では明瞭な木棺の痕跡などは確認できなかった。全体的に造りが雑で、残存状態もあまり良くない。

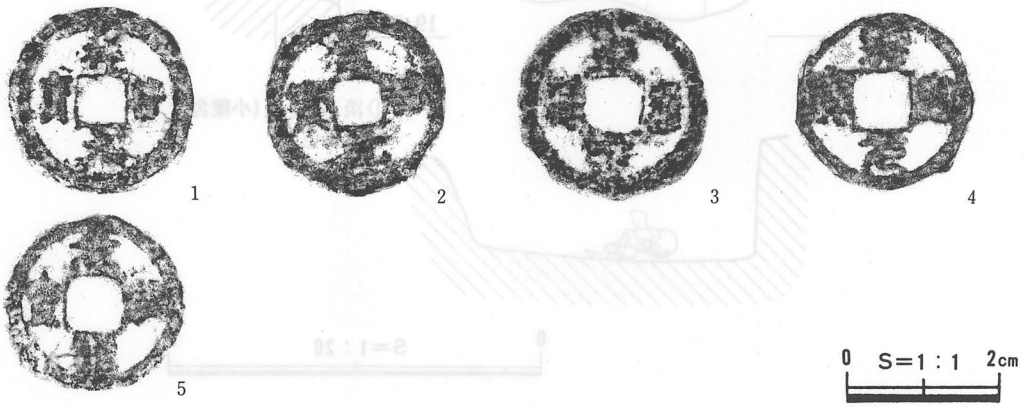



**挿図183　SK-41実測図**

【SK-42】




挿図184　SK-42 実測図




挿図185　SK-42 出土銅銭

丘陵尾根の南端の平坦部で検出された。北約１ｍにSK-41がある。これより南側から斜面が急になる。平面形は不定形だが長方形のプランは意識していると考えられる。規模は長軸で111cm、短軸90cm、深さは最深部で45cmを測る。底面は長方形プランは意識していると考えられるが不定形である。規模は長軸105cm、短軸72cmを測る。北側は平坦だが南側はゆるやかに傾斜している。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。全体的に崩落が激しく、残存状態は悪い。

遺物は銅銭と人骨が検出された。銅銭は５枚で底面の中央よりやや東側で重なった状態で検出された。人骨は底面の北側で頭骨、南側で下肢骨片が検出されている。

土層では木棺等の痕跡は確認できなかった。

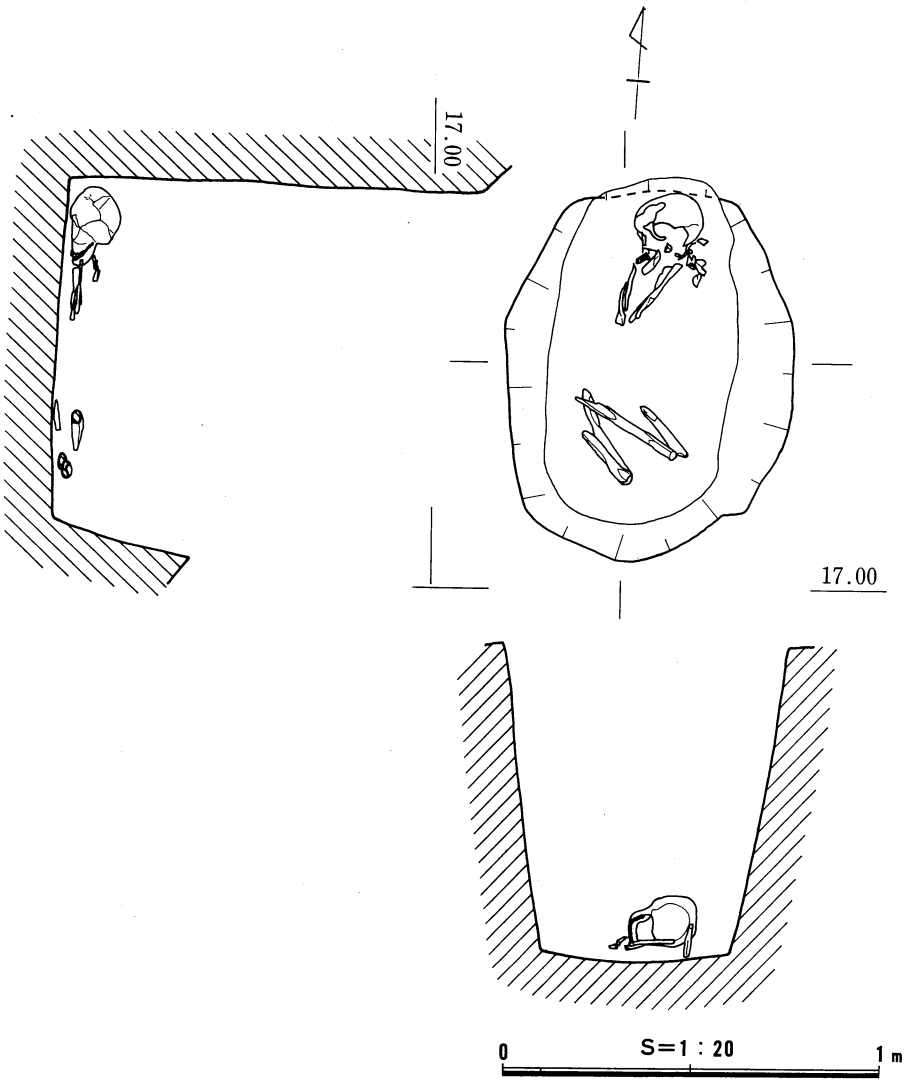
**表22　SK-42出土銅銭一覧表**

| No. | 銅銭名 | 国名 | 初鋳年(西暦) | 書体 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 祥符元宝 | 北宋 | １００８年 | 楷書 | |
| 2 | 景祐元宝 | 北宋 | １０３４年 | 楷書 | |
| 3 | ○元通宝 | | —— | 篆書 | |
| 4 | ○○元宝 | | —— | 篆書 | |
| 5 | ○○通宝 | | —— | 楷書 | |

**【SK-43】**

丘陵尾根の南端からSD-01に向かう約40°の急斜面で検出された。他の土壙と隔絶した位置にある。平面形は上面でやや不整な長楕円形を呈する。規模は長軸で98cm、短軸76cm、深さは最深部で109cmを測る。底面は平坦で長楕円形を呈し、長軸89cm、短軸49cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位はN-３°-Eで、ほぼ真北を向く。南壁側がやや崩落していると考えられるが、残存状態はほぼ良好である。

遺物は人骨１体分が検出された。底面の北側で頭骨、上腕骨が、南側で下肢骨が検出された。他の遺物は検出されなかった。



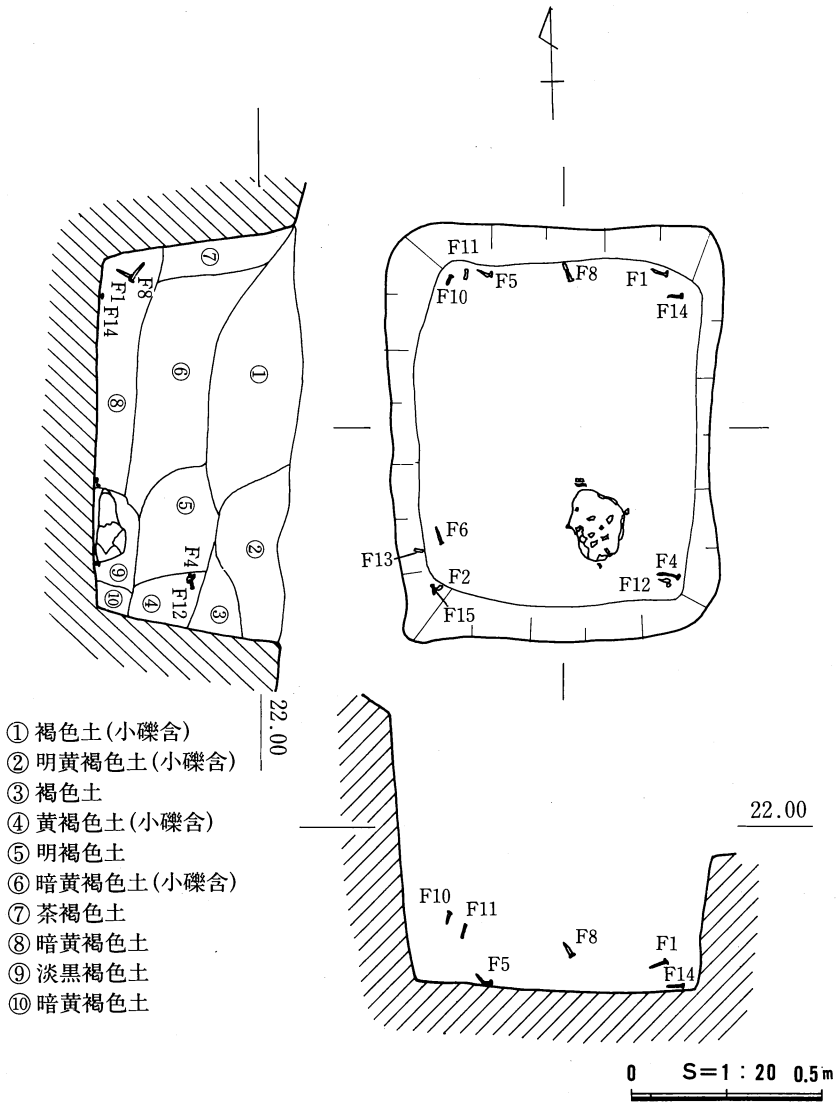

**挿図186　SK-43 実測図**

**【SK-48】**

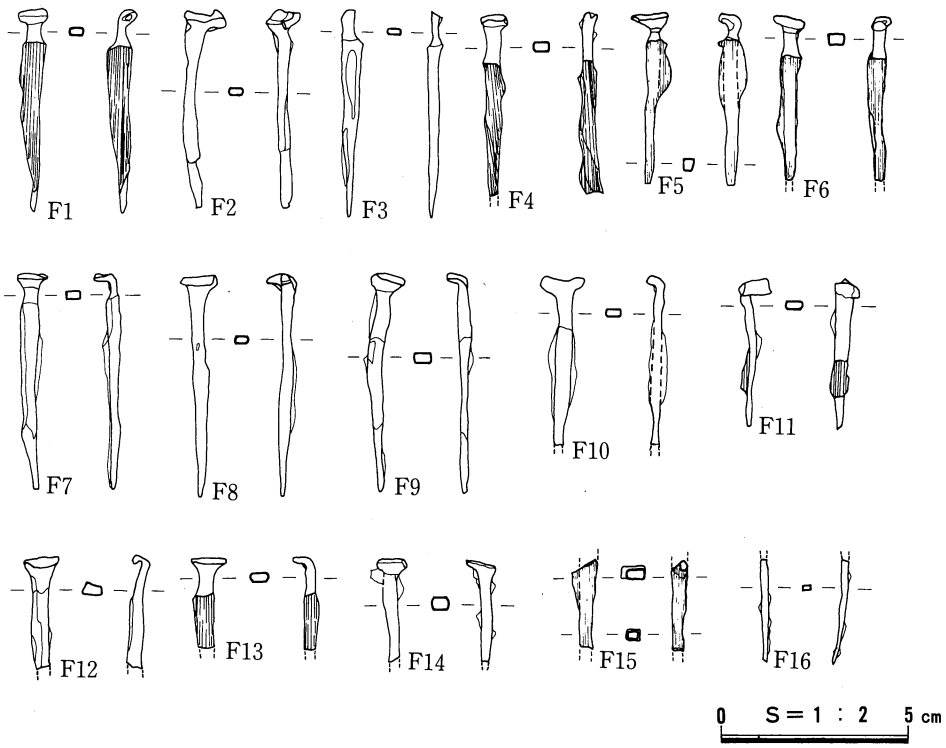
丘陵の中央付近で検出された。尾根よりやや東側のゆるやかな斜面で、2.5m南にSK-67（火葬墓）が位置する。平面形は上面で隅丸長方形を呈し、長軸110cm、短軸85cm、深さは最深部で71cmを測る。底面は平坦で隅丸長方形を呈し、長軸92cm、短軸74cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位はN-2°-Eでほぼ真北を向く。

遺物は鉄釘、人骨が検出された。鉄釘は計16本分検出された。底面の四隅、壁際に集中しており、底面に沿った長方形の木棺が安置されたと考えられる。また、土層からも木棺の存在がうかがわれる。人骨は底面の南側で頭骨が検出された。下肢骨は検出されなかった。

東壁側が一部崩落していると考えられるが、残存状態はほぼ良好である。




**挿図187　SK-48実測図**



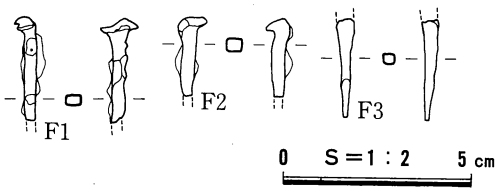

**挿図188　SK-48 出土鉄釘（S＝1/2）**

**【SK-50】**

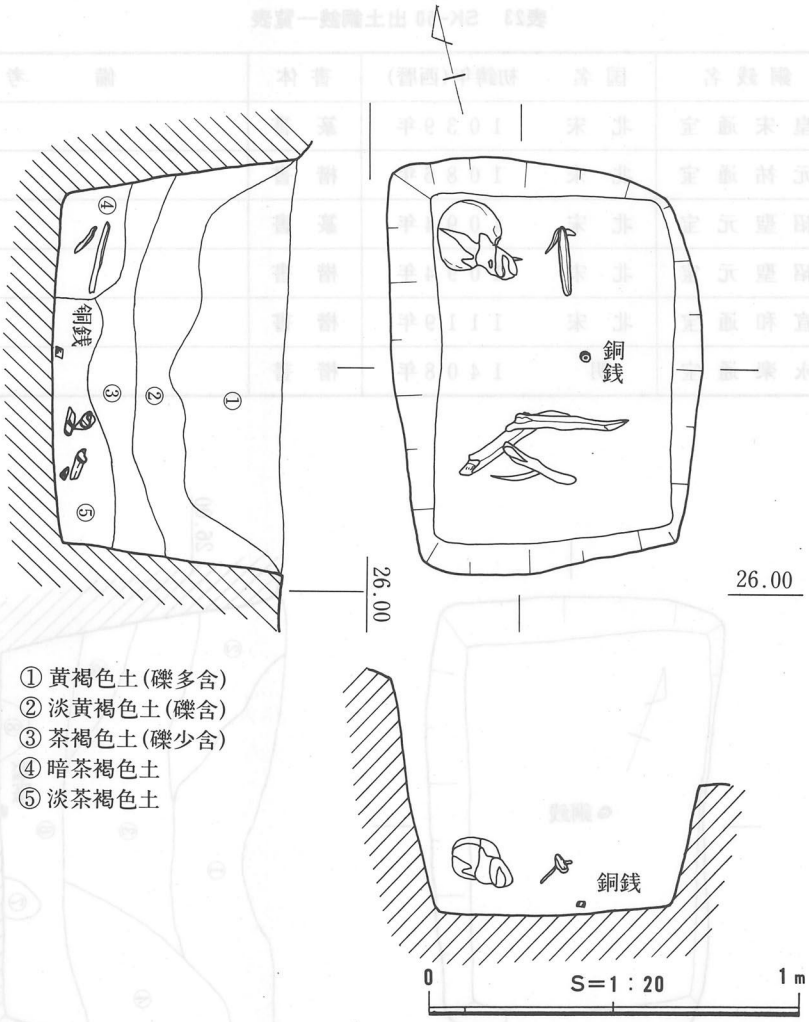
丘陵の北側の尾根で検出された。尾根の東端のゆるやかな斜面で検出され2ｍ北にSK-51が位置する。平面形はやや不整な隅丸長方形を呈し、長軸110cm、短軸82cm、深さは最深部で62cmを測る。底面は平坦でやや不整な長方形を呈し、長軸92cm、短軸61cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方向はN-12°-Eをとる。

遺物は鉄釘、銅銭、人骨が検出された。鉄釘は原位置の確定はできないが掘り下げ中に3本分検出された。銅銭は底面中央付近で6枚重なって検出された。人骨は底面の北西隅で頭骨が、南側で下肢骨が重なるような状態で検出された。人骨は全て底面から浮いた状態であった。

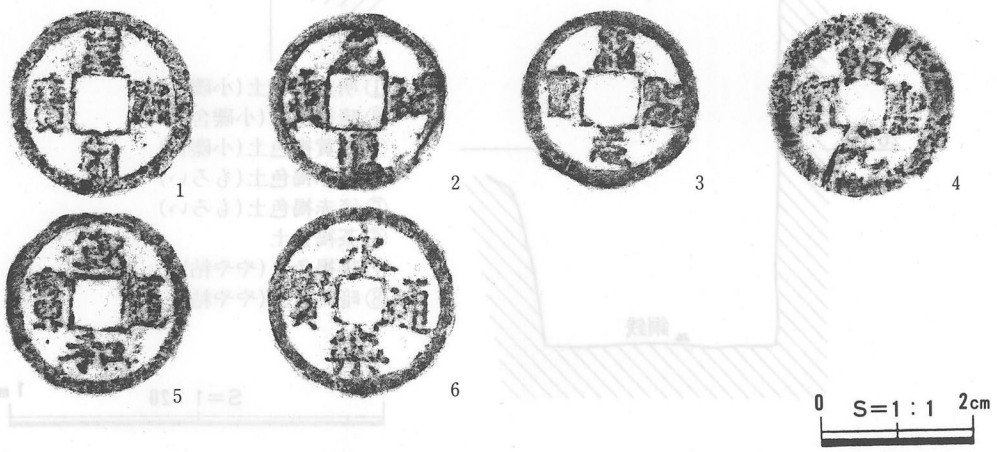
土層では明瞭な木棺の痕跡は確認できなかったが、鉄釘の存在より木棺を安置したものと考えられる。




**挿図189　SK-50 出土鉄釘（S＝1/2）**




挿図190　SK-50 実測図

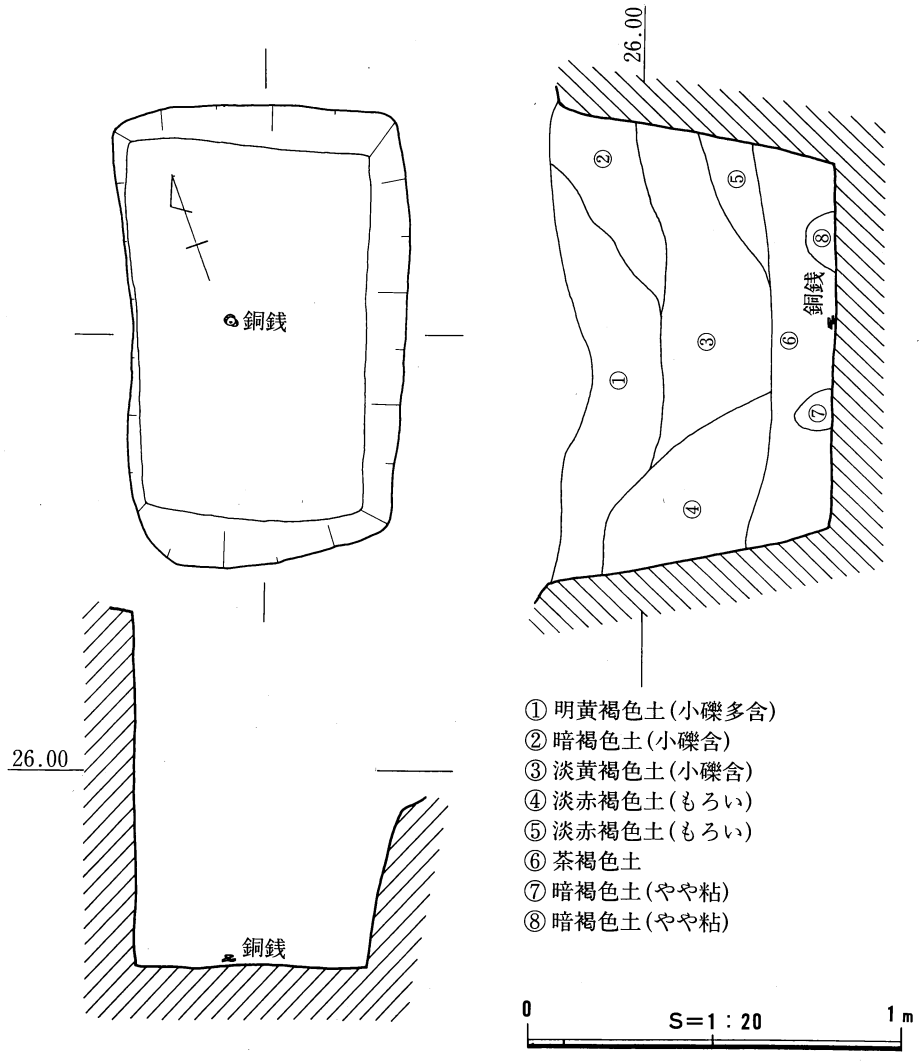



挿図191　SK-50 出土銅銭

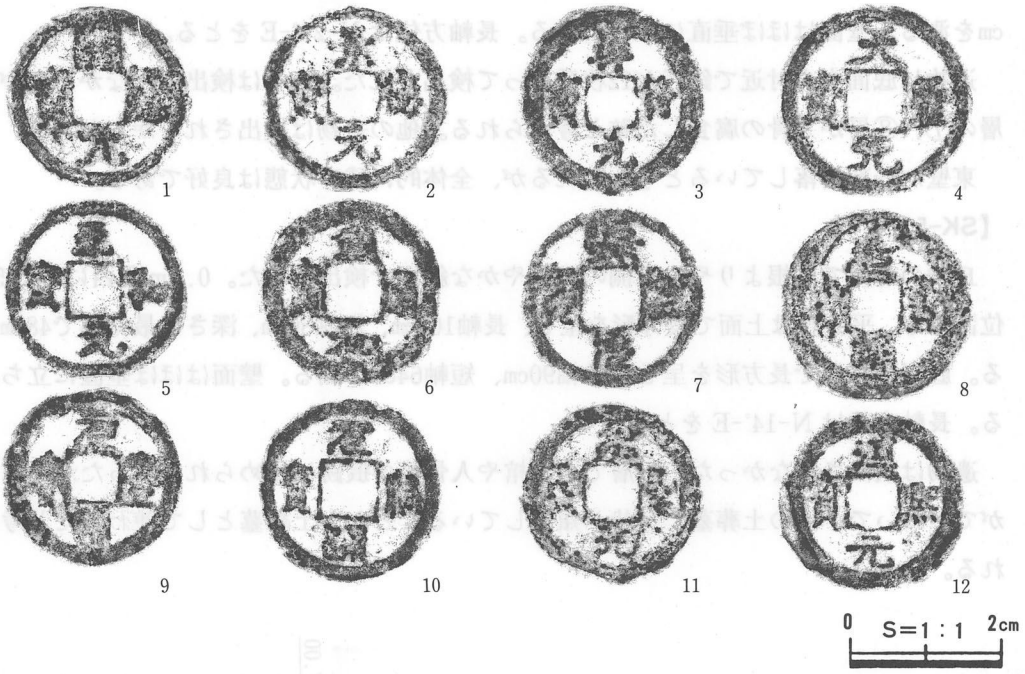
表23　SK-50 出土銅銭一覧表

| No. | 銅銭名 | 国名 | 初鋳年(西暦) | 書体 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 皇宋通宝 | 北宋 | 1039年 | 篆書 | |
| 2 | 元祐通宝 | 北宋 | 1086年 | 楷書 | |
| 3 | 紹聖元宝 | 北宋 | 1094年 | 篆書 | |
| 4 | 紹聖元宝 | 北宋 | 1094年 | 楷書 | |
| 5 | 宣和通宝 | 北宋 | 1119年 | 楷書 | |
| 6 | 永楽通宝 | 明 | 1408年 | 楷書 | |

【SK-51】




挿図192　SK-51 実測図




挿図193　SK-51 出土銅銭

表24　SK-51 出土銅銭一覧表

| No. | 銅銭名 | 国名 | 初鋳年(西暦) | 書体 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 開元通宝 | 唐 | 621年 | 楷書 | |
| 2 | 景徳元宝 | 北宋 | 1004年 | 楷書 | |
| 3 | 祥符元宝 | 北宋 | 1008年 | 楷書 | |
| 4 | 天聖元宝 | 北宋 | 1023年 | 楷書 | |
| 5 | 至和元宝 | 北宋 | 1054年 | 楷書 | |
| 6 | 至和通宝 | 北宋 | 1054年 | 楷書 | |
| 7 | 熙寧元宝 | 北宋 | 1068年 | 篆書 | |
| 8 | 元宝通宝 | 北宋 | 1075年 | 篆書 | |
| 9 | 元宝通宝 | 北宋 | 1075年 | 篆書 | |
| 10 | 元祐通宝 | 北宋 | 1086年 | 篆書 | |
| 11 | 紹聖元宝 | 北宋 | 1094年 | 楷書 | |
| 12 | 淳熙元宝 | 南宋 | 1174年 | 楷書 | |

丘陵の北側の尾根で検出された。尾根の東端のゆるやかな斜面で検出され、約１ｍ南にSK-50が位置する。平面形は上面でやや不整な長方形を呈し、長軸121cm、短軸72cm、深さは最深部で94cmを測る。底面は平坦でやや不整な長方形を呈す。規模は長軸98cm、短軸60

cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位はN-20°-Eをとる。

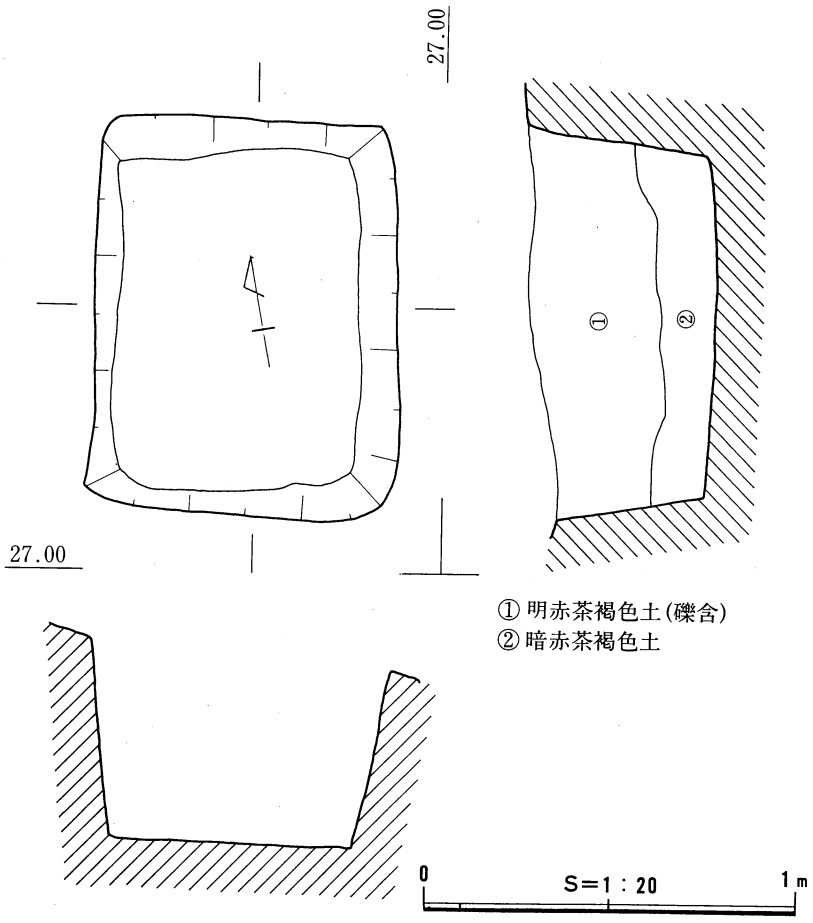
遺物は底面中央付近で銅銭が12枚重なって検出された。人骨は検出されなかったが、土層の⑦、⑧層が人骨の腐食した跡と考えられる。他の遺物は検出されなかった。

東壁が一部崩落していると考えられるが、全体的に残存状態は良好である。

**【SK-52】**

丘陵の北側で尾根よりやや東側のゆるやかな斜面で検出された。0.5m北西にSK-53が位置する。平面形は上面で長方形を呈し、長軸104cm、短軸80cm、深さは最深部で48cmを測る。底面は平坦で長方形を呈し、長軸90cm、短軸64cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位はN-14°-Eをとる。

遺物は検出されなかった。土層でも木棺や人骨等の痕跡は認められなかったが、掘り方がていねいで、他の土葬墓と形状が類似していることから土葬墓として使われたと考えられる。

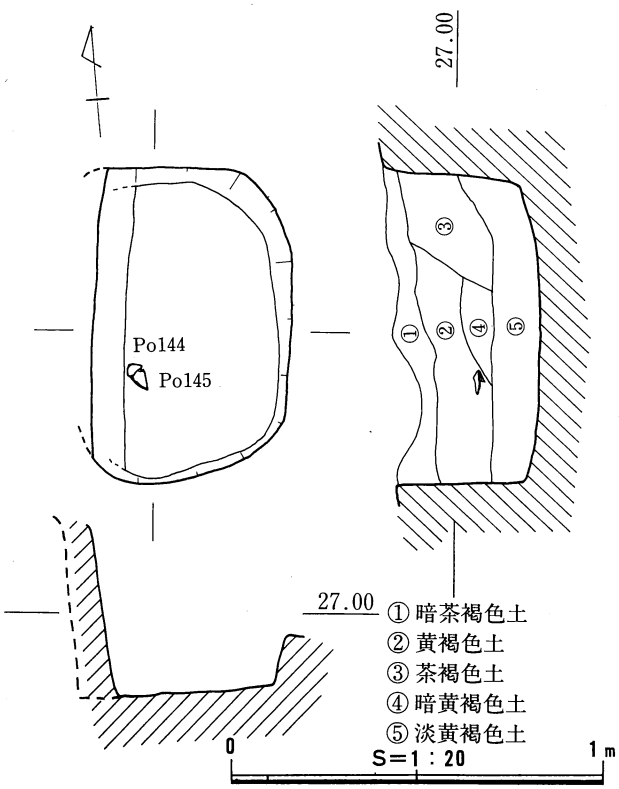



**挿図194　SK-52 実測図**

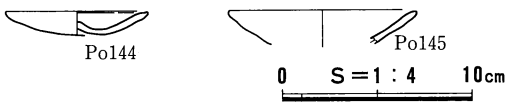
【SK-53】

丘陵の北側で尾根よりやや東側のゆるやかな斜面で検出された。0.5m南東にSK-52が位置する。西壁側の一部が調査区外のため全容は明らかでないが、平面形は上面で隅丸長方形を呈すると推定される。規模は長軸で84cm、短軸と深さはそれぞれ60cm、45cm内外と推定される。底面は平坦で隅丸長方形を呈すると推定される。規模は長軸で78cm、短軸は推定で50cm内外を測ると考えられる。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方向はN-5°-Eをとる。

遺物は底面から浮いた状態で土師質皿(Po144)が検出された。その他掘り下げ中に土師質皿(Po145)が検出された。土層で明瞭な木棺、人骨等の痕跡は確認できなかった。




挿図195　SK-53 実測図

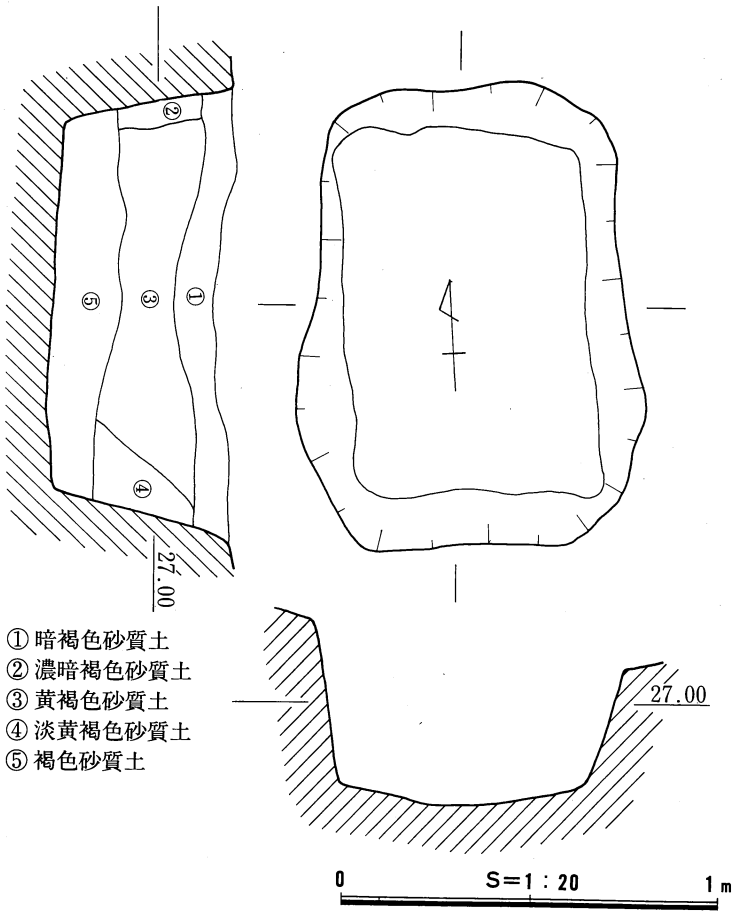



挿図196　SK-53 出土土器(S=1/4)

【SK-55】

丘陵の北側で尾根よりやや東側のゆるやかな斜面で検出された。1.5m北東にSK-56が位置する。平面形は上面でやや不整な隅丸長方形を呈し、長軸120cm、短軸85cm、深さは最深部で47cmを測る。底面は長方形を呈し、長軸95cm、短軸64cmを測る。中央部に向けてやや傾斜するがほぼ平坦面をなす。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位はN-5°-Eをとる。

遺物は検出されなかった。土層の②・③・④層が木棺の存在をうかがわせるが確定できない。遺物はないが他の土葬墓と形状が類似していることから、土葬墓として使われたと考えられる。

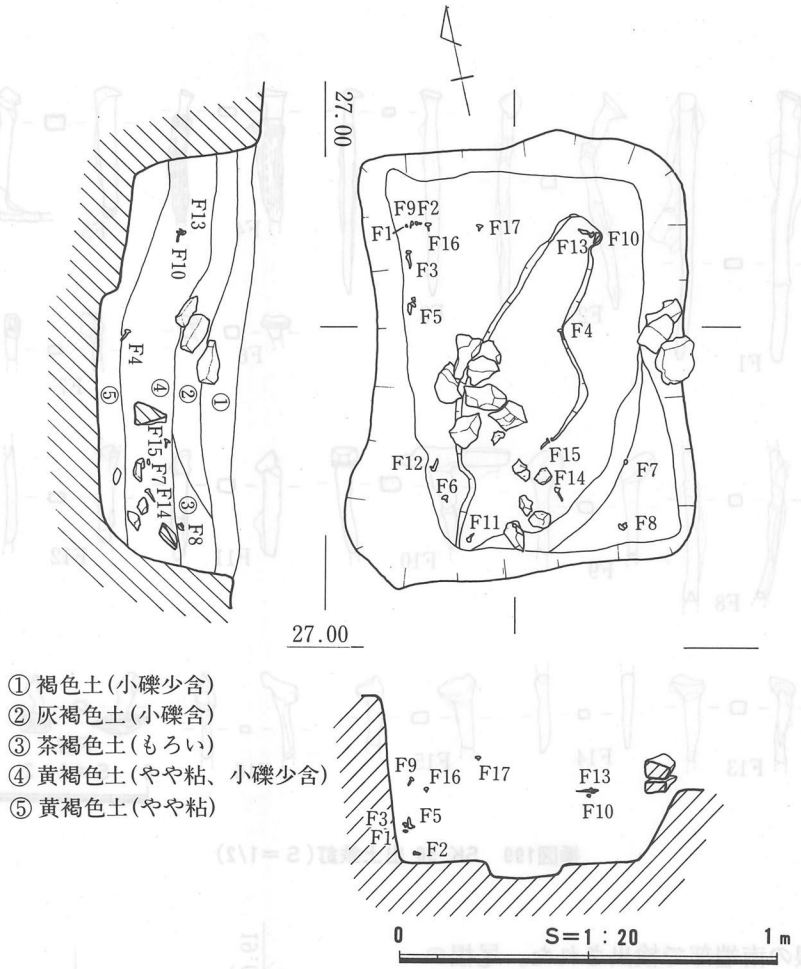



**挿図197　SK-55 実測図**

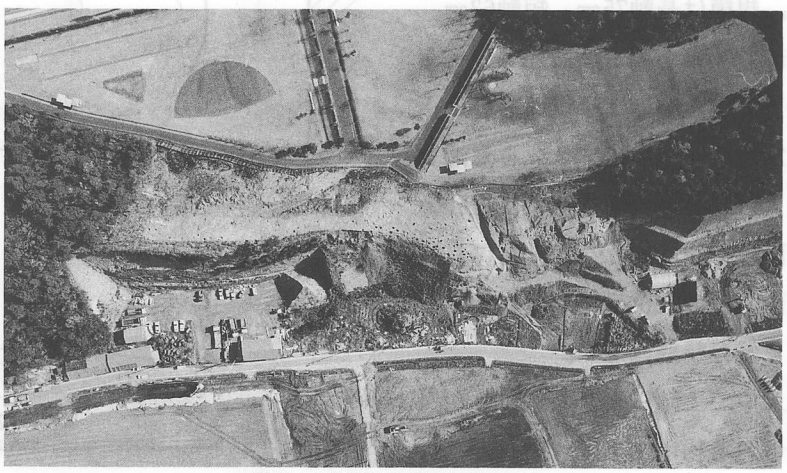
**【SK-56】**

丘陵の北側で尾根よりやや東側のゆるやかな斜面で検出された。1.5m南西にSK-55が位置する。平面形はやや不整な長方形を呈し、長軸115cm、短軸80cm、深さは最深部で45cmを測る。底面は中央部が4cm程くぼみ、南西隅の掘り込みが他より浅いなど凹凸している。平面形はやや不整な長方形を呈し、長軸98cm、短軸62cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位はN-13°-Eをとる。

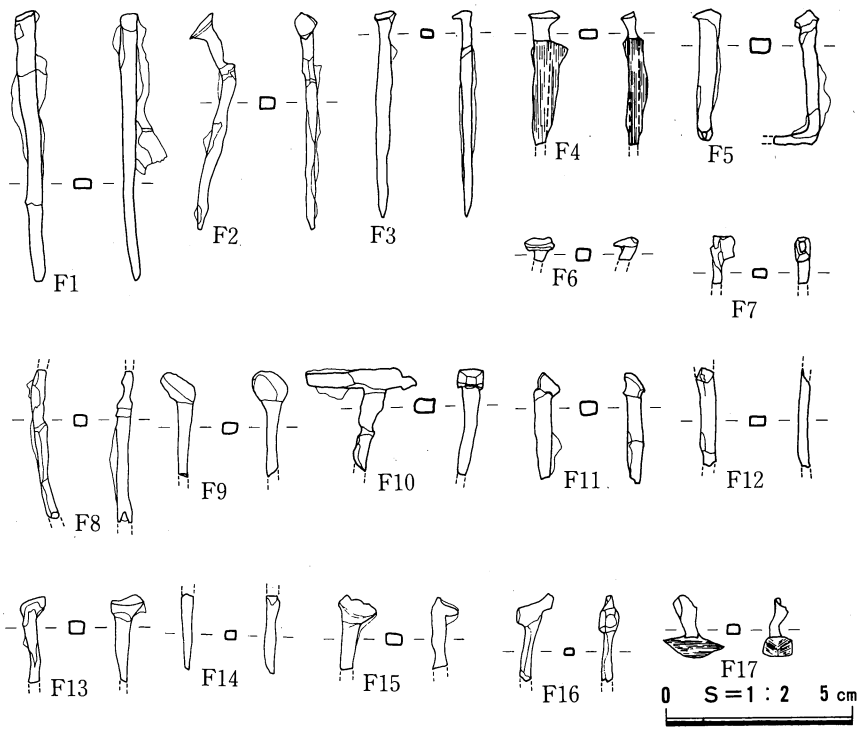
遺物は鉄釘が17本分検出された。鉄釘は底面の四隅近辺で多く検出されていることから底面に沿った長方形の木棺が安置されたと考えられる。また、自然角礫が埋土の下層から上層にかけて多く検出された。検出状況から棺を納める時に棺の上部あるいは側部等に一度に投げ込まれたものと推定される。




**挿図198　SK-56 実測図**



**鶴指奥墳墓群全景(上空より)**

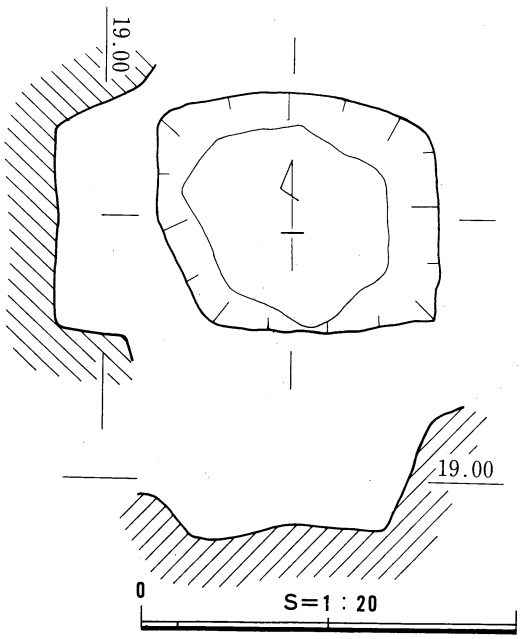



挿図199　SK-56 出土鉄釘(S=1/2)

【SK-68】

丘陵尾根の南端部で検出された。尾根の平坦部の西端にあり、0.5m東にSK-10が位置する。平面形は上面でやや不整な長方形を呈する。規模は長軸75cm、短軸63cm、深さは最深部で30cmを測る。底面は中央がやや高くなっているがほぼ平坦面をなす。平面形は不定形だが方形のプランを意識していると考えられる。規模は中央部で50cmを測る。壁面はやや外傾しながら急に立ち上がる。上面の長軸方位はほぼ真東をとる。崩壊が激しく残存状態は悪い。

遺物は埋土中で土師質火舎(Po146)が検出された。他の遺物は検出されなかった。

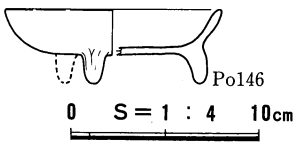



挿図200　SK-68 実測図

【SK-71】

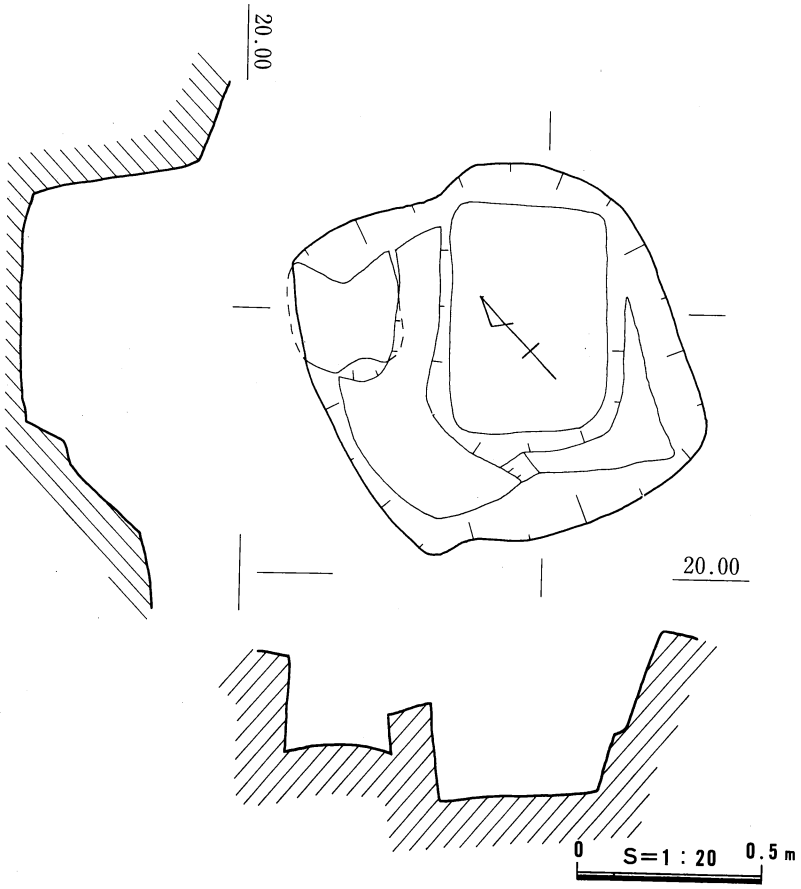
丘陵南側の尾根の西端部で検出された。

SK-01の西側約１ｍに位置する。上面の平面形はやや不整な隅丸長方形を呈し、長軸95cm、短軸75cmを測る。底面は平坦で隅丸長方形を呈し、長軸60cm、短軸40cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、最深部で44cmを測る。底面の長軸方位はN-41°-Eをとる。底面掘り方の回りには北壁側を除いてテラスが巡り上面に続いている。底面と上面は軸を異にしていることから最初に方形の土壙を掘った後に重なるように長方形の土壙を掘った可能性があるが確定できない。




挿図201 SK-68 出土土器（S＝1/4）

遺物は検出されなかったが、底面の掘り方はていねいで、形状も他の土葬墓と類似していることから土葬墓として使われたものと考えられる。

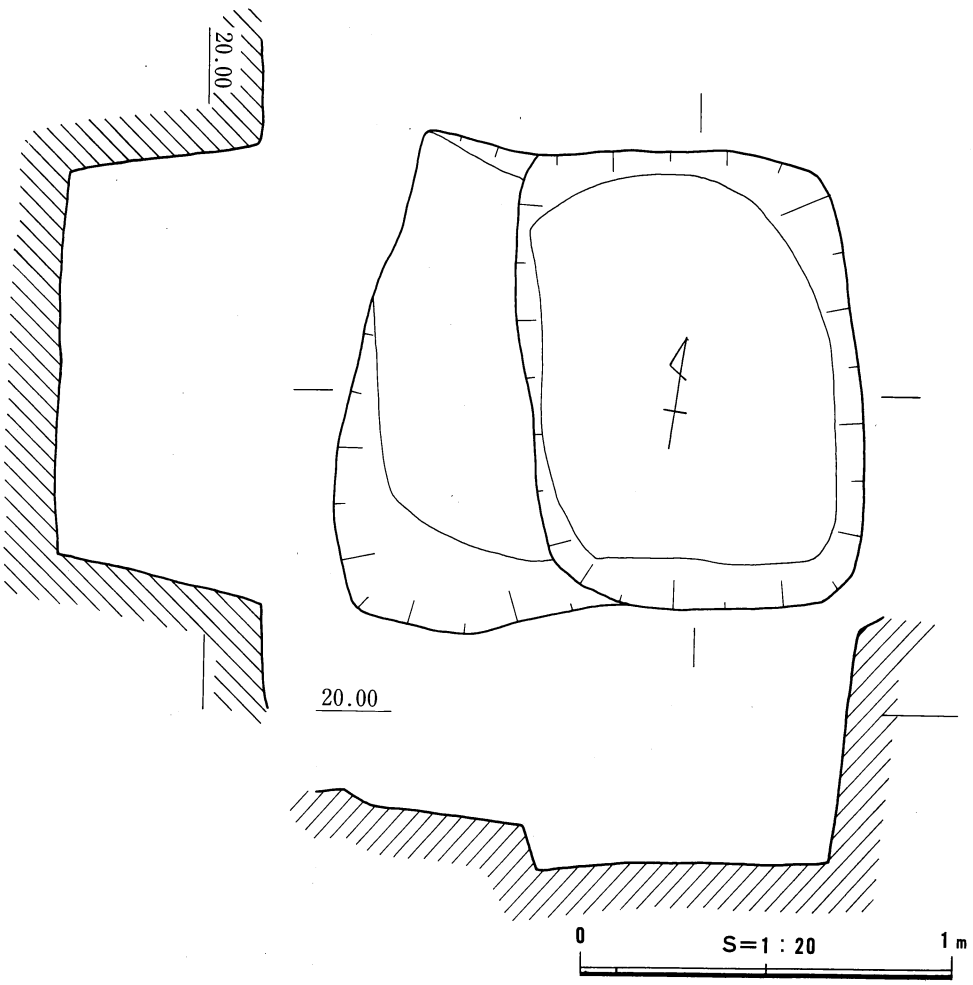



挿図202 SK-71 実測図

【SK-72】

丘陵南側の尾根の西端部で検出された。SK-71の北約1mに位置する。平面形は上面でやや不整な隅丸長方形を呈し、長軸121cm、短軸87cm、深さは最深部で61cmを測る。底面は平坦でやや不整な隅丸長方形を呈し、長軸100cm、短軸77cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位はN-8°-Eをとる。

遺物は検出されなかったが形状が他の土葬墓と類似しており、土葬墓として使われたと考えられる。また、西側に隣接して浅い掘り込みを持つ土壙状のものの一部が検出されたが崩壊が激しくSK-72に伴う掘り方かそれに先立つ土壙が判別ができない。

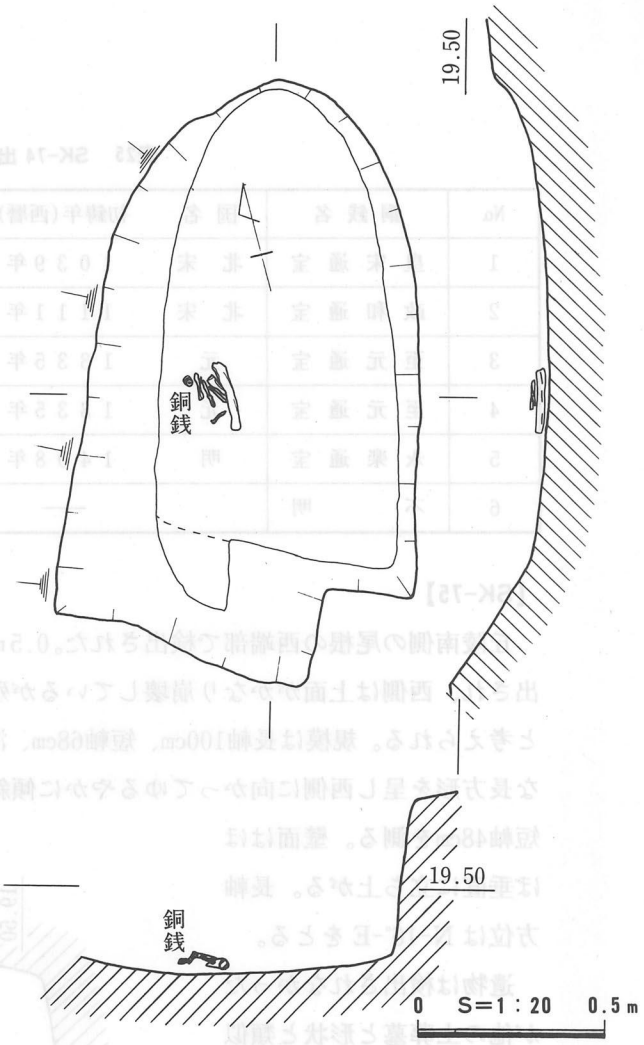



挿図203　SK-72 実測図

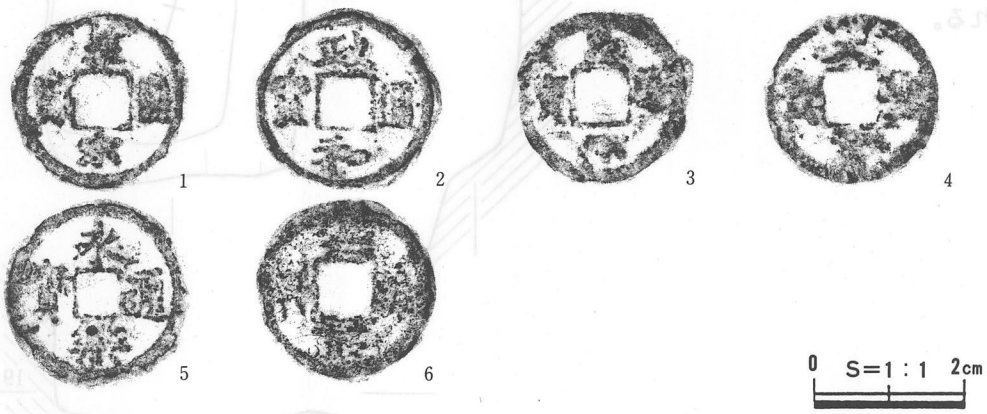
【SK-74】

丘陵南側の尾根の西端部で検出された。SK-75の0.5m南に位置している。上面の平面形は南側が不整だがほぼ舟形を呈する。規模は長軸160cm、短軸90cm、深さは最深部で40cmを測る。底面はほぼ平坦で不整な舟形を呈する。規模は長軸121cm、短軸62cmを測る。長軸方位はN-16°-Eをとる。西側半分以上が急斜面から検出され、上面はかなり崩壊していると考えられる。

遺物は銅銭と人骨が検出された。銅銭は6枚で底面中央の西側で検出された。人骨は銅銭の東側に隣接して下肢骨、上腕骨片が重なるようにして検出された。その他の遺物は検出されなかった。




挿図204 SK-74 実測図




挿図205 SK-74 出土銅銭

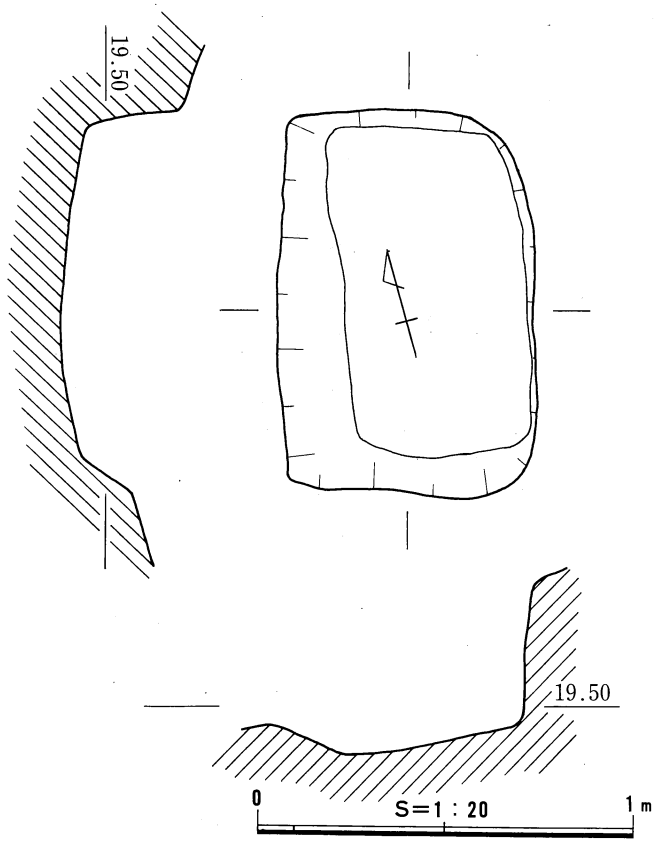
表25　SK-74 出土銅銭一覧表

| No. | 銅銭名 | 国名 | 初鋳年(西暦) | 書体 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 皇宋通宝 | 北宋 | 1039年 | 楷書 | |
| 2 | 政和通宝 | 北宋 | 1111年 | 楷書 | |
| 3 | 至元通宝 | 元 | 1335年 | 篆書 | |
| 4 | 至元通宝 | 元 | 1335年 | 楷書 | |
| 5 | 永楽通宝 | 明 | 1408年 | 楷書 | |
| 6 | 不明 | | —— | —— | |

【SK-75】

丘陵南側の尾根の西端部で検出された。0.5m南にSK-74が並ぶ。西側半分が急斜面で検出され、西側は上面がかなり崩壊しているが残存部から上面の平面形は隅丸長方形を呈すと考えられる。規模は長軸100cm、短軸68cm、深さは最深部で37cmを測る。底面はやや不整な長方形を呈し西側に向かってゆるやかに傾斜するがほぼ平坦面をなす。規模は長軸86cm、短軸48cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位はN-16°-Eをとる。

遺物は検出されなかったが他の土葬墓と形状と類似していることから土葬墓として使われていたと考えられる。

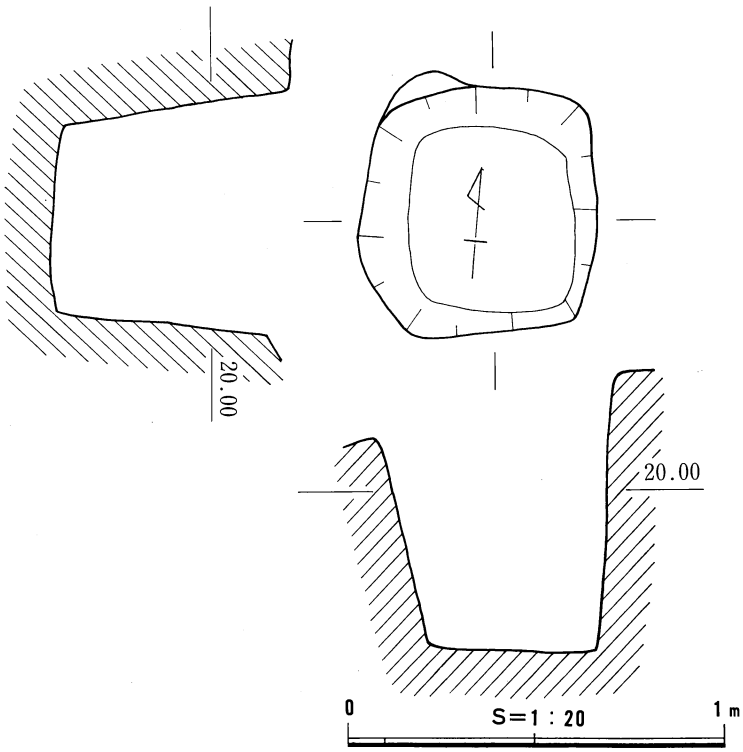



挿図206　SK-75 実測図

【SK-76】

丘陵南側の尾根の西端部で検出された。SK-74の南約1mに位置する。上面の平面形はやや不整な隅丸長方形を呈す。規模は長軸65cm、短軸62cmとほぼ正方形をなす。深さは最深部で73cmを測る。底面は平坦で隅丸方形を呈す。規模は長軸50cm、短軸45cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位はN-6°-Wをとる。

遺物は検出されなかったが、底面、壁面がていねいに加工されているなど掘り方がしっかりしていることから土葬墓として使われていたと考えられる。

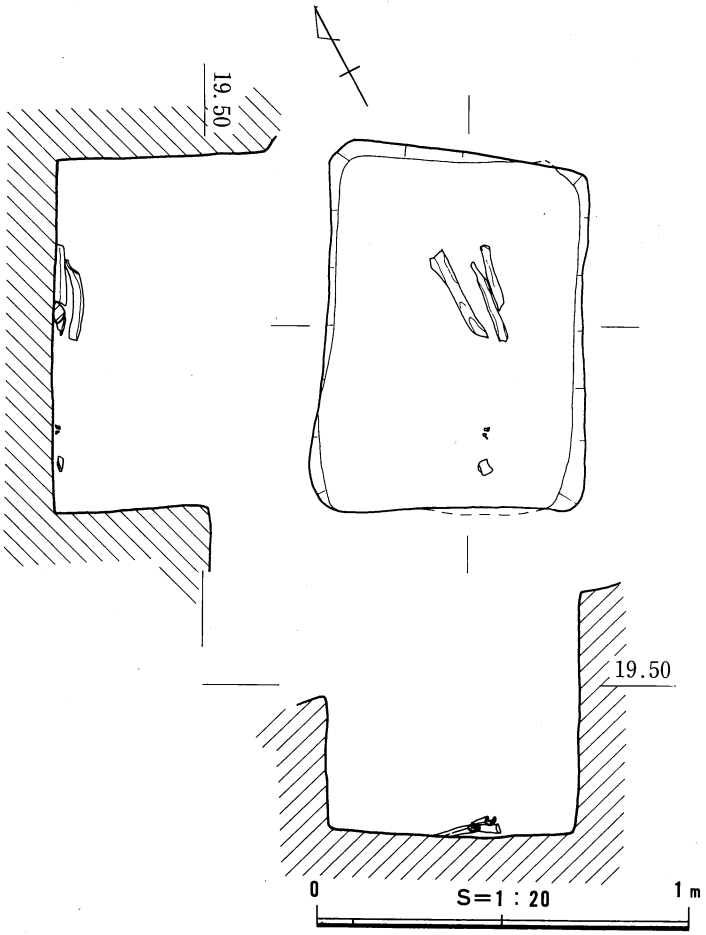



挿図207　SK-76 実測図

【SK-77】

丘陵中央付近の尾根の西端寄りで検出された。SK-38の1.5m西に位置する。平面形は上面で隅丸長方形を呈し、長軸94cm、短軸68cm、深さは最深部で64cmを測る。底面は平坦で隅丸長方形を呈し、長軸93cm、短軸63cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位はN-27°-Eをとる。西壁上面がやや崩壊していると考えられるが、残存状態はほぼ良好である。

遺物は人骨が1体分検出された。底面の中央よりやや北側で下肢骨が、南壁近くで頭骨片、歯牙が検出された。その他の遺物は検出されなかった。

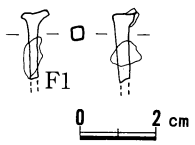



挿図208　SK-77 実測図

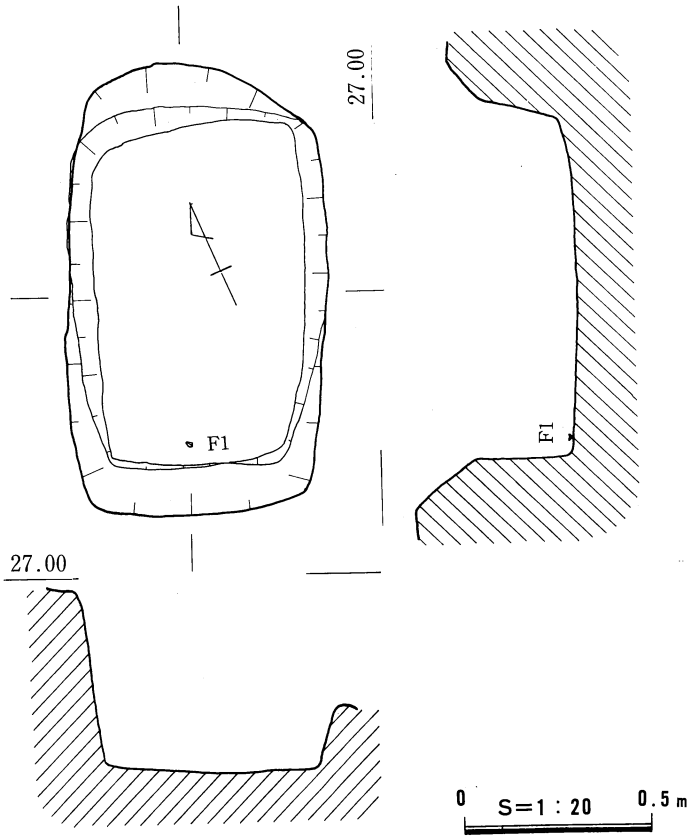
【SK-80】

調査区の北端部で尾根より東側に下ったゆるやかな斜面で検出された。約1.5m南にSK-81が位置する。平面形は上面で隅丸長方形を呈し、長軸129cm、短軸68cm、深さは最深部で46cmを測る。底面は平坦で隅丸長方形を呈し、長軸89cm、短軸55cmを測る。壁面は東、西壁はほぼ垂直に立ち上がるが北、南壁は底面から25cm程垂直に立ち上がった後外傾しながら上面に続く。長軸方位はN-22°-Eをとる。

遺物は南壁近くの底面で鉄釘が1本検出された。その他の遺物は検出されなかった。




挿図209　SK-80 出土鉄釘（S＝1/2）

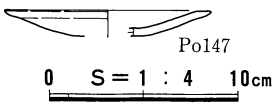



挿図210　SK-80 実測図

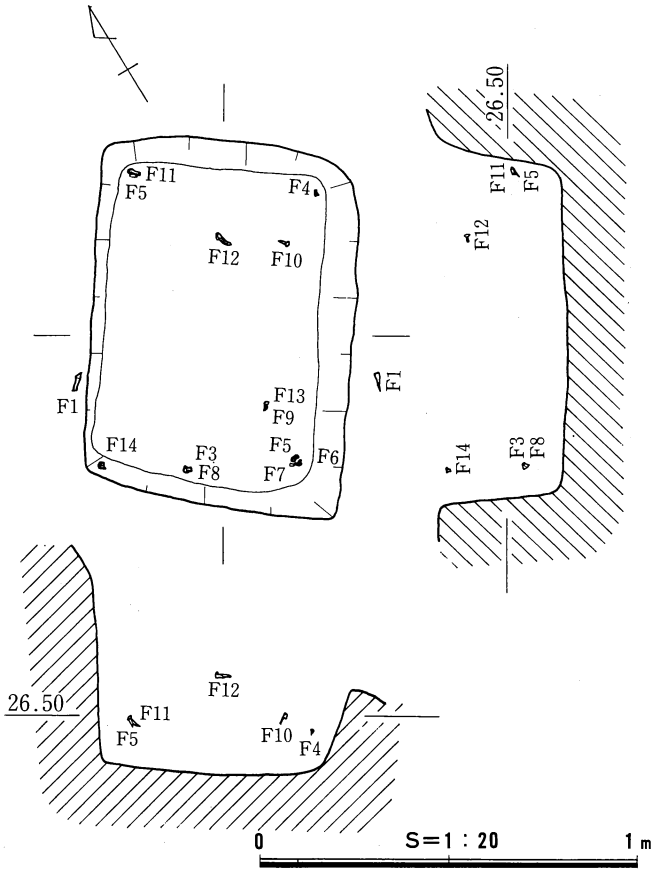
【SK-81】

調査区の北端部で尾根より東側に下ったゆるやかな斜面で検出された。約1.5ｍ北にSK-80が位置する。平面形は上面で隅丸長方形を呈し、長軸97cm、短軸69cm、深さは最深部で52cmを測る。底面は平坦で隅丸長方形を呈し、長軸84cm、短軸56cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位はN-20°-Eをとる。

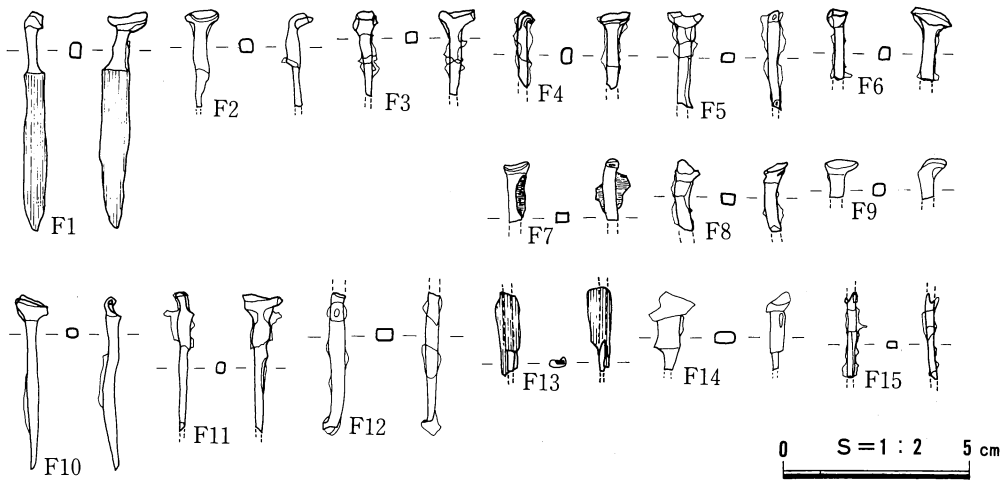
遺物は鉄釘が15本分検出された。鉄釘は底面から浮いた状態で、四隅及び壁に近いところで検出されていることから底面に沿った長方形の木棺が安置されたと考えられる。また、一番高い所で検出された釘が底面から約50cm上にあることから木棺の高さも50cm以上であったと推定される。また、埋土中から土師質皿が１点検出された。




挿図211　SK-81 出土土器（S＝1/4）




挿図212　SK-81 実測図

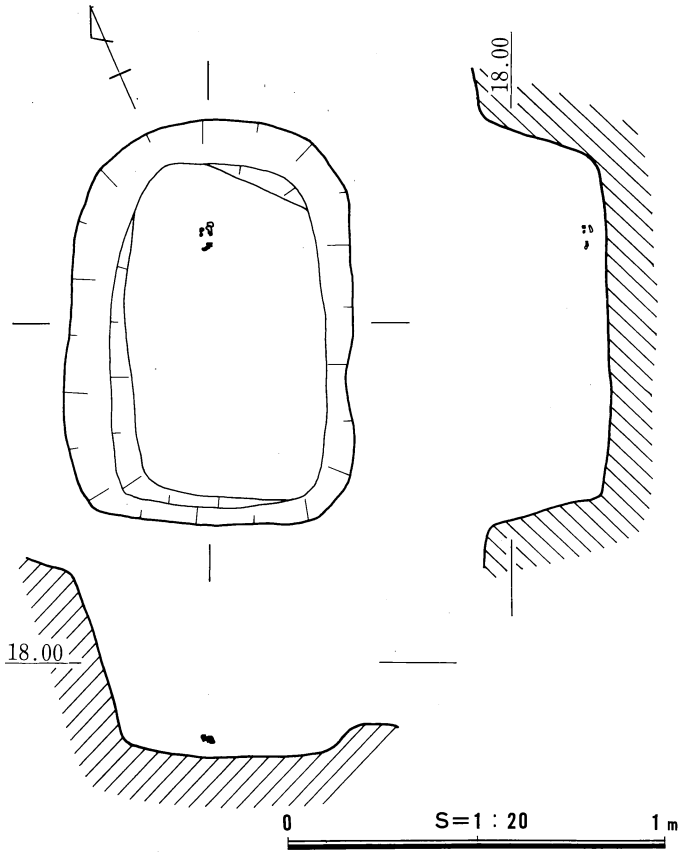



挿図213　SK-81 出土鉄釘（S＝1/2）

【SK-82】

丘陵中央付近の東斜面で検出された。斜面はやや急になり他の土壙と離れた所に位置する。平面形は上面で隅丸長方形を呈し、長軸107cm、短軸74cm、深さは最深部で44cmを測る。底面はほぼ平坦で隅丸長方形を呈し、長軸87cm、短軸53cmを測る。壁面は外傾しながら急に立ち上がる。長軸方位はN-13°-Eをとる。

遺物は歯牙が底面の北側で検出された。他の遺物は検出されなかった。東壁側の崩落が激しく残存状態はあまり良くない。

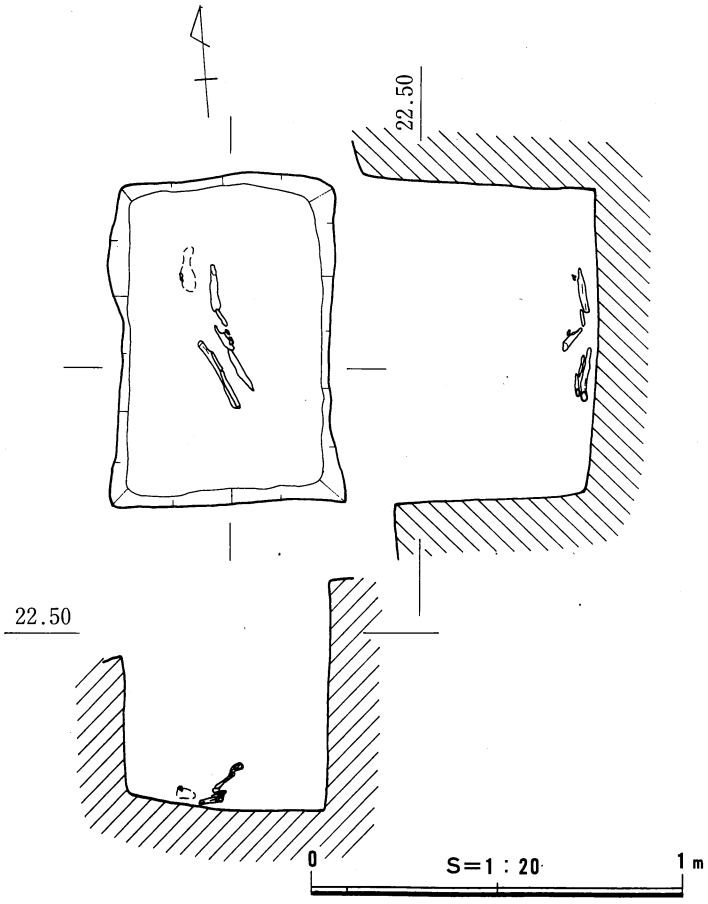



挿図214　SK-82 実測図

【SK-84】

丘陵中央付近の尾根の西端部で検出された。SK-85の約2.5m南に位置する。平面形は上面でやや不整な長方形を呈し、長軸87cm、短軸55cm、深さは最深部で61cmを測る。底面はほぼ平坦で、やや不整な長方形を呈し、長軸80cm、短軸50cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位はN-5°-Eをとる。

遺物は人骨が1体分検出された。底面中央付近に下肢骨が、北側で頭骨が検出された。その他の遺物は検出されなかった。西壁上面がやや崩壊していると考えられるが、残存状態はほぼ良好である。

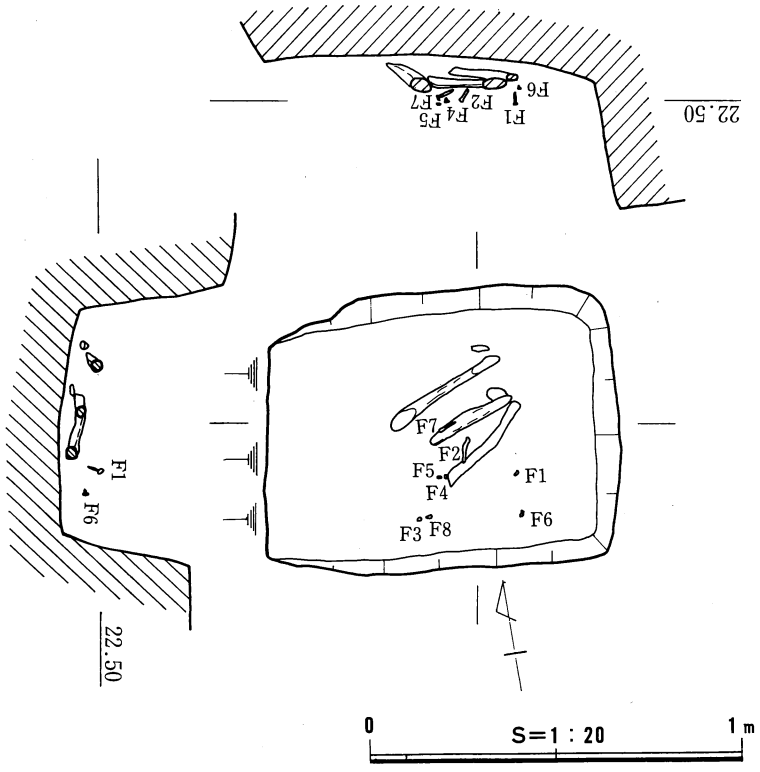



挿図215　SK-84 実測図

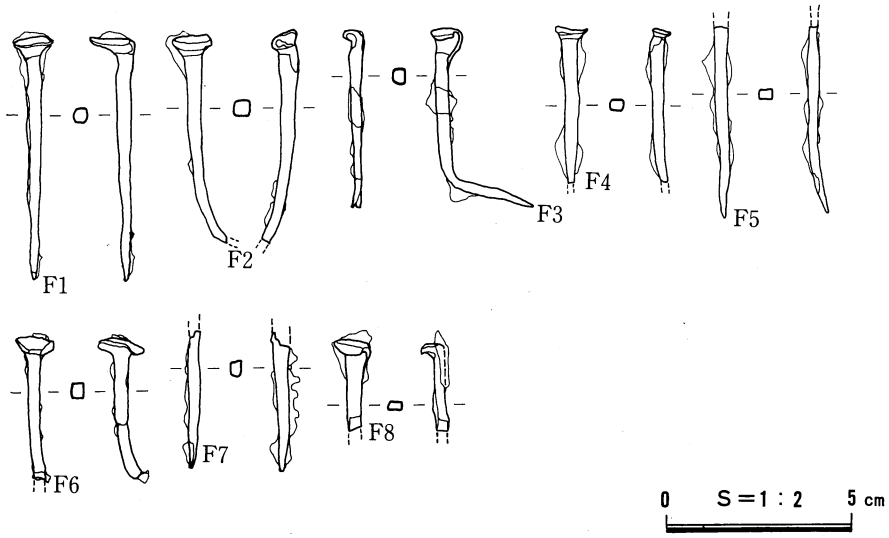
【SK-85】

丘陵中央付近の尾根の平坦部で検出された。SK-84 の北約2.3ｍに位置する。西壁側が一部削られている。平面形は上面で長方形を呈すと考えられる。規模は長軸で推定100cm前後、短軸74cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり深さは最深部で38cmを測る。底面はほぼ平坦で長方形を呈す。規模は長軸で残存部86cm、短軸68cmを測る。長軸方位は N-98°-E をとり、他の土壙と異なり東西方向を向く。

遺物は鉄釘と人骨が検出された。鉄釘は計８本分検出された。いずれも底面から浮いた状態で人骨の上及び南壁に沿うように検出された。人骨は下肢骨が底面中央よりやや東側で並ぶようにして検出された。その他の遺物は検出されなかった。



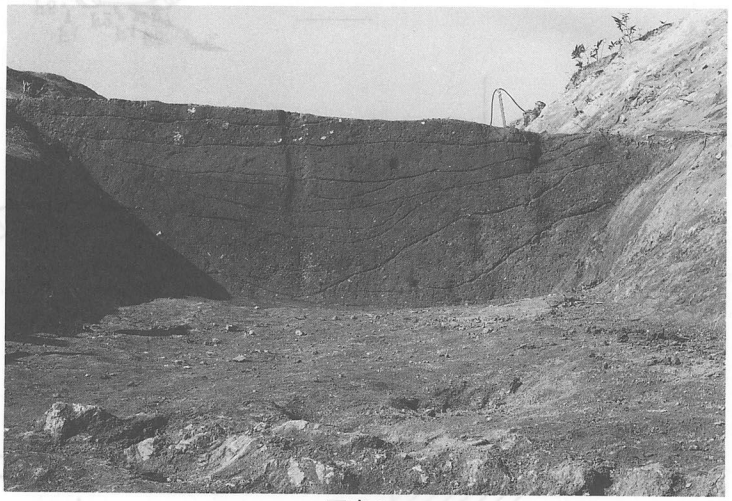

挿図216　SK-85 実測図



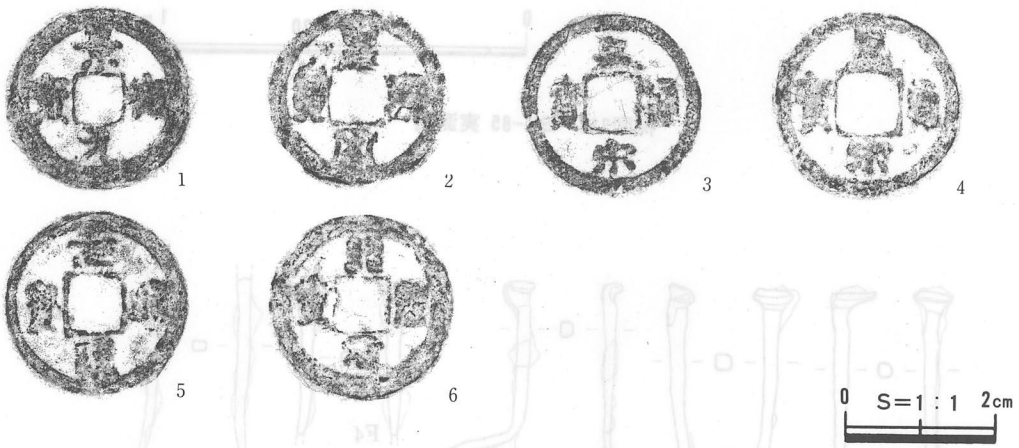

挿図217　SK-85 出土鉄釘（S＝1/2）

【SK-86】

SD-01埋土内で土葬墓の底面を検出した。検出したのは、SD-01の第6層で、採取不可能な骨片と銅銭6枚と鉄釘の錆びた痕跡3箇所である。掘り方は検出されなかった。遺物の出土状況が他の土葬墓と同じであるのでSK-86も15・16世紀の土葬墓と考える。



写真A




挿図218　SK-86 出土銅銭

表26　SK-86 出土銅銭一覧表

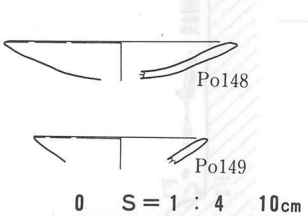
| No. | 銅銭名 | 国名 | 初鋳年(西暦) | 書体 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 景徳元宝 | 北宋 | 1004年 | 楷書 | |
| 2 | 皇宋通宝 | 北宋 | 1039年 | 篆書 | |
| 3 | 皇宋通宝 | 北宋 | 1039年 | 楷書 | |
| 4 | 皇宋通宝 | 北宋 | 1039年 | 篆書 | |
| 5 | 元祐通宝 | 北宋 | 1086年 | 篆書 | |
| 6 | 紹聖元宝 | 北宋 | 1094年 | 篆書 | |

## 《火　葬　墓》

**【SK-04】**

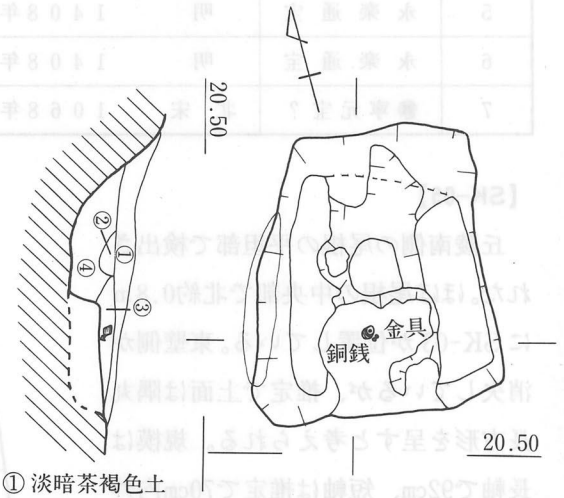
丘陵南側の尾根の平坦部で検出された。ほぼ尾根の中央部で東約1.5ｍにSK-15が位置している。残存部で上面の平面形は不整方形を呈し、長軸75cm、短軸64cmを測る。底面は不整で中央部がへこみ、東、西側では平坦面を持つ。南側中央部では焼土が厚く固まっている。平坦面から推定される底面の規模は長軸55cm、短軸50cmで方形を呈する。壁面はほぼ垂直に立ち上がり残存部で13cmを測る。長軸はN-15°-Eをとる。

遺物は中央南側の焼土の直上で銅銭８枚と銅製金具が１点検出された。銅銭は焼けて変形したものもあり、遺体と一緒に焼かれたと考えられる。人骨は焼骨の骨片が①層で検出されたが、遺存状態が悪く採集が不可能であった。その他、埋土中から土師質皿片が３点検出された。

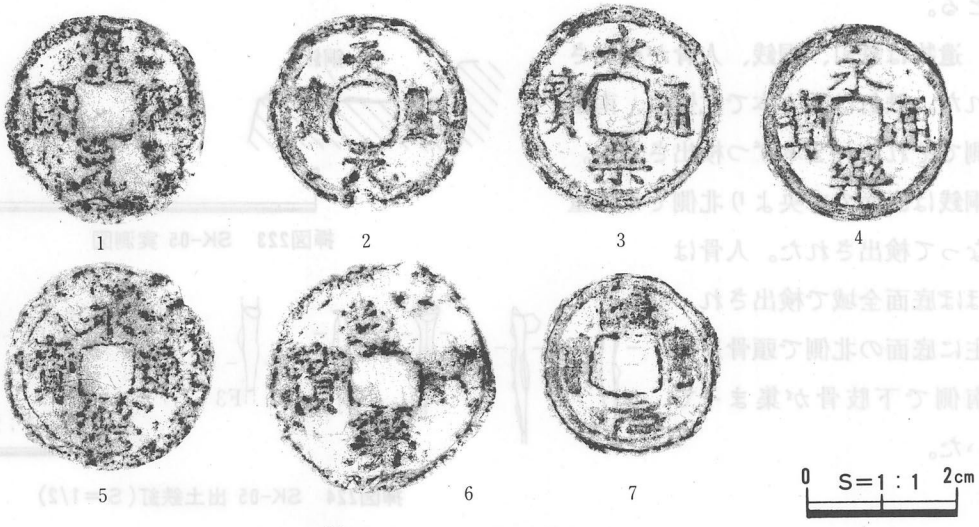



挿図219　SK-04 出土土器（S＝1/4）

挿図220　SK-04 銅製金具（S＝1/2）




挿図221　SK-04 実測図




挿図222　SK-04 出土銅銭

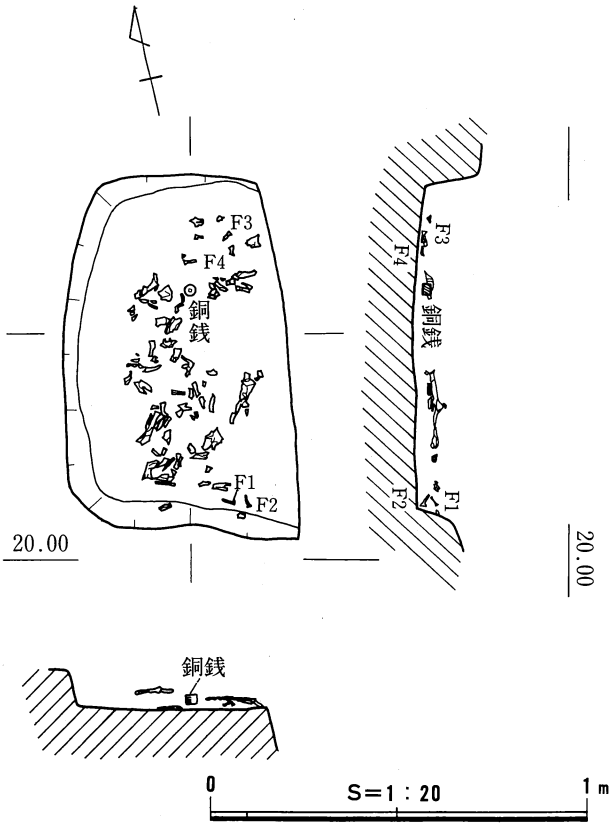
表27　SK-04 出土銅銭一覧表

| No. | 銅 銭 名 | 国 名 | 初鋳年(西暦) | 書 体 | 備　　考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 景 徳 元 宝 | 北　宋 | １００４年 | 楷　書 | |
| 2 | 天 聖 元 宝 | 北　宋 | １０２３年 | 楷　書 | |
| 3 | 永 楽 通 宝 | 明 | １４０８年 | 楷　書 | |
| 4 | 永 楽 通 宝 | 明 | １４０８年 | 楷　書 | |
| 5 | 永 楽 通 宝 | 明 | １４０８年 | 楷　書 | |
| 6 | 永 楽 通 宝 | 明 | １４０８年 | 楷　書 | |
| 7 | 熙 寧 元 宝 ? | 北　宋 | １０６８年 | 篆　書 | |

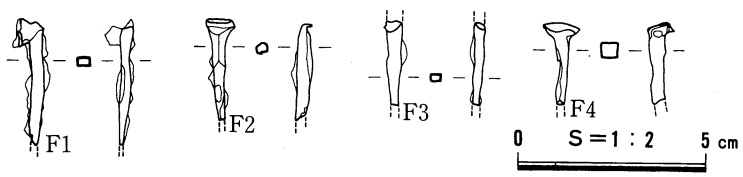
**【SK-05】**

丘陵南側の尾根の平坦部で検出された。ほぼ尾根の中央部で北約0.8mにSK-03が位置している。東壁側が消失しているが、推定で上面は隅丸長方形を呈すと考えられる。規模は長軸で92cm、短軸は推定で70cm内外を測る。底面は平坦でやや不整な隅丸長方形を呈し、規模は長軸で84cm、短軸は推定で60cm内外を測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、最深部で15cmを測る。長軸方位はN-10°-Eをとる。

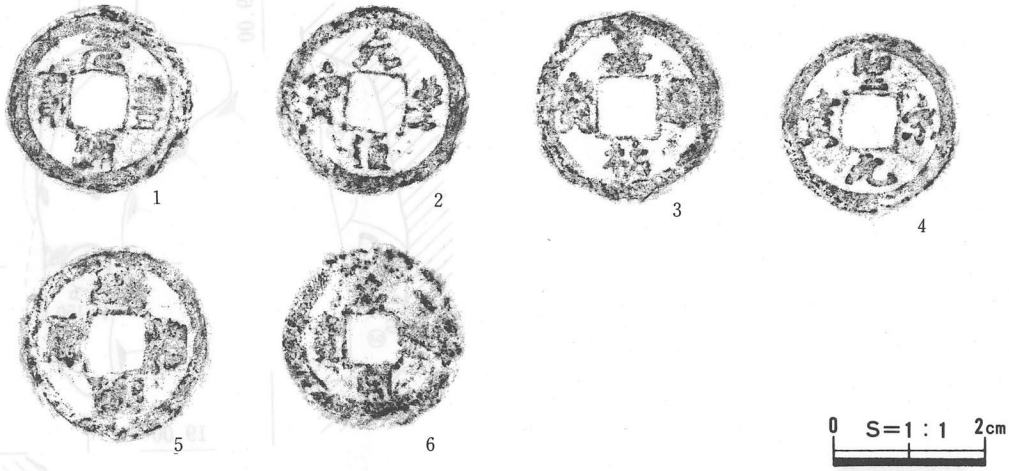
遺物は鉄釘、銅銭、人骨が検出された。鉄釘は計4本で北壁側、南壁側でそれぞれ2本ずつ検出された。銅銭は底面の中央より北側で6枚重なって検出された。人骨はほぼ底面全域で検出され、主に底面の北側で頭骨片、南側で下肢骨が集まっていた。




挿図223　SK-05 実測図




挿図224　SK-05 出土鉄釘(S＝1/2)




挿図225　SK-05 出土銅銭

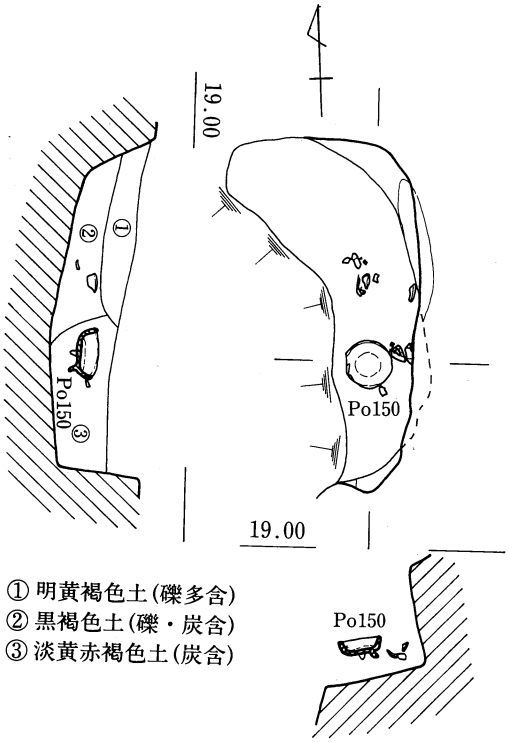
表28　SK-05 出土銅銭一覧表

| No. | 銅銭名 | 国名 | 初鋳年(西暦) | 書体 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 元豊通宝 | 北宋 | 1078年 | 篆書 | |
| 2 | 元豊通宝 | 北宋 | 1078年 | 楷書 | |
| 3 | 元祐通宝 | 北宋 | 1086年 | 楷書 | |
| 4 | 聖宋元宝 | 北宋 | 1101年 | 楷書 | |
| 5 | ○○通宝 | | —— | —— | |
| 6 | 不明 | | —— | —— | |

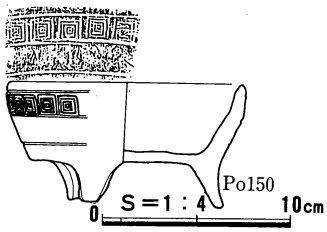
【SK-08】

丘陵南端の尾根で検出された。尾根の西端にあり、北約0.3mにSK-68が位置している。土壙の西側半分が崩落して急斜面をなしている。崩落が激しく全容は明らかではないが、残存部から推定すると上面の平面形は隅丸長方形を呈すと考えられる。規模は長軸で92cm、短軸は不明である。底面はほぼ平坦で東壁側から西側にかけてゆるやかに傾斜している。規模は長軸で90cm、短軸は不明である。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。長軸方位はN-3°-Eでほぼ真北を向く。

遺物は底面から浮いた状態で、底面中央よりやや南側の東壁寄りで土師質の火舎(Po150)が検出された。火舎はほぼ完形で、三脚を持ち口縁部にスタンプ模様が全周して施されている。人骨は焼骨で底面より浮いた状態で火舎の周囲及び北側で検出された。部位は不明である。その他の遺物は検出されなかった。




挿図227　SK-08 実測図

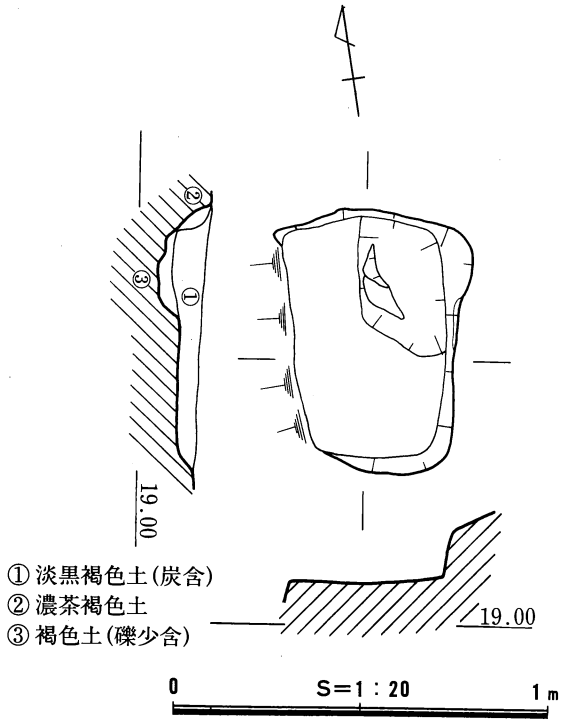



挿図226　SK-08 出土土器(S=1/4)

【SK-09】

丘陵南側の尾根の西端部で検出された。SK-68の北約1mに位置している。土壙の西壁側が崩落して急斜面をなしている。全容は明らかではないが残存部から推定して上面の平面形は隅丸長方形を呈すと考えられる。規模は長軸70cm、短軸は推定で45cm内外と考えられる。底面は隅丸長方形を呈すと考えられ、北東側に不整形のくぼみがみられる他はほぼ平坦で、長軸63cm、短軸は推定で40cm内外を測ると考えられる。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、最深部で13cmを測る。

遺物は検出されなかったが、土層の①層に炭が多く混じり、東壁の一部に加熱した跡があることから火葬墓として使われたと考えられる。

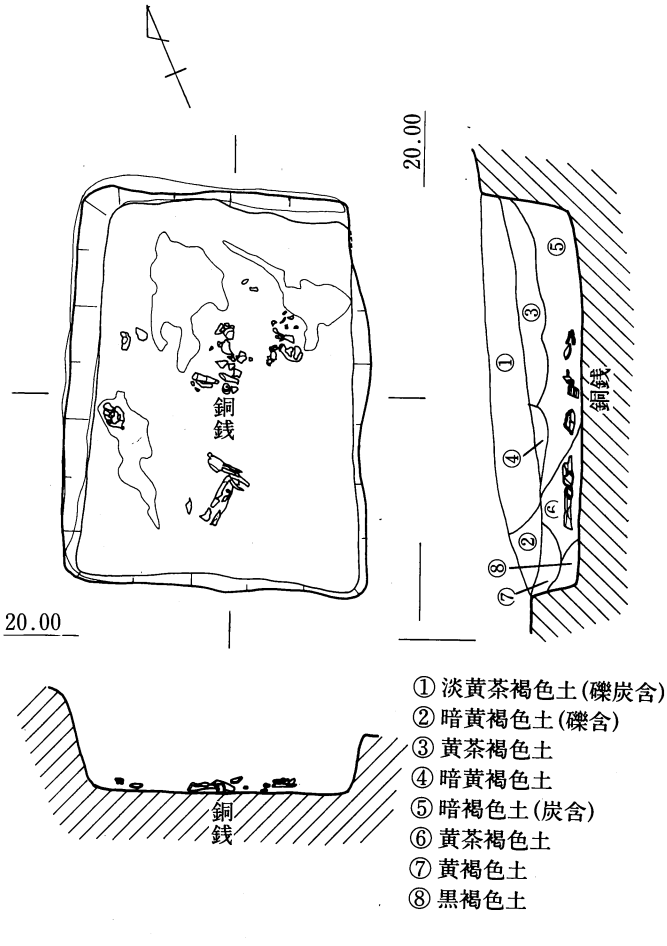



挿図228　SK-09 実測図

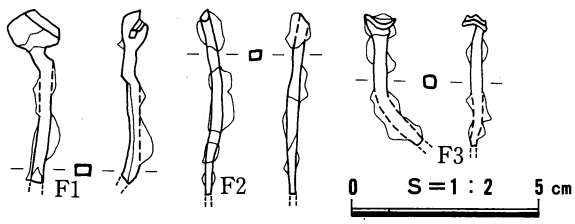
【SK-14】

丘陵南側の尾根の平坦部で検出された。尾根中央よりやや東にあり、SK-15の南約2mに位置する。平面形は上面でやや不整な隅丸長方形を呈し、長軸106cm、短軸79cmを測る。底面は平坦でやや不整な隅丸長方形を呈し、長軸97cm、短軸68cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、最深部で25cmを測る。北壁、西壁が火熱を受け赤褐色に変色している。長軸方位はN-12°-Eをとる。

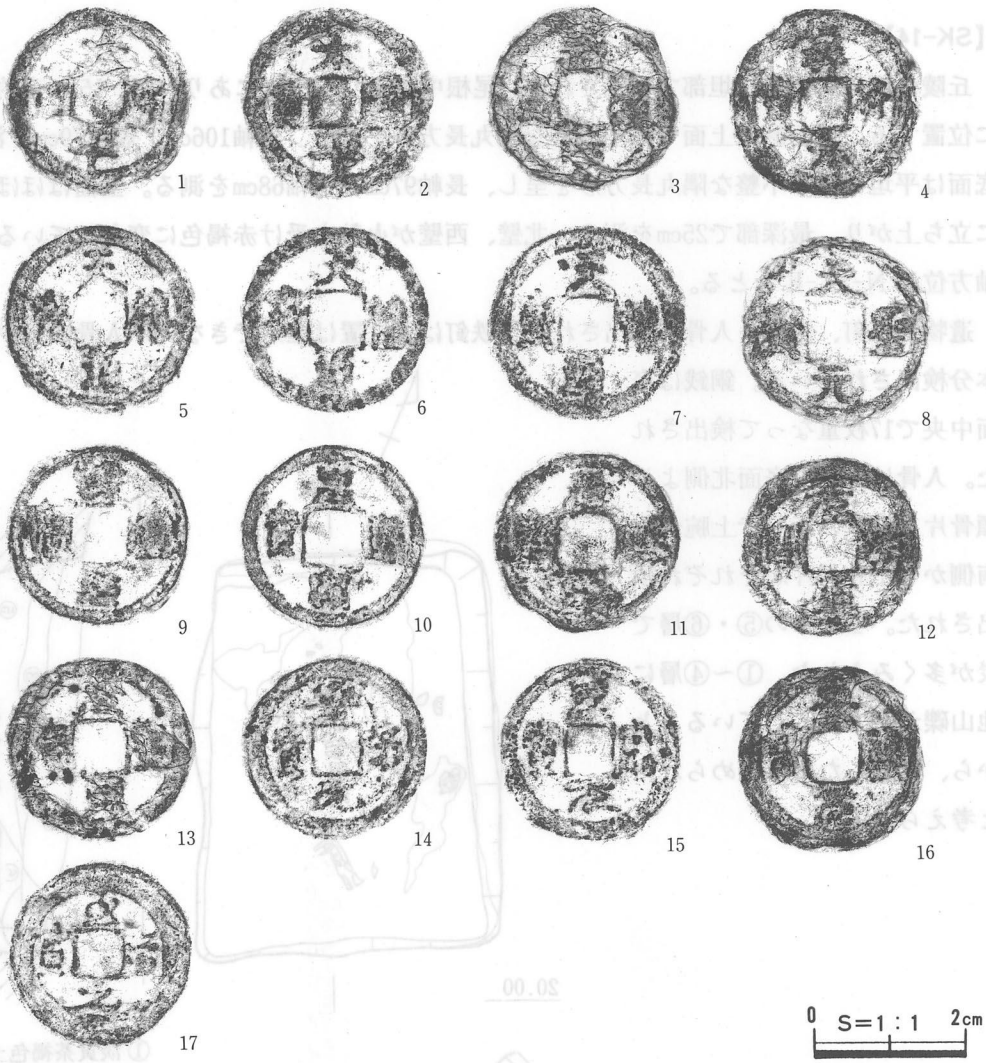
遺物は鉄釘、銅銭、人骨が検出された。鉄釘は原位置は確定できないが人骨の下から3本分検出されている。銅銭は底面中央で17枚重なって検出された。人骨は焼骨で底面北側より頭骨片、銅銭の近辺で上腕骨片、南側から下肢骨片がそれぞれ検出された。埋土中の⑤・⑥層で炭が多くみられた。①～④層に地山礫が多く混入していることから、火葬した後に埋められたと考えられる。




挿図229　SK-14 実測図




挿図230　SK-14 出土鉄釘(S=1/2)




挿図231　SK-14 出土銅銭

空撮開始！ヘリ出動！

表29　SK-14 出土銅銭一覧表

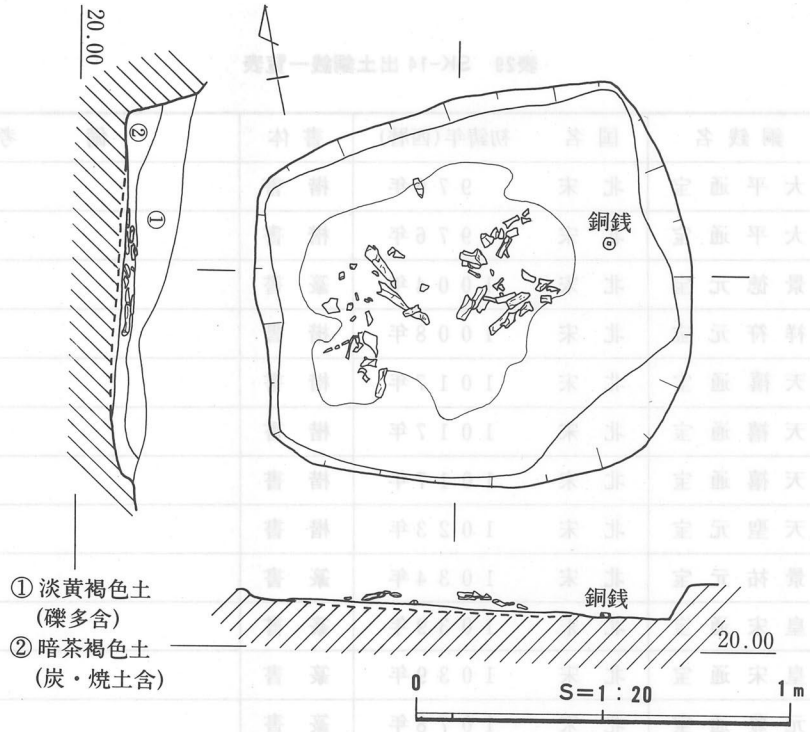
| No. | 銅銭名 | 国名 | 初鋳年(西暦) | 書体 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 大平通宝 | 北宋 | 976年 | 楷書 | |
| 2 | 大平通宝 | 北宋 | 976年 | 楷書 | |
| 3 | 景徳元宝 | 北宋 | 1004年 | 篆書 | |
| 4 | 祥符元宝 | 北宋 | 1008年 | 楷書 | |
| 5 | 天禧通宝 | 北宋 | 1017年 | 楷書 | |
| 6 | 天禧通宝 | 北宋 | 1017年 | 楷書 | |
| 7 | 天禧通宝 | 北宋 | 1017年 | 楷書 | |
| 8 | 天聖元宝 | 北宋 | 1023年 | 楷書 | |
| 9 | 景祐元宝 | 北宋 | 1034年 | 篆書 | |
| 10 | 皇宋通宝 | 北宋 | 1039年 | 篆書 | |
| 11 | 皇宋通宝 | 北宋 | 1039年 | 篆書 | |
| 12 | 元豊通宝 | 北宋 | 1078年 | 篆書 | |
| 13 | 元豊通宝 | 北宋 | 1078年 | 篆書 | |
| 14 | 聖宋元宝 | 北宋 | 1101年 | 楷書 | |
| 15 | 聖宋元宝 | 北宋 | 1101年 | 篆書 | |
| 16 | 皇宋元宝 | 南宋 | 1253年 | 篆書 | |
| 17 | 至元通宝 | 元 | 1335年 | 草書 | |

**【SK-15】**

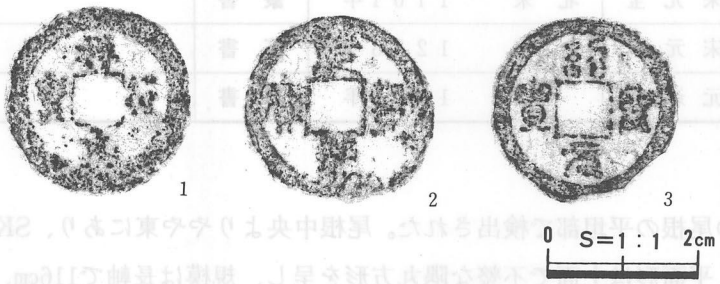
丘陵南側の尾根の平坦部で検出された。尾根中央よりやや東にあり、SK-14の北約2mに位置する。平面形は上面で不整な隅丸方形を呈し、規模は長軸で116cm、短軸102cmを測る。底面は平坦で不整方形を呈し、長軸105cm、短軸94cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、最深部で19cmを測る。底面中央に広範囲にわたって焼土がある。長軸方位はN－100°-Eで、ほぼ東西方向に向く。

遺物は銅銭と人骨が検出された。銅銭は計4枚検出された。そのうち3枚は重なった状態で底面の東壁寄りで検出された。1枚は位置は確定できないが、焼土面の人骨に混在して検出された。半分以上欠損し焼けて原型をとどめておらず図化は不可能であった。人骨は焼骨で、焼土面の上で検出された。焼土面の北側で頭骨、上腕骨片が、南側で下肢骨片が検出された。その他の遺物は検出されなかった。

土層で②層は炭を多く含み、①層は地山礫を多く含んでいることから、火葬した後土を埋めたと考えられる。




挿図232　SK-15 実測図




挿図233　SK-15 出土銅銭

表30　SK-15 出土銅銭一覧表

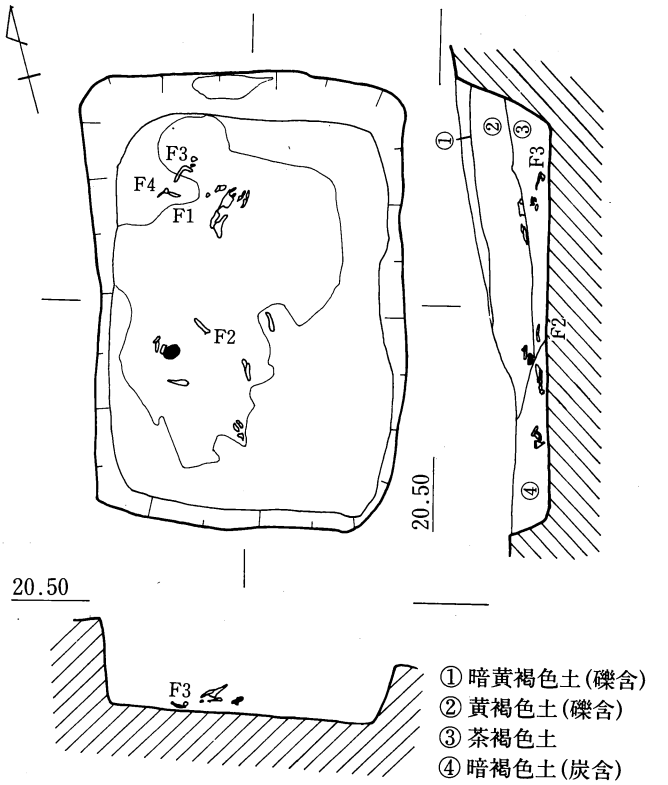
| No. | 銅銭名 | 国名 | 初鋳年(西暦) | 書体 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 祥符元宝 | 北宋 | 1008年 | 楷書 | |
| 2 | 元豊通宝 | 北宋 | 1078年 | 篆書 | |
| 3 | 紹聖元宝 | 北宋 | 1094年 | 篆書 | |

【SK-16】

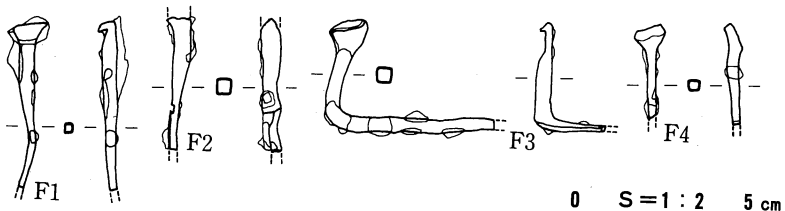
丘陵南側の尾根の平坦部で検出された。尾根中央よりやや東にあり、SK-15の北約1mに位置する。平面形は上面で隅丸長方形を呈し、長軸122cm、短軸80cmを測る。底面は平坦で隅丸長方形を呈し、長軸103cm、短軸70cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、最深部は25cmを測る。底面には広範囲に及んで火熱を受け赤褐色に変色した場所がみられた。また、北、東、西壁の一部も火熱を受け変色している。長軸方位はN－15°-Eをとる。

遺物は鉄釘、人骨が検出された。鉄釘は底面の中央付近で1本、北西隅で3本の計4本検出された。そのうちF3は折れ曲がった状態で検出された。人骨は焼骨で、焼土面の上で検出された。南側で上腕骨片、北側で下肢骨片、下肢骨片の下で頭骨片が検出された。

土層をみると③・④層は炭を含み、①、②層は地山礫を多く含んでいることから火葬をした後埋めたものと考えられる。




挿図234　SK-16 実測図



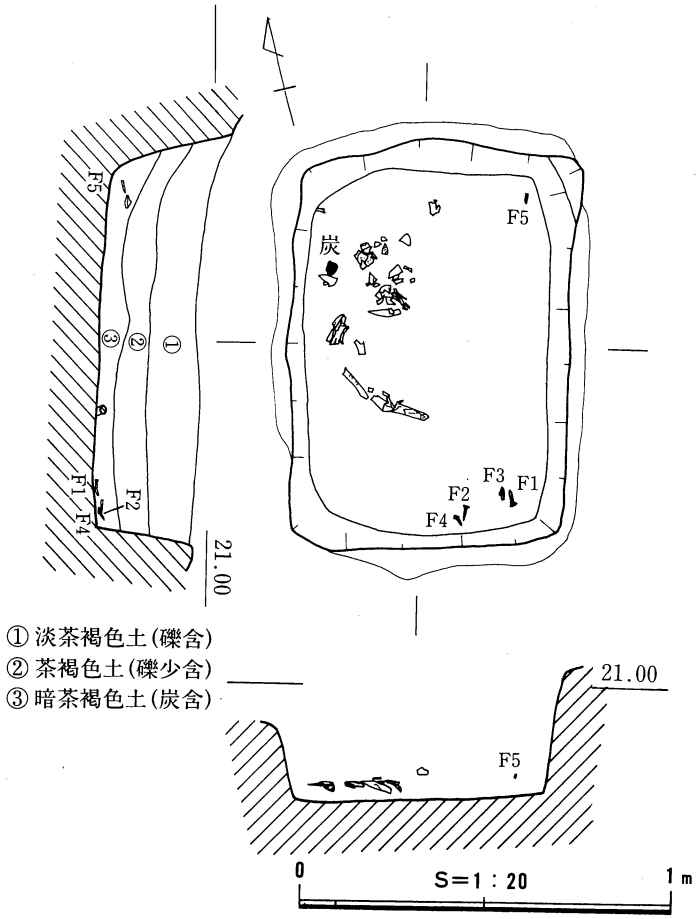

挿図235　SK-16 出土鉄釘(S＝1/2)

【SK-17】

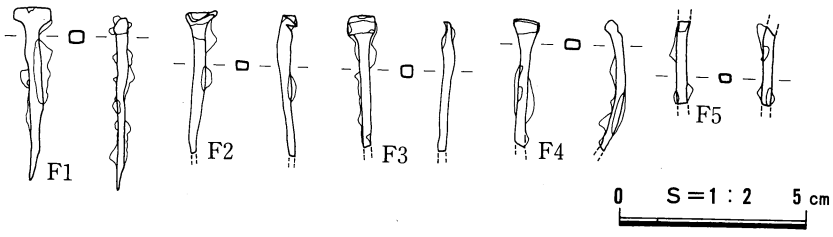
丘陵南側の尾根の平坦部で検出された。尾根のほぼ中央部にあたり、SK-21の南西約1mに位置する。平面形は上面で隅丸長方形を呈し、長軸108cm、短軸75cmを測る。底面は平坦で隅丸長方形を呈し、長軸103cm、短軸70cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、最深部で33cmを測る。土壙の掘り方を全周するように火熱を受けて赤褐色に変色している。長軸方位はN－13°-Eをとる。

遺物は鉄釘と人骨が検出された。鉄釘は北東隅と南東隅で計5本分検出された。検出状況から長方形の木棺であったと考えられる。人骨は焼骨で主に底面の西側で検出された。底面北側で主に頭骨片、南側で下肢骨片が検出された。

土層で①・②層で地山礫を多く含み、③層で炭を含むことから火葬した後埋め戻したと考えられる。




挿図236　SK-17 実測図

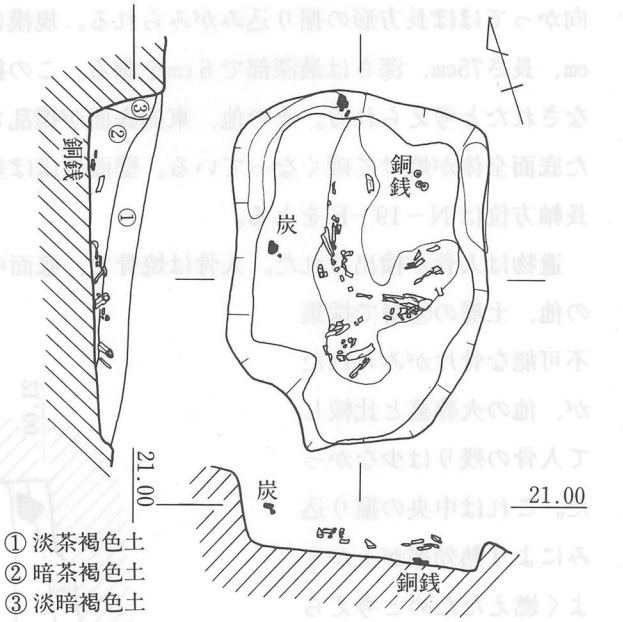



挿図237　SK-17 出土鉄釘(S=1/2)

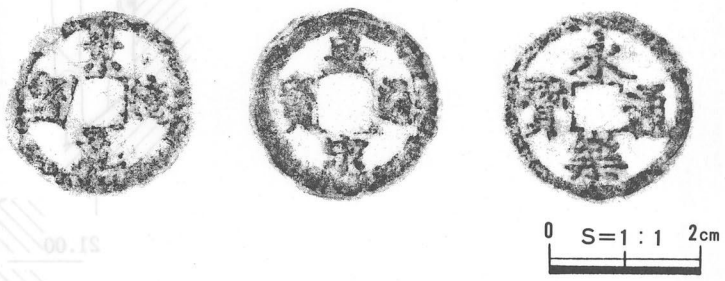
【SK-18】

丘陵南側の尾根の平坦部で検出された。尾根の東端寄りで、SK-15の東約1.5ｍの位置にある。平面形は上面で不整な隅丸長方形を呈し、規模は長軸94cm、短軸67cmを測る。底面はゆるやかに東に向けて傾斜しているがほぼ平坦で、不整な隅丸長方形を呈す。規模は長軸85cm、短軸58cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、最深部で20cmを測る。底面中央及び北壁側で火熱を受け赤褐色に変色した焼土面がみられる。長軸方位はＮ－19°-Ｅをとる。

遺物は銅銭と人骨が検出された。銅銭は底面の北東隅で３枚検出された。人骨は焼骨で底面の焼土面の上で主に検出された。北側で主に腕の骨片、南側で下肢骨片が検出された。




挿図238　SK-18 実測図




挿図239　SK-18 出土銅銭

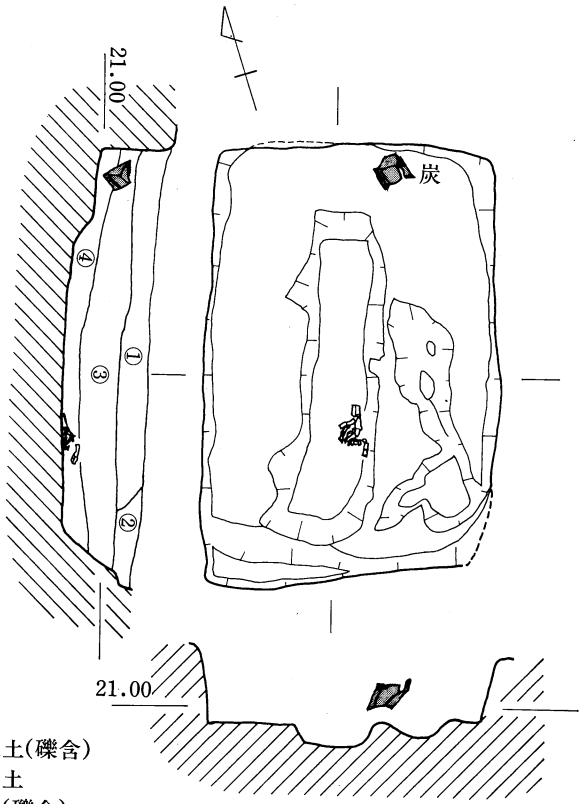
表31　SK-18 出土銅銭一覧表

| No. | 銅銭名 | 国名 | 初鋳年(西暦) | 書体 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 景徳元宝 | 北宋 | １００４年 | 楷書 | |
| 2 | 皇宋通宝 | 北宋 | １０３９年 | 楷書 | |
| 3 | 永楽通宝 | 明 | １４０８年 | 楷書 | |

【SK-21】

丘陵南側の尾根の平坦部で検出された。尾根の中央部にあたり、SK-17の北東約0.5mの位置にある。平面形は上面で長方形を呈し、長軸111cm、短軸79cmを測る。底面の平面形はやや不整な隅丸長方形を呈し、長軸105cm、短軸72cmを測る。底面中央に南壁際から北壁に向かってほぼ長方形の掘り込みがみられる。規模は上面で幅20cm、長さ88cm、底面で幅15cm、長さ75cm、深さは最深部で6cmを測る。この掘り込みは、火葬の効率を上げるためになされたと考えられる。その他、東側底面が撹乱されているがその他は平坦面をなす。また底面全体が焼けて硬くなっている。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、最深部で20cmを測る。長軸方位はN－19°-Eをとる。

遺物は人骨が検出された。人骨は焼骨で、底面中央の南側で下肢骨片が検出された。その他、土層の④層で採集不可能な骨片がみられたが、他の火葬墓と比較して人骨の残りは少なかった。これは中央の掘り込みにより熱効率が上がりよく燃えたためと考えられる。




①淡灰褐色土(礫含)
②淡暗褐色土
③淡褐色土(礫含)
④褐色土(炭・焼土含)

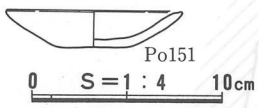
0　S＝1:20　1m

挿図240　SK-21 実測図

【SK-27】

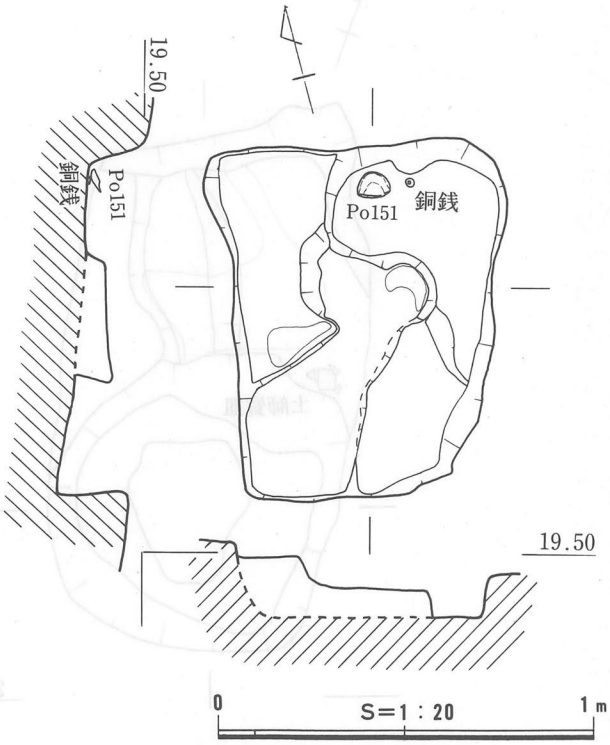
丘陵南側のやや狭くなる尾根の中央部で検出された。SK-29の南約2mに位置している。平面形は上面で不整な隅丸長方形を呈し、長軸92cm、短軸67cmを測る。底面は不整な隅丸長方形を呈し、規模は長軸86cm、短軸64cmを測る。底面の西側では掘り方上面から5cm下がった所で火熱を受け硬くなった面がみられ中央まで続いているが、本来の掘り方は北東側でみられる平坦面と考えられる。壁面は北東側の掘り方よりほぼ垂直に立ち上がり、深さは最深部で15cmを測る。長軸方位はN－12°-Eをとる。

遺物は北壁際の底面で土師質皿(Po151)が1点とその東側で銅銭1枚が検出された。いずれも底面に接した状態で検出された。人骨は掘り下げ中に骨片が少しみられたが遺存状態が悪く採集不可能であった。




挿図241　SK-27 出土土器(S＝1/4)

挿図242　SK-27 出土銅銭




挿図243　SK-27 実測図

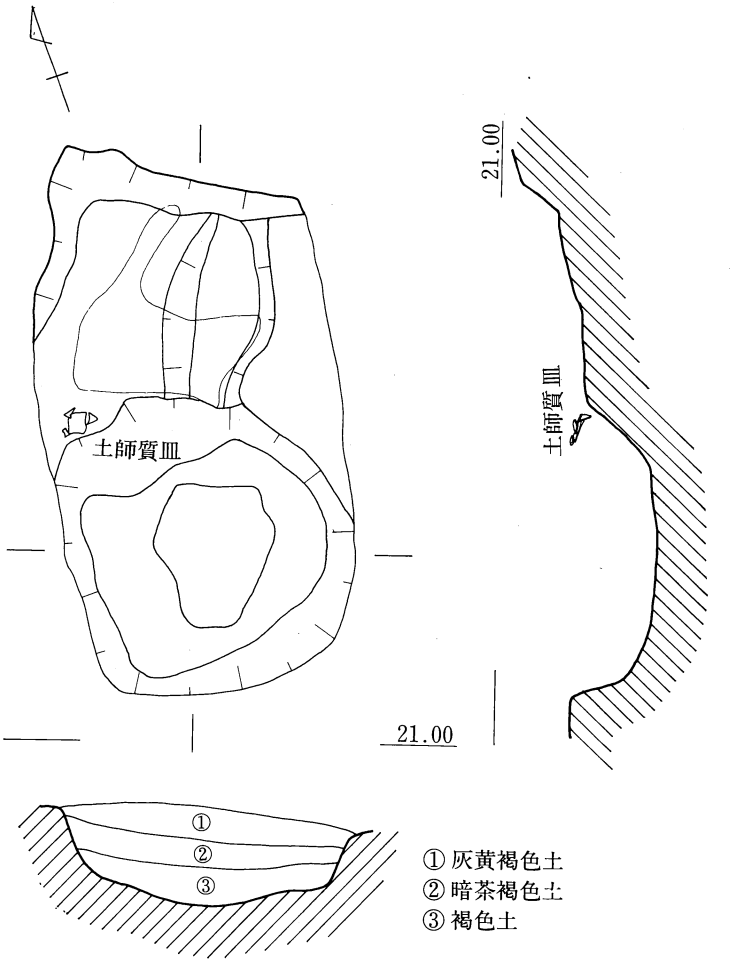
表32　SK-27 出土銅銭一覧表

| No. | 銅銭名 | 国名　初鋳年(西暦) | 書体 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 元祐通宝 | 北宋　1086年 | 篆書 | |

【SK-29】

丘陵南側のやや狭くなる尾根の中央部で検出された。SK-31の南約１ｍに位置している。残存状態は悪く、全容は明らかではないが残存部から平面形は上面で隅丸長方形を呈すと考えられる。規模は推定で、長軸135cm、短軸80cmを測る。底面は北側が中央部で浅くへこむがほぼ平坦面をなし、火熱を受け硬くなっている。南側は不整円形状に掘り込まれており、深さは最深部で25cmを測る。壁面は北壁で外傾しながら急に立ち上がり最深部で10cmを測る。長軸方位はＮ－19°-Ｅをとる。

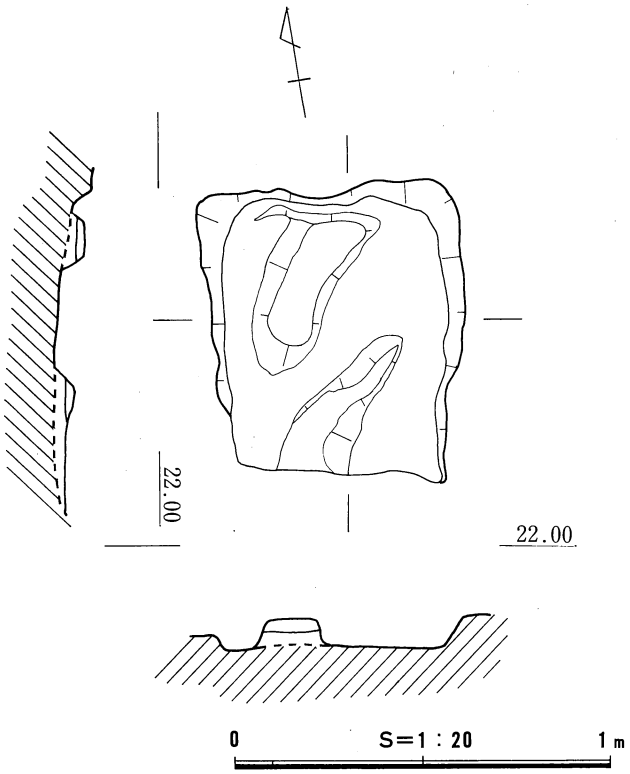
遺物は焼土面の西側で土師質土器が検出された。土師質土器は皿の底部の一部と考えられるが図化はできなかった。その他、焼骨が埋土中から検出されたが少量で風化が激しく図化できなかった。




挿図244　SK-29 実測図

【SK-30】

丘陵南側のやや狭くなる尾根の平坦部で検出された。尾根中央よりやや西にあり、SK-31の西約1mに位置する。南壁側が一部流失していると考えられるが、平面形は上面で隅丸長方形を呈すと考えられる。規模は短軸65cm、長軸は80cm内外を測ると推定される。底面はほぼ平坦で隅丸長方形を呈すと考えられる。規模は短軸59cm、長軸は55cm内外を測ると推定される。底面には火熱を受け赤褐色に変色した焼土面がみられた。焼土上面の高さは残存する掘り方上面の高さとほぼ同じである。壁面は外傾しながら急に立ち上がり、最深部で8cmを測る。長軸方位はN－10°-Eをとる。



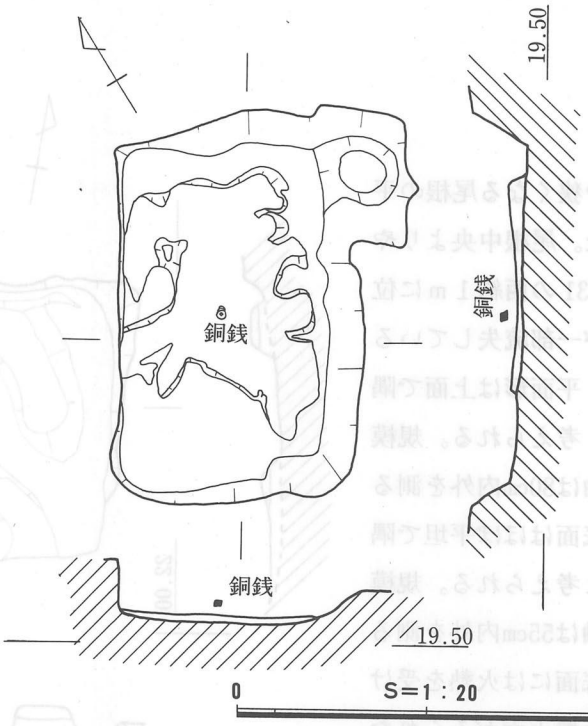

挿図245　SK-30 実測図

遺物は検出されなかった。

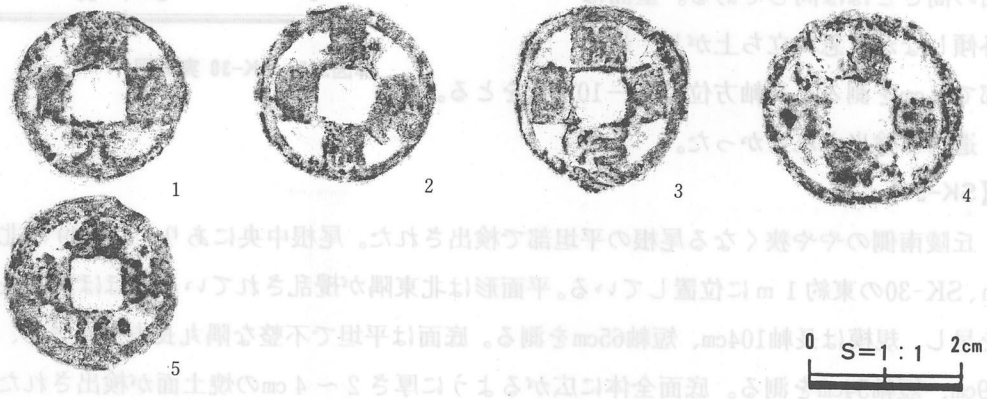
【SK-31】

丘陵南側のやや狭くなる尾根の平坦部で検出された。尾根中央にあり、SK-29の北約1m、SK-30の東約1mに位置している。平面形は北東隅が攪乱されているがほぼ隅丸長方形を呈し、規模は長軸104cm、短軸65cmを測る。底面は平坦で不整な隅丸長方形を呈し、長軸89cm、短軸54cmを測る。底面全体に広がるように厚さ2～4cmの焼土面が検出された。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、最深部で15cmを測る。長軸方位はN－22°-Eをとる。

遺物は底面中央の焼土面の上で銅銭が検出された。銅銭は底面からやや浮いた状態で、5枚重なって検出された。また、埋土中に焼骨が検出されたが細片で風化がひどく図化できなかった。その他の遺物は検出されなかった。




挿図246　SK-31 実測図




挿図247　SK-31 出土銅銭

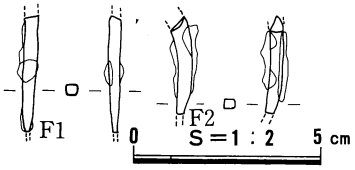
表33　SK-31 出土銅銭一覧表

| No. | 銅銭名 | 国名 | 初鋳年(西暦) | 書体 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 開元通宝 | 唐 | 621年 | 楷書 | |
| 2 | 皇宋通宝 | 北宋 | 1039年 | 篆書 | |
| 3 | 熙寧元宝 | 北宋 | 1068年 | 篆書 | |
| 4 | 不明 | | —— | —— | |
| 5 | 不明 | | —— | —— | |

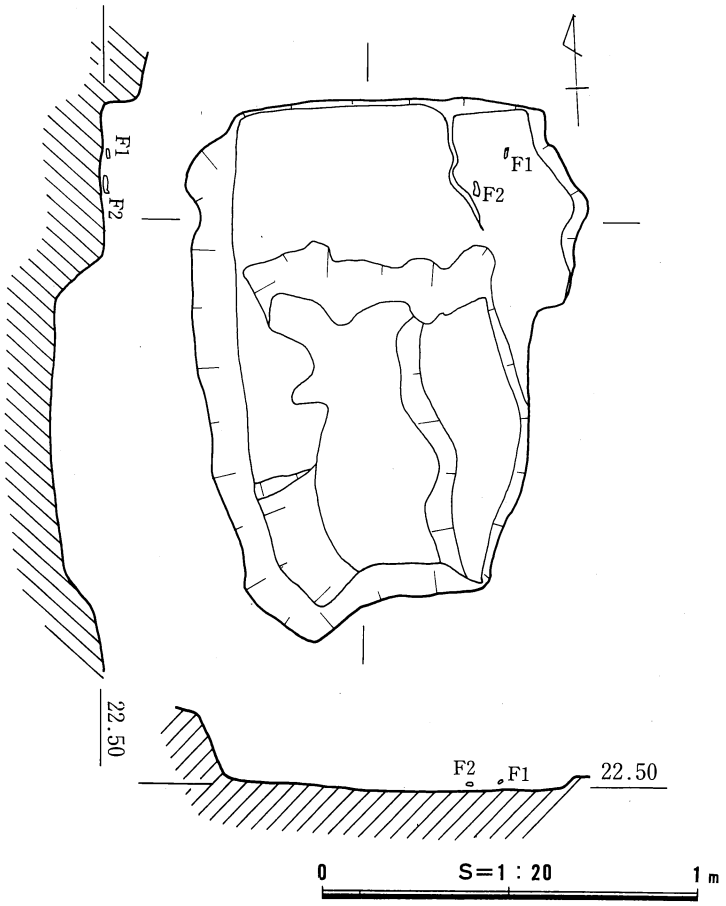
【SK-36】

丘陵中央の尾根の平坦部で検出された。SK-35の北約2ｍ、SK-69の南約3ｍに位置している。土壙は南側が攪乱されていて原形をとどめていないと考えられるが、残存部から推定して、平面形は上面でやや不整な隅丸長方形を呈すと考えられる。規模は短軸100cm、長軸は推定で135cm内外を測ると考えられる。底面は南側が攪乱されて不整形だが、北側及び西壁際で火熱を受け硬くなった平坦面が残っている。残存部から推定して底面の平面形はやや不整な隅丸長方形を呈し、規模は短軸89cm、長軸は推定で120cm内外を測ると考えられる。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、最深部で9 cmを測る。長軸方位はＮ－4°-Ｅをとる。

遺物は底面の北東隅で鉄釘が2本分検出された。また、埋土中に焼骨片が少量みられたが風化がひどく採集できなかった。




挿図248　SK-36 出土鉄釘（S＝1/2）

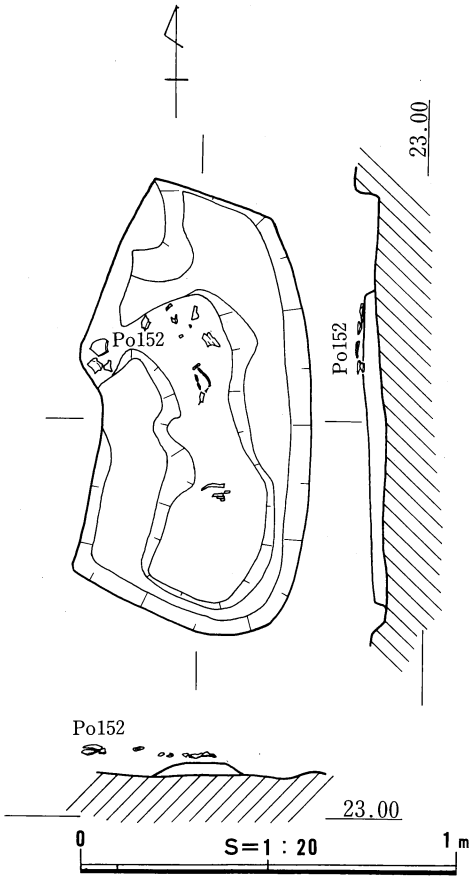



挿図249　SK-36 実測図

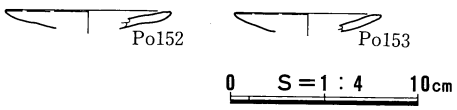
【SK-40】

丘陵中央の尾根の平坦部で検出された。尾根の東側にあたり、調査区の西端に位置する。他の土壙とは離れており、SK-69の北約8.5m、SK-46の南約8mに位置する。西側は不明だが東側に土壙は検出されていない。土壙の西側が流失して全容は明らかでないが残存部から推定して平面形は上面で隅丸長方形を呈すると考えられる。規模は長軸で116cmを測る。短軸は不明だが60cmは越えると考えられる。底面は残存部から推定すると、平坦で隅丸長方形を呈すと考えられる。規模は長軸で110cm、短軸は不明だが50cmを越えると考えられる。底面には厚さ5cm内外の焼土が広がっていた。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、最深部で6cmを測る。長軸方位はN－1°-Eをとり、ほぼ真北を向く。

遺物は焼土面の上で土師質皿と人骨が検出された。土師質皿は底面の西側でPo152と掘り下げ中にPo153が検出された。いづれも完形ではない。人骨は焼骨で北側に頭骨、上腕骨片、南側に下肢骨片が検出された。




挿図250　SK-40 実測図

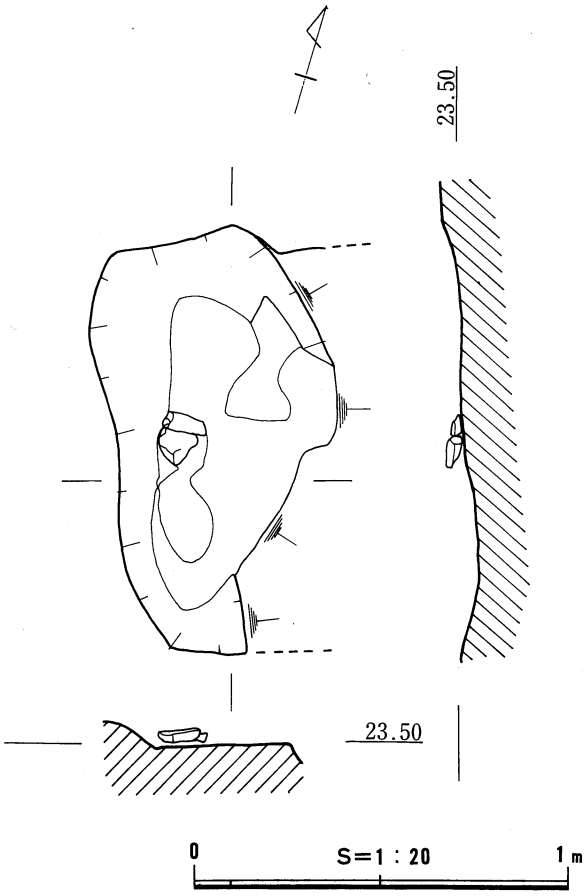



挿図251　SK-40 出土土器（S＝1/4）

【SK-46】

丘陵中央付近の尾根中央よりやや東側のゆるやかな斜面で検出された。SK-67の南約1m、SK-40の北約8mに位置する。土壙は東側が流失しており、全容は明らかでないが残存部から推定して平面形は上面でやや不整な隅丸長方形を呈すと考えられる。規模は長軸で115cmを測るが、短軸は不明である。底面は全体に火熱を受け変色しており、ほぼ平坦で、長軸70cmを測る。短軸は不明である。壁面はゆるやかに立ち上がり、最深部で7cmを測る。長軸方位はN－16°-Wをとる。

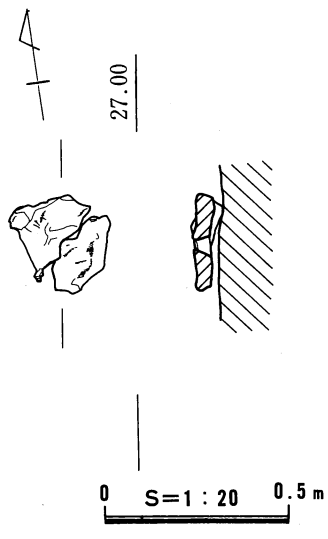
遺物は検出されなかったが、底面の西壁際で焼けた自然角礫が2つ検出された。




挿図252　SK-46 実測図

【SK-54】

丘陵北側の尾根中央より東側のゆるやかな斜面で検出された。掘り方は流失しており確認できなかったが、焼けた自然角礫が２つ平面的に置かれた状態で検出された。他の火葬墓で底面に自然角礫を置いた例があり、遺物は検出されていないがこの場で火葬が行われたと考えられる。

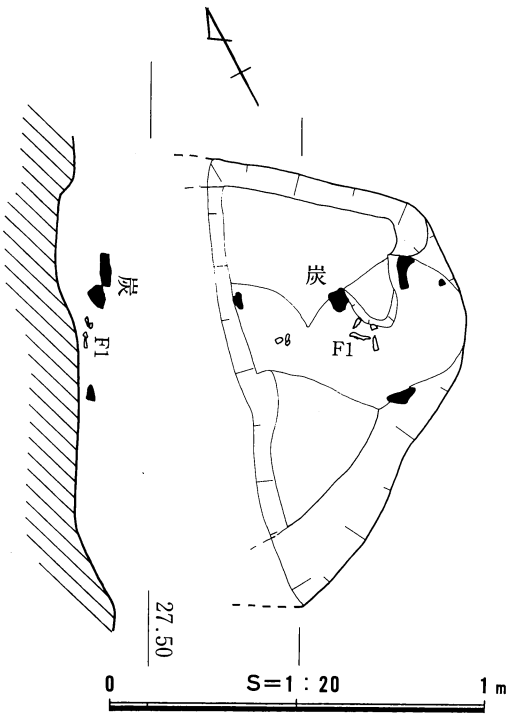



挿図253　SK-54 実測図

【SK-57】

丘陵北側の尾根より東側に下がったゆるやかな斜面で検出された。SK-58の南約1mに位置している。SK-57を南端にしてSK-63まで7基の火葬墓が等高線に沿ってほぼ等間隔で並んでいる。土壙の西側が調査区域外で調査していないため平面形、規模等は不明である。検出された底面はほぼ平坦で中央付近に火熱を受け変色した焼土面が広がっている。壁面はゆるやかに立ち上がり、最深部で10cmを測る。

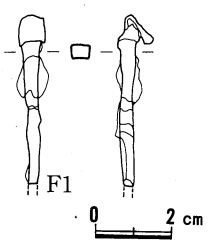
遺物は焼土面の上で鉄釘と人骨が検出されている。鉄釘は焼土面の中央で1本検出された。人骨は焼骨で、鉄釘の周辺とその西側で少量検出されたが、そのうち鉄釘周辺にある骨片の中に頭骨片が検出された。その他、炭が焼土面の上に散在していたが、材質は不明である。



挿図254　SK-57 実測図

【SK-58】

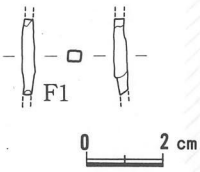
丘陵北側の尾根よりやや東側に下がったゆるやかな斜面で検出された。SK-57の北約1m、SK-59の南約1mに位置している。平面形は上面で隅丸方形を呈し、長軸100cm、短軸86cmを測る。底面は平坦で隅丸方形を呈し、長軸79cm、短軸69cmを測る。壁面は急に立ち上がり、最深部で11cmを測る。長軸方位はN－9°-Eをとる。



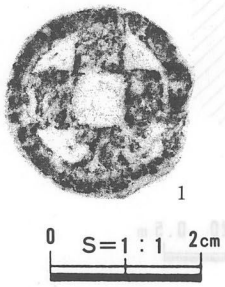
挿図255 SK-57 出土鉄釘（S＝1/2）

底面は20cm大から10cm前後の角礫による平面的な配石が施されている。角礫はすき間をもってていねいに配石されており、壁面に対しても間隔があけられている。角礫上面は火熱を受けて変質している。この配石は火葬の効率を上げるために施されたと考えられる。

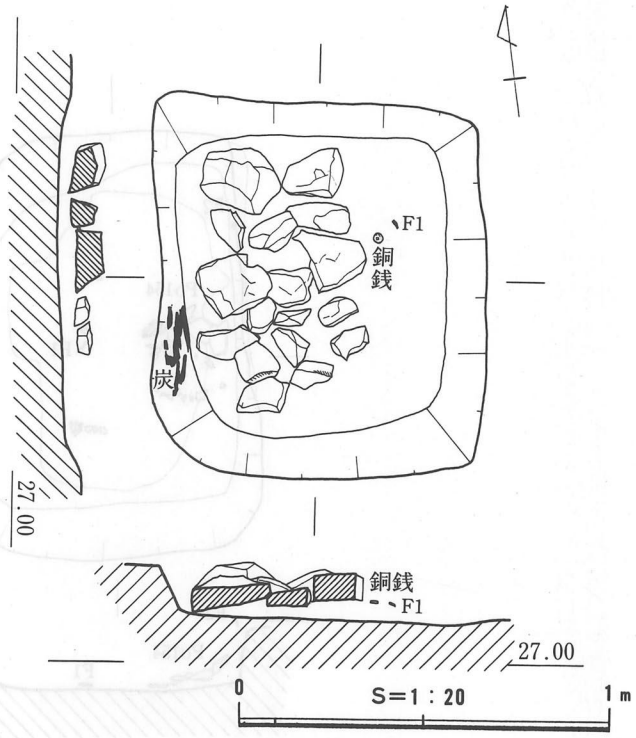
遺物は底面の配石の東側で鉄釘1本と銅銭1枚が検出された。その他、西壁で多くの炭が検出されたが材質は不明である。




挿図256　SK-58 出土鉄釘（S＝1/2）




挿図257　SK-58 出土銅銭




挿図258　SK-58 実測図

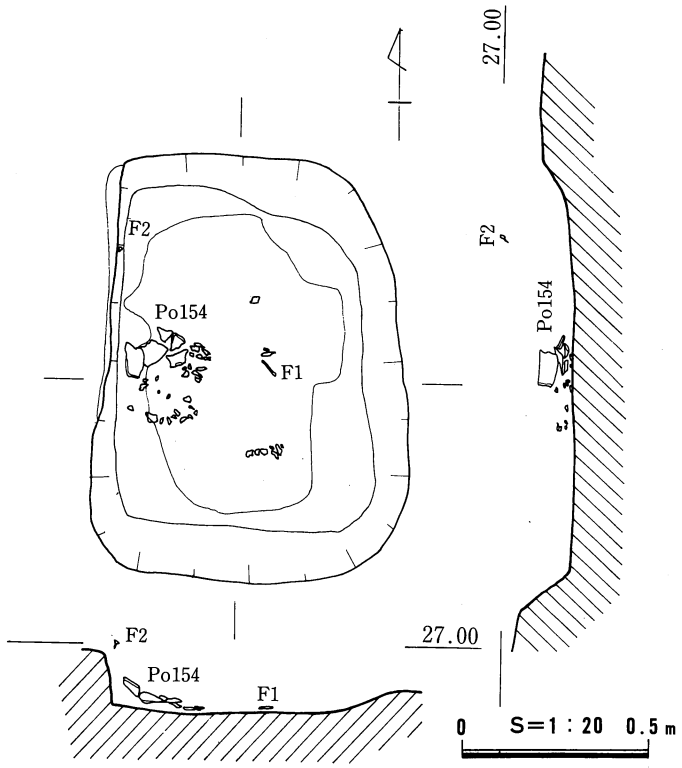
表34　SK-58 出土銅銭一覧表

| No. | 銅銭名 | 国名 | 初鋳年(西暦) | 書体 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 開元通宝？ | 唐 | 621年 | 楷書 | |

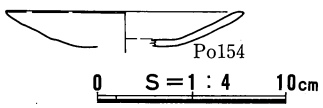
【SK-59】

丘陵北側の尾根よりやや東側に下がったゆるやかな斜面で検出された。SK-58の北約1m、SK-60の南約1.5mに位置する。平面形は上面でやや不整な隅丸長方形を呈し、長軸113cm、短軸78cmを測る。底面は平坦でやや不整な隅丸長方形を呈し、長軸86cm、短軸64cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、最深部で15cmを測る。西壁と底面の広範囲で火熱を受け変色した焼土面がみられる。長軸方位はN－4°-Eをとる。

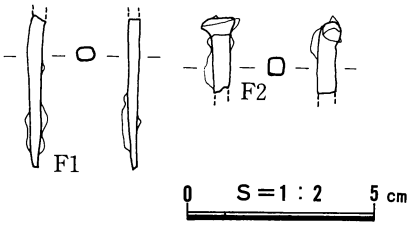
遺物は鉄釘、土師質土器、人骨が検出された。鉄釘は底面中央で1本、西壁の北側で底面から16cm浮いた状態で1本検出された。土師質土器は、底面中央の西壁側で土師質皿片(Po154)が検出された。人骨は焼骨で焼土面の上に散在して検出された。焼土面の西側で土器の周辺には頭骨、上腕骨が、南側で下肢骨が検出されている。




挿図259　SK-59 実測図




挿図260　SK-59 出土土器(S=1/4)



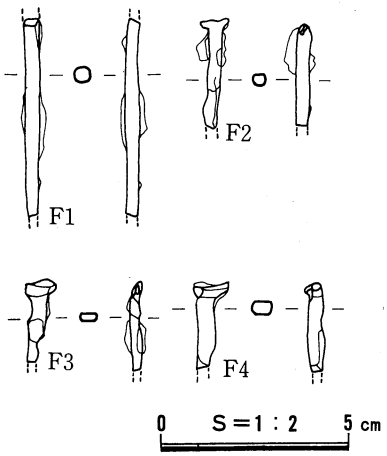

挿図261　SK-59 出土鉄釘(S=1/2)

**【SK-60】**

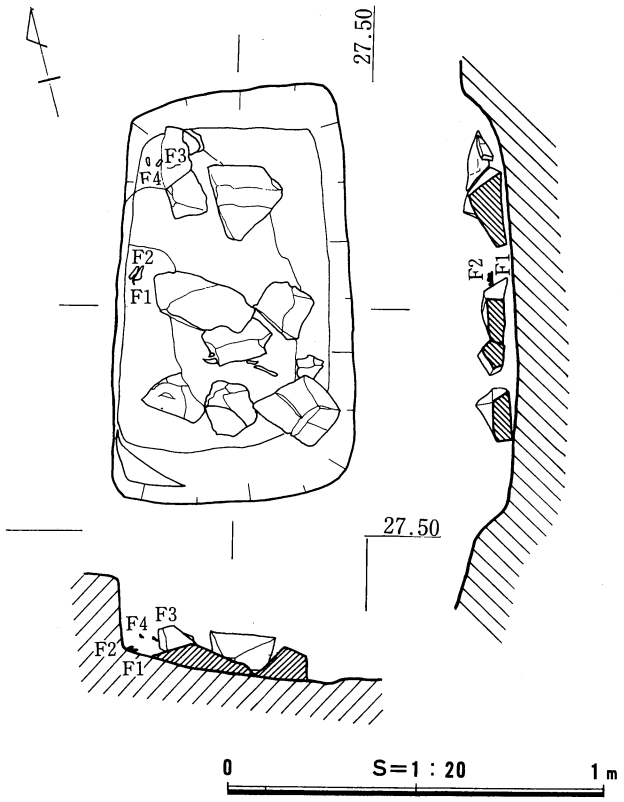
丘陵北側の尾根よりやや東側に下がったゆるやかな斜面で検出された。SK-59の北1.5m、SK-61の南約0.8mに位置する。平面形は上面でやや不整な長方形を呈し、長軸109cm、短軸69cmを測る。底面は平坦で長方形を呈し、長軸85cm、短軸54cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、最深部で20cmを測る。西壁と底面の広範囲で火熱を受け変色した焼土面がみられる。長軸方位はN－14°-Eをとる。

底面には30cm大から10cm前後の角礫による平面的な配石が施されている。角礫は上面が火熱を受け変色しており、すき間をもって配石されている。この配石は火葬の効率を上げるためと考えられる。配石はSK-58と比較すると雑である。

遺物は鉄釘が底面の北西隅で2本、西壁際で2本検出された。人骨は焼骨で骨片が少量焼土面の上で検出された。




挿図262　SK-60 出土鉄釘(S=1/2)



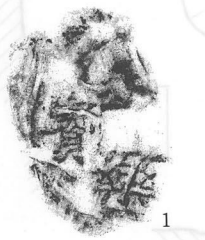

挿図263　SK-60 実測図

【SK-61】

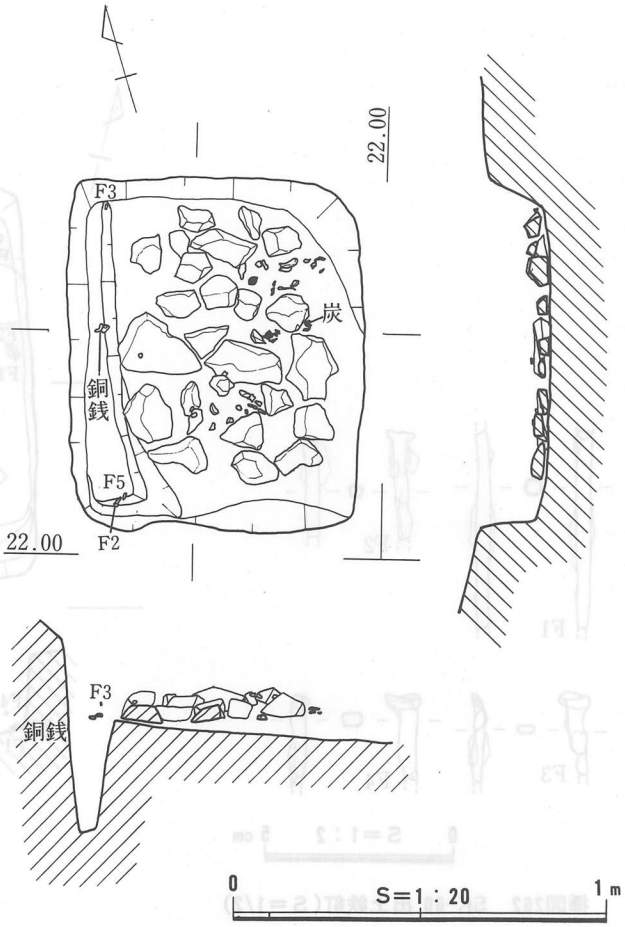
丘陵北側の尾根よりやや東側に下がったゆるやかな斜面で検出された。SK-60の北約0.8m、SK-62の南約1mに位置する。東壁側が一部流失しているが、平面形は上面で隅丸方形を呈すと考えられる。規模は長軸92cm、短軸は80cm内外を測る。底面はやや不整な隅丸方形を呈し、長軸83cm、短軸73cmを測る。底面には西壁に沿って長さ80cm、幅10cm前後の溝が掘り込まれている。溝はほぼ垂直に掘り込まれており、最深部で底面から30cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、最深部で16cmを測る。長軸方位はN－15°-Eをとる。

底面には20cm大から5cm前後の角礫による平面的な配石が施されている。角礫はすき間をもってていねいに配石され、その範囲で焼土面が広がっている。配石は火葬の効率を上げるために施されたと考えられる。

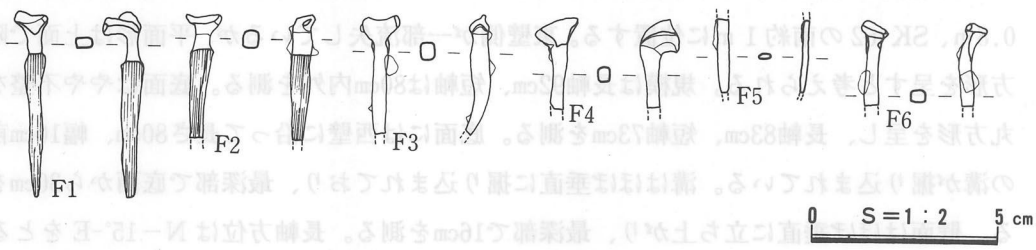
遺物は鉄釘、銅銭、人骨が検出された。鉄釘は底面の北西隅と南西隅で3本検出された。また、原位置は確定できないが、溝の埋土中から3本検出されている。銅銭は西壁寄りで3枚分検出されたが、火熱を受けて変形し現形を保っていない。人骨は焼骨で焼土面及び角礫の上で検出された。北東側に頭骨が、南側で下肢骨が検出されている。




挿図264　SK-61 出土銅銭




挿図265　SK-61 実測図



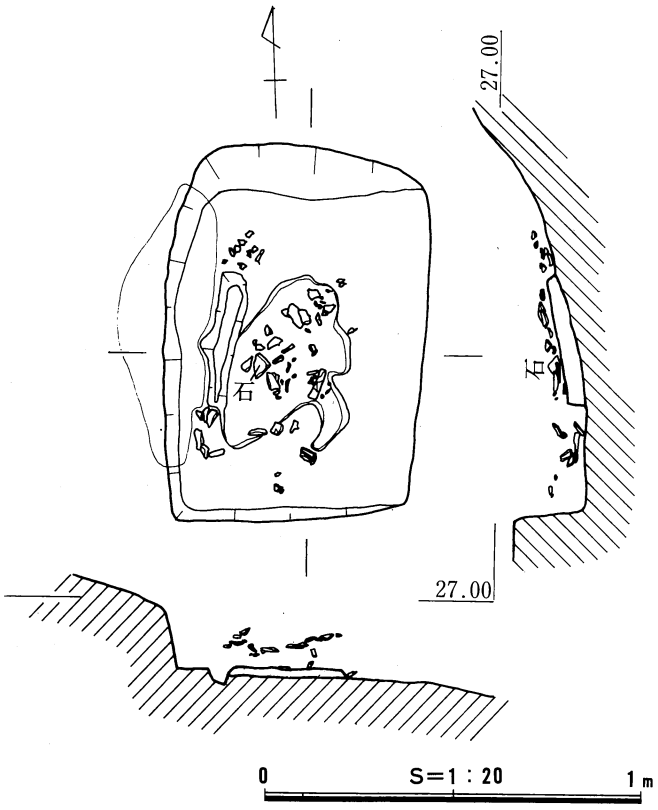

挿図266　SK-61　出土鉄釘(S=1/2)

表35　SK-61 出土銅銭一覧表

| No. | 銅銭名 | 国名　初鋳年(西暦) | 書体 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 永楽通宝 | 明　1408年 | 楷書 | |
| 2 | 不明 | —— | —— | |
| 3 | 不明 | —— | —— | |

【SK-62】

丘陵北側の尾根よりやや東側に下がったゆるやかな斜面で検出された。SK-63の南約1ｍ、SK-61の北約1ｍに位置する。東壁側が流失しているが、残存部から平面形は上面で隅丸長方形を呈すると考えられる。規模は長軸100cm、短軸は70cm内外を測る。底面はほぼ平坦でやや不整な隅丸長方形を呈し、長軸82cm、短軸は65cm内外を測る。底面の西壁側に長さ40cm、幅8cm前後、深さ4cmの不整の掘り込みがみられる。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、最深部で19cmを測る。長軸方位はＮ－2°-Ｅをとる。底面中央部と西壁側に火熱を受け変色した焼土面がみられる。



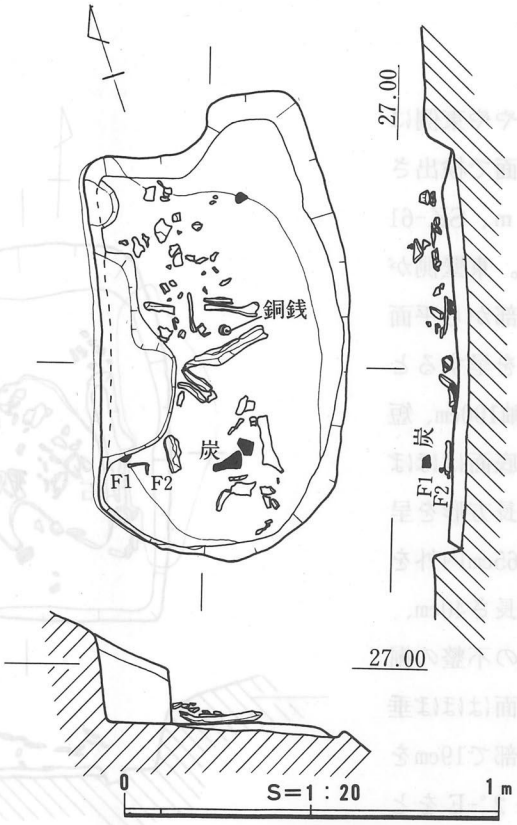

挿図267　SK-62 実測図

遺物は人骨が検出された。人骨は焼骨で、焼土面を中心に底面に散在した状態で検出された。主に底面の北側で頭骨片、南側で下肢骨片が検出されている。

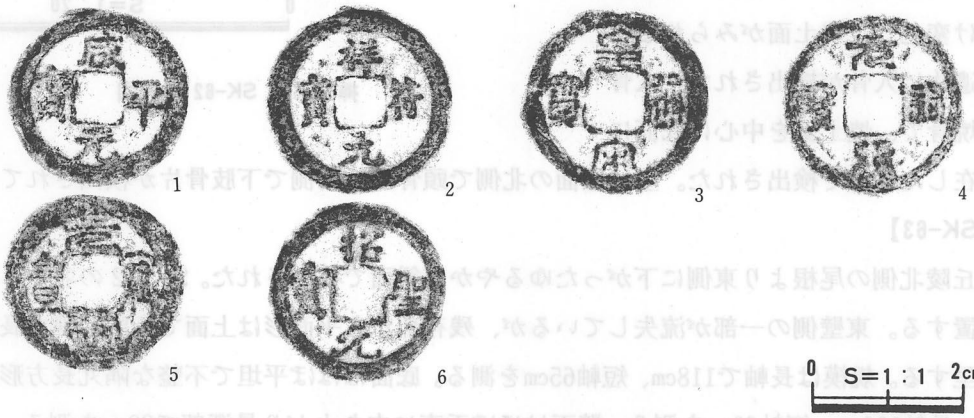
【SK-63】

丘陵北側の尾根より東側に下がったゆるやかな斜面で検出された。SK-62の北約1ｍに位置する。東壁側の一部が流失しているが、残存部から平面形は上面で不整な隅丸長方形を呈する。規模は長軸で118cm、短軸65cmを測る。底面はほぼ平坦で不整な隅丸長方形を呈し、長軸100cm、短軸60cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり最深部で22cmを測る。底面の広範囲に及び、火熱を受けて赤褐色に変色した焼土面がみられた。また、西壁も変色しており、西壁上縁付近にも焼土面が広がっている。長軸方位はＮ－20°-Ｅをとる。

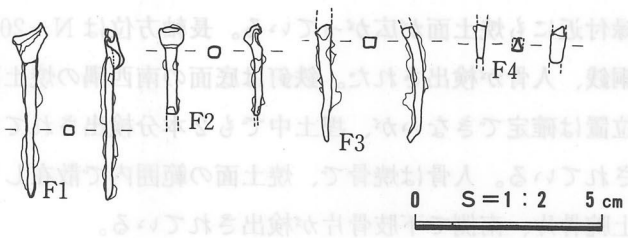
遺物は鉄釘、銅銭、人骨が検出された。鉄釘は底面の南西隅の焼土面直上で2本検出された。また、原位置は確定できないが、埋土中でも2本分検出されている。銅銭は底面の中央で6枚検出されている。人骨は焼骨で、焼土面の範囲内で散在しており、主に北側で頭骨片、中央で上腕骨片、南側で下肢骨片が検出されている。




挿図268　SK-63 実測図




挿図269　SK-63 出土銅銭




挿図270　SK-63 出土鉄釘（S＝1/2）

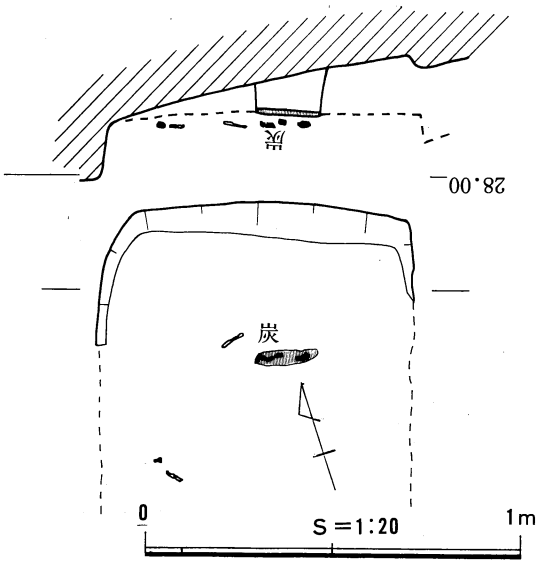
表36　SK-63 出土銅銭一覧表

| No. | 銅銭名 | 国名 | 初鋳年(西暦) | 書体 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 咸平元宝 | 北宋 | 998年 | 楷書 | |
| 2 | 祥符元宝 | 北宋 | 1008年 | 楷書 | |
| 3 | 皇宋通宝 | 北宋 | 1039年 | 篆書 | |
| 4 | 元祐通宝 | 北宋 | 1086年 | 篆書 | |
| 5 | 元祐通宝 | 北宋 | 1086年 | 篆書 | |
| 6 | 紹聖元宝 | 北宋 | 1094年 | 楷書 | |

【SK-64】

丘陵北側の尾根よりやや東側に下がったゆるやかな斜面で検出された。調査区の西端にあたり、SK-63の北西約2mに位置する。残存状態が悪く、北壁側と西壁、東壁の一部がわずかに残存していたにすぎない。残存部から平面形態は隅丸方形か隅丸長方形を呈すると考えられる。規模は東西方向で上面83cm、底面77cmを測る。南北方向は80cmを越えると考えられるが不明である。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、西壁側の最深部で14cmを測る。

底面の中央付近に火熱を受けて赤褐色に変色した焼土面が一部みられ、炭が残っていた。また、焼骨が焼土面の北西側と底面の南西側で数片検出された。焼骨は腕か足の骨の一部とみられるが、いずれも細いものであった。その他の遺物は検出されなかった。

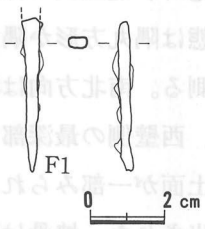



挿図271　SK-64 実測図

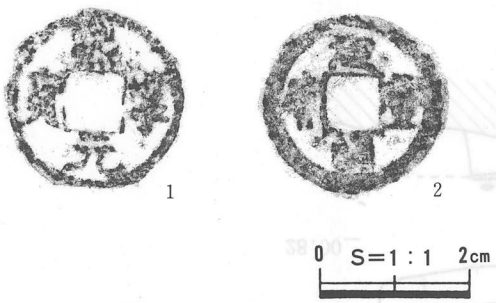
【SK-65】

丘陵北側の尾根より東側にやや下がったゆるやかな斜面で検出された。調査区の最北端にあり、SK-64の北東約2.5mに位置する。平面形は上面で不整な長方形を呈し、長軸68cm、短軸50cmを測る。底面は南側が一部攪乱されているがほぼ平坦で、不整な長方形を呈する。規模は長軸58cm、短軸45cmを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、最深部で9cmを測る。東壁は一部を除いて流失している。長軸方位はN－2°-Eをとる。

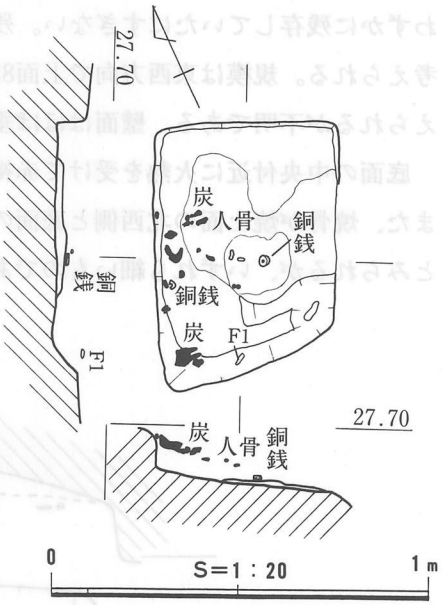
底面の中央あたりに広く火熱を受けて赤褐色に変色した焼土面がみられる。焼土面のほぼ中央で銅銭2枚と焼骨が検出された。銅銭はこの他に西壁際で焼けて原形をとどめないものが1枚分検出された。焼骨は、足か腕の骨の一部と考えられ、細いものであった。その他鉄釘が1本南壁際で検出された。また、焼土面及び西壁側に炭が多くみられた。




挿図272　SK-65 出土鉄釘(S＝1/2)




挿図273　SK-65 出土銅銭




挿図274　SK-65 実測図

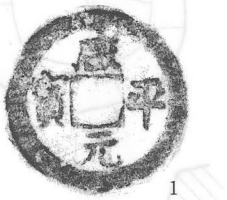
表37　SK-65 出土銅銭一覧表

| No. | 銅銭名 | 国名 | 初鋳年(西暦) | 書体 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 熙寧元宝 | 北宋 | 1068年 | 篆書 | |
| 2 | 元豊通宝 | 北宋 | 1078年 | 篆書 | |
| 3 | 不明 | | ―― | ―― | |

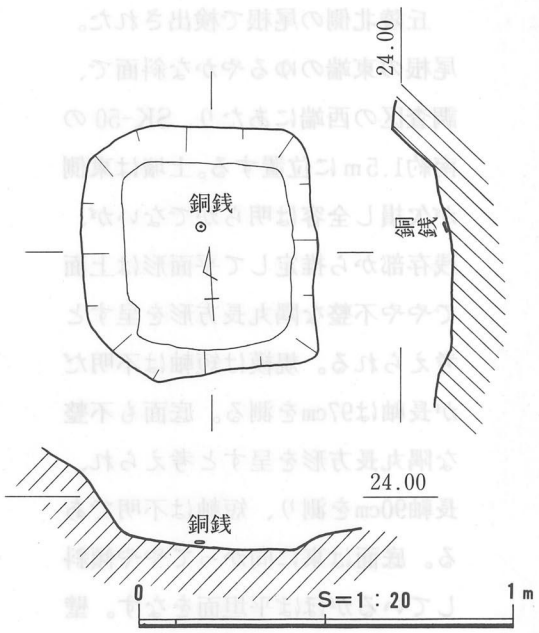
【SK-67】

丘陵中央付近の尾根よりやや東側に下ったゆるやかな斜面で検出され、SK-46の北東約1mに位置する。平面形は上面でやや不整な隅丸方形を呈し、長軸65cm、短軸62cmを測る。底面はほぼ平坦で隅丸方形を呈し、長軸50cm、短軸44cmを測る。壁面は外傾して約60°の角度をもって立ち上がる。長軸方位はN－2°-Eをとる。

遺物は底面の中央よりやや北側で銅銭1枚が検出された。その他の遺物は検出されなかった。顕著な焼土面はなかったが、埋土中に炭が少しあったこと、掘り方が浅いことから今回の調査では火葬墓に分類した。




挿図275 SK-67 出土銅銭




挿図276 SK-67 実測図

表38 SK-67 出土銅銭一覧表

| No. | 銅銭名 | 国名 | 初鋳年(西暦) | 書体 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 咸平元宝 | 北宋 | 998年 | 楷書 | |

【SK-69】

丘陵中央付近の尾根の東端部で検出された。SK-36の北約3m、SK-37の南西約1mに位置する。平面形は上面でやや不整な長楕円形を呈し、規模は長軸85cm、短軸50cmを測る。底面はやや不整な隅丸長方形を呈し、長軸52cm、短軸36cmを測る。底面の中央よりやや西側に深さ5cm程度の不整な溝があるが、その他はほぼ平坦面をなす。壁面は外傾して急な角度をもって立ち上がり、最深部で28cmを測る。長軸方位はN－10°-Eをとる。

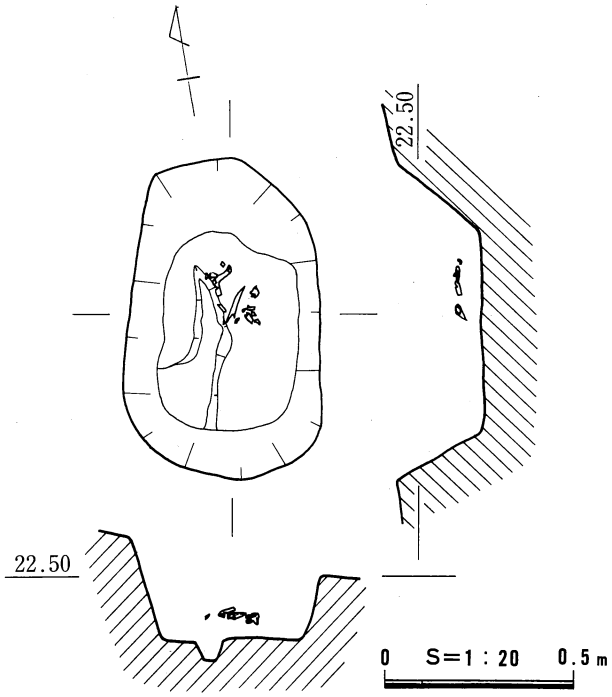
遺物は底面の北側から浮いた状態で人骨が検出された。人骨は焼骨で主に上腕骨と下肢骨片が検出された。その他の遺物は検出されなかった。火熱を受けた痕跡はみえなかったが、焼骨が検出されたので今回の調査では火葬墓に分類した。焼土面がみられないことから、他の場所で焼いた後にこの地に埋葬した可能性がある。

【SK-70】

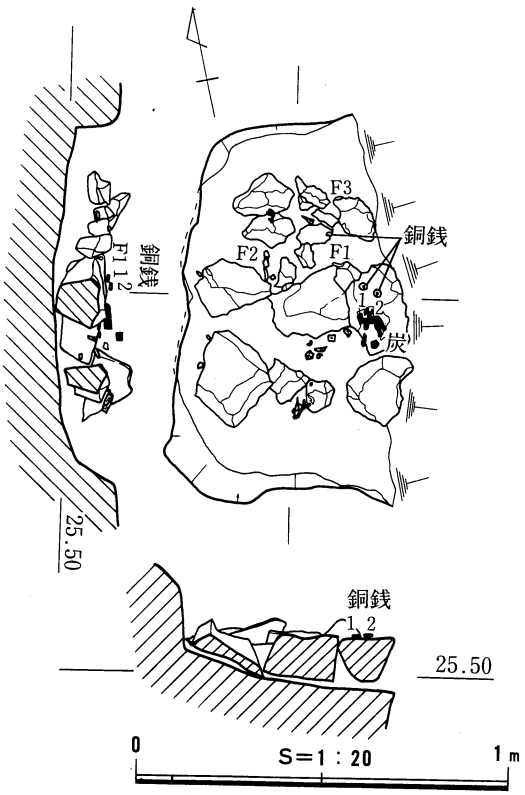
丘陵北側の尾根で検出された。尾根の東端のゆるやかな斜面で、調査区の西端にあたり、SK-50の南約1.5mに位置する。土壙は東側が欠損し全容は明らかでないが、残存部から推定して平面形は上面でやや不整な隅丸長方形を呈すと考えられる。規模は短軸は不明だが長軸は97cmを測る。底面も不整な隅丸長方形を呈すと考えられ、長軸90cmを測り、短軸は不明である。底面は東に向かってやや傾斜しているがほぼ平坦面をなす。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、最深部で15cmを測る。長軸方位はN－13°-Eをとる。

底面には20cm大から10cm前後の角礫による平面的な配石が施されている。角礫はすき間をもって配石されており、火葬の効率を上げるために施されたと考えられる。角礫の上面は火熱を受け変色しており、上部には炭も検出された。

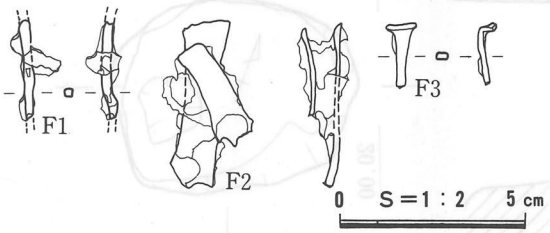
遺物は、銅銭、鉄製品、鉄釘、人骨が検出された。銅銭は角礫の上面で3枚検出された。そのうち1枚は破片で図化できなかった。鉄釘は底面の北側の角礫の上面で検出された。鉄製品は底面の西側で破片同士が重なってさびた状態で検出された。人骨は焼骨で、配石のある範囲に散在した状態で検出された。主に南側で下肢骨片が検出されている。



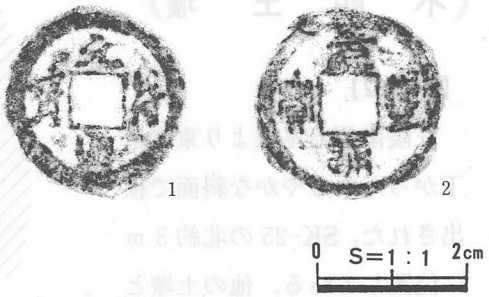

挿図277 SK-69 実測図




挿図278 SK-70 実測図




挿図279　SK-70 出土鉄釘・鉄製品(S=1/2)



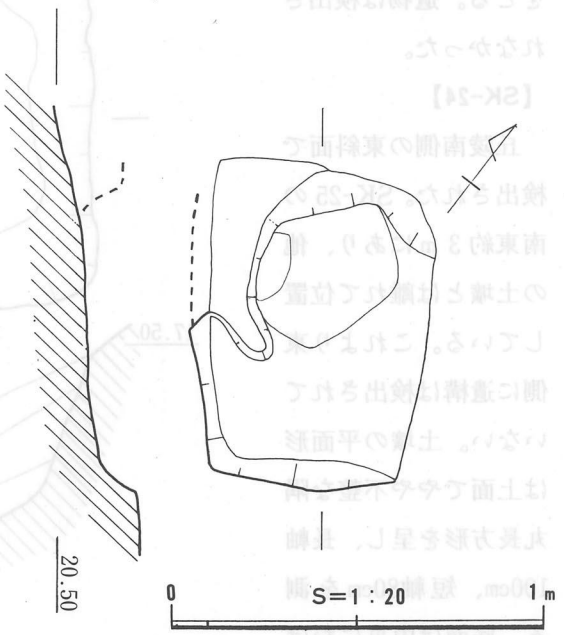

挿図280　SK-70 出土銅銭

表39　SK-70 出土銅銭一覧表

| No. | 銅銭名 | 国名 | 初鋳年(西暦) | 書体 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 元豊通宝 | 北宋 | 1078年 | 篆書 | |
| 2 | 元符通宝 | 北宋 | 1098年 | 楷書 | |
| 3 | 不明 | | —— | —— | |

【SK-73】

丘陵南側の尾根の平坦部で検出された。尾根の西端にあたり、SK-76の南西約0.5mに位置する。残存状態が悪く、南壁と西壁の一部、底面の一部が検出されたのみである。残存部から推定すると、平面形は上面、底面とも隅丸長方形を呈すると考えられる。規模は不明だが、長軸80cm、短軸60cmは越えると考えられる。壁面は南壁側でみると約60°の角度をもって立ち上がり、最深部で10cmを測る。長軸方位はN−13°-Eをとる。底面の北側で径30cm程度の焼土面がみられるが、遺物は検出されなかった。

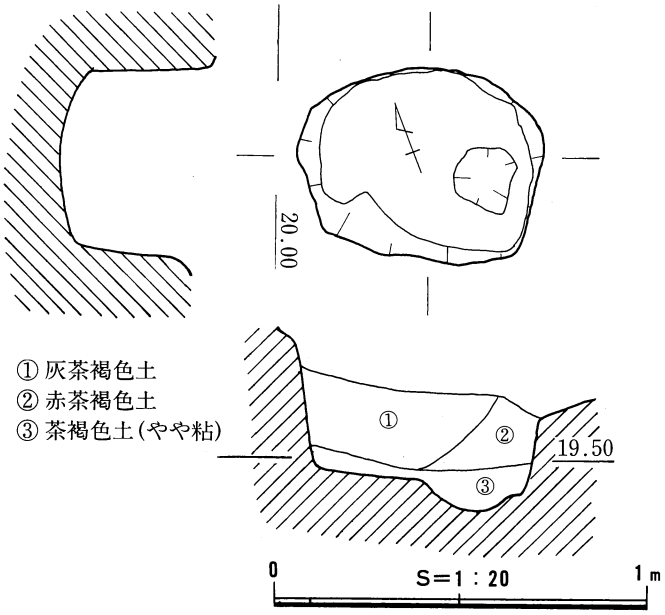



挿図281　SK-73 実測図

## 《不　明　土　壙》

**【SK-22】**

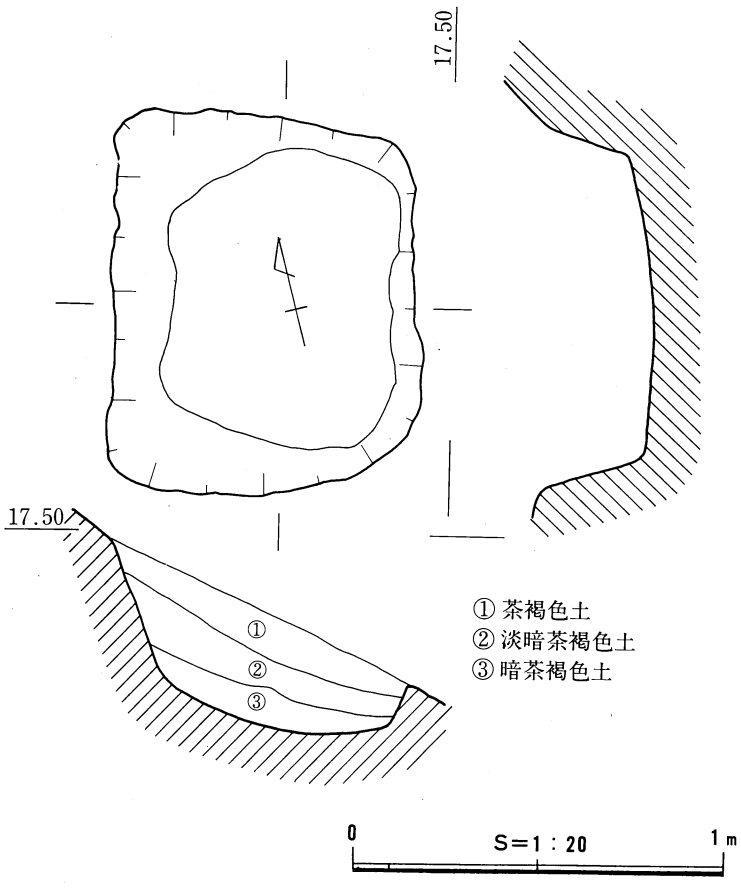
丘陵南側の尾根より東側に下がったゆるやかな斜面で検出された。SK-25の北約3mに位置している。他の土壙との間隔は広い。平面形は上面で不整な楕円形を呈し、長軸65cm、短軸50cmを測る。底面は不整な楕円形を呈し、長軸55cm、短軸44cmを測る。底面は中央に向けてゆるやかに傾斜し、南側に円形のへこみがみられる。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、最深部で32cmを測る。長軸方位はN－70°-Wをとる。遺物は検出されなかった。




挿図282　SK-22 実測図

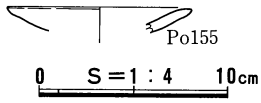
**【SK-24】**

丘陵南側の東斜面で検出された。SK-25の南東約3mにあり、他の土壙とは離れて位置している。これより東側に遺構は検出されていない。土壙の平面形は上面でやや不整な隅丸長方形を呈し、長軸100cm、短軸80cmを測る。底面は中央にむけてやや傾斜し、平面形




挿図283　SK-24 実測図

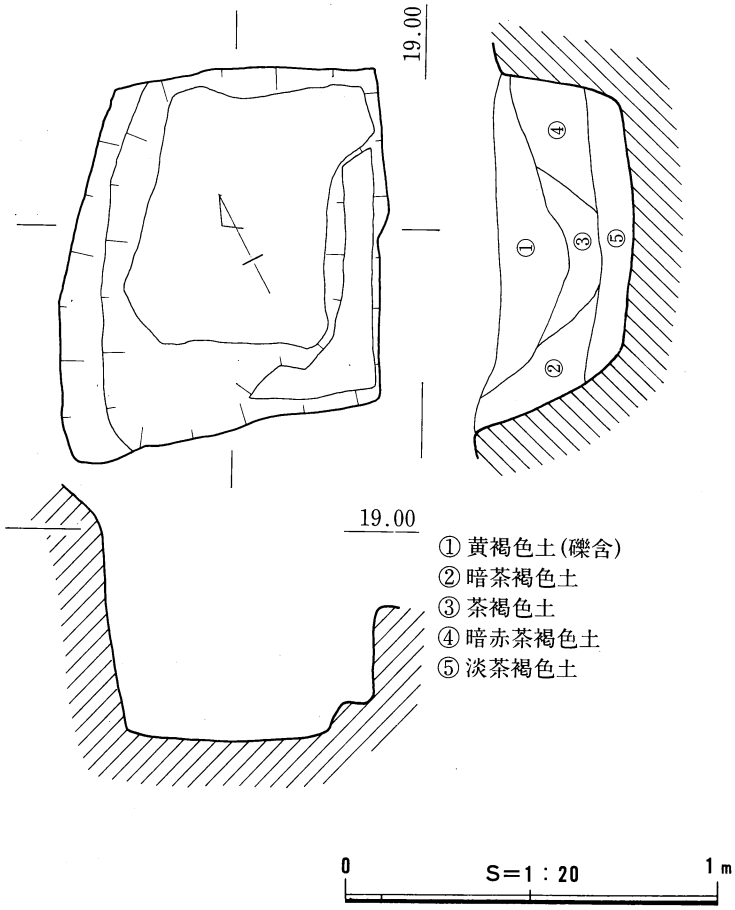
は不整な隅丸長方形を呈す。規模は長軸78cm、短軸58cmを測る。壁面は外傾して急に立ち上がり、最深部で38cmを測る。長軸方位はN－14°-Eをとる。土壙西側の斜面で土師質皿片(Po155)が1点検出されたが、この土壙に伴うものか、上部から流れたものか確定できなかったので、今回の調査では不明土壙に分類した。




挿図284 SK-24 近辺出土土器（S＝1/4）

【SK-25】

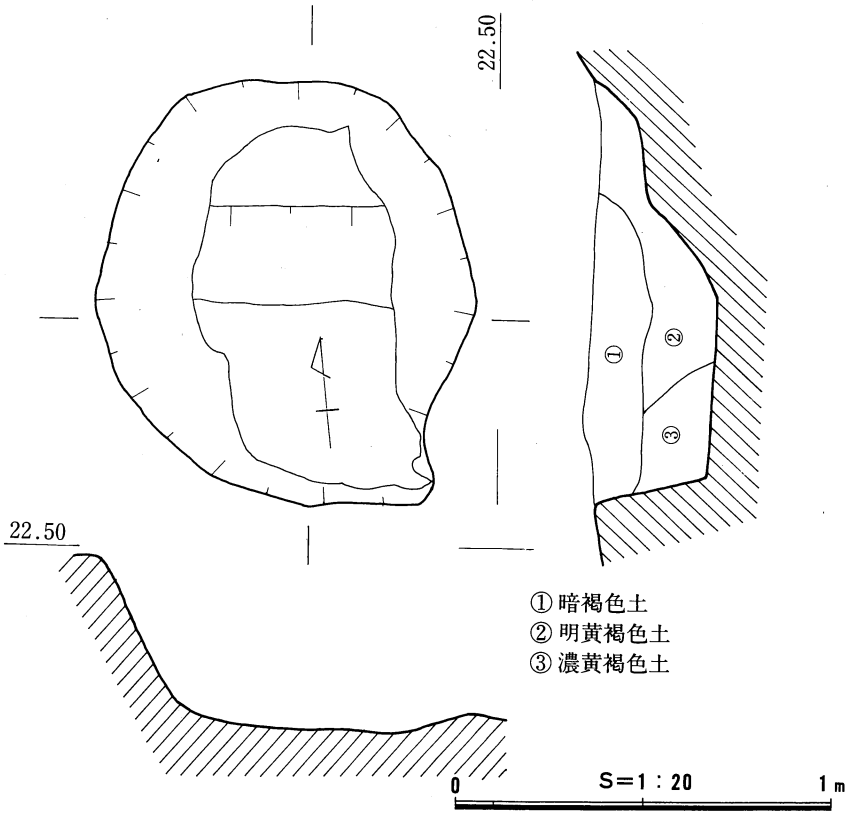
丘陵南側の尾根より東側に下がったゆるやかな斜面で検出された。SK-18の東約2m、SK-24の北東約3mに位置する。平面形は上面で不整長方形を呈し、長軸96cm、短軸81cmを測る。底面は不整長方形を呈し、長軸66cm、短軸50cmを測る。東壁側に幅10cm前後のテラス面を持つ。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、最深部で38cmを測る。長軸方位はN－29°-Eをとる。掘り方は全体的に雑である。遺物は検出されなかった。




挿図285 SK-25 実測図

【SK-45】

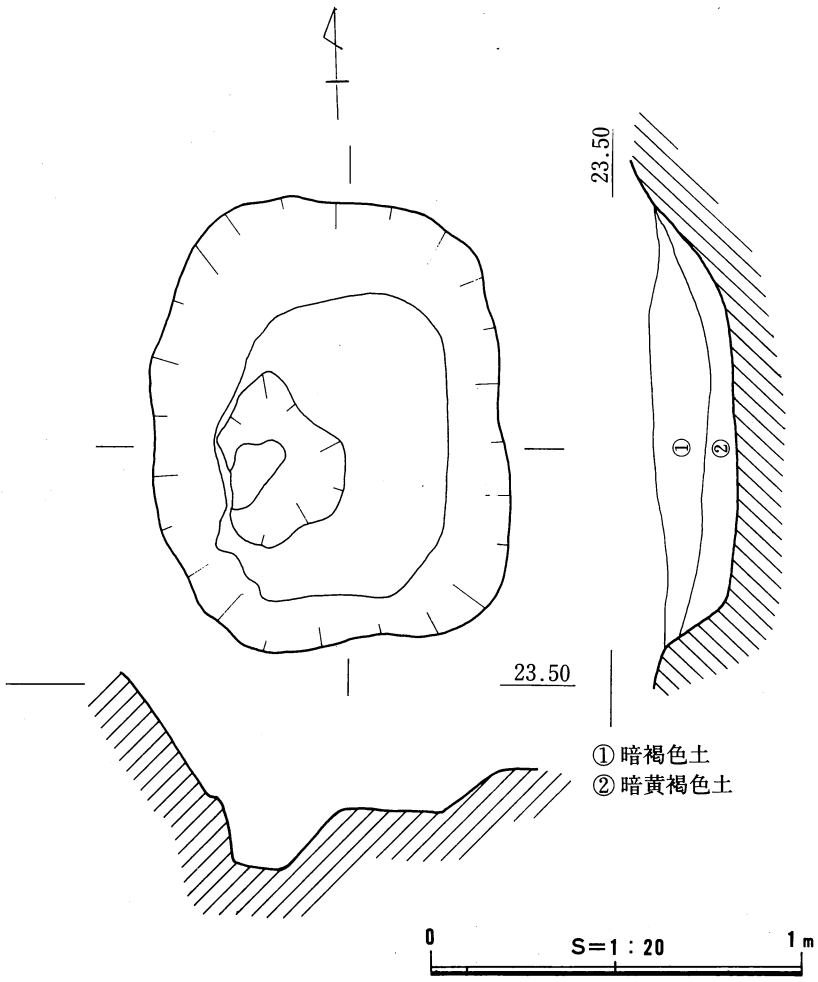
丘陵中央付近の東斜面で検出された。SK-40 の北東約5.5ｍに位置する。他の土壙とは離れた位置にある。平面形は上面で不整な楕円形を呈し、規模は長軸111cm、短軸100cmを測る。底面は不整な長楕円形を呈し、長軸92cm、短軸52cmを測る。底面は北側と南側で15cmの段差をもつ二段掘りになっている。壁面はやや外傾して急に立ち上がり、最深部で42cmを測る。長軸方位はＮ－７°-Ｅをとる。遺物は検出されなかった。




**挿図286　SK-45 実測図**

【SK-47】

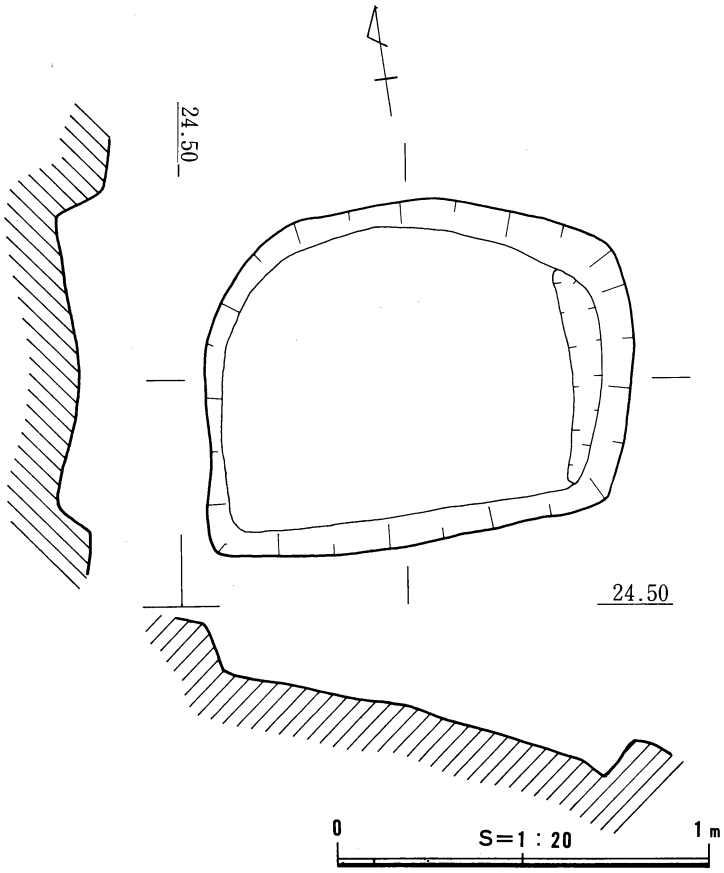
丘陵中央付近の尾根より東側にやや下がったゆるやかな斜面で検出された。SK-48 の南西側に隣接する。平面形は上面でやや不整な隅丸長方形を呈し、長軸116cm、短軸94cmを測る。底面はやや不整な隅丸長方形を呈し、長軸78cm、短軸61cmを測る。西壁際に不定形のへこみがみられる。壁面は斜めに立ち上がり、最深部で38cmを測る。長軸方位はＮ－３°-Ｅを取る。遺物は検出されなかった。




**挿図287　SK-47 実測図**

**【SK-49】**

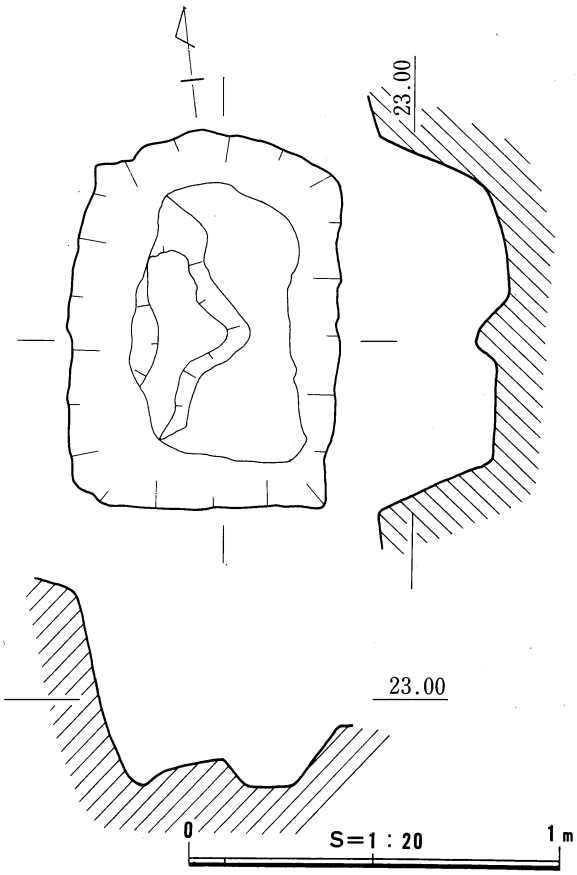
丘陵中央付近の尾根より東側のゆるやかな斜面で検出された。SK-48 の北約1.5ｍに位置する。平面形は上面でやや不整な隅丸長方形を呈し、長軸113cm、短軸91cmを測る。底面の平面形はやや不整な隅丸長方形を呈し、長軸93cm、短軸75cmを測る。底面は西から東に向けてゆるやかに傾斜している。壁面は斜めに立ち上がり、最深部で12cmを測る。長軸方位はＮ－100°-Ｅをとる。遺物は検出されなかった。




挿図288　SK-49 実測図

【SK-66】

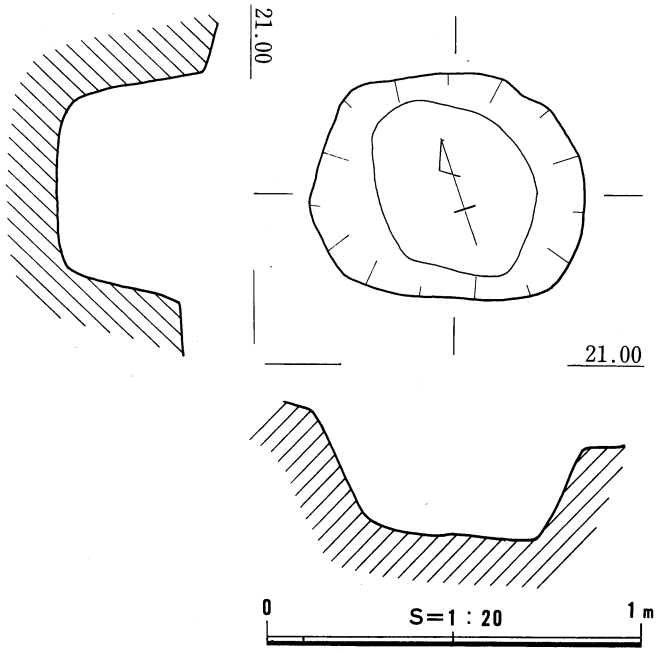
丘陵中央付近の尾根より東側に下がった斜面で検出された。SK-47 の東約1.5ｍに位置する。平面形は上面でやや不整な隅丸長方形を呈し、長軸100cm、短軸71cmを測る。底面は不整な隅丸長方形を呈し、長軸72cm、短軸40cmを測る。底面の西側は不整で凹凸の面をなす。壁面はやや外傾して急に立ち上がり、最深部で40cmを測る。長軸方位はＮ－７°-Ｅをとる。遺物は検出されなかった。




挿図289　SK-66 実測図

【SK-78】

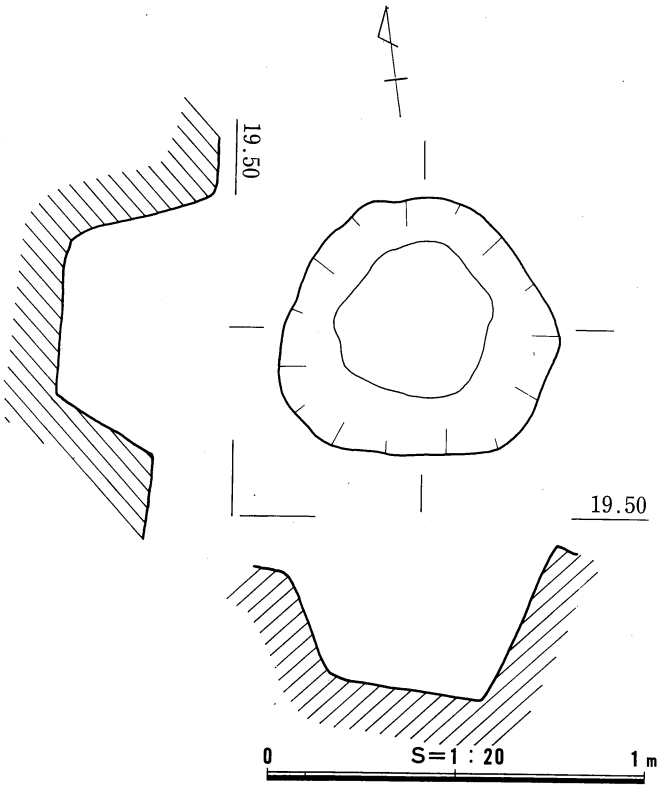
丘陵南側の尾根の平坦部で検出された。SK-21の南約1.5mに位置する。平面形は上面でやや不整な楕円形を呈し、長軸72cm、短軸60cmを測る。底面は不整な円形を呈し、径42cmを測る。底面はほぼ平坦である。壁面はやや外傾して急に立ち上がり、最深部で42cmを測る。長軸方位はN－70°-Wをとる。遺物は検出されなかった。




挿図290　SK-78 実測図

【SK-79】

丘陵南側の尾根の平坦部で検出された。尾根の南端寄りでSK-06南東約0.5mに位置する。平面形は上面で不整円形を呈し、南北方向で68cm、東西方向72cmを測る。底面は不整円形を呈し、南北方向で40cm、東西方向40cmを測る。底面は西から東に向けてやや傾斜している。壁面は外傾して急に立ち上がり、最深部で42cmを測る。遺物は検出されなかった。




挿図291　SK-79 実測図

## 《その他の遺物、遺構》

【五輪塔】

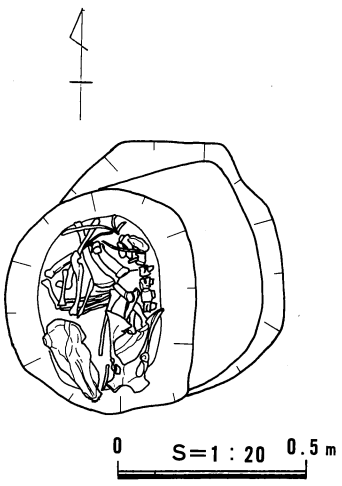
丘陵北側の東斜面で、SK-63の西側20cmの位置で出土した。空輪とと風輪が一石で造られているもので、風輪部の下部には火輪とつなぐための凸部が突出している。五輪塔に伴う遺構は検出されず、原位置を保っていないと考えられる。

【銅　銭】

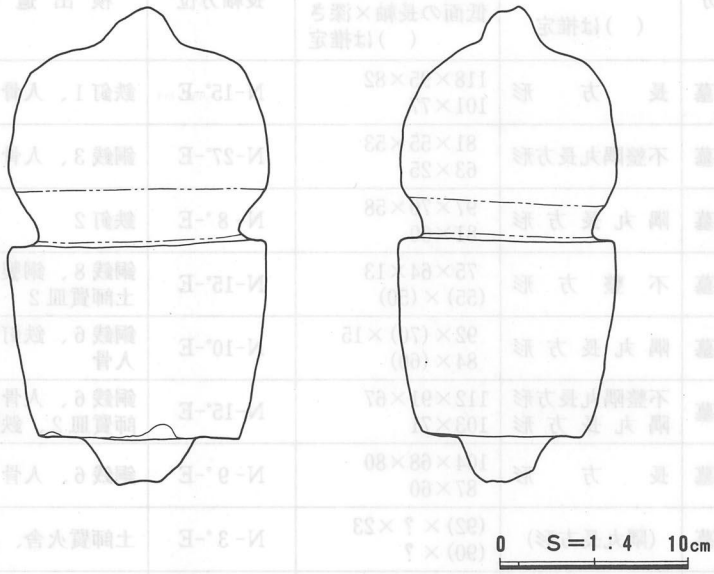
丘陵南側の西斜面の表土剥ぎ中に銅銭3枚が検出された。永楽通宝2枚、熙寧元宝1枚で、上部のSK-08かSK-09から流れたものと考えられる。

【SK-44】

丘陵南側の尾根の平坦部で検出された。SK-03の東約0.5mに位置する。上面規模60×50cm、底面規模45×32cm、深さ45cmの長楕円形の土壙内で子牛1頭分の骨が検出された。骨の残存状態から30～50年前の土壙と考えられる。




挿図292　SK-44 実測図




挿図293　五輪塔実測図(S=1/4)

挿図294　西斜面表採銅銭

表40　西斜面表採遺物出土銅銭一覧表

| No. | 銅銭名 | 国名 | 初鋳年(西暦) | 書体 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 18F北 | 熙寧元宝 | 北宋 | 1068年 | 篆書 | |
| 28F南 | 永楽通宝 | 明 | 1408年 | 楷書 | |
| 38F北 | 永楽通宝 | 明 | 1408年 | 楷書 | |

表41　中世墓一覧表(1)

| 土壙番号 | 区分 | 平面形態 ( )は推定 | 上面の長軸×短軸×深さ<br>低面の長軸×深さ ( )は推定 | 長軸方位 | 検出遺物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| SK-01 | 土葬墓 | 長方形 | 118×95×82<br>101×77 | N-15°-E | 鉄釘1、人骨 | |
| SK-02 | 土葬墓 | 不整隅丸長方形 | 81×55×53<br>63×25 | N-27°-E | 銅銭3、人骨 | |
| SK-03 | 土葬墓 | 隅丸長方形 | 97×70×58<br>81×60 | N-8°-E | 鉄釘2 | |
| SK-04 | 火葬墓 | 不整方形 | 75×64×13<br>(55)×(50) | N-15°-E | 銅銭8、銅製金具<br>土師質皿2 | |
| SK-05 | 火葬墓 | 隅丸長方形 | 92×(70)×15<br>84×(60) | N-10°-E | 銅銭6、鉄釘4<br>人骨 | |
| SK-06 | 土葬墓 | 不整隅丸長方形<br>隅丸長方形 | 112×91×67<br>103×71 | N-15°-E | 銅銭6、人骨、土師質皿2、鉄釘1 | 土師質皿は土壙外 |
| SK-07 | 土葬墓 | 長方形 | 104×68×80<br>87×60 | N-9°-E | 銅銭6、人骨 | |
| SK-08 | 火葬墓 | (隅丸長方形) | (92)×?×23<br>(90)×? | N-3°-E | 土師質火舎、人骨 | |
| SK-09 | 火葬墓 | (隅丸長方形) | (70)×(45)×13<br>63×(40) | N-9°-E | な し | 焼き土が少し残る |
| SK-10 | 土葬墓 | 隅丸長方形 | 110×85×50<br>90×65 | N-4°-E | 銅銭6、鉄釘7<br>土師質皿2 | |
| SK-11 | 土葬墓 | 隅丸長方形 | 118×73×98<br>99×67 | N-8°-E | 銅銭6、人骨<br>土師質皿2 | |
| SK-12 | 土葬墓 | 隅丸長方形 | 118×87×68<br>103×77 | N-0°-E | 土師質皿4 | 土器は掘り下げ中 |
| SK-13 | 土葬墓 | 長方形 | 118×84×75<br>100×85 | N-2°-E | 銅銭6、人骨<br>鉄釘2 | |
| SK-14 | 火葬墓 | 隅丸長方形 | 106×79×25<br>97×68 | N-12°-E | 銅銭17、鉄釘3<br>人骨 | 銅銭の数が一番多い |
| SK-15 | 火葬墓 | 不整隅丸方形<br>不整方形 | 116×102×19<br>109×94 | N-100°-E | 銅銭4、人骨 | |
| SK-16 | 火葬墓 | 隅丸長方形 | 122×80×25<br>103×70 | N-15°-E | 鉄釘4、人骨 | |
| SK-17 | 火葬墓 | 隅丸長方形 | 108×75×33<br>96×64 | N-13°-E | 鉄釘5、人骨 | |
| SK-18 | 火葬墓 | 不整隅丸長方形 | 94×67×20<br>85×58 | N-19°-E | 銅銭3、人骨 | |
| SK-19 | 土葬墓 | 不整長方形<br>長方形 | 110×75×70<br>100×60 | N-0°-E | 鉄釘2、人骨 | |
| SK-20 | 土葬墓 | 不整隅丸長方形<br>長方形 | 94×77×80<br>66×40 | N-5°-E | 鉄釘12、漆器片<br>土師質耳皿1 | |
| SK-21 | 火葬墓 | 長方形<br>隅丸長方形 | 111×79×20<br>105×72 | N-19°-E | 人骨 | |
| SK-22 | 不明 | 不整楕円形 | 65×50×32<br>55×44 | N-70°-W | な し | |

表42　中世墓一覧表(2)

| 土壙番号 | 区分 | 平面形態<br>(　)は推定 | 上面の<br>長軸×短軸×深さ<br>低面の長軸×深さ<br>(　)は推定 | 長軸方位 | 検出遺物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| SK-23 | 土葬墓 | 不整隅丸長方形<br>長方形 | 120×86×85<br>88×75 | N-19°-E | 銅銭6、鉄釘6<br>人骨 | |
| SK-24 | 不明 | 不整隅丸長方形 | 100×80×38<br>78×58 | N-14°-E | なし | 土壙外で<br>土師質皿1 |
| SK-25 | 不明 | 不整長方形 | 96×81×38<br>66×50 | N-29°-E | なし | |
| SK-26 | 土葬墓 | 不整隅丸長方形 | 109×67×89<br>93×60 | N-12°-E | なし | |
| SK-27 | 火葬墓 | 不整隅丸長方形 | 92×67×15<br>86×64 | N-18°-E | 銅銭1<br>土師質皿1 | |
| SK-28 | 土葬墓 | 不整隅丸長方形 | 81×71×46<br>50×38 | N-21°-E | 五輪塔（地輪） | |
| SK-29 | 火葬墓 | 隅丸長方形 | (135)×80×10<br>? | N-19°-E | 土師質皿1、人骨 | 土器は図化<br>できず |
| SK-30 | 火葬墓 | 隅丸長方形 | (80)×65×8<br>(70)×59 | N-10°-E | なし | |
| SK-31 | 火葬墓 | 隅丸長方形<br>不整丸形長方形 | 104×65×15<br>89×54 | N-22°-E | 銅銭5 | |
| SK-32 | 土葬墓 | 隅丸長方形 | 106×73×84<br>93×64 | N-26°-W | 銅銭6、鉄釘8<br>人骨、土師質皿1 | |
| SK-33 | 土葬墓 | 不整隅丸長方形 | 93×84×56<br>76×63 | N-36°-E | 人骨 | |
| SK-34 | 土葬墓 | 隅丸長方形 | 107×75×50<br>92×62 | N-11°-E | なし | |
| SK-35 | 土葬墓 | 不整隅丸長方形 | 108×81×55<br>83×56 | N-17°-E | 人骨 | |
| SK-36 | 火葬墓 | 不整隅丸長方形 | (135)×100×9<br>(120)×89 | N-4°-E | 鉄釘2 | |
| SK-37 | 土葬墓 | 上面隅丸長方形<br>下不整長方形 | 120×76×38<br>89×49 | N-5°-E | 鉄製品（小刀） | |
| SK-38 | 土葬墓 | 不整隅丸長方形<br>隅丸長方形 | 130×76×80<br>80×57 | N-38°-E | 銅銭6、人骨 | |
| SK-39 | 土葬墓 | 不整長方形<br>長方形 | 117×90×84<br>97×66 | N-16°-E | 銅銭12、鉄釘3<br>竹製品、人骨 | 竹製品は櫛<br>の一部か？ |
| SK-40 | 火葬墓 | （隅丸長方形） | 116×(60)×6<br>110×？ | N-1°-E | 土師質皿2、人骨 | |
| SK-41 | 土葬墓 | 不整方形 | 99×85×39<br>83×73 | N-19°-E | 人骨 | |
| SK-42 | 土葬墓 | 不定形 | 111×90×45<br>105×72 | N-54°-W | 銅銭5、人骨 | |
| SK-43 | 土葬墓 | 長楕円形 | 98×76×109<br>89×49 | N-3°-W | 人骨 | |
| SK-45 | 不明 | 不整楕円形<br>不整楕円形 | 111×100×42<br>92×52 | N-7°-E | なし | |

表43　中世墓一覧表(3)

| 土壙番号 | 区分 | 平面形態 ( )は推定 | 上面の長軸×短軸×深さ<br>低面の長軸×深さ ( )は推定 | 長軸方位 | 検出遺物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| SK-46 | 火葬墓 | 隅丸長方形 | 115×？×7 | N-16°-W | な し | |
| SK-47 | 不 明 | 不整隅丸長方形 | 116×94×38<br>78×61 | N-3°-E | | |
| SK-48 | 土葬墓 | 隅丸長方形 | 110×85×71<br>92×74 | N-2°-E | 鉄釘16、人骨 | |
| SK-49 | 不 明 | 不整隅丸長方形 | 113×91×12<br>93×75 | N-100°-E | な し | |
| SK-50 | 土葬墓 | 不整隅丸長方形<br>不整長方形 | 110×82×62<br>92×61 | N-12°-E | 銅銭6、鉄釘3<br>人骨 | |
| SK-51 | 土葬墓 | 長方形 | 121×72×94<br>98×60 | N-20°-E | 銅銭12 | |
| SK-52 | 土葬墓 | 長方形 | 104×80×48<br>90×64 | N-14°-E | な し | |
| SK-53 | 土葬墓 | 隅丸長方形 | 84×(60)×45<br>78×(50) | N-5°-E | 土師質皿2 | |
| SK-54 | 火葬墓 | 不明 | 不明 | 不明 | な し | |
| SK-55 | 土葬墓 | 隅丸長方形 | 120×85×47<br>95×64 | N-5°-E | な し | |
| SK-56 | 土葬墓 | 不整長方形 | 115×80×45<br>98×62 | N-13°-E | 鉄釘17 | 埋土中に自然角礫 |
| SK-57 | 火葬墓 | 不明 | ？×？×10<br>？ | 不明 | 鉄釘1、人骨 | |
| SK-58 | 火葬墓 | 隅丸方形 | 100×86×11<br>79×69 | N-9°-E | 銅銭1、鉄釘1 | 配石 |
| SK-59 | 火葬墓 | 隅丸長方形 | 113×78×15<br>86×64 | N-4°-E | 鉄釘1、人骨<br>土師質皿1 | |
| SK-60 | 火葬墓 | 長方形 | 109×69×20<br>85×54 | N-14°-E | 鉄釘4、人骨 | 配石 |
| SK-61 | 火葬墓 | 隅丸方形 | 92×(80)×10<br>83×73 | N-15°-E | 銅銭3、鉄釘6<br>人骨 | 配石 |
| SK-62 | 火葬墓 | 隅丸長方形 | 100×(70)×19<br>82×(63) | N-2°-E | 人骨 | |
| SK-63 | 火葬墓 | 不整隅丸長方形 | 118×65×22<br>100×60 | N-20°-E | 銅銭6、鉄釘4<br>人骨 | |
| SK-64 | 火葬墓 | 不明 | 83×？×14<br>77×？ | N-72°-W | 人骨 | |
| SK-65 | 火葬墓 | 不整長方形 | 68×50×7<br>58×45 | N-25°-E | 銅銭3、鉄釘1<br>人骨 | |
| SK-66 | 不 明 | 不整隅丸長方形 | 100×71×51<br>72×40 | N-7°-E | な し | |
| SK-67 | 火葬墓 | 隅丸方形 | 65×62×17<br>50×44 | N-2°-E | 銅銭1 | |

表44　中世墓一覧表(4)

| 土壙番号 | 区分 | 平面形態<br>(　)は推定 | 上面の<br>長軸×短軸×深さ<br>低面の長軸×深さ<br>(　)は推定 | 長軸方位 | 検出遺物 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| SK-68 | 土葬墓 | 不整方形 | 75×63×30<br>50×50 | N-1°-E | 土師質（火舎） | |
| SK-69 | 火葬墓 | 長楕円形 | 85×50×28<br>52×36 | N-10°-E | 人骨 | |
| SK-70 | 火葬墓 | (隅丸長方形) | 97×？×15<br>90×？ | N-13°-E | 銅銭3、鉄製品<br>鉄釘2、人骨 | 配石 |
| SK-71 | 土葬墓 | 不整方形 | 95×75×44<br>60×40 | N-41°-E | なし | |
| SK-72 | 土葬墓 | 不整隅丸長方形<br>隅丸長方形 | 121×87×61<br>100×77 | N-8°-W | なし | |
| SK-73 | 火葬墓 | (隅丸長方形) | ？×？×10 | N-38°-W | なし | |
| SK-74 | 土葬墓 | 不整舟形 | 160×90×40<br>121×62 | N-16°-E | 銅銭6、人骨 | |
| SK-75 | 土葬墓 | 隅丸長方形<br>長方形 | 100×68×37<br>86×48 | N-16°-E | なし | |
| SK-76 | 土葬墓 | 隅丸方形 | 65×62×73<br>50×45 | N-6°-W | なし | |
| SK-77 | 土葬墓 | 隅丸長方形 | 94×68×64<br>93×63 | N-70°-W | 人骨 | |
| SK-78 | 不明 | 不整楕円形<br>不整円形 | 72×60×37<br>42×42 | N-70°-W | なし | |
| SK-79 | 不明 | 不整円形 | 72×69×42<br>40×40 | N-7°-E | なし | |
| SK-80 | 土葬墓 | 隅丸長方形 | 129×68×46<br>89×55 | N-22°-E | 鉄釘1 | |
| SK-81 | 土葬墓 | 隅丸長方形 | 97×69×48<br>84×56 | N-20°-E | 鉄釘15<br>土師質皿1 | |
| SK-82 | 土葬墓 | 隅丸長方形 | 107×74×44<br>87×53 | N-13°-E | 人骨 | 人骨は歯牙のみ |
| SK-84 | 土葬墓 | 長方形 | 87×55×61<br>80×50 | N-5°-E | 人骨 | |
| SK-85 | 土葬墓 | 長方形 | 100×74×38<br>(86)×68 | N-98°-E | 鉄釘8、人骨 | |
| SK-86 | 土葬墓 | 不明 | 不明 | 不明 | 銅銭6 | SD-01の埋土中で検出 |

# 第5節　考　　察

## 第1項　墳丘墓及び木棺墓群について

### 1．はじめに

今回調査した布勢鶴指奥1号墳丘墓は湖山池南東の丘陵上にあり、標高18～20ｍの地点に立地する弥生時代後期の盛土・貼石をもつ長方墳であった。規模は長軸（南北軸）17.8ｍ、短軸（東西軸）10.6ｍ以上、高さ2.36ｍで、中規模のものである。鳥取県内でこの時期の墳丘墓、土壙墓群が調査された例は少ないが、湖山池の南の丘陵ではややまとまって調査されている。即ち、今回調査した墳丘墓の西方1kmに位置する標高40ｍの丘陵には、墳丘墓としては最大級の規模を誇る西桂見四隅突出型墳丘墓[(1)]がある。突出部を含む東西辺が約64～65ｍ、高さは約5ｍと推定され、貼石と列石をもつ墳丘は地山の削り出しと盛土で築造されている。墳丘上には複数の埋葬施設が想定されるが、木棺墓1基のみが検出されている。また、四隅突出型墳丘墓のすぐ東隣の標高35ｍの丘陵尾根上に立地する西桂見遺跡[(2)]には、石列とわずかな削り出しとによって一辺約12ｍの方形区画があり、区画内で6基、その周辺で5基の木棺墓群が検出されている。また、四隅突出型墳丘墓の西側100ｍに位置する桂見墳墓群[(3)]の標高27.5～35ｍの丘陵尾根上では、3群に大別される20基の木棺墓群が検出されている。一方、今回は調査区域外であったが、布勢鶴指奥1号墳丘墓の南側、標高24ｍ付近にも墳丘墓の貼石と思われる河原石が多数露出しており、同一丘陵上に1基以上の墳丘墓の存在が想像される。従って、布勢鶴指奥1号墳丘墓も湖山池南岸の一連の遺跡と深く係わるものとしてとらえるべきである。

### 2．布勢鶴指奥1号墳丘墓の築造について

布勢鶴指奥1号墳丘墓はかなりの岩盤の削り出しと最高1.2ｍもの盛土を行っていること、貼石をもつこと等に特徴をもつ。盛土を検出していないのは南側中央付近だけで、あとはすべて盛土がなされている。即ち、墳丘上面が後世にどの程度削平されているかは不明であるが、岩盤面の高い南側中央付近だけは殆ど削り出しだけで墳丘を造り、墳丘上面の岩盤を平坦にし、それ以北と南側の東西端部には盛土して墳丘を造っているようである。布勢鶴指奥1号墳丘墓の築造過程は大きく3段階に分けられる。

第1段階は、岩盤面の削り出しと地山整形の段階である。掘削されている西側については不明であるが、南・北・東ともに岩盤を削り出している。北側では岩盤を最高0.6ｍ削り出して平坦面をつくっている。東側も岩盤を削り出して狭いながらも平坦面を設けている。平坦面以東の斜面はカットされた形跡はなく、風化しているもののローム層が残っている。南側は最高1.4ｍも削り出されているが、南側の場合は南北方向に6.5ｍ程の幅で尾根が掘

り抜かれており、周溝状の形態をもつ。削り出しの後、地山整形がなされているようで、盛土下には墳丘墓の北側に見られたようなローム層はなく、旧表土も見られなかった。

第2段階は、第1主体部を掘り込むまでの盛土の段階である。この段階の盛土は第3段階のものとは異なり、かなりしまりの良い粘性をもつ土で構成され、岩盤面の高い南側との比高差を補うように盛られているが、それでもまだ緩やかな傾斜をもつ。この盛土がなされた後に第1主体部が掘り込まれている。

第3段階は、第1主体部を掘り込んだ後の盛土の段階である。この段階の盛土には花崗岩礫がかなり混入しており、斜面側には比較的しまりの良い土を盛っている。この盛土がなされた後、土器が供献されている。貼石もこの段階でなされたものであろう。

以上のような過程を経て築造された墳丘墓であるが、このような盛土の厚さには地形的なものが多分に係わっていると思われる。即ち、布勢鶴指奥1号墳丘墓は南から北に下り、再び北に高くなる丘陵の鞍部南縁に造られており、墳丘を高く見せるためには、相当の南側の削り出しと北側への盛土が必要だったのであろう。県内の墳丘墓を見ると、紙子谷遺跡門上谷1・2号墓[4]（鳥取市紙子谷）は地山の削り出しによって長方形の墳丘を築造しているが、大谷・後口谷1・2号墳丘墓[5]（倉吉市大谷）の場合は地山整形とわずかの盛土によって長方形の墳丘を築造しており、さらに四隅を橋脚状に掘り残した周溝も掘られている。両者に形態的差異はあるが、いずれの場合も主に丘陵尾根を削り出すことで墳丘をつくっていると言えよう。盛土という点では、四隅突出型墳丘墓の阿弥大寺1～3号墳丘墓[6]（倉吉市下福田）の墳丘はすべて盛土で造られており、削平されているものの1号墓で0.8mの盛土が検出されている。これは墳丘墓が緩やかに傾斜する比較的規模の大きな丘陵に立地するため、一旦斜面を削って平坦面を形成した後に盛土するという方法がとられたのであろう。西桂見四隅突出型墳丘墓には最高で約1m程の盛土がなされているが、これは谷部にあたる南斜面中央に特に厚く盛土されているためである。いずれにしても立地する地形によって厚く盛土されたものと考えられる。

布勢鶴指奥1号墳丘墓には、土砂採取のために掘削されている西側斜面を除く北・東・南側の墳丘斜面で貼石が検出された。貼石は盛土の流出とともにかなり動いており、元位置を保っているのは南側の中央部のみである。その部分の貼石の状況をみると、県内をはじめ山陰地方でよくみられる四隅突出型墳丘墓のように礎部の列石は伴っておらず、河原石を墳丘斜面に沿って隙間なく貼り詰めている。墳丘の南側は岩盤を削り出して整形する際に二段にされており、墳丘南側斜面と多数の木棺墓群が検出された南側テラスとの間には小テラスがある。この小テラスも墳丘墓築造当初から設けられていたものと思われるが、貼石は上段のみで、テラス以下には施されていない。貼石には大量の河原石が必要であるが、河原石はこの丘陵の東方を流れる野坂川に大量にみられることから、ここから運ばれ

たものと考えてよかろう。一方、この南側の小テラスが何のために設けられたかという点についてであるが、推測ではあるが、この小テラスの直下に小規模の木棺墓群がつくられていることから、南側のテラスは墳丘墓の埋葬主体に伴う埋葬施設をつくることを前提につくられ、小テラスはそれらとの境界を明瞭にするために設けられたのではなかろうか。墳丘墓自体がかなりの墳丘をもち、その上貼石を施すことで墓域を区画しながら、更に小テラスを設けて、墳丘上の被葬者との優劣関係を明瞭にしたのであろうか。しかしながらこのように考えたとき、北側テラスにも同様に埋葬施設がつくられているのに北側の墳端にはこのようなテラスをつくった形跡が見られないのは不可解である。

墳丘墓の西側斜面には、北方26ｍの位置にあるSD-01から南に続く墓道らしきものがある。途中から掘削されているために、墓道と墳丘墓との関係を確認できないが、墓道が墳丘墓を中心とする墓域に伴うものなら、その傾斜からして終点は南側のテラス以外には考えられない。全貌が不明なため断定はできないが、墳丘墓の築造、墳丘墓への祭祀、木棺墓群の築造等に伴う墓道と考えてよかろう。

### 3．主体部

この時期の墳丘墓は頂部に多数の埋葬施設をもつものが多いが、布勢鶴指奥１号墳丘墓の頂部には２基の木棺墓跡しか検出していない。第１主体は中央にあって、長軸4.80ｍ、短軸3.40ｍ、深さ1.28ｍの規模をもち、２段の掘り方をもつ。第２主体は南西端にあって、長軸2.50ｍ以上、短軸1.05ｍ、深さ0.46ｍで、第１主体にかなり遠慮してつくられているようである。第２主体に伴う供献土器は出土していないが、主軸は墳丘墓周辺の木棺墓群と一致しており、第１主体よりも後につくられたものと考えられ、墳丘上にあることから、第１主体により近い人物が埋葬されたものと思われる。

第１主体の底面には、長さ2.00ｍ、北西側の幅0.56ｍ、南東側の幅0.40ｍの広がりをもって水銀朱が検出された。朱は最も厚いところで７cmを測る。これだけ大量の朱が出土した例は県内にはないが、門上谷１号墓の26基の埋葬施設の内の１基から水銀朱が検出されている。県外では同じ山陰の島根県に類例があり、安養寺四隅突出型墳墓群[7]の１号墓主体部木棺の底面全面に朱がつめられており、西谷墳墓群[8]の３号墓（四隅突出型）第１主体木棺内からも多量の朱が出土している。布勢鶴指奥１号墳丘墓の場合も同様に、朱が木棺の底面全面に敷きつめられていたものと思われる。木棺は二段目の掘り方内に安置されたようだが、底面の規模は推定される木棺の規模よりも大きい。従って、大きめに掘られた墓壙内に木棺をおさめた後、比較的花崗岩礫を多く含む土を詰めて木棺を固定したものと思われる。布勢鶴指奥１号墳丘墓の場合、むしろ問題になるのはその上部である。即ち、墓壙は２段掘りのためテラスを有するが、墓壙検出時にすでに、テラスと２段目の掘り方の上部との埋土に明瞭な違いが見られたのである。テラスの埋土には極めて多くの花崗岩礫を

含む土が詰め込まれていた。２段目の掘り方の壁面を利用して、さらに木棺を安置する施設＝木廓がつくられていた可能性がある。その場合、規模は底面の大きさと一致するものであろうから、長さ2.96ｍ、幅1.18ｍ程度のものが想定され、高さについては断定はできないが１ｍ程度かと思われる。そうした場合、木廓内がどのような構造をもっていたかという疑問が生じるが、仮に木廓内が室のように造られていたとしたら、かなりの空洞となり、木の腐朽とともに大量の盛土が陥落していなければならないであろう。しかしながら、土層観察ではそのような痕跡はみられず、むしろ下の木棺が腐朽して埋め土が陥落した程度のものである。従って、木廓内は木棺を安置した後すぐに埋められていたものと考えられる。木廓をもつ事例は、前出の西谷墳墓群の３号墓（四隅突出型）の第１主体などがある。

最後に主体部に関して疑問点を１つ挙げておく。それは主体部の主軸方向である。尾根幅の狭い丘陵に墳丘が造られているため、短軸（東西）方向に充分な長さを取れないにもかかわらず、主体部は窮屈に北西方向を向いている。主軸方向をそうとらねばならない何らかの理由があったのであろうが、それを明らかにすることができなっかた。

**４．時　　期**

第１主体部に供献された土器は、複合口縁壷、把手付直口壷、台付壷形土器の胴部、甕、高坏、器台、蓋、内面に凹線をもつ器種不明の土器で、いずれも完形に復元できたものはないが、特に高坏と器台の多い点に特徴をもつ。出土した土器には時期差がみられ、後にも祭祀が続いたことがうかがえる。甕と器台で時期判定すると、Po４・５の甕がやや古相を示し、Po7の甕・Po21の器台がやや新相示すものの、主体となる土器は、阿弥大寺II期[9]に比定され、最近公表された鳥取市岩吉遺跡[10]土器編年では器台の資料が乏しいもののIII期古～新段階に比定されよう。供献土器中にPo8の甕が出土しており、形態的にはかなり新相を示すもので、岩吉Ⅳ期にまで下るものである。以上のことから、布勢鶴指奥１号墳丘墓は弥生時代後期中葉に築造され、後期後葉まで祭祀が続いたものと推定される。

**５．墳丘墓周辺の埋葬施設群**

布勢鶴指奥１号墳丘墓の周辺には51基の埋葬施設が検出された。南側テラス部が掘削されていなければ更に多くの埋葬施設があったと思われる。この時期の墳丘墓の多くが同様に埋葬施設を有しており、門上谷１号墓、阿弥大寺１号墳丘墓、後ロ谷１号墳丘墓等もその例であるが、51基という数は群を抜いている。木棺墓群跡は、北側テラスに４基、東斜面に１基、南東斜面に11基、南側テラスに35基ある。

検出された埋葬施設群の特徴は殆どが河原石を伴っていることである。類例は阿弥大寺１号墳丘墓の周辺につくられた埋葬施設群中にあり、土壙墓上面に円礫が敷かれている。島根県にも類例はみられ、仲仙寺10号墓、友田遺跡の土壙墓、波来浜遺跡の列石墓、やや

形態が異なるものの順庵原1号墓のストーンサークル[11]等が挙げられよう。しかしながら本遺跡の場合は南側テラスで検出された石列を除くとほとんどのものが、波来浜遺跡の列石墓のように墓壙周囲に整然と並ぶものはなく、むしろ阿弥大寺の7・8・12号土壙墓[12]などに近いものがある。石の中には墓壙内埋土上層に陥落しているものもあるが、そのほとんどが墓壙上面で土器と共に出土しており、墓壙上面に盛られた土に配されていたものと思われる。一方、南側テラスの東側中央にある石列はかなり整然としており、残存状況のよい西側の石列は中心部に向かって高くなっている。石列内には大規模の木棺墓SX-09、特異な小口穴をもつSX-08があり、これらの埋葬施設が小墳丘をもち、それに貼られた石である可能性が強い。

埋葬施設群の主軸方向は大きく4つに分かれ、ほぼ東西方向を示すもの、ほぼ南北方向を示すもの、北北西方向を示すもの、南南東方向を示すものがある。しかしながら、主軸の方向性は時期差とは直ちには結び付かない。埋葬施設群から出土した土器をみると、主体となっているのは阿弥大寺II～III期、岩吉III期に比定されるものであり、これらの土器が出土している埋葬施設が比較的早い段階でつくられたものと思われる。本報告書には掲載していないが、SX-02と石列に伴う土器がそれぞれ試掘調査時に出土しており、いずれもこの時期のものであった。一方、中に新相を示すものもある。南北方向を向くSX-03のPo46・SX-35のPo89・90と東西方向を向くSX-20のPo95の器台は受部の形状からほぼ同時期のものと思われ、SX-35からは甕（Po87・88）も出土しており、いずれも新相を示す。遺構の位置からしてもSX-20は墳丘墓のテラスを破壊しており、SX-35は石列を乱していることからやはり新しいグループであろう。南東斜面でもPo97・100のように口縁部の沈線が多条化した新相を示す甕が出土しており、ここからは古相を示す土器が出土していないことから、南東斜面の埋葬施設群は新しいグループに属するものと思われる。以上の点から、木棺墓群は時期的に2グループに分けられ、北側テラスの木棺墓群、墳丘墓直南にある小規模の埋葬施設群、SX-05・06、石列内にあるSX-08・09等が早い段階でつくられたもので、SX-03・18～21・27・35・40・42、南東斜面の木棺墓群等がその後につくられたものと思われる。

従って、この木棺墓群は、布勢鶴指奥1号墳丘墓が弥生時代後期中葉に築造されてその祭祀が後期後葉まで続くなか、墳丘墓の周囲に次々とつくられていったものであろう。

**7．県内の弥生時代後期の遺跡との時期関係**

これまでに触れた以外に県内には、尾根に直交する溝と削り出しによって造り出された一辺12mの方形の区画内に7基の木棺墓を検出した下坂1号墓[13]（八頭郡郡家町）、13基の木棺墓群をU字状に囲む形で幅4mの貼石が帯状に検出された泰久寺中峯遺過疎跡[14]（東伯郡

関金町）がある。これまで県内では阿弥大寺１号墳丘墓が古い段階とされてきたが、布勢鶴指奥１号墳丘墓の主体部に供献された土器は、阿弥大寺１号墳丘墓のものとほぼ同じ形態を示すことから、それに並行する時期の墳丘墓と考えられる。門上谷１号墓・下坂１号墓で出土している土器も形態的には差がないので、ほぼ同時期のものと考えてよかろう。後ロ谷墳丘墓と泰久寺中峯遺跡で出土している土器は岩吉Ⅲ期新に比定されることから、やや後出のものである。また、湖山池南側の西桂見四隅突出型墳丘墓と土壙墓群、桂見墳墓群内の土壙墓群との関係についていえば、西桂見四隅突出型墳丘墓にはその出土土器から、従来より弥生時代後期終末という年代が比定されている(1)ので後出のものと考えてよい。西桂見遺跡の土壙墓群の土器は布勢鶴指奥１号墳丘墓のものよりも新しい段階のもので、この土壙墓群も後出のものと考えてよかろう。桂見墳墓群内の土壙墓群で出土した土器は、大半が新しい段階のものであるが、岩吉Ⅲ新に比定される甕が１点だけ埋葬施設内から出土しており、本遺跡のものと重複する。

以上のことから、布勢鶴指奥１号墳丘墓は、湖山池の南側丘陵にある弥生時代後期の墓群の中で、最も早い段階に築造された墳丘墓であるといえる。そして墳丘墓への祭祀が継続されながら、その周辺に次々と埋葬施設がつくられていったのである。その一方で、布勢鶴指奥１号墳丘墓の築造よりやや遅れて西方の丘陵でも木棺墓がつくられ始め、その後、四隅突出型墳丘墓が築造されるのである。

［参考文献］
(1)　『西桂見遺跡』鳥取市教育委員会（1981）
(2)　『西桂見遺跡Ⅱ』鳥取市教育委員会　倉見古墳群発掘調査団（1984）
(3)　『桂見墳墓群』鳥取市教育委員会　鳥取市遺跡調査団（1984）
(4)　『定型化する古墳以前の墓制』－九州、中国、四国篇－　埋蔵文化財研究会（1988）
　　鳥取市の遺跡－紙子谷遺跡発掘調査現地説明会資料－　鳥取市遺跡調査団（1987）
(5)　『大谷・後ロ谷墳丘墓』倉吉市教育委員会（1985）
(6)　『上米積遺跡群発掘調査報告Ⅱ』－阿弥大寺地区－　倉吉市教育委員会（1980）
(7)　『荒島墳墓群』古代の出雲を考える４　出雲考古学研究会（1985）
(8)　『西谷墳墓群』古代の出雲を考える２　出雲考古学研究会（1980）
(9)　前掲の報告書で弥生時代後期から古墳時代前期にいたる土器が編年されている。
(10)　『岩吉遺跡３』鳥取市教育委員会　鳥取市遺跡調査団（1991）
(11)　前掲の『定型化する古墳以前の墓制』、『荒島墳墓群』等を参考にした。
(12)　墳丘外に12基の土壙墓があり、うち４基に円礫がある。第３号土壙墓のもののみが墓壙を取り囲むように敷かれているが、あとのものはさほど整然と並ばず、墓壙上面に敷かれている。
(13)　『下坂１号墓』郡家町教育委員会（1990）
(14)　『泰久寺遺跡発掘調査報告書』－中峯地区－　関金町教育委員会（1984）

［その他の参考文献］
東森市良「墳丘墓と小規模古墳」『播磨考古学論叢』別刷（1990）
東森市良『四隅突出型墳丘墓』考古学ライブラリー54　ニュー・サイエンス社（1989）

## 第2項　中世墓について

### 1．「土葬墓」

鶴指奥墳墓群で「土葬墓」は44基検出された。今回の調査では、火熱を受けた跡がなく、遺物のある土壙を「土葬墓」として扱ったが、遺物がなくとも掘り方が他の土葬墓と類似しているものも同様とした。「土葬墓」はいずれも盛土、墓石等の墓標はなく、表土を20～30cm下げた地山面で検出された。主に尾根の平坦面に並ぶが、SK-43、SK-82のように急斜面に造られているものもある。墓壙の長軸はおおむね南北方向を向き、地形状の制約もあるが、ある程度方位を意識して造っていると考えられる。墓壙は尾根の平坦部に密集して造られており、小群に分けるのは困難である。

墓壙の平面形態は長方形（隅丸長方形を含む）プランのものが多く、全体の8割以上を占める他は長楕円形、略方形を呈する。墓壙の上面の規模の平均値をとると長さ107cm、幅76cmである。同様に底面は長さ88cm、幅61cmをとり、この数値の前後が、この時期のこの地域での一般的な「土葬墓」の規模と考えられる。深さは「火葬墓」に対して深く掘り込まれており、一番深いもので109cm、浅いもので37cmを測る。ただし、斜面で検出されたものは上部が流失しており、尾根の平坦部で残りの良い土壙の平均値をとると78cmである。上部が多少流失したと考えると80～100cm程度が平均的な深さと考えられる。

副葬品は冥土銭としての銅銭が15基の「土葬墓」から検出された。銅銭は底面で重なった状態で検出された。SK-07で布の痕跡が残っていたことから布等できちんと包んで埋葬したと考えられる。銅銭の枚数は6枚が一番多く11基、3枚1基、5枚1基、12枚2基で6枚が基本になっていると考えられる。銅銭の有無と人骨の性別、年令との関連性は見当たらなかった。出土遺物は土師質土器が9基の「土葬墓」で検出されている。その中ではSK-20で耳皿（箸置きとして使われたもの）が底面近くで検出され、一緒に埋葬されたと考えられるが、他の土壙で検出された土師質皿及び火舎は表土に近い埋土中のものが多く、墓前（上）に供献された可能性が高い。また、SK-20では耳皿の近くで漆器片が見つかっている。その他特異なものとしてSK-39で櫛の一部と考えられる竹製品が、SK-37で小刀と思われる鉄製品が検出された。ちなみにSK-39は若い女性骨で銅銭を12枚持ち、SK-37は鉄製品以外何も検出されなかった。副葬品を見ると傑出した貧富の差はなく、ほぼ同レベルの階層と思われるが、銅銭の有無などで多少の差は感じられる。鉄釘は16基の「土葬墓」で検出された。木質部も残り、木棺が納められていた事を示唆する。SK-20・48・56・81の鉄釘の出土状況をみると掘り方にあわせた長方形の木棺が納められたと考えられる。鉄釘が出土しなかった他の墓壙も、鉄釘の腐朽、木、竹等の使用、木組による木棺の存在

を考える必要があるが、SK-02、28、68等は掘り方の規模から直葬の可能性が高く、木棺と直葬の両方の埋葬方法がとられたと考えられる。人骨は23基の「土葬墓」から検出された。人骨は遺存状態は良くないがいずれも頭骨が底面の北側で、下肢骨が重なるように南側で検出されており、横臥屈葬であったと考えられる。人骨は性別、年令等で区別して埋葬した様子はなかった。

**2．「火葬墓」**

「火葬墓」は31基検出された。「土葬墓」と同様に表土を20～30cm下げた地山面で検出された。火熱を受けて赤褐色に変色しており検出は比較的容易であった。尾根の主稜線上に並び、「土葬墓」と混在している。「土葬墓」と同様に長軸はおおむね南北方向を向き、ある程度方位を意識していると考えられる。

墓壙の平面形態は長方形（隅丸長方形を含む）プランのものが多く、他は略方形、楕円形を呈する。残存状態の良い墓壙の上面規模の平均値を求めると長さ108cm、幅76cmで、同様に底面は長さ93cm、幅66cmをとり、「土葬墓」とほぼ同規模の数値をとる。深さは「土葬墓」に対して極端に浅く、最深のもので30cmで、この数値の前後が一般的な深さと考えられる。火をつけ燃焼させるという行為の性格上浅く掘られたと考えられる。また、火葬の効率を上げるため、SK-58、60、61、70では底面に配石が施され、SK-21では底面中央に溝を設けるなどの工夫がみられた。

副葬品は冥土銭としての銅銭が13基で検出された。銅銭は焼けて変形したものがあり一緒に焼かれたと考えられる。枚数は1枚（3基）、3枚（4基）、4枚（1基）、5枚（1基）、6枚（2基）、8枚（1基）、17枚（1基）と不統一だが、焼けて粉砕した可能性も否めない。土師質土器は6基から検出された。SK-08の火舎以外はいずれも皿であった。鉄釘は13基から検出された。鉄釘の存在から木棺に納められた後に火葬されたと考えられる。人骨は20基で検出されたが、焼骨のため遺存骨状態が悪く、骨片化していた。理由は不明だが、「土葬墓」と比べて圧倒的に小児の骨が多かった。人骨が多く残ることから火葬行為の後埋めたと考えられるが、SK-69のように火熱を受けた跡がない土壙に焼骨が埋葬されている例があり、捨骨行為があった可能性は否めない。

**3．遺　　物**

【銅　　銭】

「土葬墓」15基、「火葬墓」13基で検出され、総数は159枚を数える。出土状態は重なった状態で土壙底で出土しているものが多い。各遺構の出土枚数は、1、3、4、5、6、8、12、17枚と統一されていないが、「火葬墓」から検出された枚数がそのまま副葬された数と断定できない事、6枚の副葬が13基と一番多いことを考えると、6枚を基本として副葬されていると思われる。

種類が判別できる銅銭は142枚あり、北宋銭を中心に唐の開元通宝７、金の正隆元宝１、南宋の皇宋元宝１、淳熙元宝１、元の至元通宝３、明の洪武通宝１、永楽通宝10で構成されている。開元通宝は初鋳年は621年だが長期にわたって鋳造されている。北宋銭は太平通宝（976）が古く、宣和通宝（1119）が新しいが、大半は11世紀代鋳造のものが占める。同一の土壙で銅銭の初鋳年に幅を持つこと、北宋銭の摩滅の度合い等から副葬の時期を永楽通宝（1408）が渡来した以降とみることができる。

【鉄　　釘】

鉄釘は「土葬墓」16基、「火葬墓」13基の計29基で検出された。鉄釘の遺存により、土壙に木棺が納められていたと考えられる。鉄釘の出土総数は148本で、そのうちほぼ完存しているものが20本を数える。鉄釘は釘身断面が方形を呈する鍛造品が多い。釘頭は端を圧しつぶして頭部をつくり出していると考えられ、扁平な頭部をＬ字状に曲げたものと頭端部を丸めたものがある。ほぼ完存する鉄釘の長さをみると、少なくとも、4.5cm前後、5.5cm前後、6.5cm前後、９cm前後の４種類の釘が使われたと考えられる。

【土師質土器】

土師質土器は「土葬墓」９基、「火葬墓」６基の計15基で検出された。図化できたのは皿22点、耳皿１点、火舎２点の計25点だが、他にも破片で図化できなかったものも多く、総数は増える。皿はいずれも緻密な胎土を使用しており、横ナデによる整形が施され、色調は黄橙色を呈するものが多い。大きさは口径８～９cmの比較的小型のもの、11cm前後の中型のもの、14cm前後の比較的大型のものの３つのタイプに分けることができる。SK-20で検出された耳皿は長径5.5cmで、箸置きとして使用されたと考えられる。同様の耳皿が布勢の天神山遺跡で出土している。SK-08で検出された火舎は脚部が貼り付けてあり三脚を有する。外面上部に２本の沈線で囲まれた幅約１cmの文様帯があり、簡略化された雷文がスタンプされている。SK-68で検出された火舎は一部しか残存していないが貼り付けの三脚を有すると考えられる。土器をみると布勢の天神山遺跡出土の土器とほぼ同時期で、15世紀後半～16世紀前半のものと考えられる。

**４．ま　と　め**

今回調査した中世墓群は北から南に向けてゆるやかに下がる丘陵の主陵線上に「土葬墓」「火葬墓」が混在して密集した状態で検出された。盛土、墓標等の目印が検出されなかったにもかかわらず、切り合った土壙はなく、長期間に渡って群が形成されたとは考え難い。また、出土した土器、銅線、鉄釘等からも土壙間及び「土葬墓」「火葬墓」間に明瞭な時期差は感じられない。以上のことから、鶴指奥墳墓群中の中世墓群は15世紀後半～16世紀前半にかけて成立した墓群と考えられる。同時期に「土葬墓」「火葬墓」が併存するのは宗派による葬法の違いかとも考えられるが、「火葬墓」の人骨が「土葬墓」に比べて圧倒的に小

児骨が多いことから死因による違いとも考えられる。各土壙はおおむね長軸方位を合わせ、その形態も似通っている。遺物の有無、質量で若干の階層の差は感じられるが、極だった差はなく、ほぼ同レベルの階層と考えられる。武具類、装飾品類がほとんどなく、周溝、塚などを造らない簡素なものが主であることから、上流階級と考えるより、庶民層の墓と考えた方が良いと思われる。

**5．湖山池周辺の中世墓**

15～16世紀の湖山池東南岸地域は、因幡の中心地として天神山城に守護所が置かれ、城下町も形成していたとされる。天神山城は文正元年(1466)ごろに守護大名山名勝豊によって築城され、岩美の二上山城から守護所が移されたとされ、その後、政治的拠点が鳥取城に移るまでの100余年の間、因幡支配の拠点として存在したと思われる。本中世墓群もちょうどこの時期にあたる。また、江戸時代につくられた「因伯古城跡図誌」にみられる「天神山城絵図」には天神山城の外堀の西方の丘陵地に「弦サシ屋舗」という地名がみられる。この「ツルサシヤシキ」の字名を持つ丘陵が本墳墓群のある丘陵と考えられる。「ツルサシヤシキ」の丘陵の北と南の丘陵と「葬地」と記され、天神山城廃棄後も長い間当時の墓地が「葬地」として認識されていたことがうかがい知ることができる。

湖山池東南岸地域では多くの中世墓群が検出されている。本墳墓群と谷をはさんだ西方の丘陵には西桂見遺跡、桂見墳墓群があり、西桂見遺跡東地区より８基、Ｂ地区７基、Ｃ地区10基、桂見墳墓群第１地区６基、第２地区12基、第３地区２基を検出し、総数37基と密集した中世墓群を形成する。この中世墓群の中には土盛りや周溝を持つもの、越前の大甕を棺として埋葬したものなども検出されている。また、本墳墓群の東方にある里仁古墳群で３基、徳尾遺跡で４基が検出されている。湖山池東岸では鳥取大学構内の大熊段遺跡で８基、三浦遺跡で３基検出されている。本中世墓群と同様の形態、遺物を持つものも多いが、このうち大熊段遺跡では「コ」の字形の周溝を持つ中世墓が検出されている。その他、他の遺跡でも盛土、方形区画を有するものや甕棺、集石などの施設を持つものなど葬制がバラエティに富み、階層差が感じられる。本中世墓群は因幡国・守護山名氏の墓域とは言い難いが、当時の一般的な墓と考えられ、天神山城を中心とする因幡の中世社会を知る一端となれば幸いである。

［参考文献］
(1)『西桂見遺跡』鳥取市教育委員会（1981）　(2)『西桂見遺跡Ⅱ』鳥取市教育委員会（1984）
(3)『桂見墳墓群』鳥取市教育委員会（1984）　(4)『大熊段遺跡』鳥取県教育文化財団（1986）
(5)『天神山遺跡発掘調査概報』鳥取県教育委員会（1973）
(6)『里仁古墳群』鳥取県教育文化財団（1985）　(7)『三浦遺跡』鳥取県教育文化財団（1981）
(8)『徳尾遺跡』鳥取県教育委員会（1985）　(9)『長瀬高浜遺跡Ⅲ』鳥取県教育文化財団（1981）
(10)『歴史時代の鳥取県』鳥取県埋蔵文化財センター（1989）
(11)『中世の葬送・墓制』水藤真（1991）　(12)『中世の都市と墳墓』網野善彦・石井進（1988）